日 脚 遺 跡

日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書

1985年3月

育委員会

日 脚 遺 跡

日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書

1985年3月

島 根 県 教 育 委 員 会

序

島根県教育委員会は島根県住宅供給公社からの委託を受け、昭和58年度と59年度において浜田市日脚町に計画された住宅団地予定地の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、縄文時代早期の遺構、古墳、須恵器窯跡、中近世の遺構などが検出されました。特に、縄文時代早期の集石遺構は島根県内では初めての調査例であります。また、須恵器窯跡は古式須恵器を焼いた窯であることが判明し、当地方の歴史についての貴重な資料を得ることができました。

本書は、発掘調査の記録をまとめたものでありますが、広く各方面においてご活用いただき、多少なりとも埋蔵文化財に対する理解に役立つことができれば幸いであります。

なお、発掘調査にあたり島根県住宅供給公社をはじめ地元浜田市教育委員会など各方面から暖かいご理解、ご協力を賜りましたことに対して心から感謝申し上げる次第であります。

昭和60年３月

島根県教育委員会

教育長　栗　栖　理　知

例　　言

1. 本書は、昭和58年度と59年度において島根県が島根県住宅供給公社の委託を受けて実施した浜田市日脚町の日脚住宅団地造成にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。現地調査は昭和58年6月から昭和59年6月まで行った。その後資料整理を昭和60年3月末まで実施した。
2. 事務局

教育庁文化課　課長　美多　定秀
主査　藤間　享
課長補佐　蓮岡　法暲　長谷川行雄(昭58)　永瀬　忠治(昭59)
文化振興係長　岩崎況一郎　主事　吉井　良夫(昭58)　吉川　広(昭59)
埋蔵文化財第一係長　勝部　昭(昭58)　永塚　太郎(昭59)
〃　第二係長　石井　悠　文化財保護主事　宮沢　明久

3. 調査員

主事　川原　和人
兼主事　白石　睦(昭58)
浅沼　政誌
住宅供給公社主事　丹羽野　裕

4. 調査指導者(順不同・敬称略)

県文化財保護審議会委員　山本　清
県文化財保護審議会委員　池田　満雄
県文化財保護審議会委員　三浦　清
北九州市立考古博物館　小田富士雄
奈良教育大学　三辻　利一
島根大学理学部　時枝　克安
島根大学理学部　伊藤　晴明
島根大学教育学部　林　正久

5. 調査協力者(順不同・敬称略)

県文化財保護指導委員　桑原　詔一　的場　幸雄
補助員　岩井　重道　伊藤　克己　浦田　和彦　長見　康弘(以上島根大学々生)
藤原　哲也(関西大学々生)

6. 遺物整理　瀬田　明子　鈴政　泰子　佐藤　順子　田辺　淑美　金津　恵子
7. 挿図中の方位は磁北をさす。
8. 出土遺物および実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。
9. 下記の方々に寄稿をいただいた。記して謝意を表する。(執筆順・敬称略)

小田富士雄　三辻　利一　時枝　克安　伊藤　晴明　三浦　清
林　正久

10. 本報告書は、川原和人と丹羽野裕が編集した。

目　　次

Ⅰ　調査にいたる経緯 ……（石井　稔）…… 1

Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（川原和人）…… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 7

1.　調査の結果 …… 9

(1)　第１号墳 ……（川原）…… 9

(2)　第２号墳 ……（丹羽野裕）…… 21

(3)　Ａ地区・第３号墳 ……（丹羽野・川原）…… 24

(4)　第４号墳 ……（川原）…… 58

(5)　第５号墳 ……（丹羽野）…… 64

(6)　第６号墳 ……（丹羽野）…… 67

(7)　Ｂ　地　区 ……（丹羽野）…… 72

(8)　Ｃ　地　区 ……（川原）…… 86

(9)　Ｄ　地　区 ……（川原）…… 135

2.　出土土器観察表 …… 137

Ⅳ　島根県日脚窯跡と須恵器について …… 194

（北九州市立考古博物館　　小田富士雄）

Ⅴ　日脚１号窯出土須恵器の胎土分析 …… 203

（奈良教育大学　　三辻　利一）

Ⅵ　日脚遺跡須恵器窯の考古地磁気年代 …… 207

（島根大学教育学部　　時枝克安　　伊藤晴明）

Ⅶ　浜田市日脚遺跡におけるアイラおよびアカホヤ火山灰
の産状と遺跡の年代について …… 209

（島根大学教育学部　　三浦　清　　林　正久）

Ⅷ　ま　と　め

1.　縄文時代早期の遺構と遺物について ……（丹羽野）…… 215

2.　発掘調査された古墳について ……（川原）…… 219

3.　日脚１号窯跡及び灰原二次堆積について …… 222

4.　埴輪について …… 224

5.　日脚遺跡における須恵器の編年 …… 226

図　版

挿　図　目　次

第 1 図　日脚遺跡の位置と周辺の遺跡
第 2 図　周布平野周辺遺跡出土須恵器実測図(1)
第 3 図　〃　(2)
第 4 図　調査区全体配置図
第 5 図　第1・2号墳調査前地形測量図
第 6 図　第1・2号墳調査後地形測量図
第 7 図　第1号墳・集石遺構実測図
第 8 図　集石遺構遺物出土状況図
第 9 図　第1号墳出土遺物実測図(1)
第 10 図　〃　(2)
第 11 図　〃　(3)
第 12 図　集石遺構土器出土状況図(1)
第 13 図　〃　(2)
第 14 図　〃　(3)
第 15 図　〃　(4)
第 16 図　〃　(5)
第 17 図　〃　(6)
第 18 図　〃　(7)
第 19 図　〃　(8)
第 20 図　〃　(9)
第 21 図　〃　(10)
第 22 図　〃　(11)
第 23 図　〃　(12)
第 24 図　〃　(13)
第 25 図　〃　(14)
第 26 図　〃　(15)
第 27 図　〃　(16)
第 28 図　〃　(17)
第 29 図　〃　(18)
第 30 図　第2号墳石室実測図
第 31 図　第2号墳遺物出土状況図
第 32 図　第2号墳出土遺物実測図
第 33 図　A地区・第3号墳周辺地形測量図
第 34 図　A地区4層内石器土器出土状況図・土層図
第 35 図　A地区4層内遺物出土頻度図
第 36 図　集石炉実測図
第 37 図　A地区出土縄文土器実測図(1)
第 38 図　〃　(2)
第 39 図　A地区出土石材
第 40 図　A地区出土石鏃型式別比率
第 41 図　A地区出土石器実測図(1)（石鏃）
第 42 図　〃　(2)（〃）
第 43 図　A地区出土石鏃長幅相関図
第 44 図　A地区出土器実測図(3)（楔形石器）
第 45 図　〃　(4)
第 46 図　A地区出土石器実測図(5)
第 47 図　〃　(6)（石核）
第 48 図　〃　(7)（〃）
第 49 図　〃　(8)（〃）
第 50 図　A地区出土垂飾実測図
第 51 図　SD01内出土遺物実測図
第 52 図　A地区掘立柱建物跡実測図
第 53 図　SK01実測図
第 54 図　A地区出土遺物実測図（1～3南尾根出土、4・5 SK01出土、6・7 3層内出土）
第 55 図　第3号墳地形測量図（調査後）
第 56 図　第3号墳実測図
第 57 図　第3号墳遺物出土状況図

第 58 図　第３号墳出土遺物実測図(1)
第 59 図　〃　(2)
第 60 図　第４号墳周辺地形測量図
第 61 図　第４号墳実測図
第 62 図　第４号墳遺物出土状況図
第 63 図　第４号墳出土遺物実測図(1)
第 64 図　第４号墳出土遺物実測図(2)
第 65 図　宝篋印塔実測図
第 66 図　第５号墳調査前地形測量図
第 67 図　〃　調査後　〃
第 68 図　第５号墳墳丘土層図
第 69 図　第６号墳実測図
第 70 図　第６号墳周辺の調査前地形測量図
第 71 図　〃　調査後　〃
第 72 図　第６号墳石室掘り方内の遺物出土状況実測図
第 73 図　第６号墳出土遺物実測図（１～８、10～11は石内室、９は周溝内）
第 74 図　第５号墳付近検出の掘立柱建物跡実測図
第 75 図　Ｂ地区遺構配置図
第 76 図　Ｂ地区土層図
第 77 図　ＳＫ02実測図
第 78 図　Ｂ地区ＳＫ03実測図
第 79 図　〃　ＳＫ04　〃
第 80 図　〃　ＳＫ05　〃
第 81 図　〃　ＳＫ06　〃
第 82 図　〃　ＳＫ07　〃
第 83 図　Ｂ地区出土縄文土器実測図(1)
第 84 図　〃　(2)
第 85 図　Ｂ地区出土石器実測図(1)（石鏃）
第 86 図　〃　(2)（尖頭器、スクレイパー）
第 87 図　Ｂ地区出土石器実測図(3)（石斧・石錘）
第 88 図　〃　(4)（石核）
第 89 図　Ｂ地区ＳＤ04実測図
第 90 図　ＳＤ05実測図
第 91 図　Ｂ地区出土須恵器実測図（１、４～８、11～14、16…９層、２、３、７…８層、10、15、17、18…７層）
第 92 図　Ｃ地区地形測量図
第 93 図　第１号窯跡実測図・土層図
第 94 図　第１号窯跡遺物出土状況図
第 95 図　第１号窯跡出土遺跡実測図(1)
第 96 図　〃　(2)
第 97 図　〃　(3)
第 98 図　〃　(4)
第 99 図　〃　(5)
第 100 図　第１号窯跡出土の壷・甕類拓影図(1)
第 101 図　〃　(2)
第 102 図　Ｃ地区谷底部土層図
第 103 図　Ｃ地区１～３層出土遺物実測図
第 104 図　〃　４　層　〃
第 105 図　〃　４・５層　〃
第 106 図　〃　６　層　〃　(1)
第 107 図　〃　〃　〃　(2)
第 108 図　〃　７　層　〃　(1)
第 109 図　〃　〃　〃　(2)
第 110 図　〃　〃　〃　(3)
第 111 図　〃　〃　〃　(4)
第 112 図　〃　８　層　〃　(1)
第 113 図　〃　〃　〃　(2)
第 114 図　〃　〃　〃　(3)
第 115 図　〃　〃　〃　(4)
第 116 図　〃　〃　〃　(5)

第 117 図　C 地区 8 層出土遺物実測図(6)
第 118 図　〃　(7)
第 119 図　〃　(8)
第 120 図　〃　(9)
第 121 図　〃　(10)
第 122 図　C 地区 9 層出土遺物実測図
第 123 図　〃　10層　〃　(1)
第 124 図　〃　〃　〃　(2)
第 125 図　D 地区地形測量図、トレンチ配置図
第 126 図　出土遺物実測図
第 127 図　D 地区土層図
第 128 図　芝窯跡(上)と中塚窯体構造図（大川清ほか報文より）
第 129 図　本片子窯跡の窯体構造図（勝部昭ほか報文より）
第 130 図　須恵器窯跡（北九州市天観寺山第 1 区第 1 号窯跡）
第 131 図　金崎古墳の須恵器
第 132 図　薬師山古墳(上段)・めんぐろ古墳（下段)の須恵器
第 133 図　日脚 1 号窯出土須恵器のK・Ca・Fe量
第 134 図　〃　のRb－Sr 分布図
第 135 図　日脚 1 号窯と大井窯跡群出土須恵器のRb－Sr分布図
第 136 図　日脚 1 号窯と高畑、門生窯跡出土須恵器のRb－Sr 分布図
第 137 図　日脚 1 号窯と奈古田、芝、杉迫窯跡出土須恵器のRb－Sr分布図
第 138 図　島根県内の窯跡出土須恵器のK量の比較
第 139 図　島根県内の窯跡出土須恵器の Ca 量の比較
第 140 図　島根県内の窯跡出土須恵器の Fe 量の比較
第 141 図　窯体および試料位置
第 142 図　熱残留磁気の方向
第 143 図　西南日本における過去2000年間の地磁気永年変化と日脚 1 号窯の熱残留磁気の方向
第 144 図　日脚遺跡土壌断面と試料採取地点
第 145 図　日脚遺跡土壌断面図試料のX線回析図
第 146 － A図　アイラ火山灰（ＡＴ）の化学成分
B図　〃　の化学成分
第 147 － A図　アカホヤ火山灰（Ar ）の化学成分
B図　〃　の化学成分
第 148 － A図　試料Ｉの化学成分変化図
B図　〃
第 149 － A図　試料Ａ－１の化学成分変化図
B図　〃
第 150 － A図　試料Ａ－３の化学成分変化図
B図　〃
第 151 － A図　試料Ａ－４の化学成分変化図
B図　〃
第 152 － A図　試料Ａ－５の化学成分変化図
B図　〃
第 153 図　日脚遺跡出土土器編年関係図
第 154 図　石見地方における後期古墳分布図
第 155 図　周布地区出土埴輪実測図
第 156 図　日脚遺跡等出土須恵器一覧表

図　版　目　次

図版１　日脚遺跡周辺の航空写真　大麻山より周布平野を臨む
図版２　鰐石よりみた日脚遺跡近景　１号墳、２号墳発掘前の状況
図版３　１号墳の石室材と掘り方　１号墳下の集石遺構
図版４　集石遺構内遺物出土状況　２号墳、石室掘り方と根石
図版５　２号墳石室内遺物出土状況　Ａ地区発掘前の状況
図版６　Ａ地区土層堆積状況　Ａ地区集石炉
図版７　Ａ地区４層内遺物出土状況　Ａ地区４層内垂飾出土状況
図版８　Ａ地区３層下面検出柱穴群　Ａ地区柱穴内柱痕検出状況
図版９　Ａ地区ＳＫ01土層堆積状況　Ａ地区ＳＫ01完掘状況
図版10　３号墳（西上方より）　３号墳（南より）
図版11　３号墳遺物出土状況　３号墳玄室内遺物出土状況
図版12　３号墳羨道内遺物出土状況　３号墳完掘状況
図版13　４号墳、１号窯周辺発掘前の状況（西より）　４号墳（東より）
図版14　４号墳（西上方より）　４号墳石室内遺物出土状況
図版15　４号墳石室内遺物出土状況　５号墳、６号墳発掘前の状況
図版16　５号墳、６号墳発掘後の状況　５号墳全景（北より）
図版17　５号墳盛土状況　５号墳盛土状況
図版18　５号墳付近宝篋印塔　６号墳（南より）
図版19　６号墳石室掘り方内遺物出土状況　６号墳周辺柱穴群（北より）
図版20　Ｂ地区土層堆積状況　Ｂ地区土層堆積状況
図版21　Ｂ地区ＳＫ02・03　Ｂ地区ＳＫ02
図版22　Ｂ地区ＳＫ04　Ｂ地区ＳＫ04内堆積状況
図版23　Ｂ地区ＳＫ05　Ｂ地区ＳＫ05内土堆積状況
図版24　Ｂ地区ＳＫ06　Ｂ地区ＳＫ07
図版25　Ｂ地区９層下面ＳＤ04柱穴群　Ｂ地区９層下面ＳＤ05土層堆積状況
図版26　Ｃ地区１号窯跡（南より）
図版27　１号窯跡検出状況　１号窯跡窯体内遺物出土状況
図版28　１号窯跡窯体継断土層　１号窯跡窯体横断土層
図版29　１号窯跡窯体完掘状況　１号窯体断ち割り状況
図版30　１号窯跡熱残留地磁気測定風景　１号窯

図版31　C地区谷底部土層堆積状況　C地区谷底部横断土層
図版32　C地区谷底部縦断土層　C地区谷底部完掘状況
図版33　1号墳出土鉄製品　1号墳下集石
図版34　1号墳下集石遺構出土遺物
図版35　1号墳下集合遺構出土遺物
図版36　1号墳下集石遺構出土遺物　2号墳出土遺物
図版37　2号墳出土遺物
図版38　A地区4層出土縄文土器（外面　内面　外面）
図版39　A地区4層出土縄文土器（内面　外面　内面）
図版40　A地区4層出土縄文土器　外面、内面　A地区4層出土石器　黒曜石製石鏃
図版41　A地区4層出土石器　安山岩製石鏃　安山岩製石鏃　安山岩製石鏃
図版42　A地区4層出土石器　楔形石器　スクレイパー(表)　スクレイパー(裏)
図版43　A地区4層出土石器　磨石　黒曜石石核(表)　黒曜石石核(裏)
図版44　A地区4層出土石器　安山岩石核(表)　安山岩石核(裏)　安山岩石核(表)
図版45　A地区4層出土石器　安山岩石核(裏)　石核打面パンチ痕、石斧、垂飾
図版46　1・3A地区南側尾根上出土、6・7A地区3層内出土、4・5A地区SK01出土、3号墳出土置物
図版47　3号墳出土遺物
図版48　3号墳出土遺物
図版49　3号墳出土遺物　4号墳出土遺物
図版50　4号墳出土遺物
図版51　6号墳出土遺物
図版52　B地区出土遺物　11層出土縄文土器(外面)　11層出土縄文土器(内面)　10層出土縄文土器(外面)
図版53　B地区出土遺物　10層出土縄文土器(内面)　石鏃　尖頭器(表)
図版54　B地区出土遺物　尖頭器(裏)　スクレイパー(表)　スクレイパー(裏)
図版55　B地区出土遺物　石錘　石核(表)　石核(裏)
図版56　B地区出土遺物　石斧　須恵器　須恵器
図版57　C地区1号窯跡出土遺物
図版58　C地区1号窯跡出土遺物
図版59　C地区1号窯跡出土遺物
図版60　C地区1号窯跡出土遺物
図版61　C地区1号窯跡出土遺物

図版62　甕内面タタキA類　甕内面タタキB類　甕内面タタキC類　甕内面タタキD類
甕内面タタキE類　C地区1号窯跡出土遺物
図版63　C地区谷底部出土遺物（1～3層出土　1～3層出土　1～3層出土）
図版64　C地区谷底部出土遺物（4層出土　4層出土　4層出土）
図版65　C地区谷底部出土遺物（4・5層出土　4・5層出土　4・5層出土）
図版66　C地区谷底部出土遺物（6層出土　6層出土　6層出土）
図版67　C地区谷底部出土遺物（7層出土　7層出土　7層出土）
図版68　C地区谷底部出土遺物（7層出土　7層出土　7層出土）
図版69　C地区谷底部出土遺物（7層出土　7層出土　7層出土）
図版70　C地区谷底部出土遺物（7層出土　7層出土　7層出土）
図版71　C地区谷底部出土遺物（7層出土　7層出土　7層出土）
図版72　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版73　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版74　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版75　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版76　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版77　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版78　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版79　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版80　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版81　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版82　C地区谷底部出土遺物（8層出土　8層出土　8層出土）
図版83　C地区谷底部出土遺物（9層出土　9層出土　9層出土）
図版84　C地区谷底部出土遺物（9層出土　9層出土　9層出土）
図版85　C地区谷底部出土遺物（10層出土　10層出土　10層出土）
図版86　C地区谷底部出土遺物（10層出土　10層出土　10層出土）
図版87　C地区谷底部出土遺物（10層出土　10層出土）
図版88　発掘調査風景（調査風景　調査風景　調査参加者）

Ⅰ 調査にいたる経緯

昭和55年12月18日に開催された島根県土地利用調整会議に、島根県住宅供給公社（以下、公社とする。）から仮称「大久保住宅団地」（浜田市日脚町地内）造成計画が提出された。開発面積は約8.55ヘクタールにおよぶもので、計画地内に狐塚古墳(島根県遺跡目録、通番号2609)が存在すると考えられたため、浜田市教育委員会が確認のための現地踏査を行った。踏査の結果、墳丘はすでに消失しているが、石室を構成していたと考えられる石材の存在が確認され、石室の基部は現存しているものと考えられた。その後、狐塚古墳以外にも遺跡が存在する可能性が大きいと判断した島根県教育委員会(以下、県教委とする。)は公社と協議のうえ、昭和57年度に再度計画地内の遺跡分布調査を行ったところ、狐塚古墳周辺の畑地で大規模な遺跡が存在することを確認した。立木密生の部分もかなりあり、詳細は不明であったが、ほかに地形的に古墳、砦跡として考えられる地点があった。

公社は昭和58年度中に造成工事を発注する予定であったことから、度重なる協議を行い、急きょ昭和58年度事業として県教委が発掘調査を行うことになった。

現地での発掘調査は昭和58年6月から昭和59年4月の間で行った。発掘調査は対象区に詳細不明の地点も含まれていたので、各調査区で部分発掘を実施して全体の状況を把握した後に、必要個所は全面発掘を行うという方針のもとで行った。昭和59年度に先送りした部分を除いた調査区の部分調査を行った結果、当初予定していたⅡ区およびⅣ区は遺構が存在しないことが判明した。Ⅰ区の東側に須恵器を焼いた窯跡の存在が明らかになったため、当初の計画を変更して調査を行った。昭和59年度に送った部分では、Ⅰ区の南側に新しく発見した古墳が存在する丘陵の調査を追加することになった。

発掘調査によって得られた資料についての詳細は以下報告するが、古くは縄文時代早期から新しいところでは中、近世に至る時代の遺物、遺構が検出された。中でも古い時期の須恵器を焼いた窯跡の検出はこれまでに例がなく、今後の調査研究に役立つものと考えられ、造成工事で消失するのが惜しまれたため、公社および県土木部建築課と度重なる協議を行って、盛土中ではあるが、将来破壊しないように保存することとなった。

なお、今回の調査は調査期間の後半頃から造成工事と並行することになったが、事故もなく順調に現場調査を終えることができたのは、公社、造成工事業者および地元の各関係者の協力があったからである。記して謝意を表する。

Ⅱ 位置と歴史的環境

本遺跡の所在する地籍は、浜田市日脚(ひなし)町大久保他の畑地、山林である。ここは周布平野の北東に位置し、ちょうど日脚八幡宮裏手の丘陵にあたる。この丘陵は、塚ケ原山（標高185 m）の北側に伸びる一連の丘陵から沖積地に突き出た標高20mあまりの比較的なだらかな丘陵地で、この付近は多数の谷が入り込み、複雑な地形をなしている。丘陵の北側には日脚地区の民家が建ち並び、西方の眼下には周布平野が広がり、背面に大麻山（標高599 m）がそびえ立つ。また、晴天の日には遠く山口県の高山を眺望することのできる景勝地である。

本遺跡の眼前に広がる周布平野は、中国山地に源を発する周布川によって形成され、塚ケ原山、米ケ辻山を頂点として北側に伸びる丘陵と日本海に突き出た津摩地区の丘陵地帯にはさまれているため、沖積平野としてはさほど広くない。しかし、平野が少ない石見地方においては比較的大きな沖積地で、その周辺には当地方の代表的な前方後円墳である周布古墳をはじめ、多くの遺跡が古くから知られている。次に、代表的な遺跡についてその概要をのべることにする。

鰐石遺跡

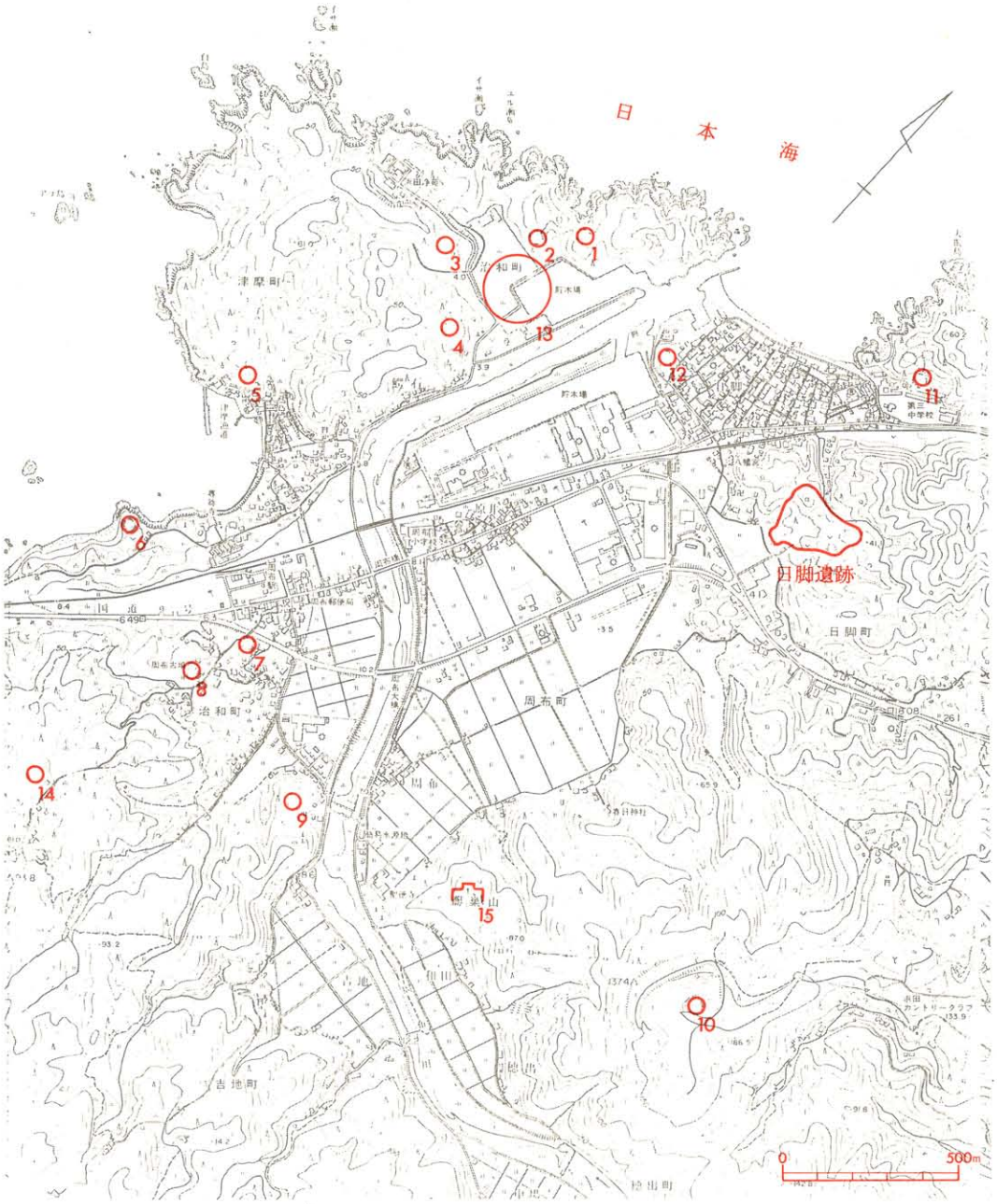
周布川の川口に近い沖積微高地に存在する弥生～奈良時代にかけての複合遺跡で、昭和58年に浜田市教育委員会が主体となり遺跡の一部について発掘調査を実施した。その結果、弥生～奈良時代の遺物を含む黒色砂壌土の下層から32基におよぶ土壙を検出した。これらの土壙は円形、楕円形、隅丸長方形の平面形を呈し、規模は長径が4.0 m～1.0 mと大小様々である。各土壙とも壙内に墓標と思われる拳大から人頭大の自然石を伴っていることから、これらの土壙は埋葬施設と考えられている。土壙内から出土した遺物には磨製石剣、磨製石鏃、石鎌、石斧、石のみ、石包丁、管玉、土錘、黒曜石の剥片等の石器の他、弥生前期～中期にかけての特徴をもつ甕、壺、蓋の土器がある。

鰐石遺跡は出土遺物からみて北九州などとの関係が考えられ、弥生文化の伝播を考えるうえからきわめて重要な遺跡で、県下における代表的な弥生前期の遺跡である。

周布古墳

山陰本線周布駅の西南約500 mの所に位置する前方後円墳である。ここは米ケ辻山から派生して北側に伸びる丘陵の先端近くで、周布平野西側の丘陵上にあたる。墳丘は東側および前方部の先端が民家によって削り取られているが、現存長66.6m、後円部径35.0m、くびれ部の幅18.0m、前方部端の幅24.5 mを測る。高さは後円部が約5.7 m、前方部は5.5 mあまりで、前方部のよく発達した前方後円墳である。後円部は基庭部より2.0 mの高さで段がめぐり、墳頂部には12.0 m×10.5 mの平面をもつ。墳丘の斜面には川原石を用いた葺石がよく残っており、円筒埴輪、形象埴輪の破片が散布している。

周布古墳は石見地方を代表する大形の前方後円墳で、国の史跡に指定されている。



1. 鰐石第２号古墳　2. 鰐石第１号古墳　3. 鰐石第３号古墳　4. 森ケ曽根古墳
5. 蔵地繁正宅後古墳　6. 小西ケ丘古墳　7. めんぐろ古墳　8. 周布古墳
9. 沃田寺山古墳　10. 塚原山古墳群　11. 鈴居古墳　12. 日脚古墳
13. 鰐石遺跡　14. 坂辻遺跡　15. 鳶巣城跡

第１図　日脚遺跡の位置と周辺の遺跡

めんぐろ古墳

周布古墳の北側100 mの所に存在していた県内では最も古い横穴式石室を内部主体にもつ古墳である。昭和24年の田地拡張工事中に石室および遺物が発見されたが、石室はこの時破壊された。横穴式石室は発見当時の見取図によると西側に開口している両袖形で、玄室は長さ4.0 m、幅3.0～3.5 mあまりを測り、床面には礫を敷く。壁は下方に長さ1.5 mあまりの大きな石を据え、上方は人頭大の石を用いて持ち送り式に積み上げていたものと思われる。また、玄室内には屍床仕切石と考えられる板状の石が奥に向って一列に伸び、奥部には長さ70 cm～80 cmの六角柱の石が数本立っていたという。この柱状の石は石屋形状の施設に使われたものと考えられているが、壁に支柱をした横穴式石室が最近九州で発見されていることから、このような性格をもつものとも考えられる。石室内から出土している遺物としては鏡、水晶切子玉、鈴釧、三輪玉形金具、直刀、槍身残片、石突、轡、馬鐸、鉄地金銅張円形金具、鉸具残片、それに蓋坏、瑞、提瓶、壺、有蓋高坏の蓋、短頸壺、子持脚付壺などの須恵器がある。なお、国道9号線バイパス工事中に日脚遺跡出土遺物に類似する円筒埴輪が出土している。

埴輪を除いた遺物は現在、県立博物館で保管されており、県の有形文化財に指定されている。

日脚下浦遺跡

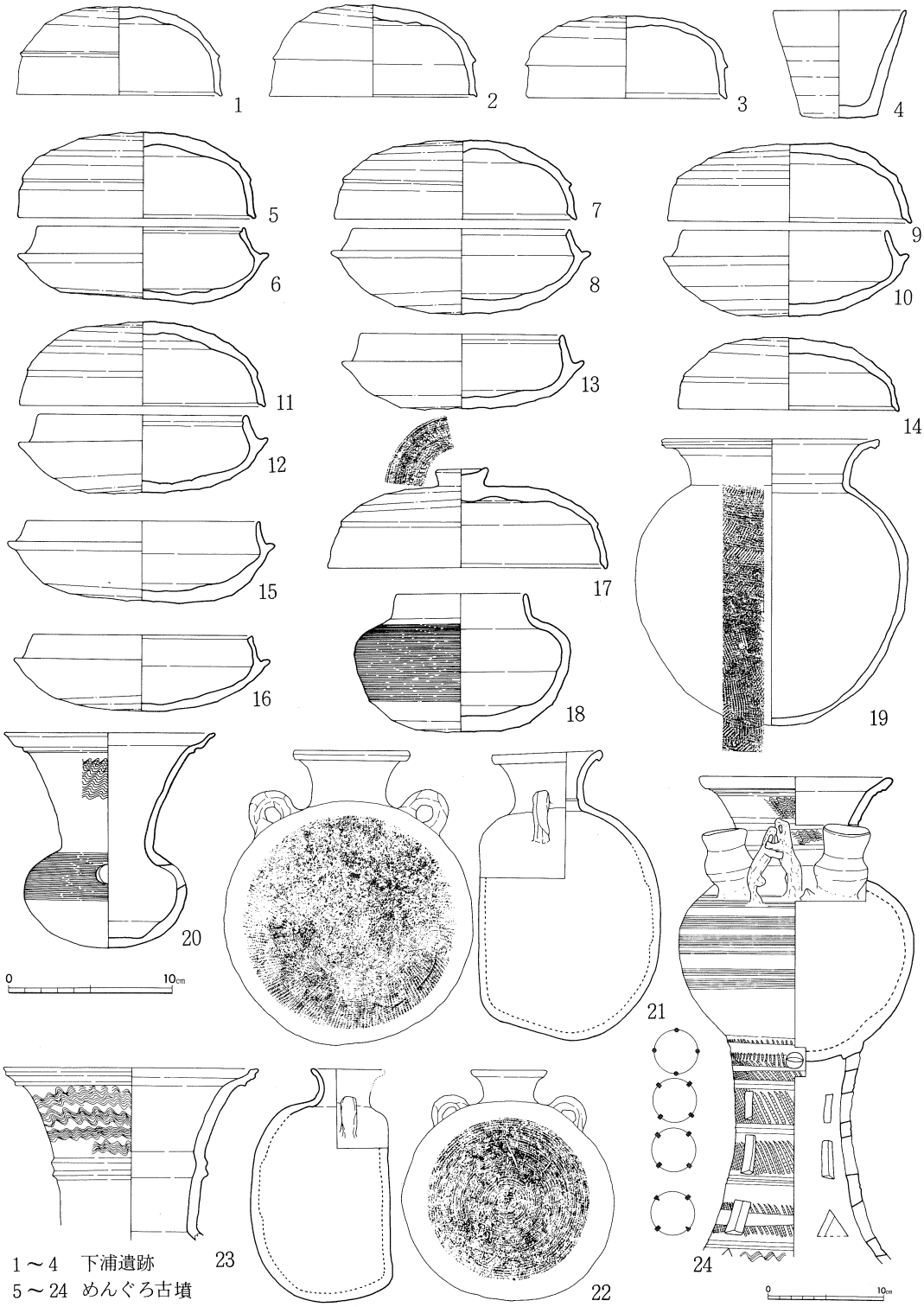
周布川川口に近い東岸の砂丘地に存在する遺跡で、掘削作業中に2か所から須恵器等の遺物が発見されている。このうち昭和25年に字台から出土した須恵器は蓋坏(蓋)、コップ形土器があり、蓋坏は古式須恵器の特徴をもつものである。これらの土器に伴う遺構については詳細が明らかではないが、発見当時のメモ書きによると箱式石棺状の石囲いの中から出土していることから、埋葬施設と推定される。また、昭和26年に字御神幸地の地表下1.5 mのところから掘り出された土器は有蓋高坏、瑞、蓋坏(蓋)の須恵器および土師器の高坏がある。遺構については明らかでないが、有蓋高坏が3セット出土していることから、やはり埋葬施設に関係するものと思われる。

沃田寺山古墳

周布平野南側に突き出た舌状台地の先端部に存在していた古墳で、昭和34年に簡易水道の貯水地造成中に発見されたが破壊された。埋葬施設についての詳細は不明であるが、出土した遺物には蓋坏、高坏、瑞、提瓶などの須恵器があり、比較的まとまりをもつものである。これらの須恵器は形態的に山本清編年のⅢ・Ⅳ期の2つに分けることができる。

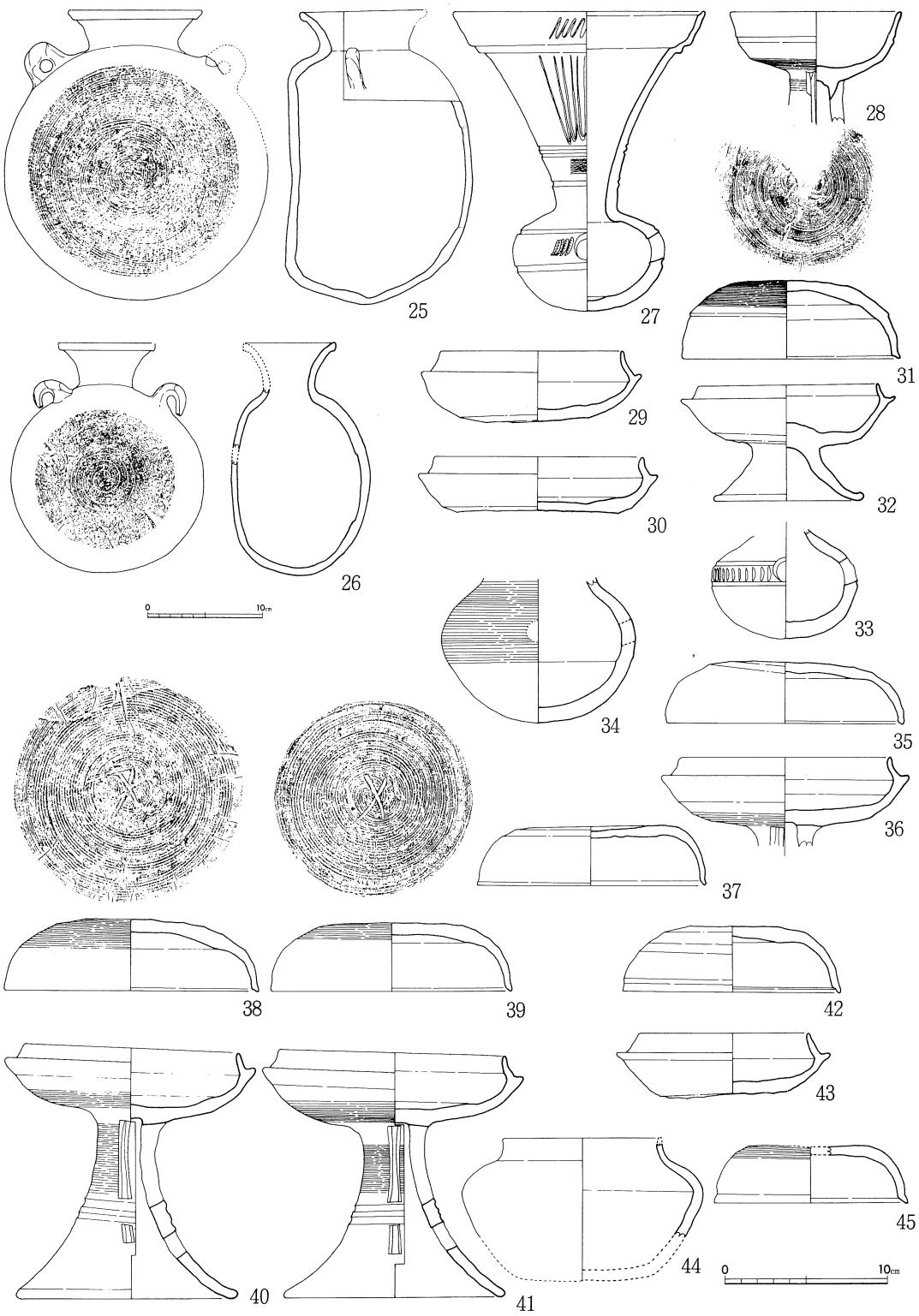
蔵地繁正宅後古墳

国鉄周布駅の北約500 mの丘陵先端付近に築かれた箱式石棺を主体部にもつ古墳で、大半が破壊され、わずかに石棺の一部が残っている。現存している石棺は長さ2.2 m、幅0.9 mを測り、東側の側壁および天井石が失われている。石棺の壁は長さ1.0 m、幅0.7 mあまりの扁平な石を横方向に立てて築造している。出土遺物は明治時代に石棺内から大刀が出土したらしいが、現存していない。ただ、石棺の周辺から蓋坏、短頸壺など須恵器が採集されている。



1～4　下浦遺跡
5～24　めんぐろ古墳

第2図　周布平野周辺遺跡出土須恵器実測図(1)



22～32 沃田寺山古墳　33～41 下浦遺跡　42～44 蔵地宅後古墳

第 3 図　周布平野周辺遺跡出土須恵器実測図(2)

Ⅲ 調 査 の 概 要

調査対象地は面積が約63,000㎡あまりの広範囲にわたる地域である。ここは東西方向の丘陵から南側の沖積地に向って数本の尾根が伸び、複雑な地形をなしている。これらの丘陵は石州瓦用の粘土採取や、開墾などによって丘陵全体が人工的にかなり削平されているところである。現在はおもに畑地として利用されているが、地山が粘質土であるため海岸から砂を搬び上げて稲作地としている。

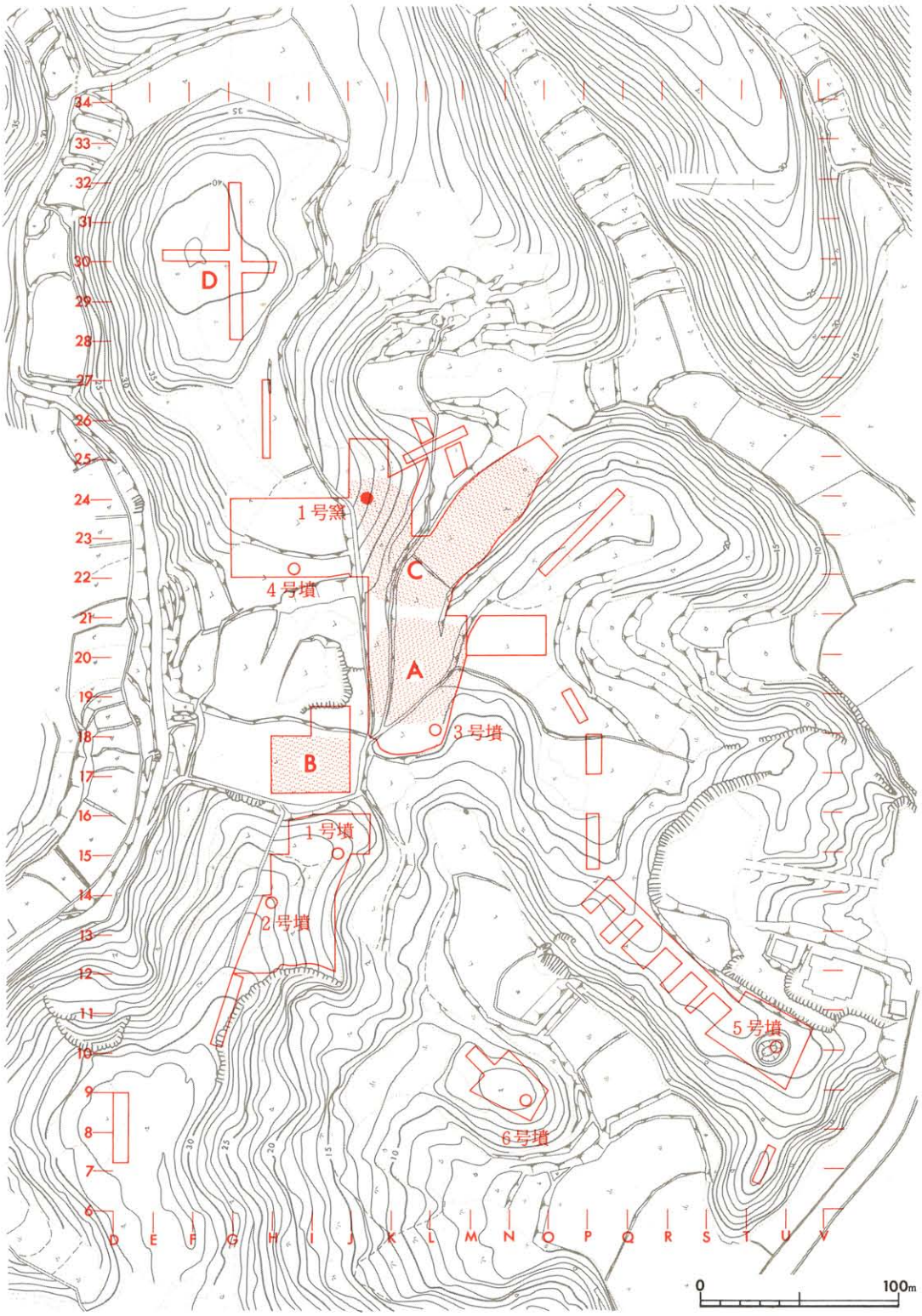
調査はまず丘陵全体に磁北を基準として10m方眼のメッシュを組み、遺物が散布していたA、B地区を中心に調査区を設定するとともに、各尾根にトレンチを入れて遺構の有無について確認を行った。その結果、尾根上から古墳6基、A調査区の東側にあたるC調査区から窯跡1基、それにA、B調査区から縄文早期の土壙、集石炉、奈良時代の掘立柱建物跡をそれぞれ検出した。しかし、東西丘陵の両端および南北丘陵の5、6号墳を除く尾根上からは遺構を検出することができなかった。

古墳は5号墳を除き、横穴式石室を内部主体にもつもので、いずれも石室の根石がわずかに残っている程度であったが、石室の床面に耳環、鉄鏃、直刀、須恵器などの副葬品が残っていた。なお、6基の古墳の他、東西丘陵の東端にあたるD調査区およびA調査区の南側の尾根上から古墳の副葬品と思われる遺物が出土したことから、この地点にも古墳が存在していた可能性が強く、本来この丘陵地には8基以上の古墳が築かれていたものと推定される。

C調査区で検出した窯跡は西向きの斜面中段に築かれた長さ9.9m、最大幅2.5mを測る5世紀末～6世紀初頭の登り窯で、石見地方の須恵器生産の開始を考えるうえにきわめて重要な発見であった。当地方では今まで6世紀末～7世紀にかけての須恵器窯跡が益田市で見つかっており、須恵器の生産は出雲地方より遅れて出現するものと考えられていただけに、再検討が必要となってきた。また、C調査区の谷の地域から、二次堆積された6世紀後半代の須恵器片、円筒埴輪片、それに窯壁片がコンテナ300箱あまり出土し、益田地方に窯が出現するまでの5世紀末～6世紀後半にわたり、同丘陵地で須恵器、埴輪の生産が行われていたことがわかった。このように、日脚遺跡から出土した須恵器は窯跡関係が5世紀末～6世紀初頭、古墳から出土したものが6世紀～7世紀代、それに掘立柱建物跡に伴う奈良～平安時代のものまで、5世紀末～9世紀にわたる須恵器が出土しており、石見地方の須恵器編年を考えるうえにきわめて貴重な資料となった。

AおよびB調査区で検出された縄文早期の遺構として集石炉1基、土壙6基がある。これらの遺構は石見地方において初めての発見であり、土器、石器も豊富なことから、当地方の縄文早期の様相を知るうえで貴重な資料となった。

このように、今回実施した日脚遺跡の発掘調査では縄文早期の遺構および古墳時代の窯跡、古墳を検出した。これらの資料は今まで明らかでなかった石見地方の古代を考えるうえに重要な手掛かりを与えるものとして注目される。



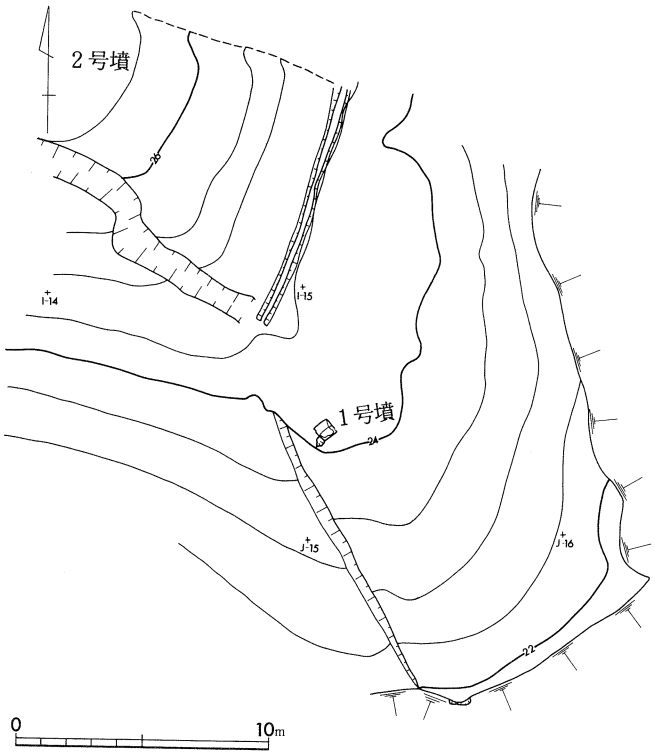
第 4 図　調査区全体配置図

1. 調査の結果

(1) 第1号墳

B調査区西側斜面上に築かれた横穴式石室を内部主体にもつ径10 m程度の円墳である。ほとんどが破壊されていたが、石室の掘り方および奥壁の根石1個が残っていたため、かろうじて古墳と判明した。石室の掘り方は長さ4.6 m、幅3.2 mを測る。掘り方内の土層をみてみると、地山の上に白褐色粘土層の床面があり、その上に褐色、黄褐色、淡褐色の粘土層がある。これら床面上の土層が堆積する間に一次の石室破壊があったものと思われ、その後に奥壁根石等を抜き取った二次の破壊を受け、さらに掘り方の東側および南側に最も新しい撹乱を受けて、現在の状況になったものと考えられる。したがって、掘り方内に現存していた人頭大の石は原位置を保つものとは考えがたい。ただ、掘り方の東側に長さ0.6 m、幅0.3 mの根石を抜き取ったと思われる浅い落ち込みがあり、これは位置から考えて玄室側壁の部分に当るものと推定される。また、原位置を動いていないと思われる奥壁の根石は幅0.6 m、高さ1.2 m、厚さ0.7～0.4 mの比較的大きな石である。

これらのことから、石室は長さ3.5 m、幅1.5 mあまりのやや小規模な横穴式石室であったものと思われる。なお、石室の北西斜面上から1号墳の周溝と推定される幅1.5 m～0.7 mの浅い溝を約4.0 mにわたって検出した。



第5図　第1・2号墳調査前地形測量図

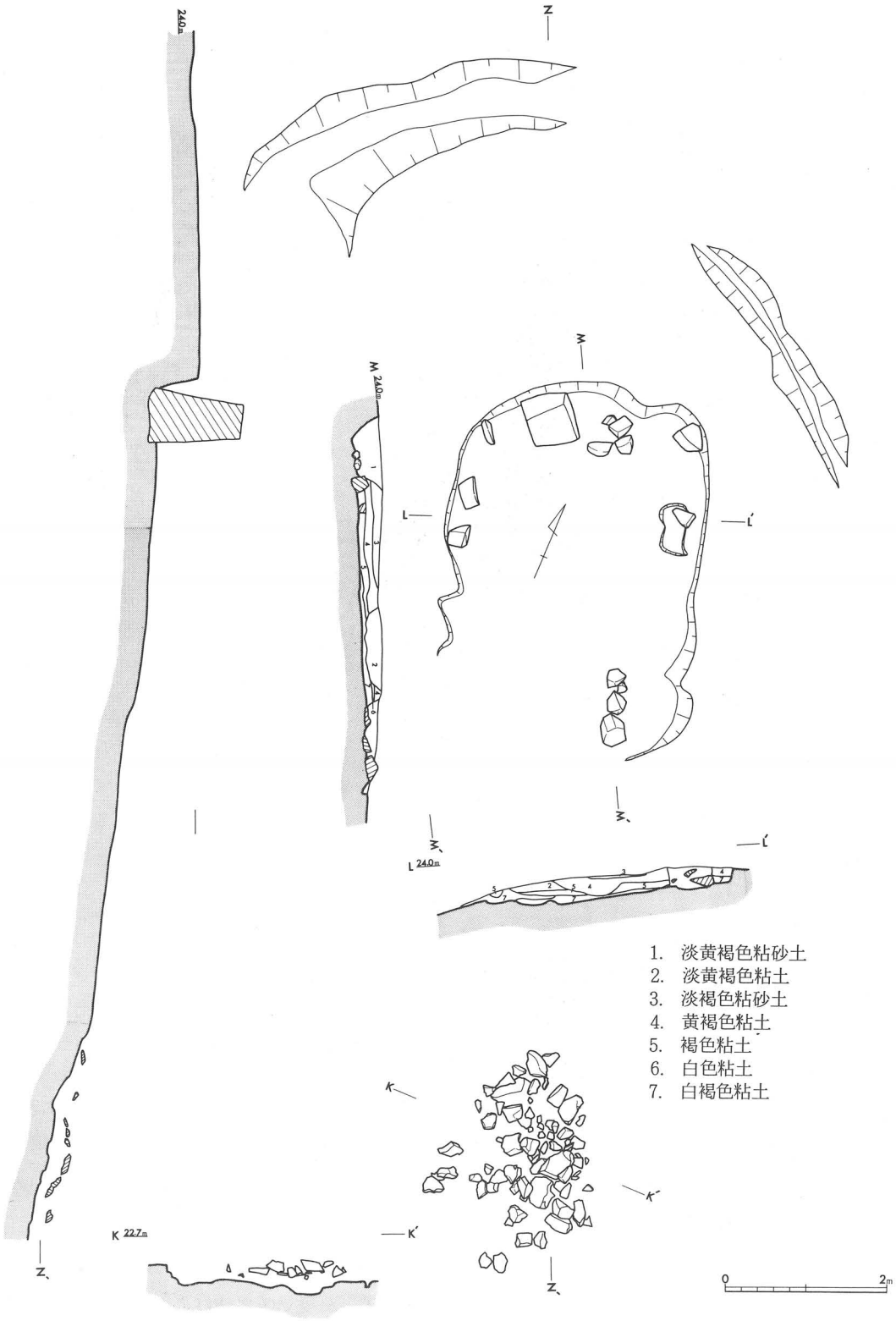
また、石室前方の斜面には人頭大から拳大の石数十個が2.8 m×2.0 mの範囲内に集石していた。これらの石は浅く凹んだ落ち込みの上面から検出したもので、石の周りには須恵器片が粉砕されたような形で多量に散在していた。この集石は1号墳を破壊した時点で掻き出されたものとも考えられるが出土した須恵器は他の古墳と比べて高坏が多く、新しい時期の遺物を含んでいない。また、集石下の土層に撹乱された様子がないこと、さらに石室の石材としては石が小さすぎることなどから、この遺構は1号墳に関係する墳墓祭祀

第6図　第1・2号墳調査後地形測量図

にかかわるものと考えられる。なお、ここから出土した須恵器の破片散布状態を検討してみると、同一個体の破片が斜面の上下方向に散布しているものが多く、その場で粉砕したと思われる土器は1点のみである。

出土遺物（第9図～第11図）

石室内から出土した遺物には短頸壺、高坏の須恵器と耳環、鉄鏃、鉄釘がある。短頸壺(1)は口縁部がほぼ垂直に上り、口縁端部は丸く、肩部はなだらかに下る。高坏は無蓋高坏の坏部の破片(2)と脚部の破片(3)がある。耳環(52)は保存状態が悪く、縁青が吹き出しているが径1.9㎝あまるの金メッキされたものである。鉄鏃は10点あまり出土している。いずれも保存状態が悪く、鏃身の残ってい

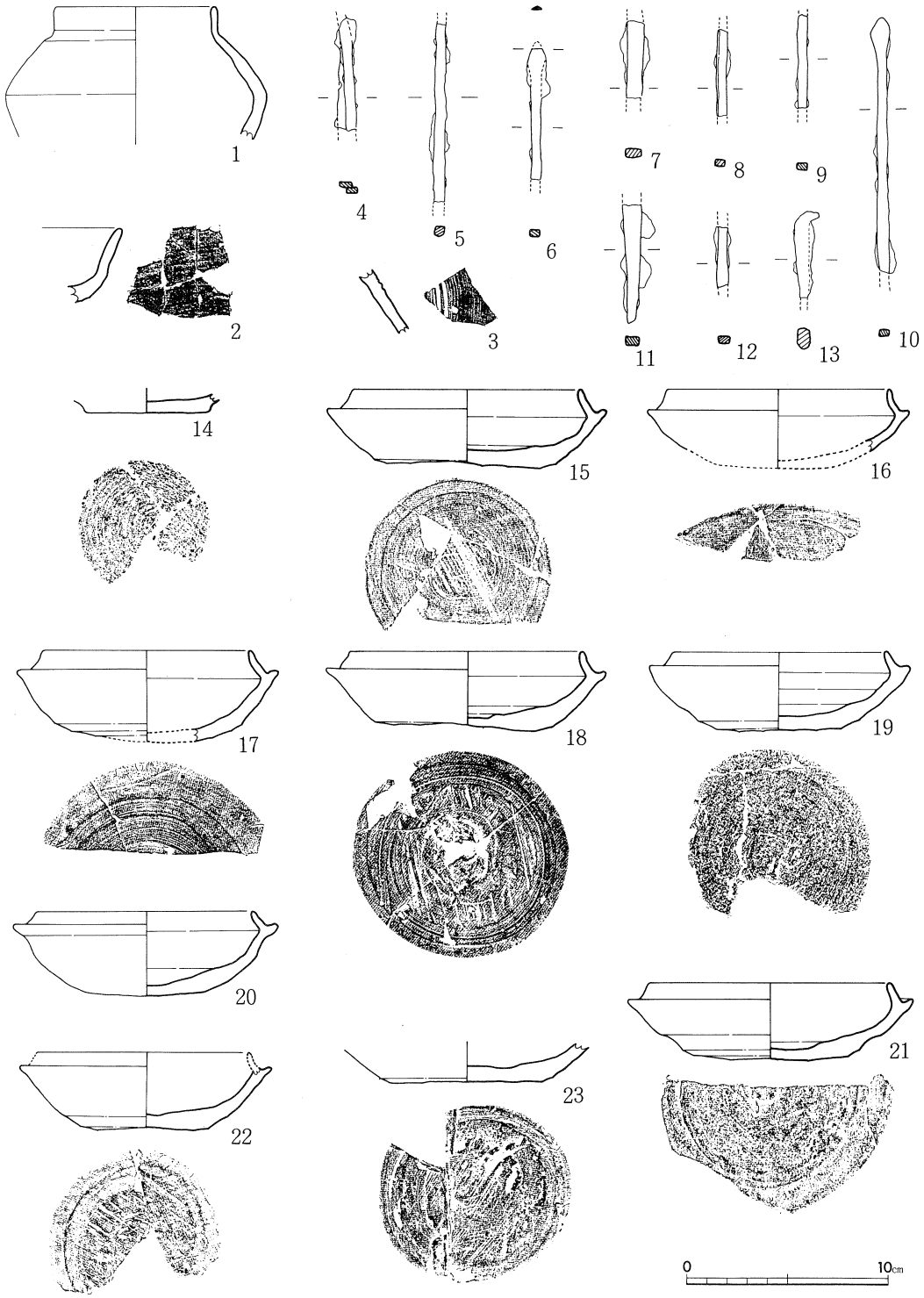


第7図　第1号墳・集石遺構実測図

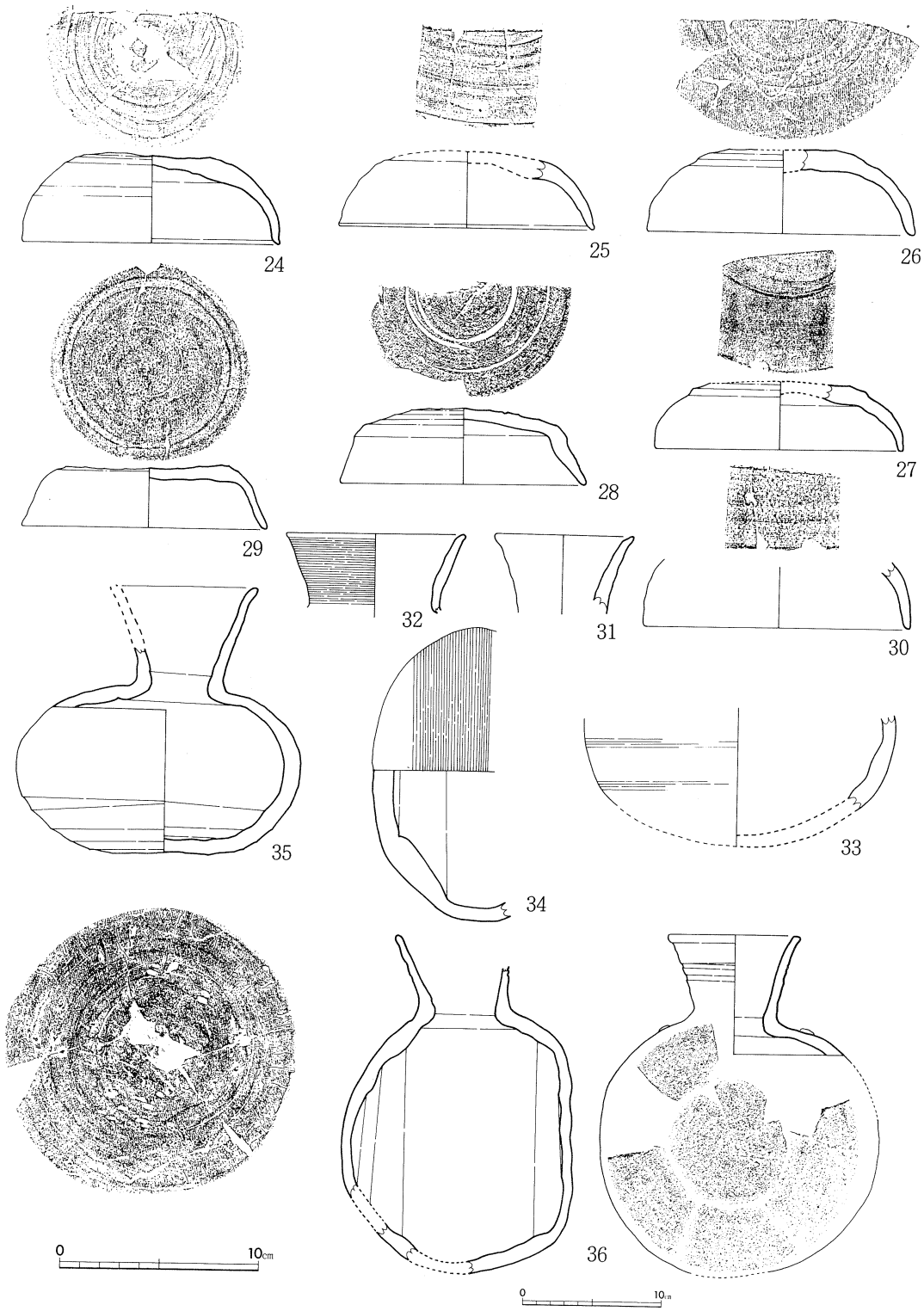
第8図　集石遺構遺物出土状況図

る6、10は尖根式に属する。剣先に似た形態をもち、鏃身の断面は三角形を呈する。他に箆被部から茎部にかけての破片（4、5、7～9、11、12）がある。これらも尖根式と思われる。13の鉄器は上部の先端が鍵形に屈曲し、下方になるにしたがって尖るもので鉄釘と考えられる。

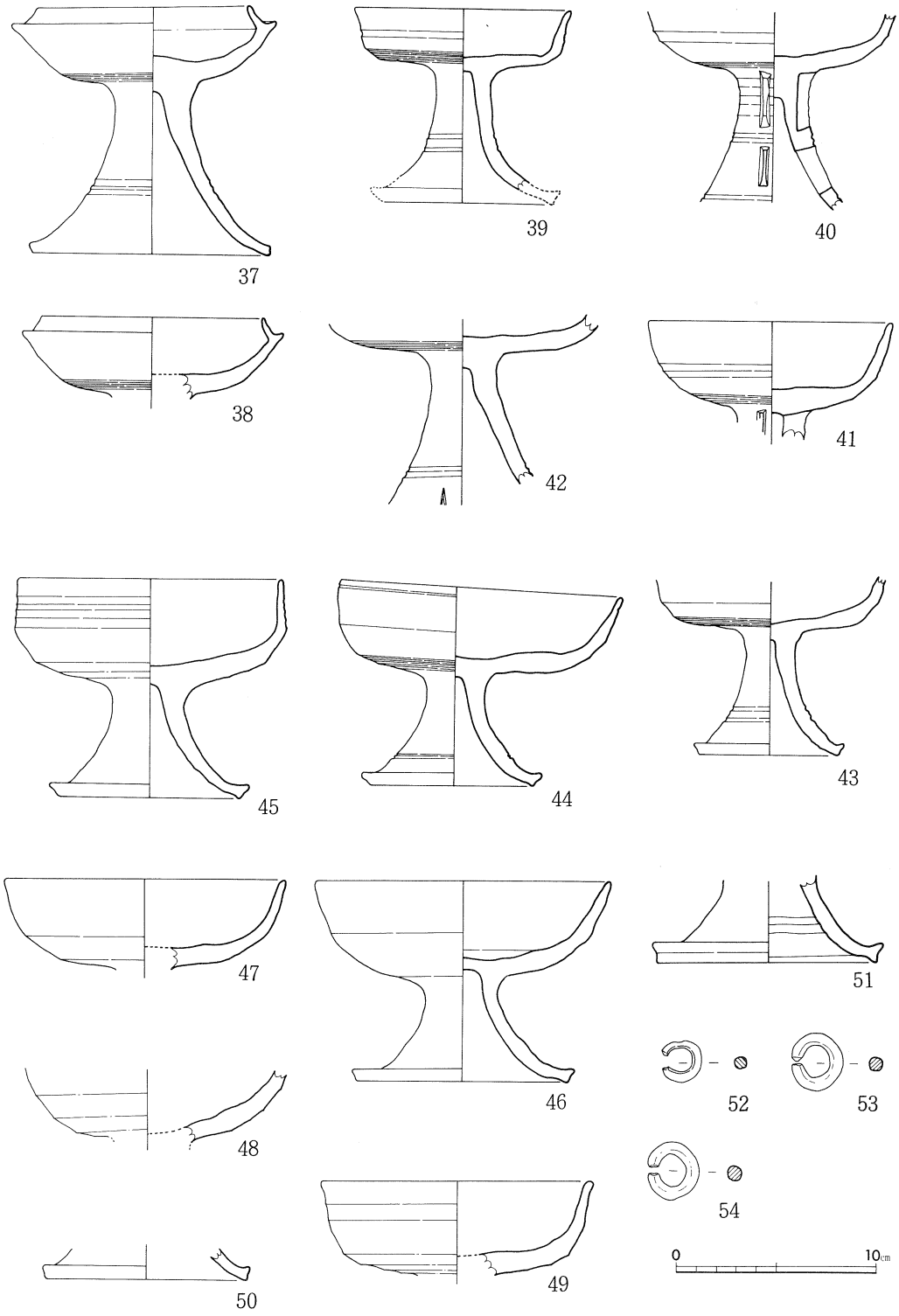
集石遺構から検出した須恵器には蓋坏、平瓶、提瓶、高坏等がある。蓋坏の身はたちあがりの高さから2つに分けることができる。すなわち15～18は若干外反気味に伸びる高さ1.0㎝あまりのたちあがりをもつのに対し、19～20は1.0㎝以下でやや低い。これらの身は底部が平らで、底体



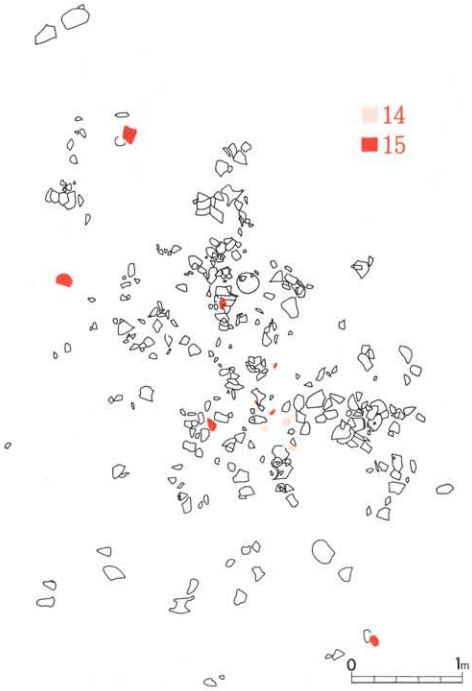
第9図　第1号墳出土遺物実測図(1)



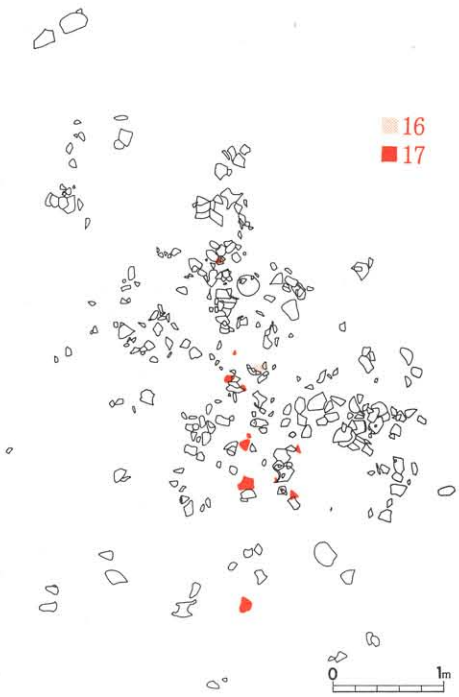
第10図　第１号墳出土遺物実測図(2)



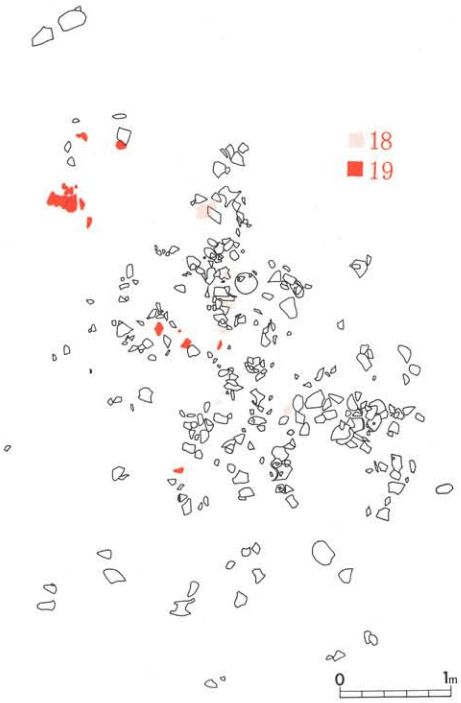
第11図　第１号墳出土遺物実測図(3)



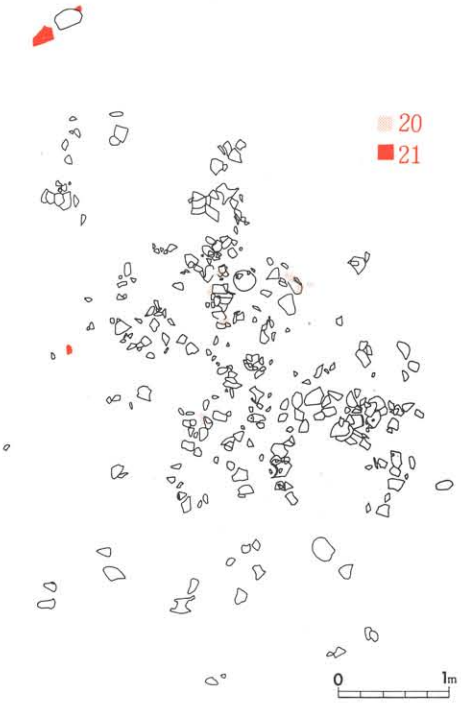
第12図　集石遺構土器出土状況図(1)



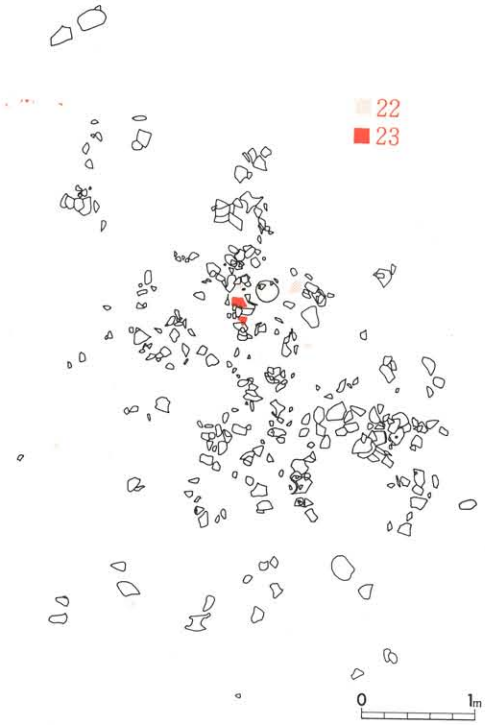
第13図　集石遺構土器出土状況図(2)



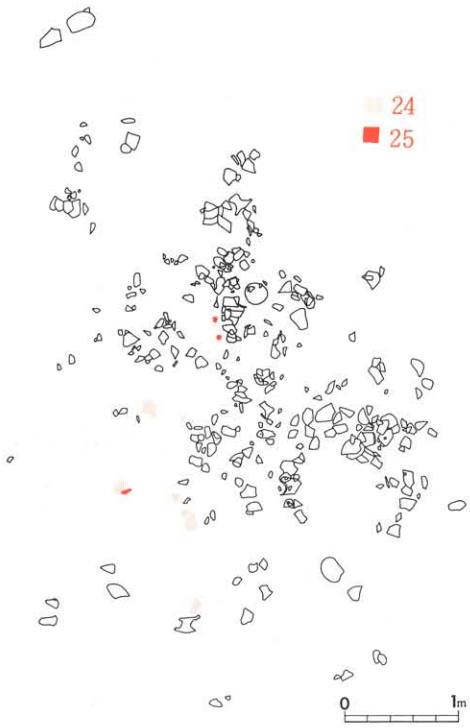
第14図　集石遺構土器出土状況図(3)



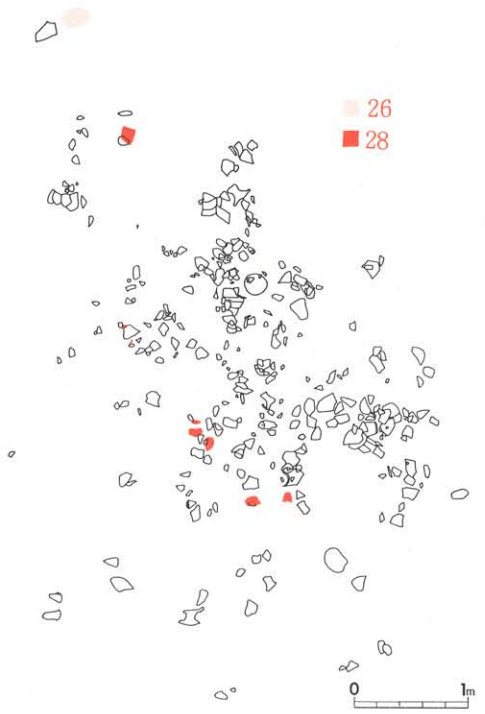
第15図　集石遺構土器出土状況図(4)



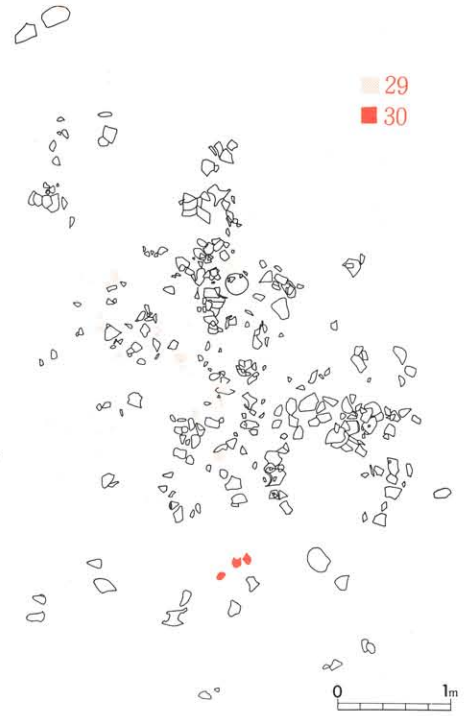
第16図　集石遺構土器出土状況図(5)



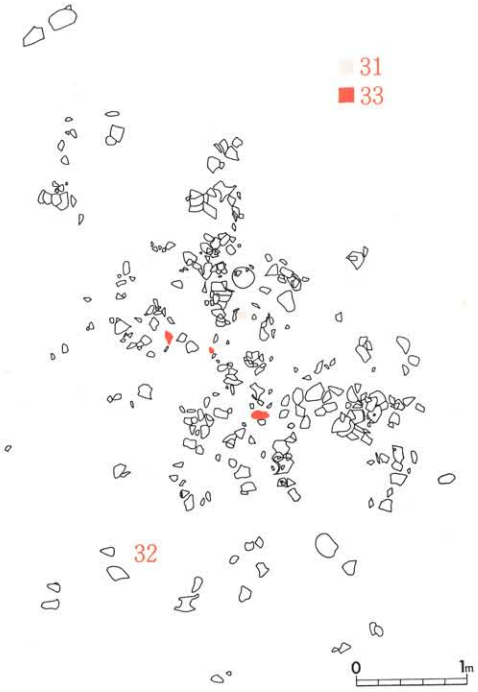
第17図　集石遺構土器出土状況図(6)



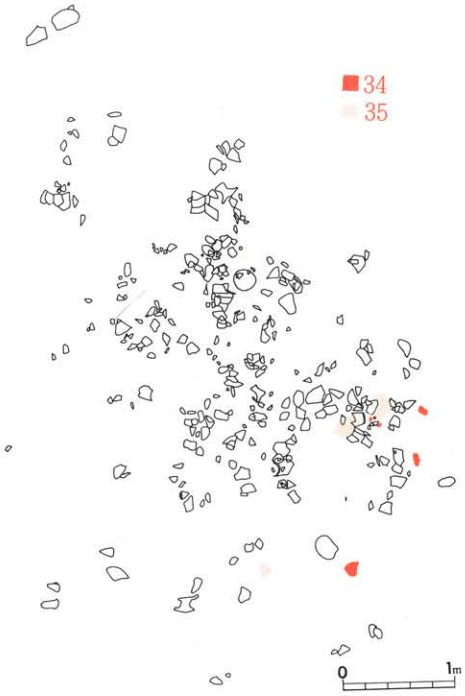
第18図　集石遺構土器出土状況図(7)



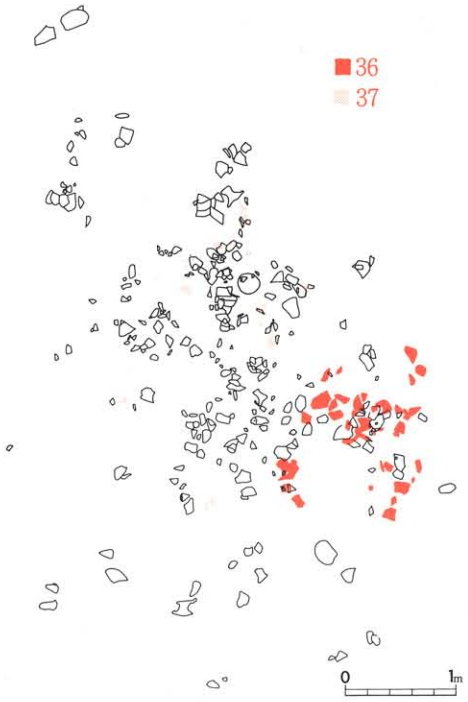
第19図　集石遺構土器出土状況図(8)



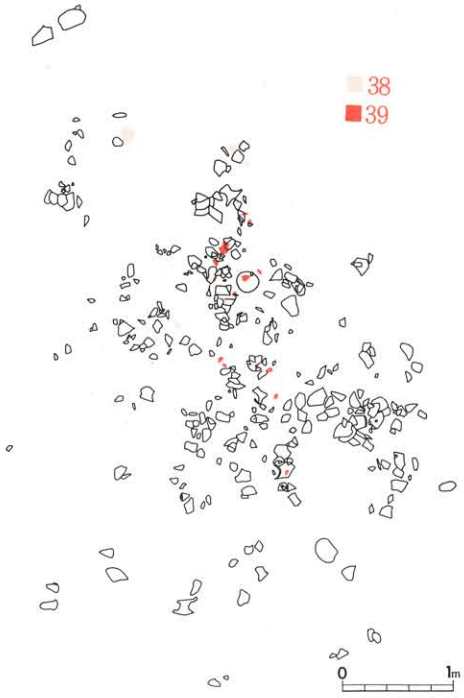
第20図　集石遺構土器出土状況図(9)



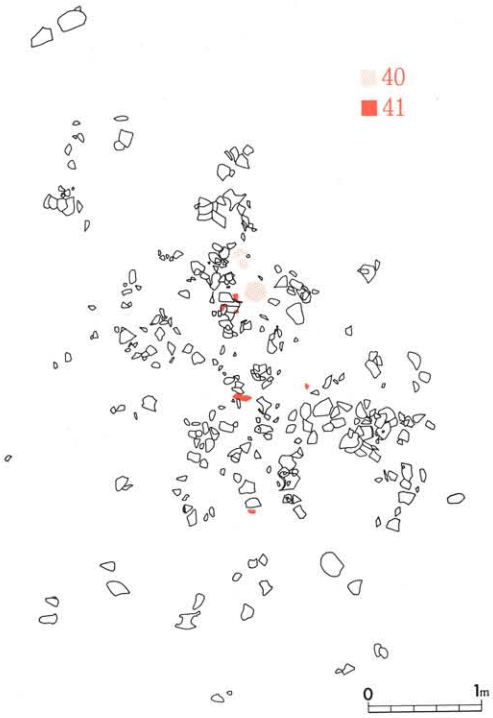
第21図　集石遺構土器出土状況図(10)



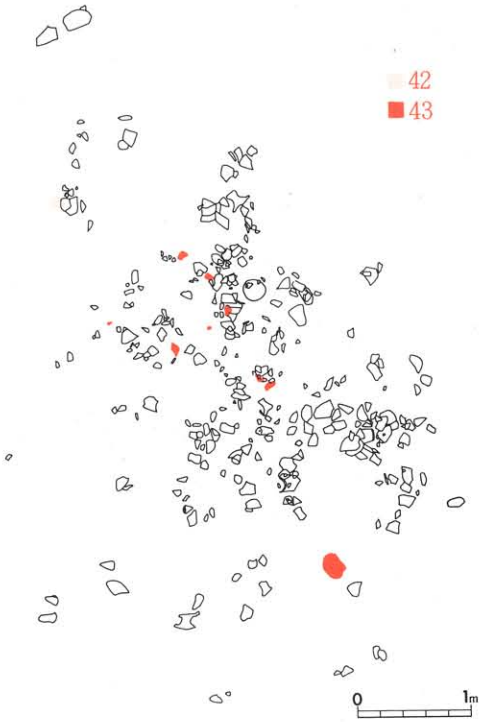
第22図　集石遺構土器出土状況図(11)



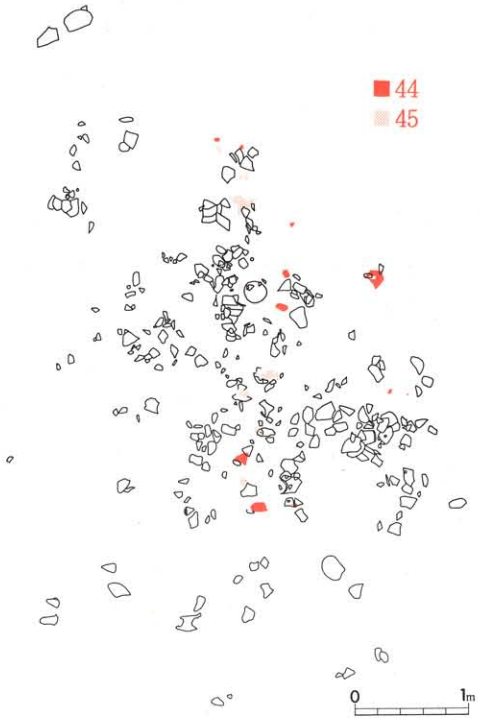
第23図　集石遺構土器出土状況図(12)



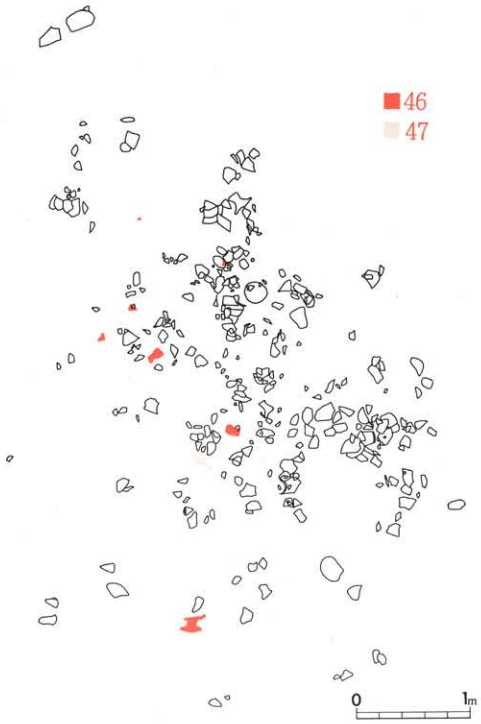
第24図　集石遺構土器出土状況図(13)



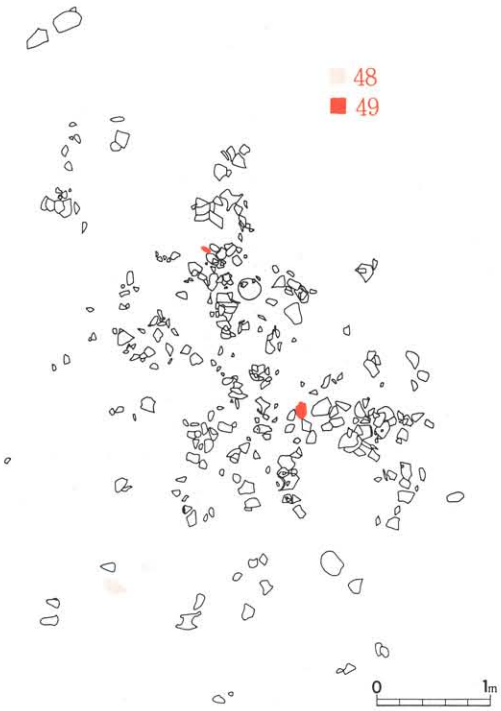
第25図　集石遺構土器出土状況図(14)



第26図　集石遺構土器出土状況図(15)



第27図　集石遺構土器出土状況図(16)



第28図　集石遺構土器出土状況図(17)

第29図　集石遺構土器出土状況図(18)

部に回転ヘラ削りを施す。また、15、18、22、23の底部には板状工具によるナデの痕跡が残っている。このナデは回転ヘラ削りの後に施しているものと削りの前に行っているものの両方がある。蓋は口縁部内側に内傾する平面をもつもの（24、25）、端部の丸いもの（26、27、30）があり、前者はたちあがりの高い身とセットになるものと思われる。また、天井部は丸みをもつもの（26）とやや平らなもの（24）がある。28、29は短頸壺の蓋と思われる須恵器で、口縁部は内傾して開き、天井部は低くて平らである。35の平瓶は口縁部がラッパ状に開き、体部は大きく内彎し、体部下半に回転ヘラ削りを施す。提瓶（36）はやや外反気味に開く口縁部をもち、体部前面のふくらみは大きく、背面は平ら、体部側面肩にボタン状の貼り付けがある。31、32の口縁部片は平瓶ないし提瓶の破片、34、35は提瓶体部の破片と思われる。高坏は有蓋と無蓋の２つに大きく分けられる。有蓋高坏（37、38）はラッパ状によく開いた脚部をもち、坏底部にカキ目、脚部に沈線を施す。無蓋高坏は口径が小さく、口縁部がやや外反気味に上るもの（39）、平らな坏底部をもち、内彎気味に上るもの（41、44）、口縁部がほぼ垂直に上り、脚部がやや低いもの（45）、口径が大きく、内彎気味に開き、低い脚部をもつもの（44、46、47）の４つに細分できる。40は坏上部が欠損しているが、脚部にスカシを有するものである。

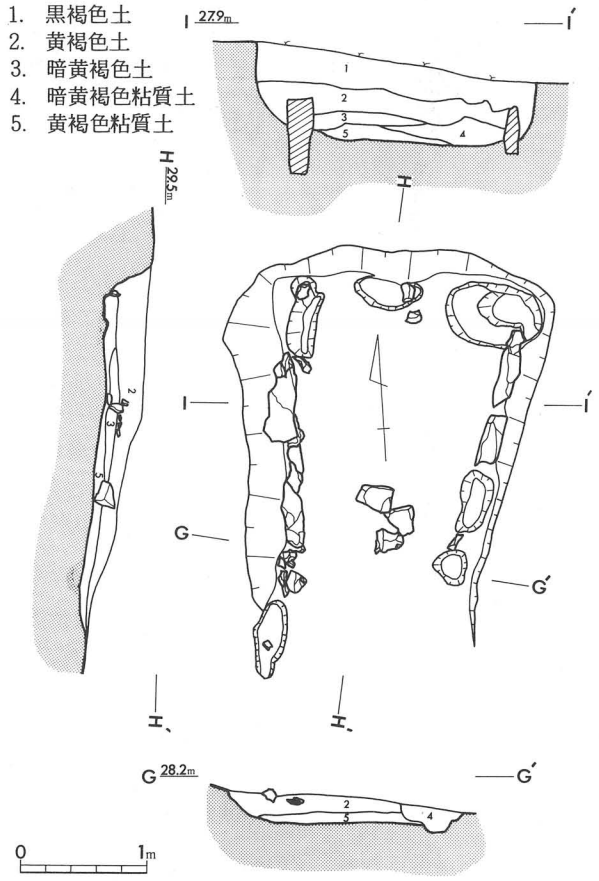
なお、石室入口付近の耕作土中から耳環２つ（53、54）が出土している。53は金メッキされた保存状態の良いものである。

(2) 第 2 号 墳

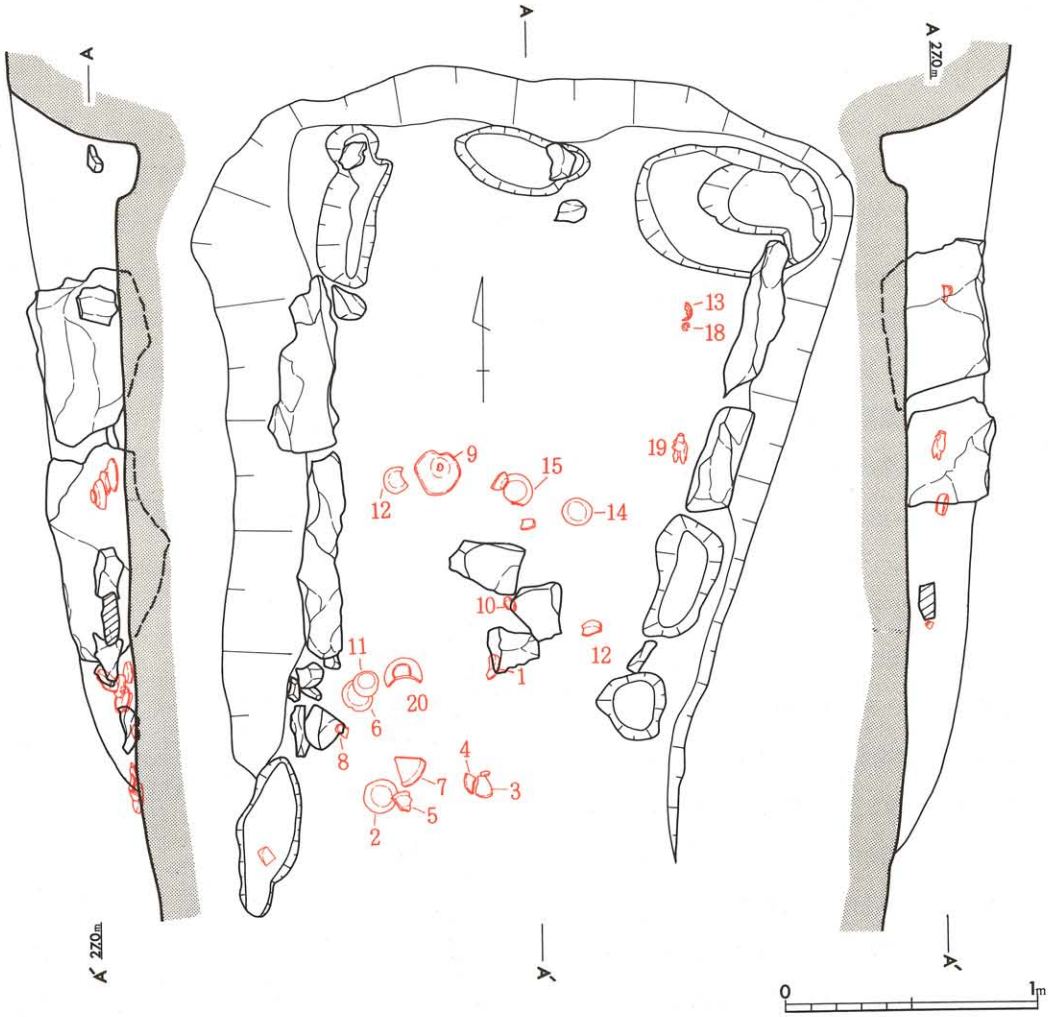
1号墳の北東40.0mに位置する横穴式石室を内部主体にもつ古墳である。1号墳と同じ丘陵斜面に築かれているが、石室の根石数個が残っている程度で、保存状態はあまり良くなかった。石室の掘り方は2.6 m × 3.4 mを測り、掘り方内には側壁の根石4個と6か所の根石を抜き取った痕跡が残っていた。これらの検出状態から、2号墳の石室は主体部をほぼ南北に向けた、長さ3.0 m、幅1.0 mを測る小規模な横穴式石室であったものと思われる。玄室の平面形は東壁が奥壁とほぼ直角に接して直線的に伸びるのに対し、西壁は内彎気味に若干彎曲し、横幅が入口に向って除々に狭くなっている。現存する根石は長さ40 cm～80 cm、高さ40cmあまりの扁平な石を横長に立てており、本来、玄室側壁は東壁が4個、西壁が3個の根石によってそれぞれ構成されていたものと考えられる。床面は地山上に白色の粘土ブロックを含む黄褐色粘質土を詰めて築造しており、遺物は床面から検出した。なお、周溝を検出できなかったため、墳形および墳丘の規模等については明らかにできなかった。

出土遺物（第32図）

石室内から出土した遺物には須恵器の蓋坏、高坏、それに耳環、二叉状鉄器等がある。蓋坏は時期の異なる2つのタイプが出土している。A類（1～8）は内傾するたちあがりをもつ身と口縁端部に内傾する平面をもつ蓋である。身はさらに全体の器形によって細分できる。すなわち、4はたちあがりおよび器高が高く、底体部はやや丸みをもっているのに対し、5は底部がやや平らで、器高が低い。さらに、6は底が逆台形を呈し、たちあがりは大きく内傾して低い。これらA類の須恵器は石室入口付近でまとまって検出しており、追葬時に掻き出された可能性が強い。B類は蓋につまみがつく蓋坏椀（9～15）で、いずれも玄室と思われる石室内から出土した。蓋（9、10）は口縁端部に短い返りをもつもので、大小2つのタイプがある。一方、身は高台のつ

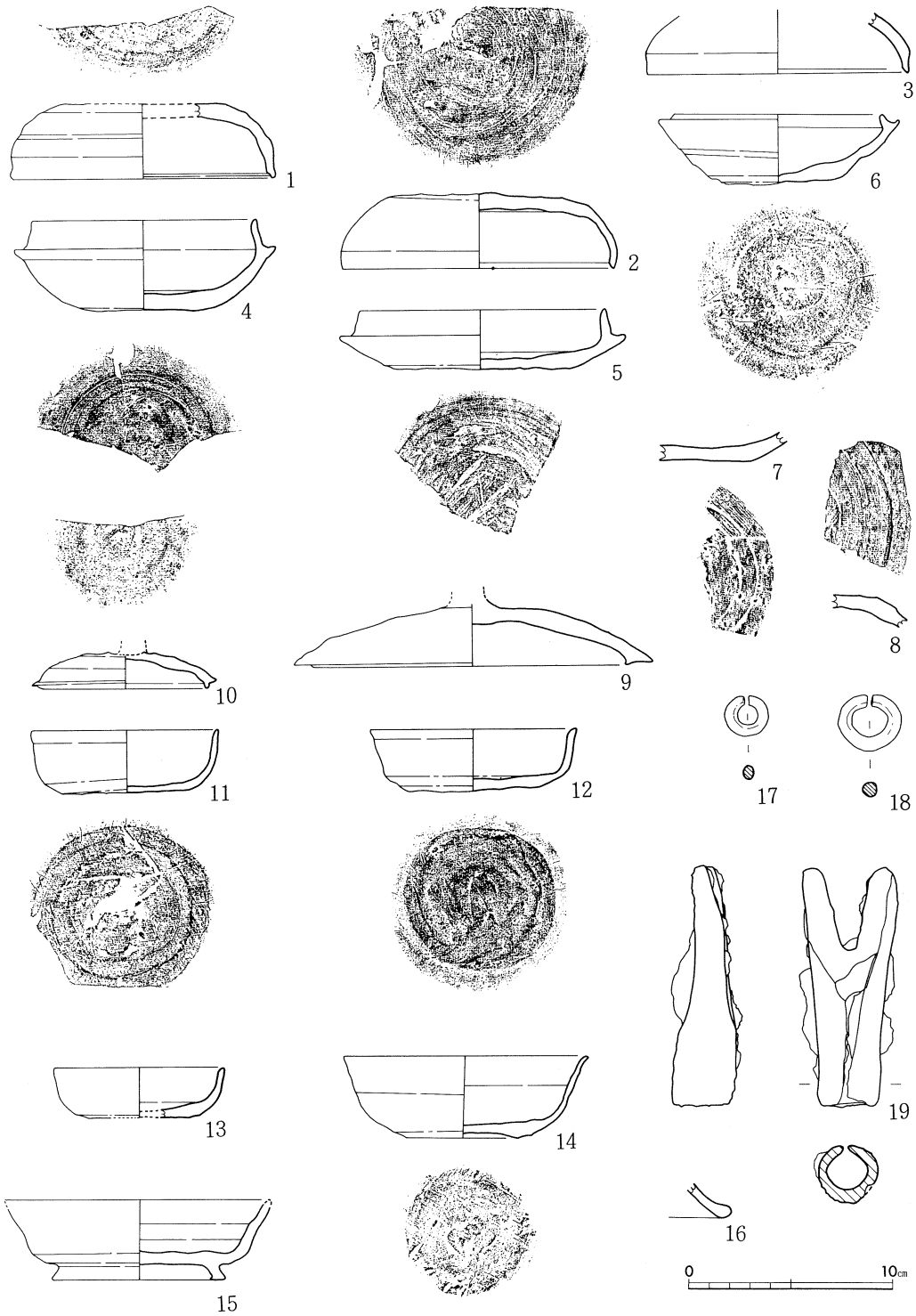


第30図　第2号墳石室実測図



第31図　第２号墳遺物出土状況図

くもの（15）とつかないものがあり、後者は小形で薄く、底体部に回転ヘラ削りを施している。なお、石室入口付近で検出した20の土器は高台の付く椀であったが、きわめて保存状態が悪く、図化することができなかった。17の耳環は石室入口付近で検出したもので、直径2.0㎝、厚さ0.5㎝を測る。18は石室奥部から出土した直径3.0㎝、厚さ0.6㎝あまりを測るやや大形品の耳環で、17、18とも金メッキが施されている。19の鉄器は袋部から二叉状に分かれて伸びる全長11.5㎝の用途不明の鉄器である。袋部は曲げ合わせたもので、内径が3.0㎝あまりの円形を呈し、先に向って徐々に幅広くなる。二叉状の突起は基部の厚み1.5㎝を測り、先端は本来、尖っていたものと思われる。また、側面から見ると二叉の部分は若干外反しており、この鉄器は突き刺して掬い上げるのに都合の良い形態をもっている。



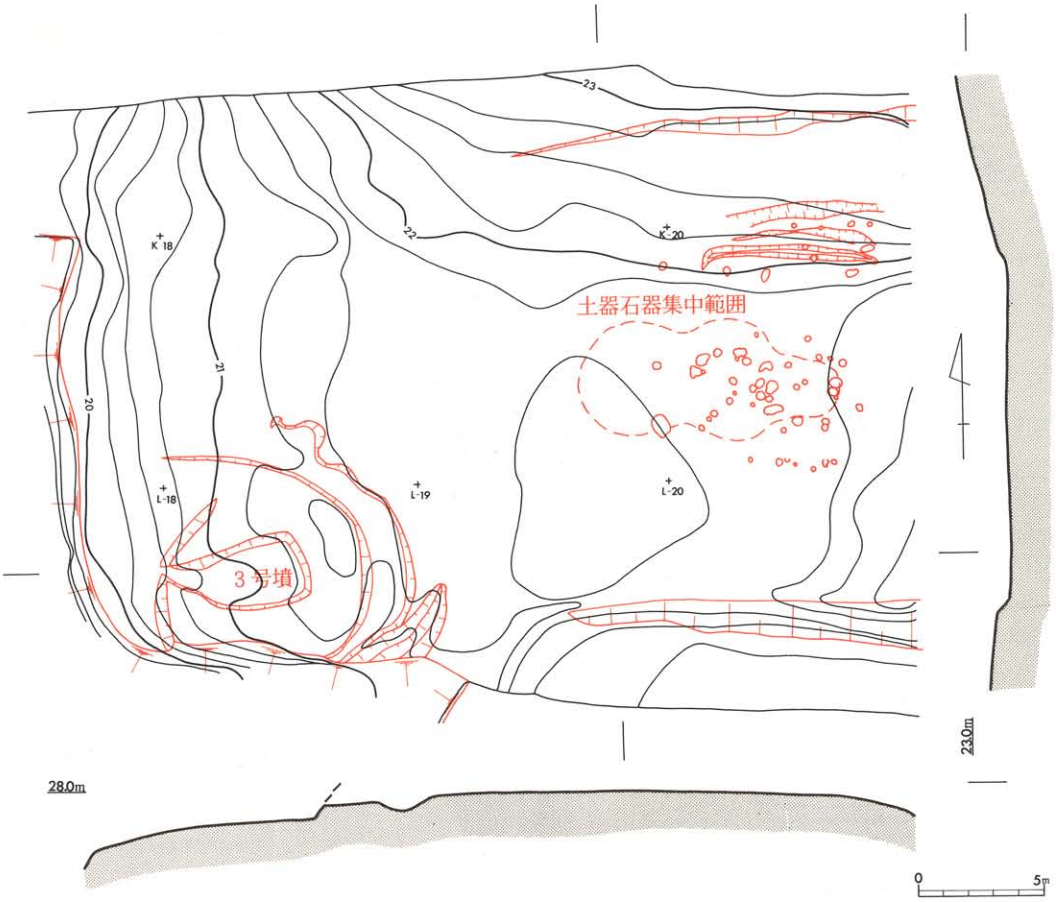
第32図　第２号墳出土遺物実測図

(3)　A地区・第３号墳

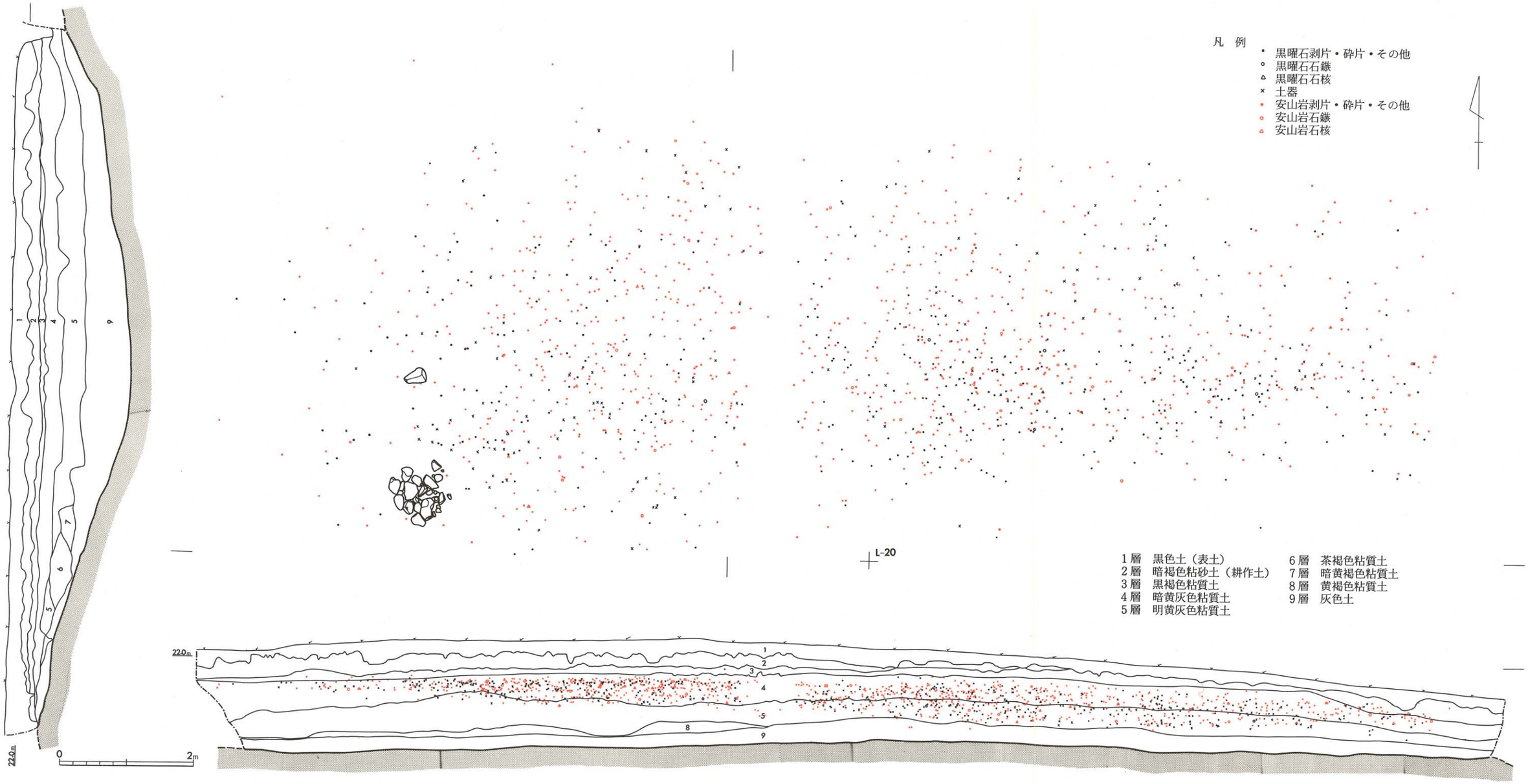
調査区のほぼ中央部、二つの尾根にはさまれたゆるやかな谷状地形を呈す部分をＡ地区と呼んだ。土層の堆積をみると（第34図）１・２層は砂質土で、耕土、客土である。３層は黒褐色粘質土で、７世紀代の遺物を包含する。４層は暗黄灰色粘質土で、火山灰が二次的に堆積した層と考えられ、縄文時代早期の遺物を包含する。５層以下は地山、および地山の風化土である。Ａ地区では、時期の異なる２面の遺構を検出した。すなわち、４層暗黄色粘質土内より、縄文時代早期末葉と考えられる遺構、遺物群が３層黒褐色土直下より７世紀代の遺構が検出された。一方、Ａ地区の西側に隣接する、なだらかな地形の突端にあたる地点より、３号墳が検出された。

(a)　４層内検出の遺構と遺物

集石炉（第36図）　４層を数㎝掘り下げたところで石が集中して検出された。約１ｍ四方にほぼ拳大～人頭大の石が集中しており、特にやや大形の石は扁平で、上面を平らにそろえるようにおかれていた。いずれも表面は焼けて赤黒く変色していた。集石の下方には、ピット等の施設は検出さ



第33図　Ａ地区・第３号墳周辺地形測量図

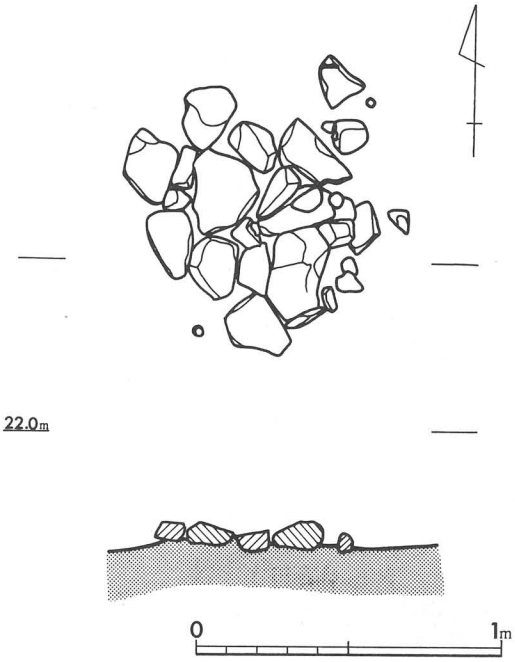


第34図　A地区4層内石器土器出土状況図・土層図

第35図　A地区・4層内遺物出土頻度図

れなかった。なお、集石上より半分を欠損している磨石が出土している。また付近より縄文土器片、石片が出土している。この集石炉の時期については、4層内からは時期的にまとまった縄文土器以外は出土していないため、ほぼ縄文時代早期末葉と考えられよう。

土器、石器出土状況（第34図）　およそ18m×7mの範囲より、多数の縄文土器、石器が出土し、それらは全て出土位置を記録して取りあげた。その分布状況をみると、極端な粗密の差はみられないが、細かくみた場合、三か所により密に集中しているようである。そこで、よりわかりやすくするため、全域を10cm四方に区切って、各小区画ごとの出土量の粗密を濃淡により表わしたのが第35図である。一部試掘トレンチで分断されてはいるが、明らかに三群のまとまりがみられ、以下西側から順にⅠ群～Ⅲ群と呼ぶ。Ⅰ群とⅡ群は、その密な部分がほぼ円に近い形を呈す。一方、その垂直分布をみてみたい（第34図）。土器、石器群から南側にわずかにずれた縦断土層図に石器、土器分布を投影してみると、Ⅱ群とⅢ群は、あたかも5層内へ落ち込むように分布しているのがわかる。これらの土器、石器群は全て4層内より出土しており、このことはⅡ群及びⅢ群部分では、4層が5層内に落ち込むように堆積していたことを示す。また、石器、土器群を横切る横断土層図をみると、わずかながら4層下面に浅い落ち込み状のものが認められる。これらのことから考えて、平面的には全く検出できなかったものの、A地区には縄文時代早期の竪穴住居が存在した可能性は大きいといえる。全くの推定であるが、直径4m程度の円形住居2棟とやや規模の小さい住居1棟が想定され、そのうち西端の住居には集石炉が伴っていた可能性が考えられよう。

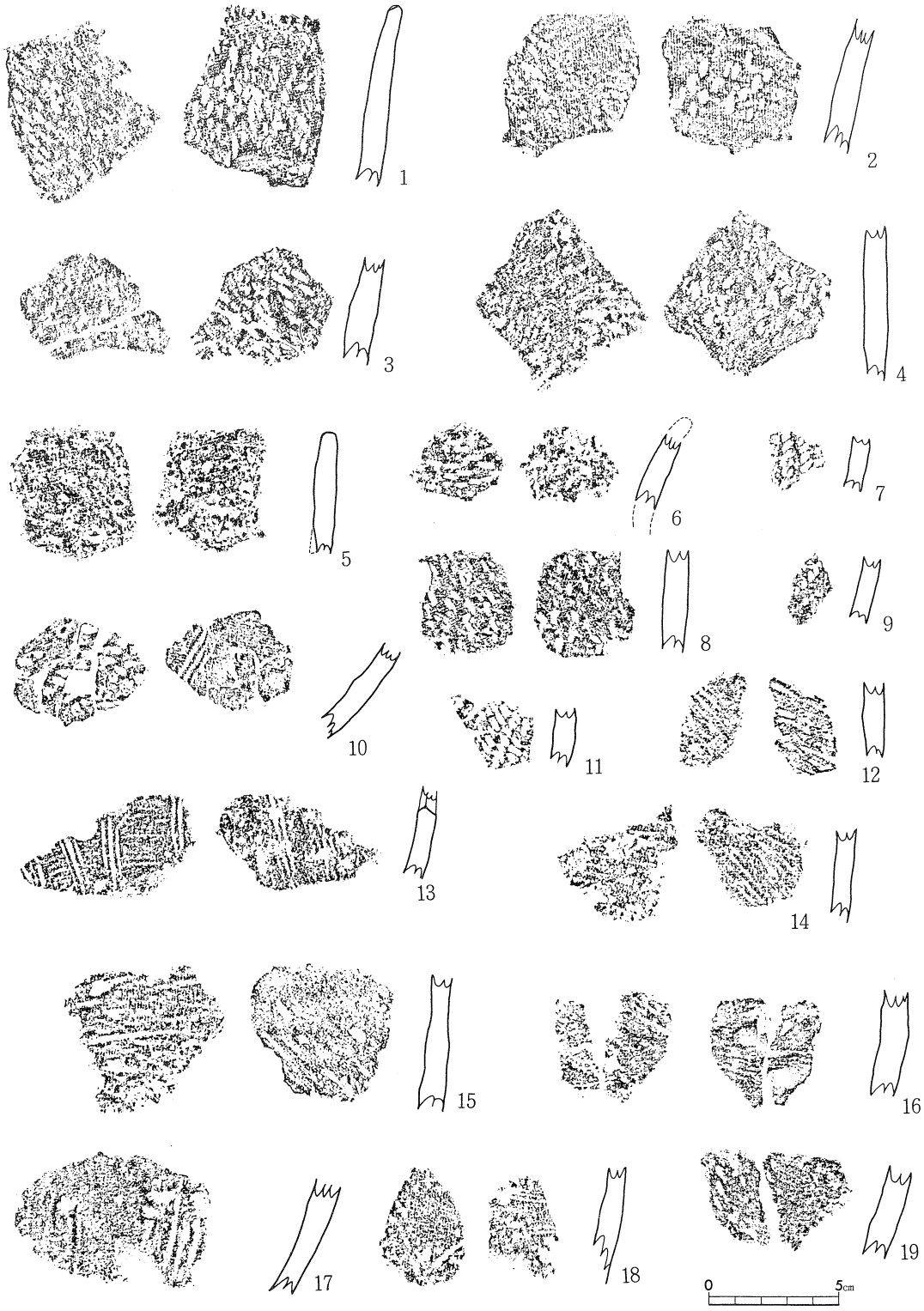


第36図　集石炉実測図

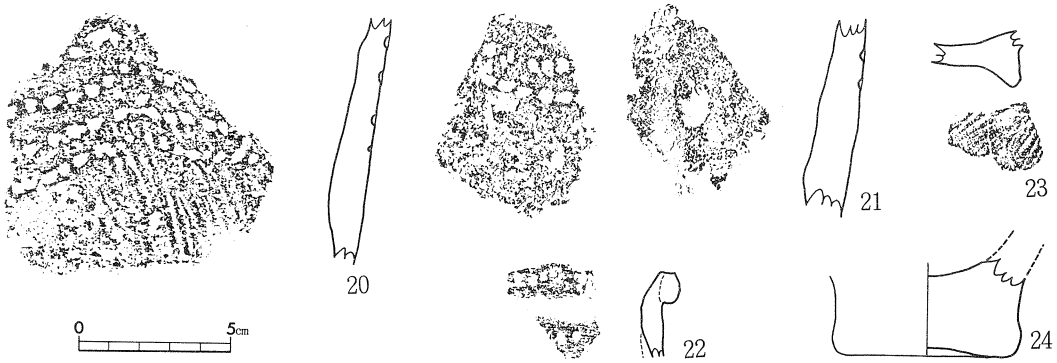
出土遺物

縄文土器（第37図、第38図）　4層内より石器、石片類とともに相当量の縄文土器片が出土した。これらの土器は、概して分厚で、焼成が良くないためか、周囲の土と同じくらいに軟らかいものが多く残存状態は悪かった。これらの土器は大きく分けて縄文の施されたもの、条痕のあるものの二種に分けられる。

1～11は縄文が施されたもので、縄文は概して太くて粗く表裏縄文（1～8）のものや、外面のみ縄文を施したもの（9～11）もみられる。1は波状口縁と考えられ口縁端部内側に刻目がみられる。また2、10は内面に条痕がみられる。これらの土器片の厚さは7～12mmだが10mm前後のものが



第38図　A地区出土縄文土器実測図(2)



第37図　A地区出土縄文土器実測図(1)

多い。また植物繊維を含むものも多い。

一方条痕系の土器（12〜19）は、表裏条痕のものや、片面のみ条痕のものもあり、植物繊維を少量含むものが多い。厚さは7〜10㎜である。13は外面に柄子または斜柄子状に条痕を施しており、補修孔もみられる。

20〜22は、刺突を施した土器である。20は外面条痕地に、4段以上にわたって波状に刺突が施されている。21は、外面をナデたのち2段以上の刺突が波状に施されていると考えられる。21、22ともに非常に分厚で12〜15㎜をはかる。一方、22は口縁部外面に隆帯を設け、その隆帯上及び下方に、半截竹管状原体で刺突を入れたものである。

23、24は底部破片である。ともにやや上げ気味の平底で、24は非常に分厚である。23は底部に条痕がみられる。

これらの土器は、その諸特徴から考えていずれも、ほぼ縄文時代早期末葉に位置づけができよう。類例を求めると、帝釈峡遺跡群の中の寄倉11層、観音堂第17層、馬渡第2層下層、豊松堂面第9層[(1)]などの出土土器に対比できそうである。一方これらの土器を出土地点別に分けてみると、興味深い結果が出た。すなわち遺物集中地点Ⅰ群からは、縄文系7点、条痕系2点、Ⅱ、Ⅲ群からは縄文系4点、条痕系9点となる。明確に調整、文様のわかる破片が少ないため、明言はできないが、Ⅰ群は縄文系中心、Ⅱ、Ⅲ群は条痕系中心という傾向はつかめそうである。仮にⅠ群〜Ⅲ群それぞれが住居跡等の遺構を反映しているとすれば、それぞれの土器の差が時期差を表している可能性も考えられる。

石　　器

A地区より出土した石器、石片は1391点で、石材の種類は安山岩、黒曜石、水晶、チャート、砂岩、泥質片岩等である。しかし石斧材の砂岩、垂飾石材の泥質片岩を除くと、安山岩の占める割合が72％、黒曜石27.5％で、この二種の石材が圧倒的である。また、安山岩、黒曜石の中でも、肉眼

観察により数種に分類が可能である。

安山岩

A類　微密で断面が黒色を呈す。

B類　微密で良質であるが、不純物がやや含まれる。

C類　ややキメが粗く、全体に風化が著しい。

D類　キメが粗く、棒状の不純物が含まれる。

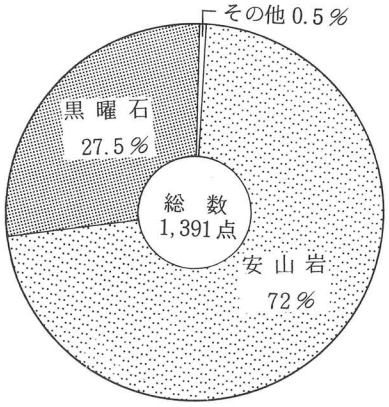
E類　ややキメが粗く、断面が黒灰色を呈す。

黒曜石

A類　淡黒で透明感のないもの。

B類　淡黒で縞状紋のみられるもの。

C類　透明感のあるもの。



第39図　A地区出土石材

これらは、あくまでも肉眼観察であり、不正確ではあるが、産地等をある程度反映している可能性もある。詳細は産地同定の結果を待ちたい。なお、石器観察表には石材の種類を記載した。

石鏃　石鏃は、大きく3種に分類ができる。

A類（第41図1～23）　基部が深く抉られ、脚端及び抉入部は方形または円形を呈す。いわゆる鍬形鏃である。抉りの深さ形状、脚端の形状、側縁の形状などに若干のバラエティがある。

B類（第42図24～第42図42）　基部に抉りのある凹基石鏃で、脚端は尖り気味である。抉りの深さ形状、側縁の形状などで細分が可能である。

C類（第41図44、45）　全体の形がほぼ二等辺三角形を呈す。平基石鏃である。

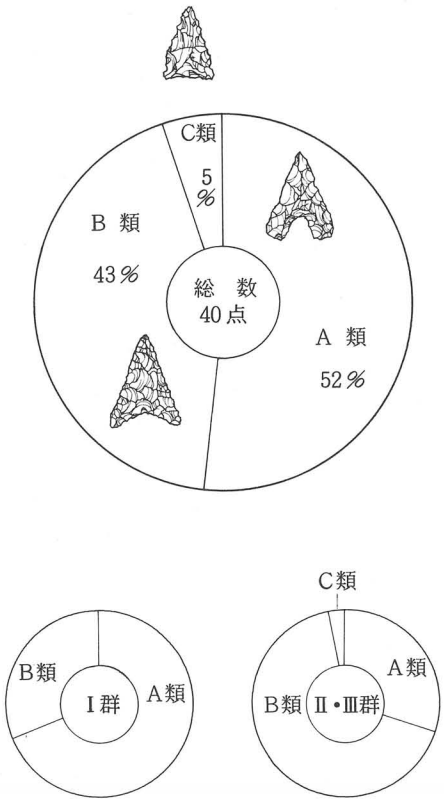
各類の比率をみると、A類が52％、B類が43％で、凹基石鏃が95％を占めることになる。とりわけA類が半数以上を占めることは、「鍬形鏃」＝縄文早期という通念と一致している。

次に各類を、出土地点別にまとめてみると、

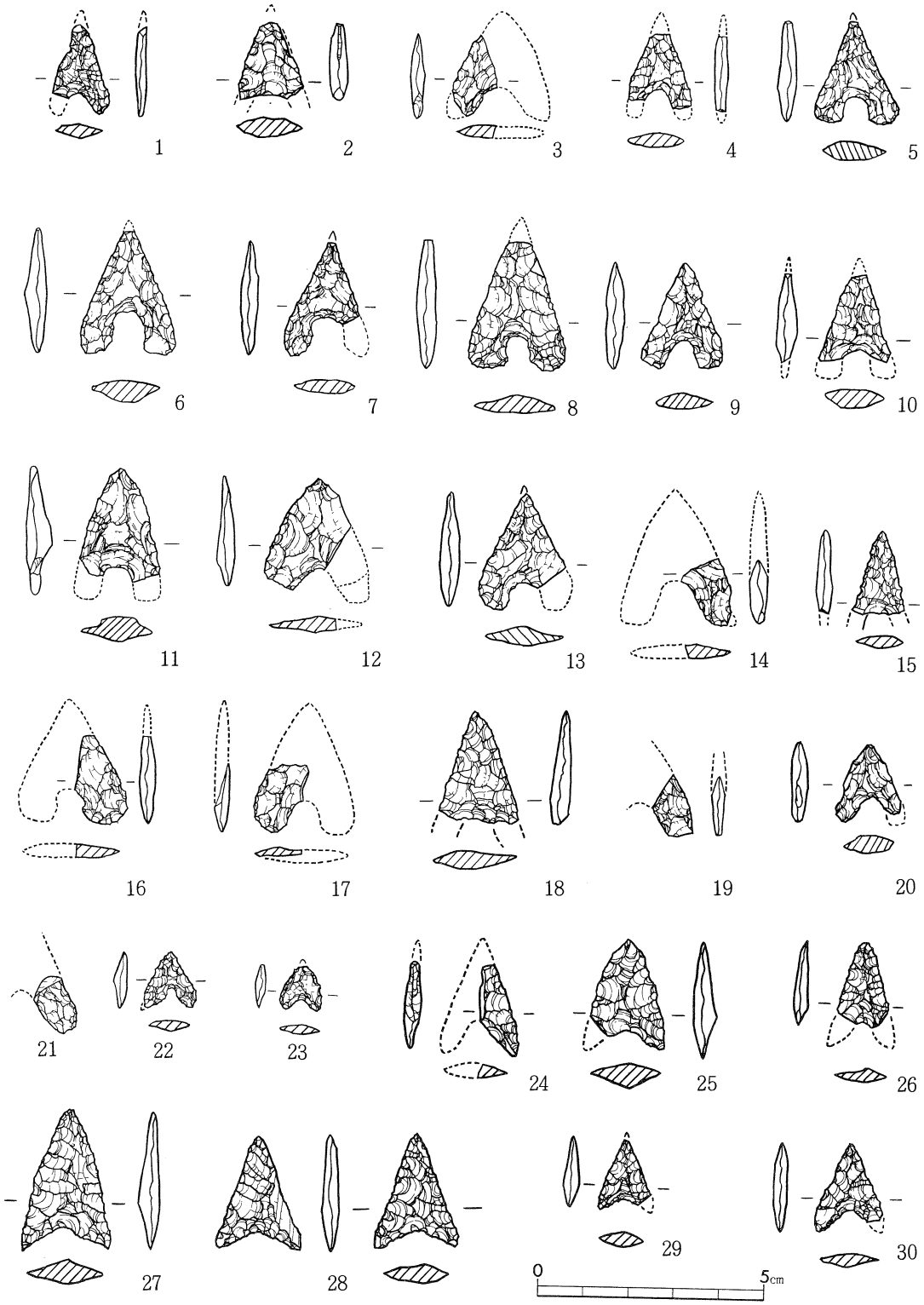
Ⅰ群　A類9点、B類4点

Ⅱ、Ⅲ群　A類8点、B類18点、C類1点

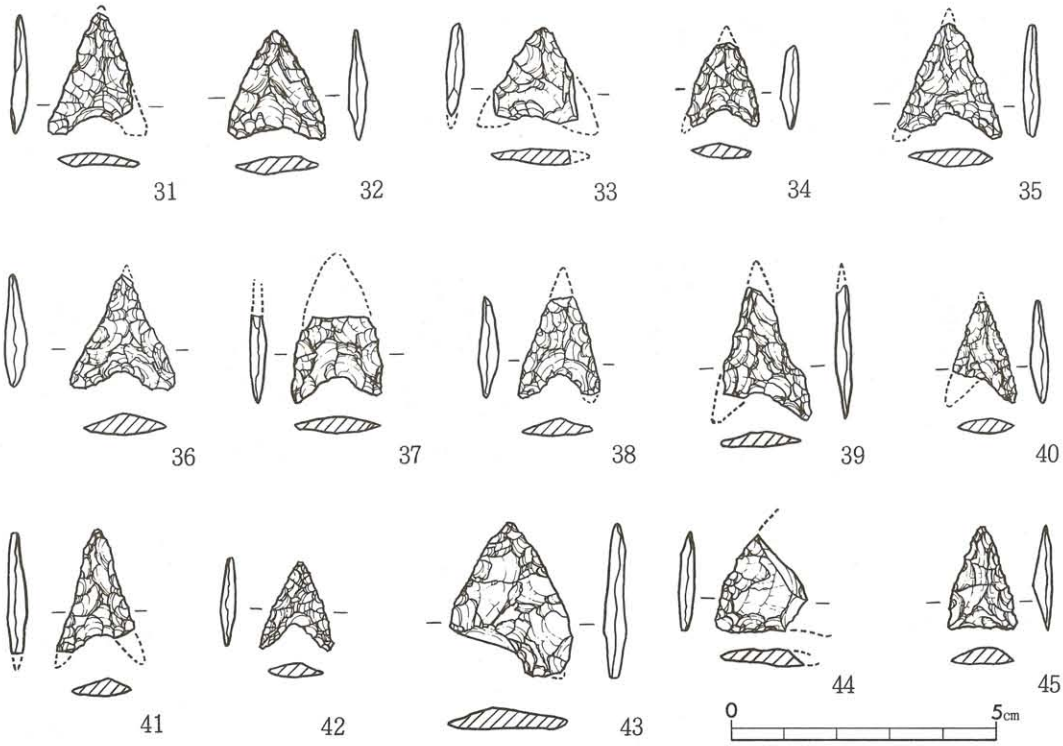
となる。明らかに両者は、型式組成が異っており、これは、前記の土器のあり方とも一致し、興味深い。



第40図　A地区出土石鏃型式別比率



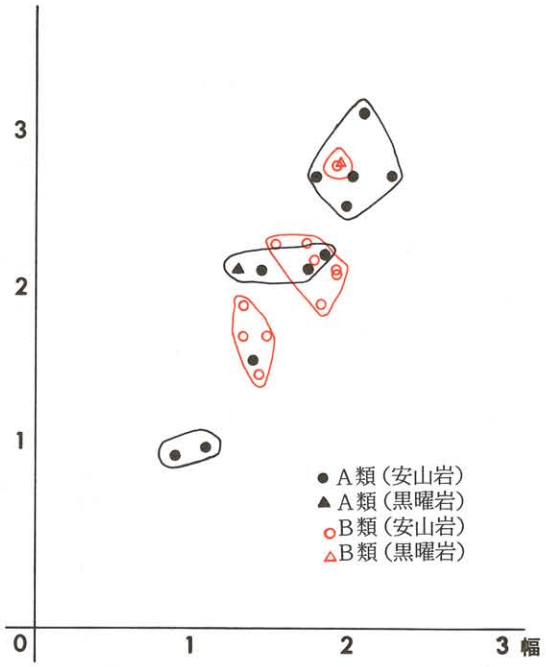
第41図　A地区出土石器実測図(1)(石鏃)



第42図　A地区出土石器実測図(2)(石鏃)

次に、石鏃の大きさをみてみたい。表は、縦軸に長さ、横軸に幅をとって作成した相関図である。(破損しているものについては、全形が復元できるもののみをピックアップして表を作成した。)長さをみると1.1㎝から3.3㎝まであり、大小のバラエティがあるが、全体的にみて、A類、B類ともにおよそ大、中、小の三群に分かれるようである。特にA類については、大小の幅が大きいといえる。これらの大小の差からみると、獲物の大きさなどにより鏃の使い分けが行われていた可能性も十分に考えられよう。

一方、石鏃の欠損状況をみてみると、まず完存品が45点中6点と、極めて少な



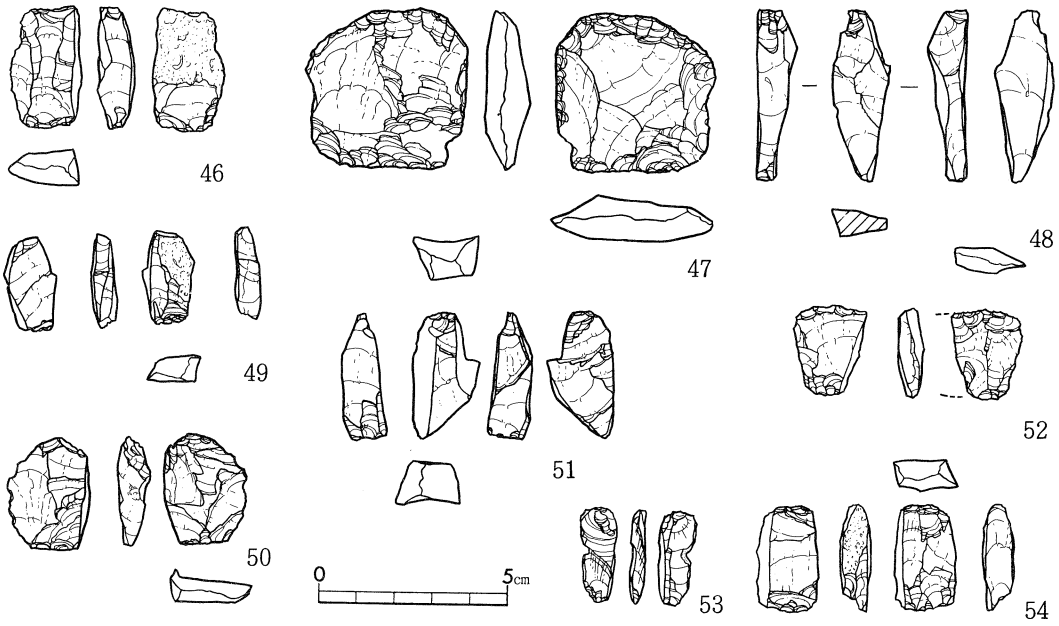
第43図　A地区出土石鏃長幅相関図

いことがわかる。部位別に欠損の状況をみてみると、全形がわかるもの35点中13点が、先端部を欠損している。また、先端部に「つぶれ」がみられたり、先端部から強い衝撃を受けた結果割れ口に樋状剥離が見られるもの（24）もあり、こうした事実は、これらの石鏃が、実際に刺突具として使用されたことを、如実に物語っているといえよう。一方、脚部を欠損しているものが、35点中22点にものぼる。これは基部が深く抉り込まれたタイプが多いことに起因していると考えられる。

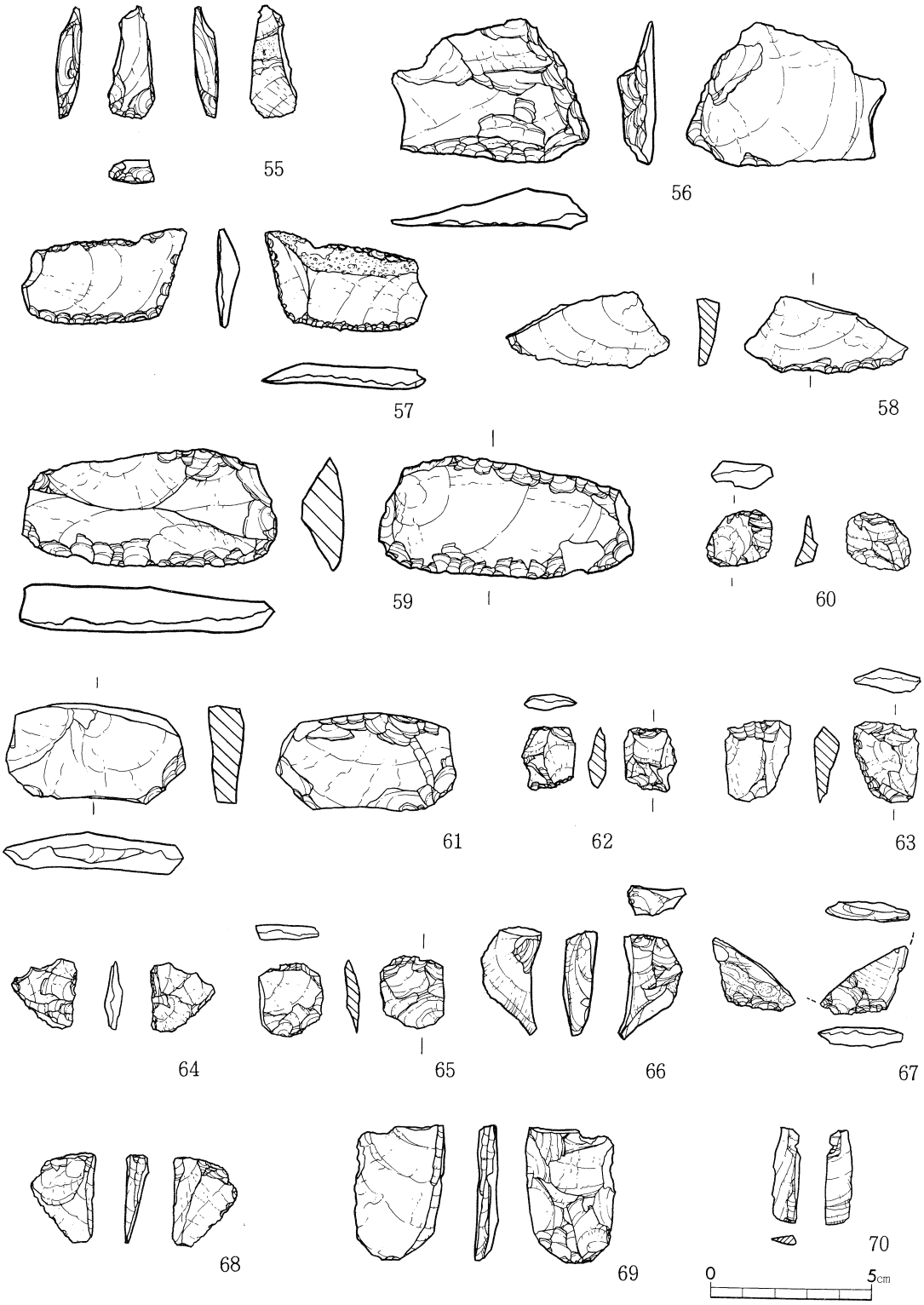
楔形石器（第44図46～54）　9点の楔形石器が出土した。これらの楔形石器は次のような特徴がある。上下両方向からの数多くの不規則な剥離面がみられ、上下両端には、しばしば「つぶれ」が観察される。側面には上下方向からの大きな剥離面（截断面）がみられることが多い。なお、52は截断面を打面にして、小形剥片を剥取した形跡がある。

スクレーパー（第45図55～59）　いずれも不定形の剥片の縁辺に調整を加え刃部を形成したものである。55は黒曜石製がエンド、スクレイパー状の石器で、両側縁は切断している可能性がある。57、59は、いずれも縦長の剥片を素材に、その二辺～三辺に調整加工を行っている。59は打瘤をそのまま残している。

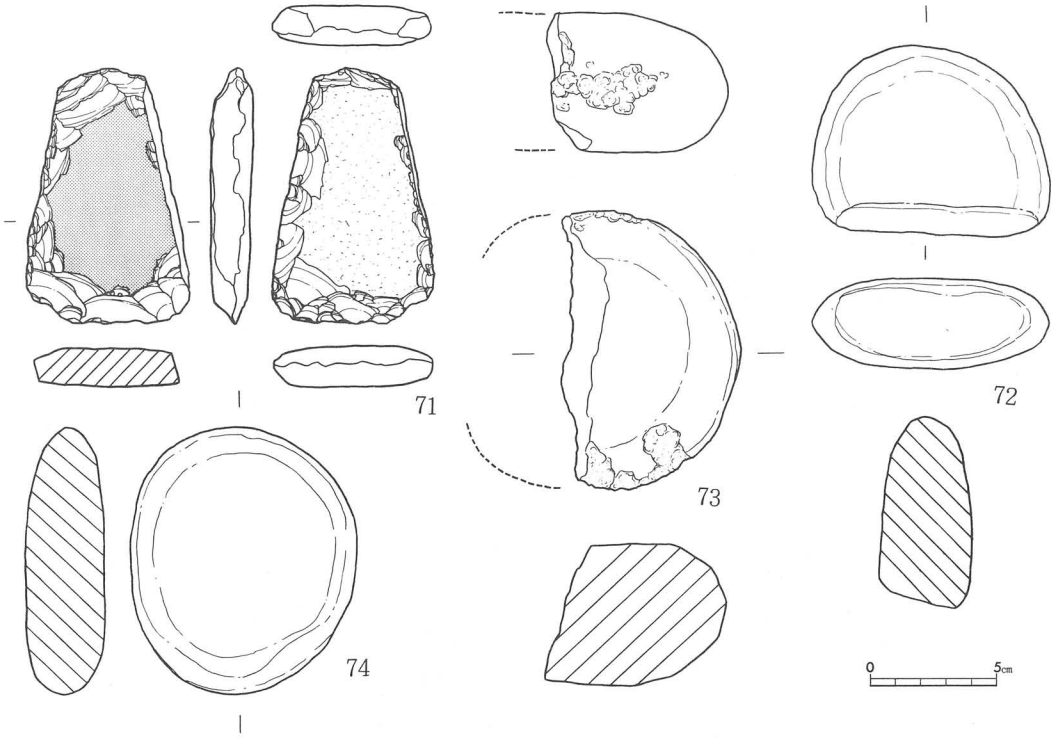
二次加工のある剥片（第45図60～70）　不定形の剥片の一部に二次加工を行ったもので、いずれも機能を明確に推定しえない。61～65は小形で石鏃等の加工中途品の可能性もある。68～70は、いずれも一側線に樋状剥離がみられる彫器状の石器だが、彫刀面に当たる部分に何ら使用痕跡はみられない。69は基底部に調整がみられ、68、70は側縁に刃こぼれがみられる。



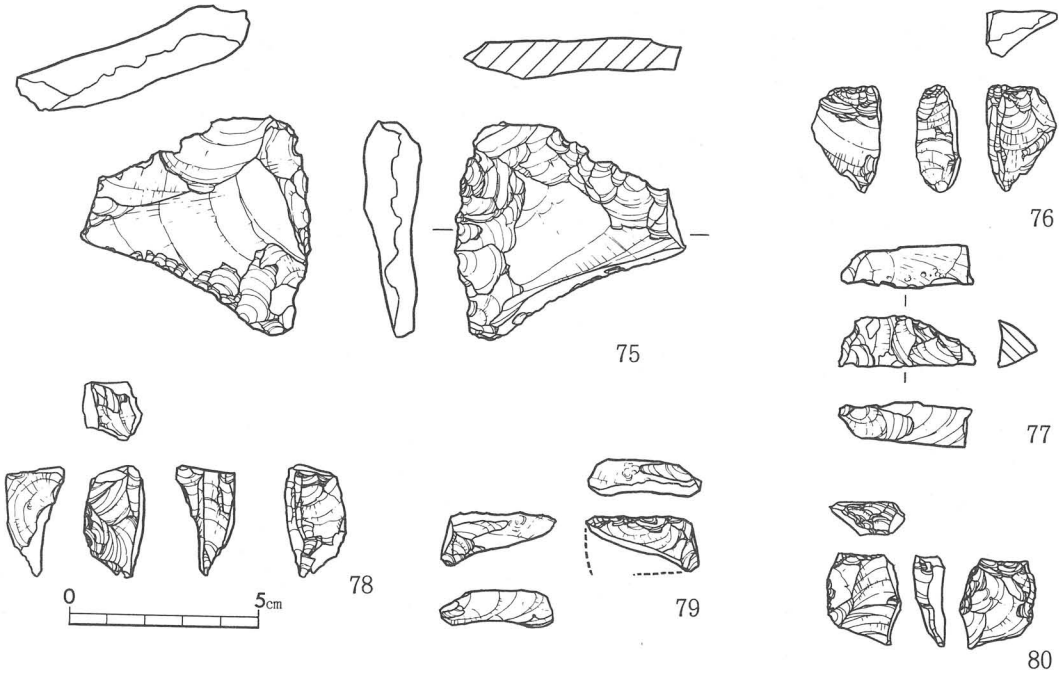
第44図　A地区出土石器実測図(3)（楔形石器）



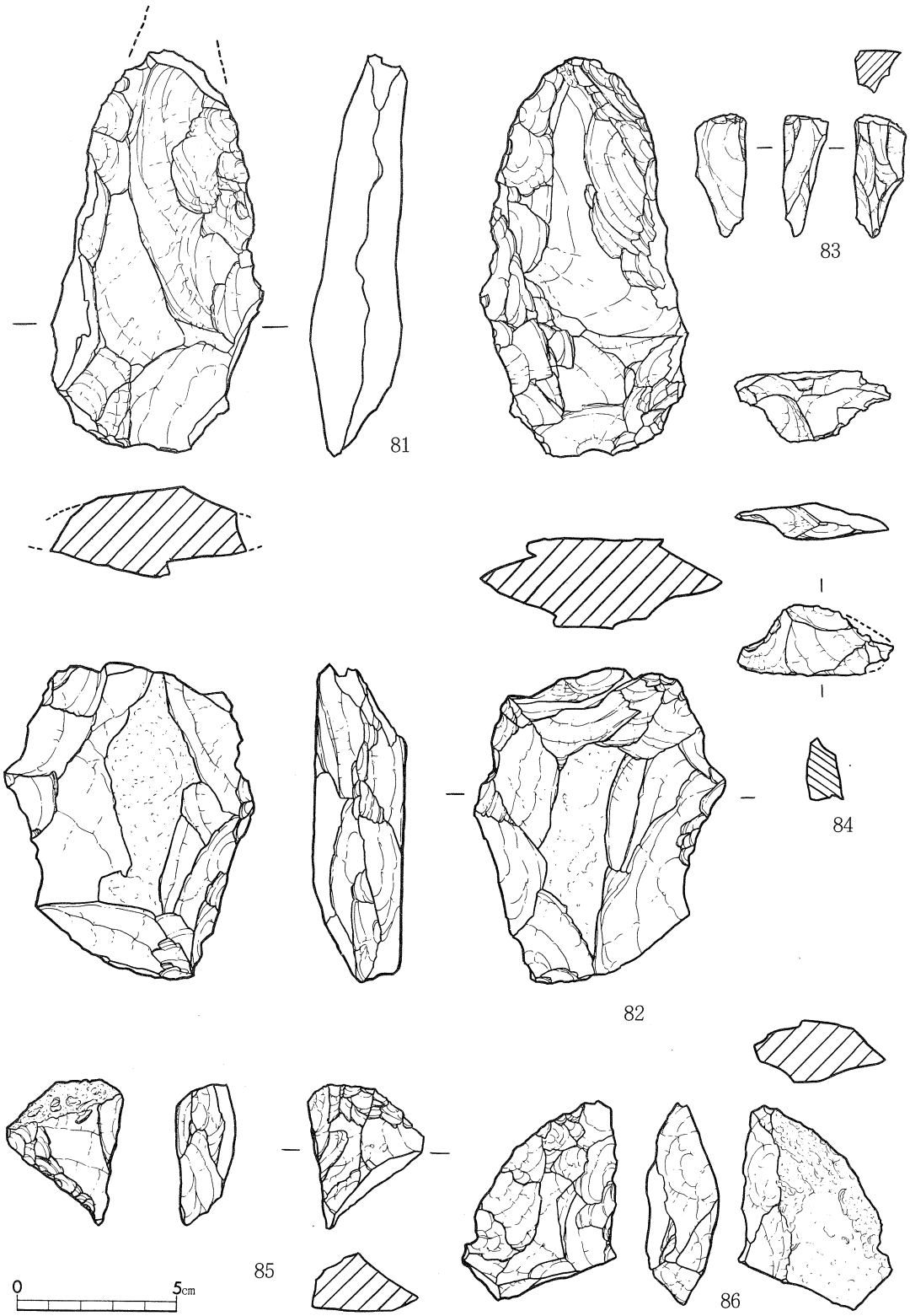
第45図　A地区出土石器実測図(4)



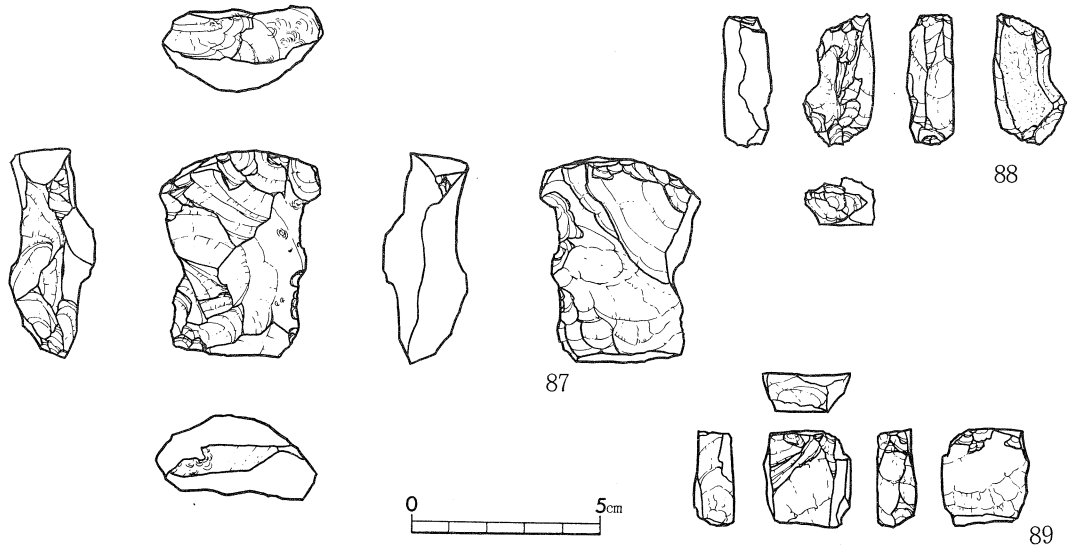
第46図　A地区出土石器実測図(5)



第47図　A地区出土石器実測図(6)(石核)



第48図　A地区出土石器実測図(7)(石核)



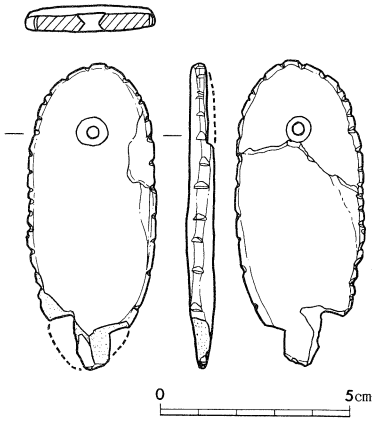
第49図　A地区出土石器実測図(8)(石核)

石斧（第46図71）　平面形はバチ形、横断面が扁平な長方形の石斧である。刃部は両面から打ち欠いて形成しており、上下両端ともに刃部として使用可能である。片面は磨いているが、反対面は剥落していて不明である。緑灰色を呈する砂岩製である。

磨石（第46図72～74）　いずれも河原石を利用している。72は、両面および側面の平坦部を磨面として使用している。73は、集石炉上より出土したもので、全面に火を受けている。片面を磨石として使用し、上下両端は敲打痕がみられることから、叩き石としても使用されたと考えられる。74は片面のみ使用している。

石核（第47図75～第49図89）　第47図は黒曜石、第48、49図は安山岩である。剥片剥取方法をみると、盤状剥片の縁辺より、打面を移動しながら剥片を剥取したタイプ（75、81、82など）打面を数ケ所に限定して剥片を剥取したタイプ（78、85、87、89など）に大別できる。結果的に残された残核は、前者は盤状で鋭い縁辺を持ち、後者は塊状または多角柱状を呈す。いずれにしても取られた剥片は不定形で、規則的な剥片剥離技術によるものではない。

剥離された剥片の大きさをみると、いくつかの大きなまとまりに分類できそうである。81、82は取られた剥片がかなり大形で、スクレイパー等の素材や、小形石核の原素材を剥離したものと考えられる。75、86、87等は、2㎝前後



第50図　A地区出土垂飾実測図

の中形の剥片を取ったもので、楔形石器や、やや大形の石鏃の素材を剥取したものであろう。76～80、85、89等は、非常に小形の剥片を取ったもので、小形の石鏃用と考えられる。これらのことから、剥取する剥片の目的により、ある程度石核を使い分けていたと考えられる。なお、打面に小形の円形敲打痕がみられるものがある（77、78、79、87など）。これは、剥片剥離の際、打面には、先の細いものが直接当っていたことを示し、パンチが使用されていたことも想定される。

石製装飾品（第50図）　泥質片岩製で、層状に薄く剥げやすい石材である。全形は長楕円形を呈し、全周縁に刻みを施している。1か所に、両面より穿孔しており、垂飾の一種と考えられる。表面に研磨の痕跡はみられない。伴出する遺物より、縄文時代早期末のものと考えられる。

以上のことから遺物集中地点のⅠ群とⅡ、Ⅲ群では、遺物のあり方に差異のあることが明らかになった。それをまとめると下表のようになる。

	土　　器	石　　器
Ⅰ　群	縄文系中心	A類（鍬形鏃）中心
Ⅱ・Ⅲ群	条痕系中心	B類中心

まず土器について考えると、土器の厚みや繊維の混入量などは縄文系、条痕系両者の間に大きな差はみられず、また帝釈峡遺跡群のあり方をみても両者はほぼ同時期と考えるのが妥当であろう。が、あえて先後関係を考えるならば、伴う石鏃の組み合わせのちがいが参考になるであろう。A類（鍬形鏃）は、従来縄文早期、特に押型文土器に伴うと考えられてきた。鍬形鏃＝早期の石器と決めつけるのは、他の遺跡のあり方などから考えて間違いであるが、押型文土器を中心とする時期に、鍬形鏃が高い割合であらわれるということはいえそうである。とするとA類石鏃を多く伴う縄文系土器が、条痕系土器よりやや先行すると考えることもできよう。いずれにせよ、これらの分類が、明確な遺構や層位関係に基づくものではないので、ここではその可能性を指摘するにとどめたい。

A地区出土縄文土器観察表

No.	出土地	調整の特徴	文様の特徴	胎　土	備　考
1	K－19 902	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文 内面　縄文	小微砂粒多量含む ごく少量に繊維含む	色調　黒褐色～焦茶色 口縁波状で端部に刻目
2	K－19 902	外面ナデ、内面大きな二枚貝条痕のちナデ	外面　縄文 内面　縄文	小微砂粒多量に含む ごく少量繊維含む	色調　焦茶色 外面の縄文は浅い
3	K－19 902	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文 内面　縄文	小微砂粒多量に含む	色調　黒褐色～焦茶色 外面縄文は浅い
4	K－19 688	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文か 内面　縄文か	微砂粒多量に含む	色調　茶褐色

No.	出土地	調整の特徴	文様の特徴	胎　　土	備　　考
5	K－19 475	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文 内面　縄文か	小砂粒(長石か)多量に含む	色調　外面　淡赤褐色 内面　茶褐色
6	K－19 685	内外面　ナデ	内外面　撚糸原体斜め押圧か	小微砂粒多量に含む	色調　赤褐色
7	K－20 723	内面　ナデ	外面　縄文	微砂粒多量含む	色調　外面　黒褐色 内面　褐色
8	K－20 1032	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文 内面　縄文	微砂粒多量に含む ごく少量繊維含むか	色調　焦茶色
9	K－19 565	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　縄文	微砂粒多量含む	色調　焦茶色
10	K－20 1089	外面　ナデ 内面　ナデ一部二枚貝条痕	外面　縄文	微砂粒多量含む 少量植物繊維含むか	色調　淡赤色
11	K－20 706	内面　ナデ	外面　縄文	微砂粒多量に含む 繊維少量含む	色調　暗茶褐色
12	K－20 866	外面 斜め二枚貝条痕 内面 斜め二枚貝条痕		微砂粒多量に含む	色調　外面　淡赤色 内面　黒色
13	K－20 775	外面　斜格子二枚貝条痕　内面　ナデのち斜め二枚貝条痕		小微砂粒多量含む 植物繊維少量含む	色調　焦茶色～黒褐色 両面穿孔の補修孔あり
14	K－20 685	外面　やや斜め二枚貝条痕　内面　やや斜め二枚貝条痕		小砂粒(石英か)多量に含む	色調　黒色
15	K－20 800	外面　横方向二枚条痕 内面　ナデ		微砂粒多量に含む	色調　外面　黒褐色 内面　褐色
16	K－20 731	外面　ナデ、斜め二枚貝条痕　内面　ナデ一部板目状条痕		小微砂粒多量含む 繊維含むか	色調　外面　暗橙色　内面黒褐色　内面凹凸顕著
17	K－20 813	内面　ナデ 外面　二枚貝条痕		小微砂粒多量に含む やや繊維含むか	色調　茶褐色、内面暗黄褐色　内面凹凸著しい
18	K－20 1022	外面　ナデ 内面　一部横方向二枚貝条痕		微砂粒多量含む 植物繊維少量含む	色調　焦茶色
19	K－19 357	外面　斜め二枚貝条痕のちナデ 内面　ナデ		小微砂粒多量含む	色調　茶褐色
20	K－20 866	外面　斜めの二枚貝条痕 内面　ナデ、一部二枚貝条痕	外面　4段の刺突波状にはいる	小微砂粒多量に含む やや繊維を含む	色調　暗茶褐色～焦茶色
21	K－20 808	外面　ナデ 内面　縦方向強いナデ	外面　二段の刺突弧状にはいる	小微砂粒多量に含む やや繊維を含むか	色調　茶褐色 内面凹凸著しい
22	K－20 728	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　小さな半截竹管状の原体で刺突	小砂粒多量含む	色調　外面　黒色 内面　褐色
23	H－17 黄褐色粘質土	外面　ナデ 底部　一部二枚貝条痕か　内面　ナデ		小砂粒多量含む	色調　赤褐色～灰褐色
24	L－19 2	外面　不明 内面　ナデ		小砂粒多量含む	色調　灰褐色～明褐色 表面は完全に剥脱

A地区出土石器観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備 考
－1	(1.95)	(1.1)	0.33	0.47	黒曜石C	K－20 1604	Z 39	先端部・脚部欠損
－2	(1.7)	(1.4)	0.41	0.75	黒曜石A	3号墳周溝内	Z 38	先端部つぶれ、脚部欠損
－3	(1.7)	(0.95)	(0.3)	0.29	安山岩B	K－19 321	Z 11	大半欠損
－4	(1.6)	(1.4)	0.32	0.45	安山岩C	K－20 1123	Z 10	先端部・脚部欠損
－5	(2.2)	1.85	0.4	0.8	安山岩B	K－20 374	Z 4	先端部欠損
－6	(2.7)	2.05	0.47	1.28	安山岩C	K－19 538	Z 7	先端部欠損
－7	(2.5)	(1.6)	0.3	0.67	安山岩E	K－19 382	Z 3	先端部・脚部欠損
－8	(2.8)	2.1	0.4	1.61	安山岩A	K－20 504	Z 8	先端部新破損
－9	2.3	1.75	0.38	0.8	安山岩C	K－19 772	Z 5	完存
－10	(1.9)	(1.6)	0.4	0.92	安山岩A	K－19 402	Z 17	先端部・両脚欠損
－11	(2.5)	(1.75)	0.52	1.62	安山岩B	K－20 747	Z 6	両脚欠損
－12	(2.4)	(1.85)	0.38	1.07	安山岩A	K－20 863	Z 9	脚部欠損・脚端は再加工
－13	(2.5)	(1.9)	0.4	1.15	安山岩A	3号墳周溝内	Z 2	脚部欠損、先端部新破損
－14	(1.4)	(1.1)	(0.32)	0.3	安山岩A	K－19 486	Z 13	脚部のみ残存
－15	(1.8)	(1.2)	0.35	0.49	安山岩E	K－19	Z 20	側縁鋸歯状　両脚欠損
－16	(1.9)	(0.95)	(0.3)	0.42	安山岩C	K－19 510	Z 12	大半欠損
－17	(1.5)	(1.15)	(　)	0.28	安山岩A	K－20 574	Z 14	脚部のみ残存
－18	(2.4)	(1.7)	0.4	1.21	安山岩A	K－20 118	Z 54	両脚欠損
－19	(1.3)	(0.8)	(　)	0.2	安山岩A	K－19 782	Z 15	脚部のみ残存
－20	1.7	1.4	0.38	0.49	安山岩C	K－18 697	Z 1	脚端欠損後再加工
－21	(1.2)	(0.8)	(　)	0.2	安山岩C	K－17 985	Z 16	脚部のみ残存
－22	1.2	1.15	0.25	0.2	安山岩A	K－20	Z 18	側縁鋸歯状　ほぼ完存
－23	(0.95)	0.9	0.2	0.13	安山岩A	K－20	Z 19	先端部欠損
－24	(1.9)	(0.9)	0.39	0.35	黒曜石C	K－20 758	Z 44	1／2欠損　割口は樋状に剥離
－25	2.4	(1.65)	0.5	1.25	黒曜石A	K－20 763	Z 40	脚部欠損
－26	(1.8)	(1.1)	0.3	0.46	黒曜石C	K－19 1090	Z 42	両脚欠損
－27	3.0	1.9	0.5	1.55	黒曜石B	K－20	Z 37	完存

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 28	2.5	1.95	0.4	0.93	黒曜石A	K−20	Z 41	完存　一面に大剥離面残る
− 29	(1.5)	(1.1)	0.32	0.34	黒曜石A	K−20	Z 43	脚部欠損
− 30	1.9	1.5	0.29	0.47	黒曜石A	K−20　896	Z 36	脚部欠損
− 31	(2.2)	(1.55)	0.25	0.64	安山岩B	K−20 1116	Z 27	脚部欠損　一面は加工粗い
− 32	2.05	1.8	0.31	0.79	安山岩B	K−24	Z 31	完存
− 33	(1.8)	1.45	0.33	0.8	安山岩A	K−20 1120	Z 32	両部欠損　一部自然面残る
− 34	(1.6)	(1.35)	0.28	0.45	安山岩B	K−20　657	Z 28	先端つぶれ、脚部欠損
− 35	(2.15)	1.9	0.32	0.85	安山岩A	K−19　633	Z 23	先端部・脚部欠損
− 36	(2.15)	1.9	0.41	1.11	安山岩B	K−20　319	Z 22	先端部新破損
− 37	(1.6)	1.65	0.3	0.68	安山岩A	K−19　668	Z 25	上半部欠損
− 38	(1.9)	1.5	0.33	0.78	安山岩B	K−20　957	Z 24	先端部・脚部欠損
− 39	(2.5)	(1.6)	0.3	0.78	安山岩B	K−20	Z 26	先端部・脚部欠損
− 40	(1.9)	(1.1)	0.3	0.39	安山岩A	K−20 1094	Z 21	脚部欠損、先端部新破損
− 41	(2.2)	(1.5)	0.32	0.59	安山岩A	K−19	Z 29	両脚新破損
− 42	1.65	1.4	0.24	0.27	安山岩A	K−20　835	Z 30	側縁鋸歯状　完存
− 43	2.9	2.3	0.4	1.87	安山岩A	K−20	Z 35	脚部加工中に破損か
− 44	(1.8)	(1.7)	0.3	0.78	安山岩A	K−20 1000	Z 34	大半欠損
− 45	1.9	1.3	0.36	0.57	安山岩C	K−20　321	Z 33	完存

A地区出土楔形石器観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 46	3.2	1.85	0.95	6.1	安山岩B	K−19　585	P 6	自然面残る
− 47	4.2	4.15	1.15	23.27	安山岩A	K−20　498	P 10	
− 48	4.6	1.6	1.0	6.16	安山岩A	K−19　832	P 8	削片
− 49	2.4	1.4	0.7	2.61	安山岩C	K−20 1078	P 5	自然面残る
− 50	3.3	1.75	1.15	5.73	安山岩B	K−20　702	P 9	
− 51	2.4	1.95	0.65	2.58	安山岩C	K−20 1092	P 2	
− 52	2.95	2.15	0.9	4.05	安山岩C	K−20	P 7	截断面に打痕あり

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 53	2.45	1.0	0.4	0.86	黒曜石A	K−19　331	P 11	削片
− 54	2.8	1.7	0.85	5.3	安山岩B	K−20　949	P　1	自然面残る

A地点出土スクレイパー観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 55	3.4	1.35	0.75	3.27	黒曜石A	K−20　976	S　1	側縁欠損、自然面残る
− 56	6.1	4.4	1.2	24	安山岩D	K−20　600	S　4	一部欠損
− 57	5.05	3.1	0.7	8.6	安山岩A	K−19　650	S　2	自然面残る、三辺に刃部
− 58	5.05	2.4	0.65	7.57		K−20　320	R　8	
− 59	7.8	3.7	1.4	39.4	安山岩B	K−19　671	S　3	一部欠損、二辺に刃部

A地点出土二次加工のある剥片観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 60	5.5	3.0	1.2	22.81	安山岩D	K−19　470	R　3	一部欠損
− 61	2.0	1.7	0.8	2.2	安山岩C	K−20　965	P　4	
− 62	1.95	1.65	0.5	1.4	安山岩B	K−19　362	P　3	
− 63	2.45	2.0	0.75	2.81	安山岩A	K−20　609	R　5	
− 64	2.1	2.0	0.5	1.45	安山岩C	K−20 1008	R　6	
− 65	2.3	1.95	0.45	2.35	安山岩A	K−19　568	R　4	
− 66	3.3	1.8	0.95	4.1	黒曜石C	K−19　727	C 12	打面に打痕あり
− 67	3.1	1.5	0.6	2.35	黒曜石A	K−20	R　7	自然面残る
− 68	2.7	1.95	0.65	2.37	安山岩A	K−19　758	G　3	側面に樋状剥離
− 69	4.2	2.8	0.7	8.67	安山岩E	K−20　903	G　2	側面に樋状剥離
− 70	2.9	0.8	0.25	0.59	黒曜石C	K−19	G　1	側縁にかすかな刃こぼれ

A地点出土石斧・磨石観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 71	10.0	6.3	1.6	147.65	砂　岩	K−19　759	A　3	一部研磨、一面新しく剥離

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備 考
− 72	9.3	7.5	3.6	382.5		K−19 870	H 2	
− 73	11.1	7.0	5.6	570		K−19	H 3	半分欠損、全体に被火
− 74	10.4	8.9	3.2	445.4		K−20 843	H 1	

A地点出土石核観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備 考
− 75	6.1	5.8	1.5	39.02	黒曜石B	K−20 1075	C 8	
− 76	2.85	1.8	1.05	5.4	黒曜石A	K−19	P 13	
− 77	3.5	1.4	1.15	7.96	黒曜石B	K−19 850	C 10	打面再生剥片状、打面打痕
− 78	2.9	1.55	1.5	5.66	黒曜石C	K−20 32	C 9	一部に打痕あり
− 79	3.0	(1.45)	0.95	2.8	黒曜石A	K−20	C 11	打面再生剥片状、打面打痕
− 80	2.4	1.95	0.9	3.55	黒曜石A	K−19 521	P 12	
− 81	(12.4)	(6.5)	2.9	207.8	安山岩A	K−21	C 1	一部に新しい割れ
− 82	9.8	7.8	2.8	235.2	安山岩A	K−19 554	C 6	
− 83	3.8	1.6	1.35	7.26	安山岩A	K−19 358	C 4	
− 84	4.9	2.2	1.1	8.92	安山岩A	K−19 742	C 3	
− 85	4.5	3.6	1.9	24.29	安山岩B	K−19 656	C 2	自然面残る
− 86	6.3	4.8	2.3	59.35	安山岩C	K−20 1112	C 5	自然面大きく残る
− 87	5.4	4.2	2.2	41.37	安山岩B	K−19 833	C 16	打痕数か所にみられる
− 88	3.4	1.7	1.2	7.07	安山岩B	K−19 796	C 13	自然面残る
− 89	2.6	2.3	1.0	8.7	安山岩E	K−20 31	C 7	

A地点出土石製装飾品観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備 考
−	8.1	3.35	0.7	22	泥質片岩	K−20 318 323	O 1	一部新破損、周縁に刻み

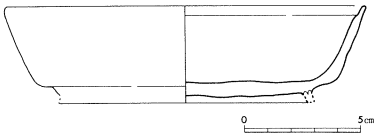
注

(1) 松崎寿和編 『帝釈峡』 1969

(b) 3層内検出の遺構と遺物

3層はやや谷状に窪んだ部分にほぼ水平に堆積しており（第34図）、須恵器、土師器を包含する。遺構としては、3号墳の15m東側、4層遺物群のⅡ群、Ⅲ群にあたる地点の3層黒褐色土を取り除いた面で、溝状遺構、柱穴群、土壙を検出した。

SD01（第52図）ゆるやかな谷状地形の斜面部が、谷底の平坦部につながる緩斜面より検出された溝である。幅20～30cm、長さ6.6m、深さ20cmでわずかに弧を描いて東西方向に延び、両端は屈曲している。溝内より須恵器碗が出土している。この溝は、後に記す掘立柱建物跡と軸が一致し、また、溝の両端が、あたかも建物跡を囲むように、屈曲することから考えて、この建物に伴う遺構と考えられる。



第51図　SD01内出土遺物実測図

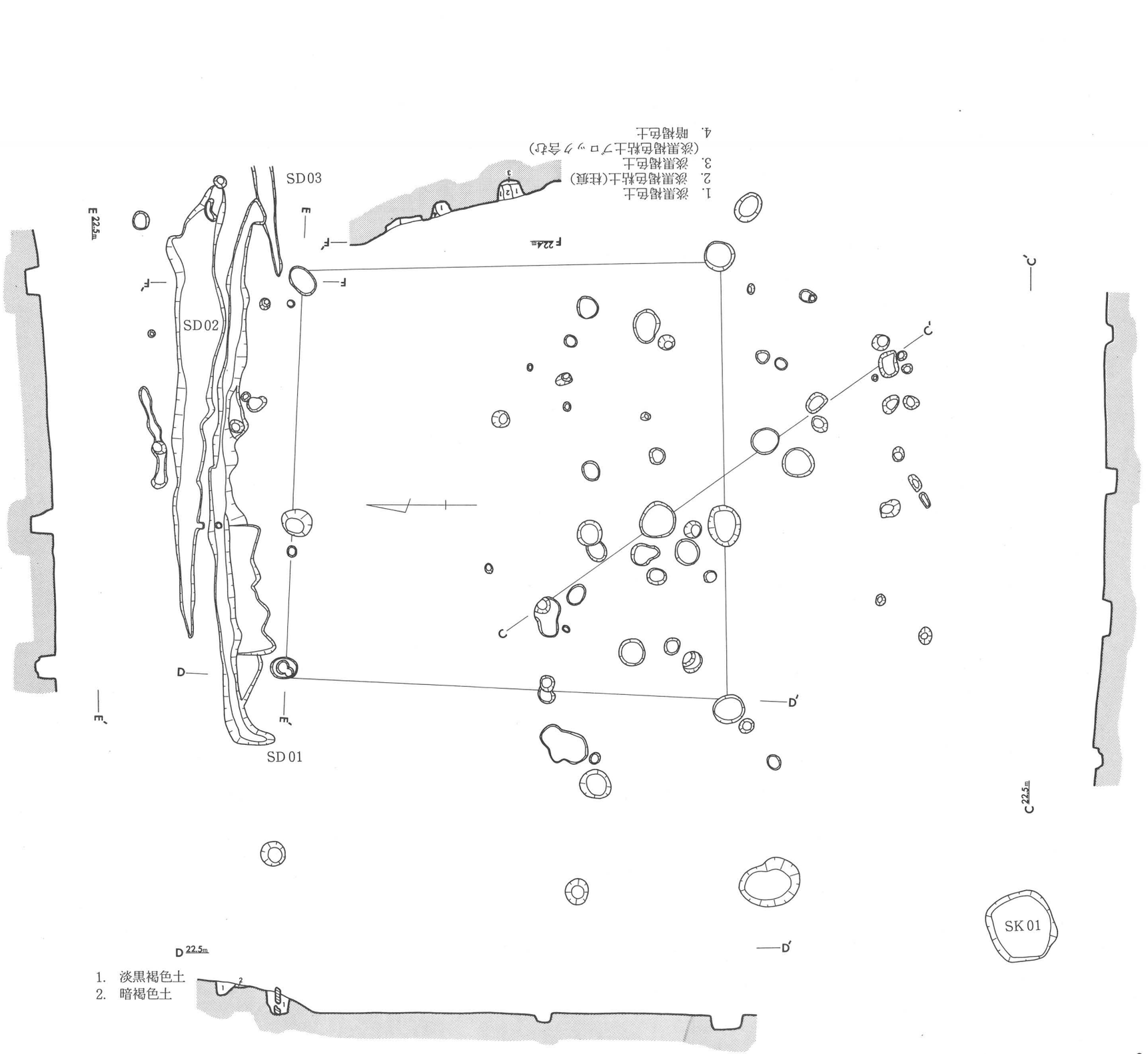
溝内より出土した須恵器は、口径15.5cm、器高約4cmをはかるやや大形の碗で底部には径11cmの高台がつく。体部はやや外方に開きながら、ほぼまっすぐに立ち上がり、口縁端は丸くおさめる。焼成は非常に悪く赤褐色を呈し、特に底部付近は風化が著しい。全体の器形は、隣接する3号墳出土D類須恵器に類似しており、およそ7世紀代のものと考えられる。

SD 02（第52図）　SD01の北側に接して、ほぼそれに平行するように検出された溝状遺構である。長さ5.7m、副15～62cmのややいびつな形をしており、深さも10cm前後と浅い。SD01との前後関係は不明である。

SD03（第52図）　SD01の東端付近で検出された溝状遺構で、SD01より新しいと考えられる。東側は後世の粘土採取のため大きく削られており、詳細は不明である。

掘立柱建物跡（第52図）　平坦部より数多くの柱穴が検出され、少なくとも1棟の掘立柱建物跡が明らかになった。この建物は、2間×2間東西辺5～5.4m、南北辺5.3～5.6mのややいびつな方形を呈し、主軸はほぼ東西方向を示す。柱間が一定ではないが、東西辺では、西側の柱間が両辺ともやや狭くなっている。柱痕のみられる柱穴もあり、柱径は約12cmで、さほど大規模な建物ではなかったことがうかがえる。一方、この建物跡の南側を横切るように、柱間1.8mで、4個の柱が並んで検出された。しかし、柱穴1列分以外は検出されず、詳細は不明である。これらの掘立柱建物跡の時期は、SD01とほぼ同時期の7世紀前後と考えられる。

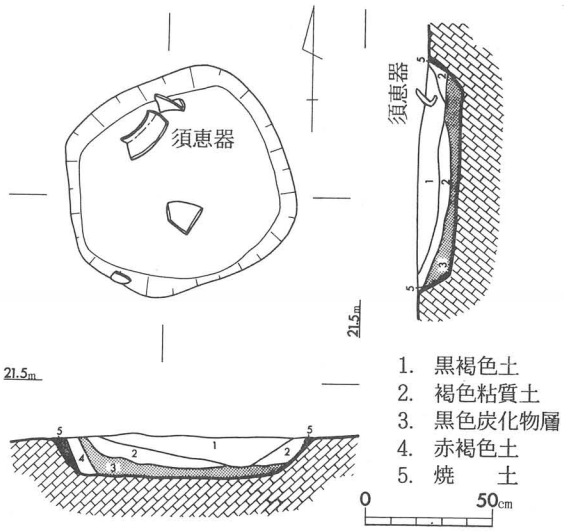
SK01（第53図）　掘立柱建物の南西約5mの地点で検出された土壙である。長径88cm、短径83cmの隅丸方形を呈し、深さは15cmをはかる。土壙の底面には、灰と炭化物が多量に堆積し、壁面が焼けて赤変していたことから、炉穴であったと考えられる。土壙内覆土より、須恵器甕口縁部片が2個体分出土している（第54図4、5）。4は、頸部が外方に開きながら立ち上がり口縁付近でやや内方に折れて直立気味に口縁端につづく。口縁端は丸くおさめる。頸部外面は浅い沈線で三段に仕切られ、上段の口縁部付近には、「メ」状のヘラ描き文を施し、中段には2段にわたり櫛描波状



第52図　A地区掘立柱建物跡実測図

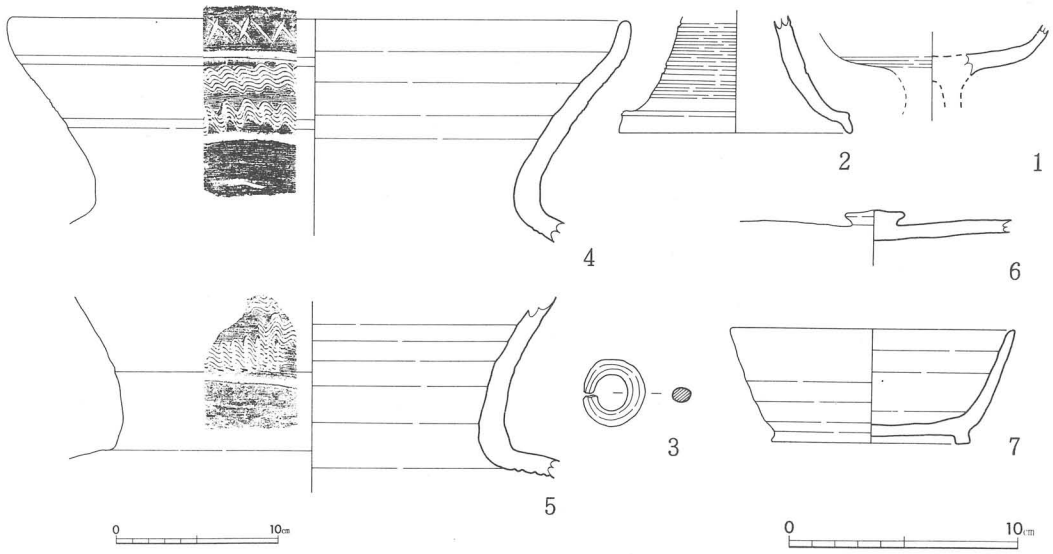
文を施す。5は口縁部が欠損しているが、頸部外面には少なくとも2段以上に櫛描波状文を施している。これらの特徴からみて、SK01の時期は7世紀代と考えられる。

これらはいずれも、およそ7世紀頃の遺構と考えられるが、これは後に記す隣接した3号墳の使用時期と重なる可能性がある。とすると、これらの遺構は古墳と密接に結びついた遺構、例えば殯家等の可能性も考えられるが、祭祀的な遺物は全く出土しておらず、詳細は不明といわざるをえない。



第53図　SK01実測図

遺構に伴わない遺物（第54図1～3、6、7）　6、7は3層出土の須恵器である。6は蓋でやや扁平な宝珠状つまみをもつ。7は断面方形の高台をもつ**椀**である。底部から体部にかけてやや丸みをおびて立ち上がり内湾気味に外方に開いて口縁に至る。いずれも7世紀代のものと考えられる。1～3は、掘立柱建物跡の南側上方尾根上より出土したものである。ここは、後世の粘土採取により大きく撹乱を受けており、旧状を復元できるような遺構は全く検出できなかったが、その遺物からみて、古墳が存在していた可能性が高いと考えられる。1、2は須恵器高坏である。1は坏部片で底部にカキメを廻らす。脚部は、坏部との接合部付近では径が細くしまっていたと考えられる。2は脚部片で脚端に向って「ハ」の字状に聞き、端部は屈曲して下方にのびる。

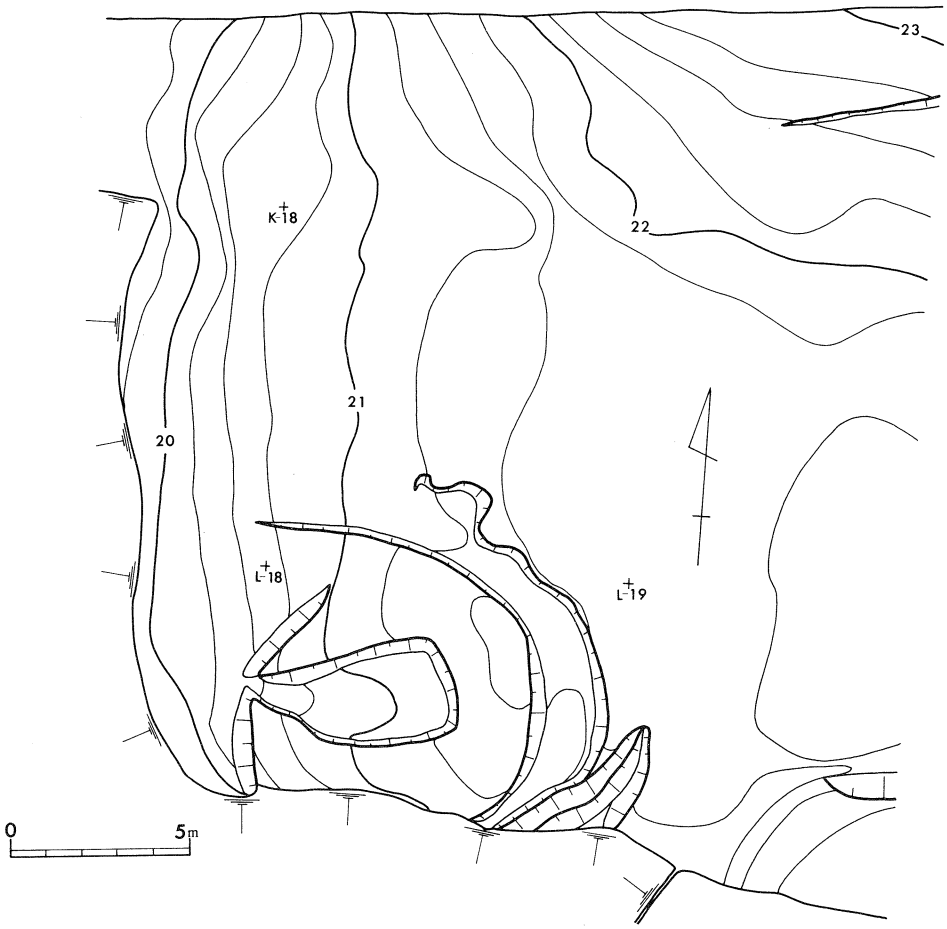


第54図　A地区出土遺物実測図（1～3南尾根出土、4・5 SK01出土、6・7 3層内出土）

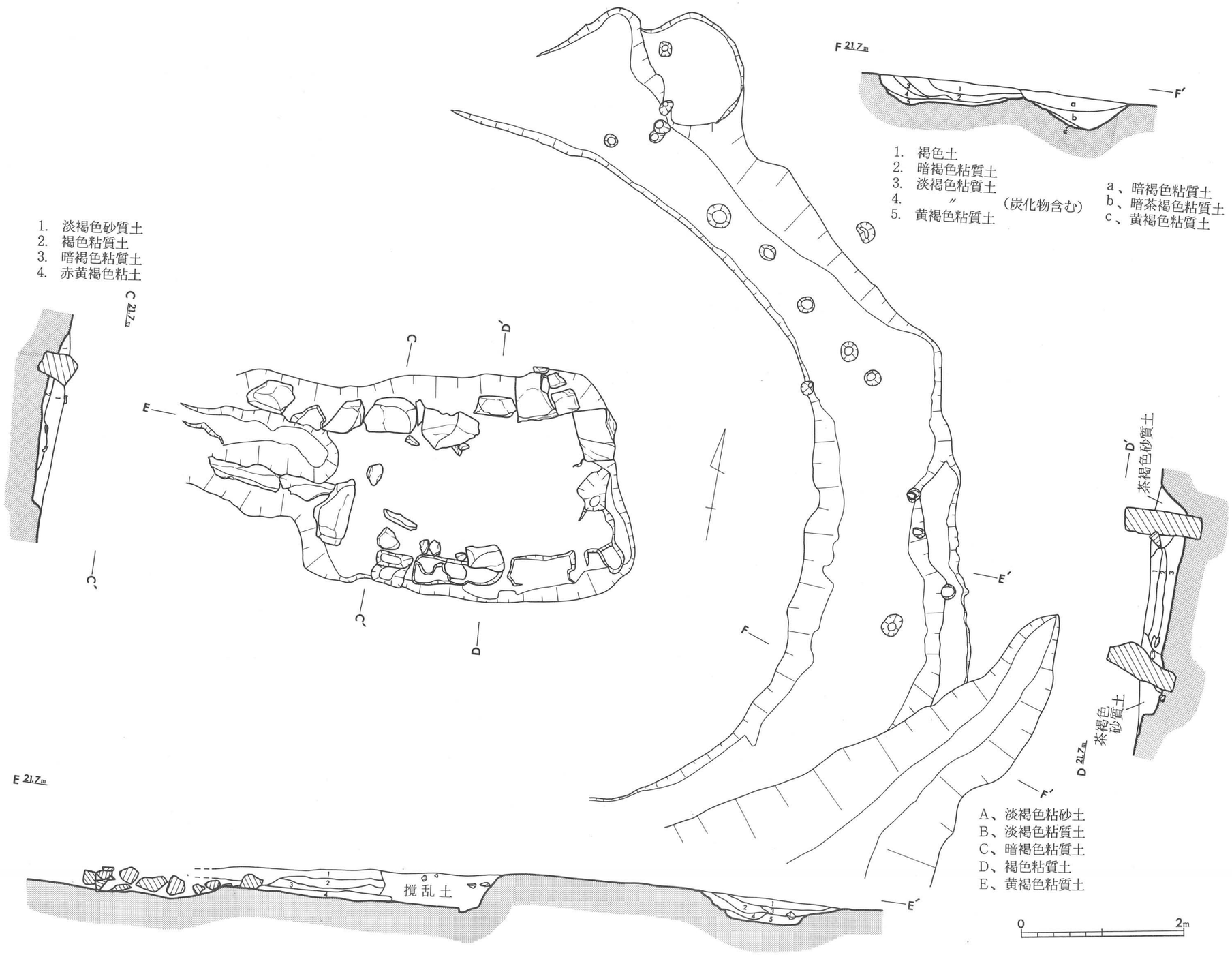
(c) 第3号墳

A調査区西側の谷頭に築かれた横穴式石室を内部主体にもつ径10mあまりの円墳で、以前から狐塚と呼ばれ、その存在が知られていた。しかし、古墳の大半はすでに破壊されていたため、今回の調査では周溝および石室の根石、掘り方を検出した程度であった。石室の東側に存在していた周溝は径約10.0m、幅1.5m前後を測り、南側は新しい溝によって切られ、北側は浅くなって消えていた。このことから、3号墳に伴う周溝は地山が高くなっている東側を中心として南北方向に掘られ、西側には存在しなかったものと思われる。

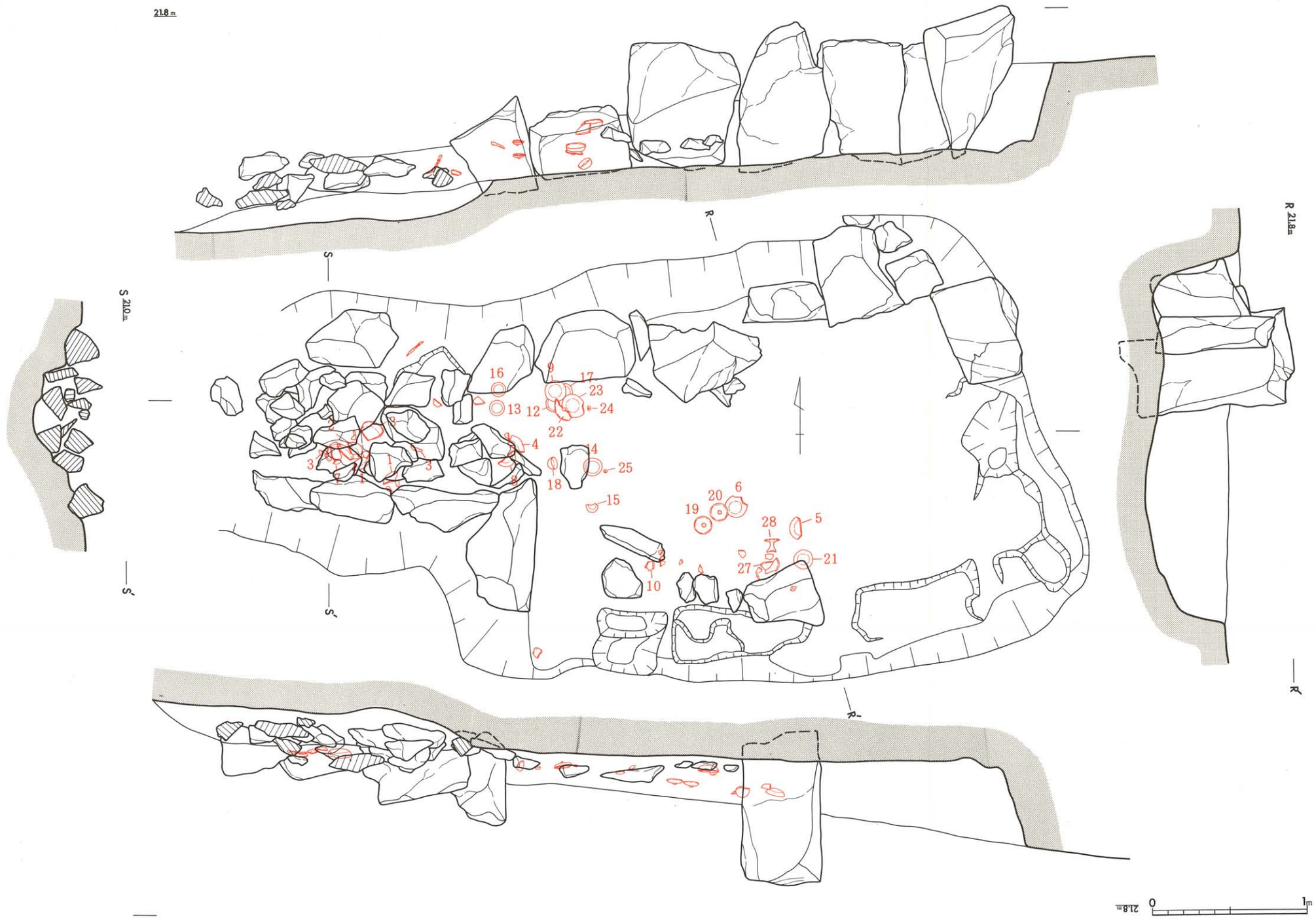
横穴式石室は主軸をほぼ東面に向けた。いわゆる片袖式の石室で、全長4.6m、玄室長2.8m、幅1.8m～1.5m、羨道長1.8m、幅0.6m～0.8mを測る。玄室の平面形はやや変形した狭長な長方形を呈している。北壁は奥壁とほぼ直角に直線的に伸びているのに対し、南壁はやや鋭角で内湾気味に伸びており、約80°の角度で前壁と接している。玄室の奥部に現存する根石は幅0.6m、高さ1.0m前後の比較的大きな石を立てて据えているが、前側は0.7×0.5mのやや小さな石を横方向に置いている。根石は本来、奥壁3個、前壁1個、北壁4個、南壁6個によってそれぞれ構成



第55図　第3号墳地形測量図（調査後）



第56図　第 3 号 墳 実 測 図

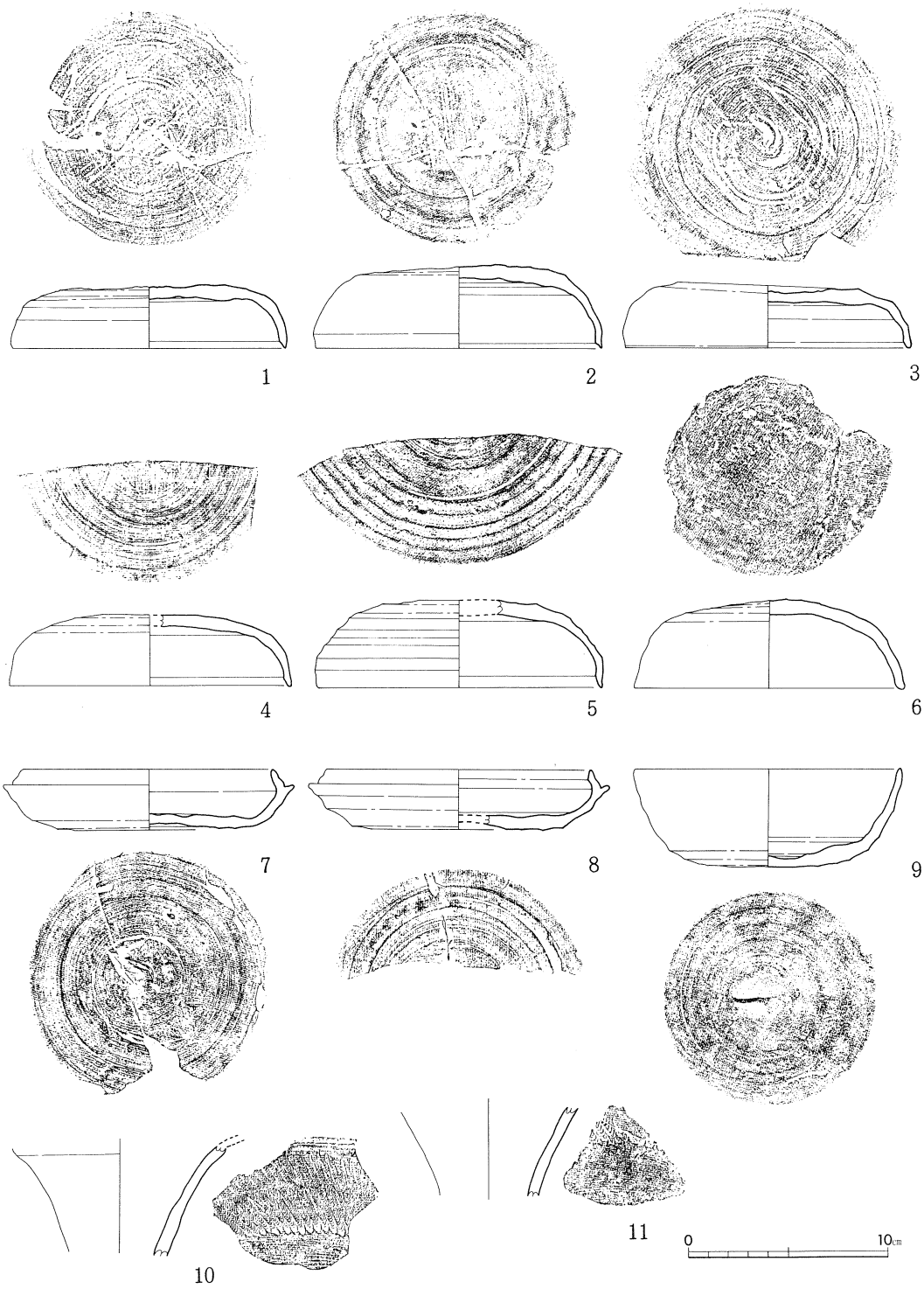


第57図　第３号墳遺物出土状況図

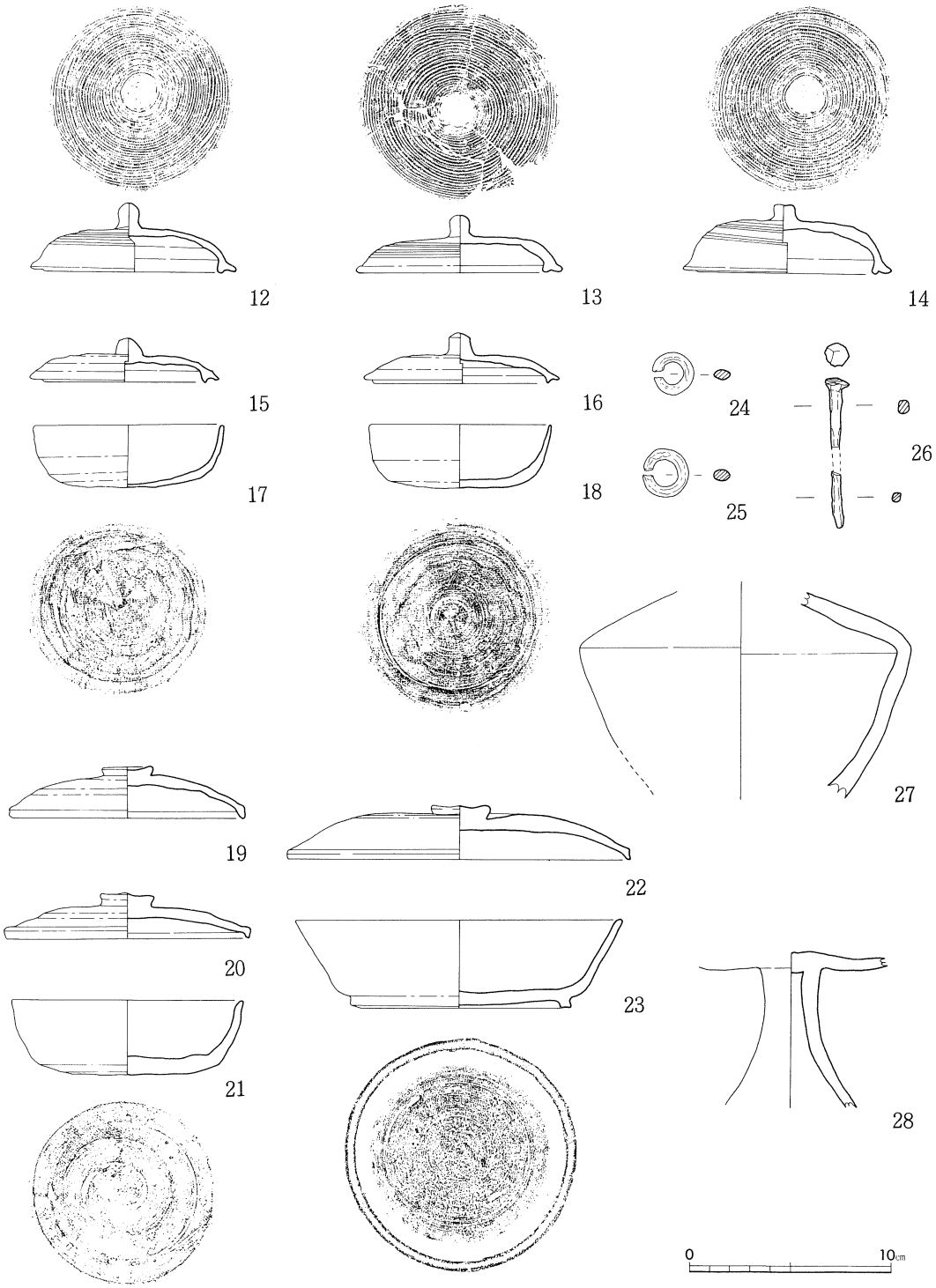
されていたものと思われる。また、玄室の前方には人頭大の石が両側壁に沿って数個存在していた。これらの石はほぼレベルがそろっていることから棺台に使用されていたものと考えられる。玄室内の土層をみてみると、奥部は近世の撹乱を受け土層が乱れていたが、前側は地山の上に4層からなる土層が残っていた。すなわち、地山直上に赤褐色粘土層（4層）があり、その上には暗褐色（3層）、褐色（2層）の粘質土、最上部に淡褐色砂質土（1層）がそれぞれ存在していた。これらの土層は少し乱れている所があるが、ほぼ並行して存在する。下層から古い須恵器を、上層から新しい須恵器をそれぞれ検出したことから、追葬があったものと考えられ、追葬時に床面を整地した可能性がある。羨道は玄室の主軸より北側に約18°あまりずれて設けられているため、石室全体がややいびつな形を呈しているようにみえる。玄室から伸びる北壁は玄門あたりで外側に大きく開いて屈折し、南壁は前壁とほぼ直角に接して伸びる。根石は横方向に長さ0.5 m～0.7 mの石を据えている。また、床面の部分には「U」の字形を呈する溝があり、その上に人頭大の石がぎっしり詰まっていた。これらはおそらく排水的な意味をもつものであろう。なお、石室の掘り方は長さ5.2 m、幅1.8～3.0 mで、壁の根石に沿って掘られていた。

出土遺物（第58図、第59図）

石室内から出土した遺物には蓋坏、蓋付埦、瑞、長頸壺、高坏等の須恵器と耳環、鉄釘がある。蓋坏、蓋付埦はその形態から4つに細分できる。A類は短いたちあがりをもつ身に蓋が付くタイプで、羨道および玄室の下層から出土している。蓋（1～6）は口縁端部内側に内傾する平面をもつものが多く、天井部は平らなものとやや丸みをもつもの（2、5、6）がある。また、6は口縁端部が丸く、やや新しい様相をもっている。なお、天井部および底体部には回転ヘラ削りが施されており、板状工具によるナデの痕跡をもつものが多い。B類（12～18）は小形の蓋付埦になるもので埦（17、18）は口径9.4 cm、器高3.0 cmを測り、底体部に入念な回転ヘラ削りが施され、17は口縁端部が丸いが、18は薄く尖っている。蓋は天井部の中央に凝宝珠様のつまみが付き、口縁端部に短いかえりをもつ。天井部はカキ目を施すもの（12～14）と回転削りを施すもの（15、16）がある。これらB類の蓋付埦は玄室の中層から出土したものが多い。C類（19～21）は口径11.5 cmあまりの坏に蓋がつくもので、主に玄室の上層から出土している。埦は底体部に回転ヘラ削りが施され、口縁部は短く外反して端部に至っている。蓋はやや扁平なつまみをもち、口縁部は鳥の嘴状を呈する。D類は玄室の上層から出土したもので、口径16.0 cmを測る高台付の埦に蓋が付くタイプである。蓋（22）はC類とほぼ同様の器形をなしているが、口径が大きい。身は口縁部がやや外傾して上り、端部は丸い。瑞（10、11）はラッパ状に開き、波状文およびカキ目がめぐる頸部の破片で、28の高坏は白褐色を呈した土師質のものである。27は長頸壺の体部の破片で、肩はよく張り、体部下方に回転ヘラ削りを施す。耳環は2つ出土しているが、いずれも保存状態は良好で、金メッキされたものである。24は径2.0 cm、25は径2.5 cmをそれぞれ測る。26は上部が鍵形に屈折していることから、鉄釘と思われる。



第58図　第３号墳出土遺物実測図(1)



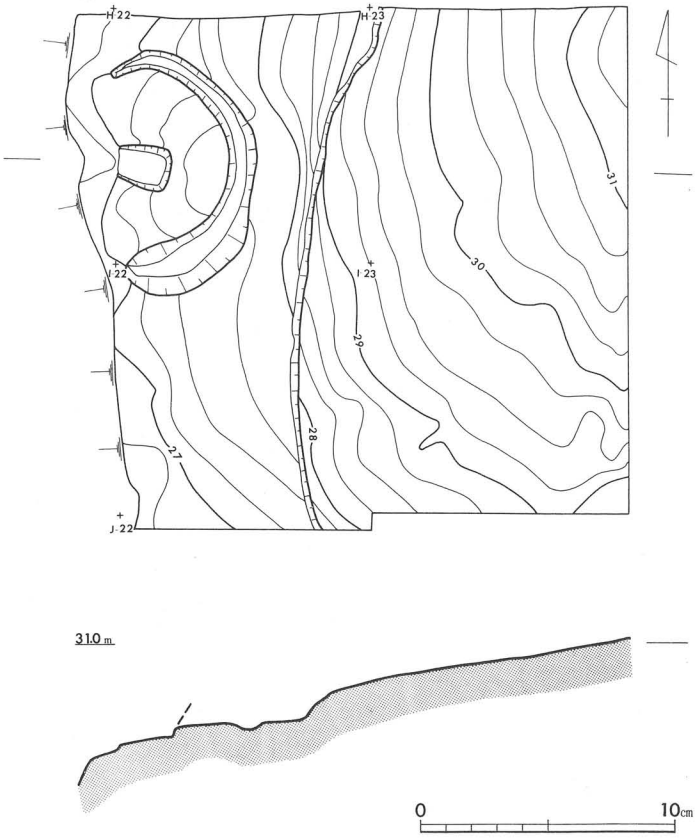
第59図　第３号墳出土遺物実測図(2)

(4) 第 4 号 墳

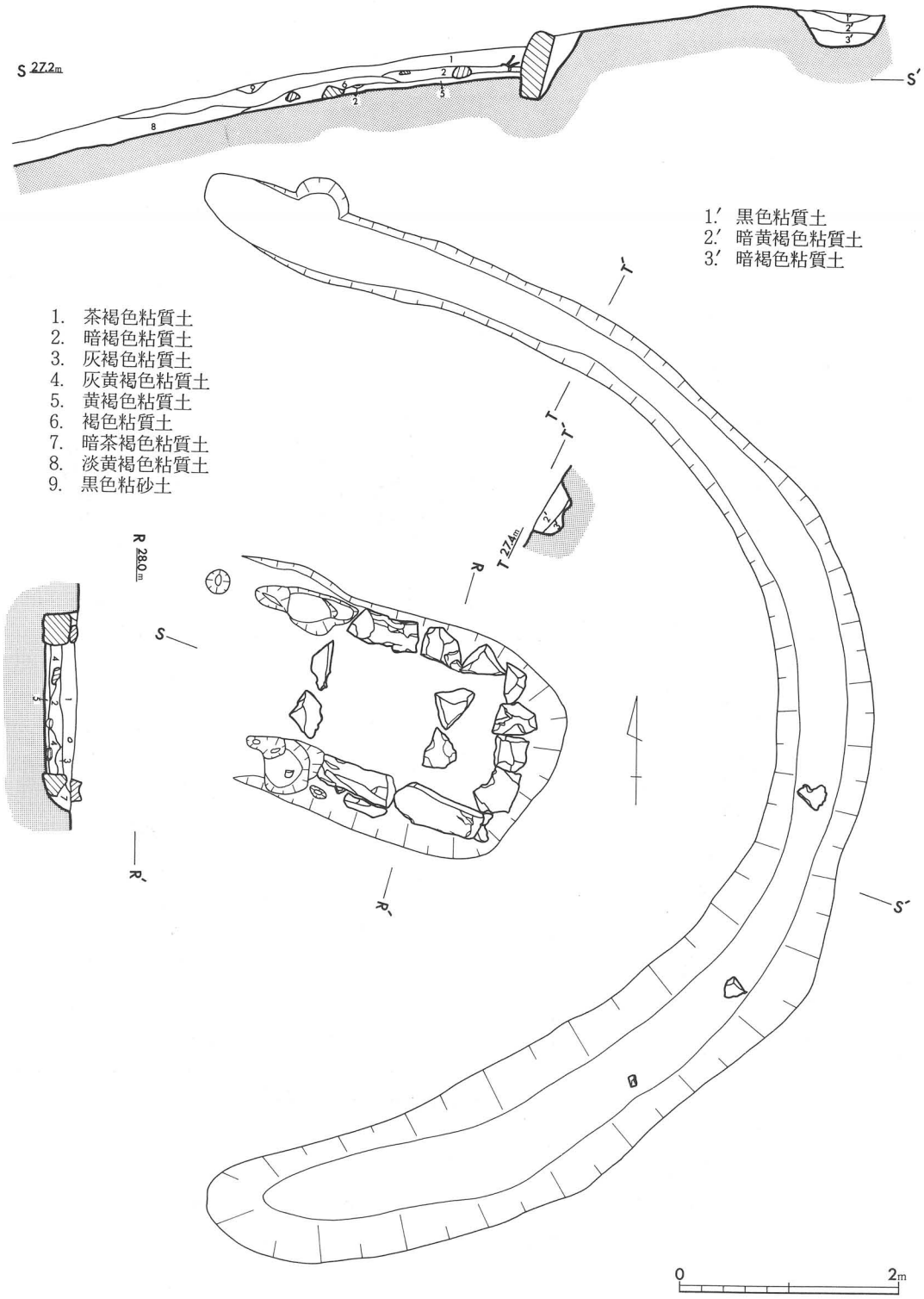
B調査区の東側丘陵斜面に築かれた横穴式石室を主体部にもつ径9.0 mあまりの円墳である。墳丘は開墾のため削り取られていたが、斜面上方に周溝が残っていた。周溝は幅0.6 m～1.2 m、深さは0.3 mあまりを測り、斜面の下方になるにしたがって浅くなっている。横穴式石室は入口付近を欠くが、西側に入口を向けた現存長3.0 m、幅1.2 m～1.1 mあまりを測る小形の石室である。玄室の平面形は長方形を呈し、周壁の根石が残っていた。奥壁は4つの根石から構成されていたが、これらの根石は幅0.3 m～0.4 m、長さ0.5 m～0.6 mの石を縦方向に立てている。これに対し、側壁の根石は長さ0.5 m～2.0 m、幅0.3 m前後の横方向に置き、奥壁と側壁とでは石の用い方が異なっていた。側壁は本来、南壁に3個、北壁に4個の根石が存在していたものと思われ、根石は安定を図るため地山を若干掘り下げて据えている。床面は地山直上に黄褐色の粘質土を約5.0 cmあまり貼って築造しており、石室内には1.3 mの間隔をもって人頭大の石が前後にそれぞれ2個づつ存在していた。これらの石は地山および床面の直上に置かれていることから、原位置をあまり動いていないものと思われ、石が企画的に配置されていることや、後側の石と奥壁との間に遺物がまとまって出土していることなどから、棺台に使用されていたものと考えられる。なお、石室の掘り方は長さ3.4 m、幅2.1 mを測り、出土遺物は床面上から主に出土している。

出土遺物（第63図）

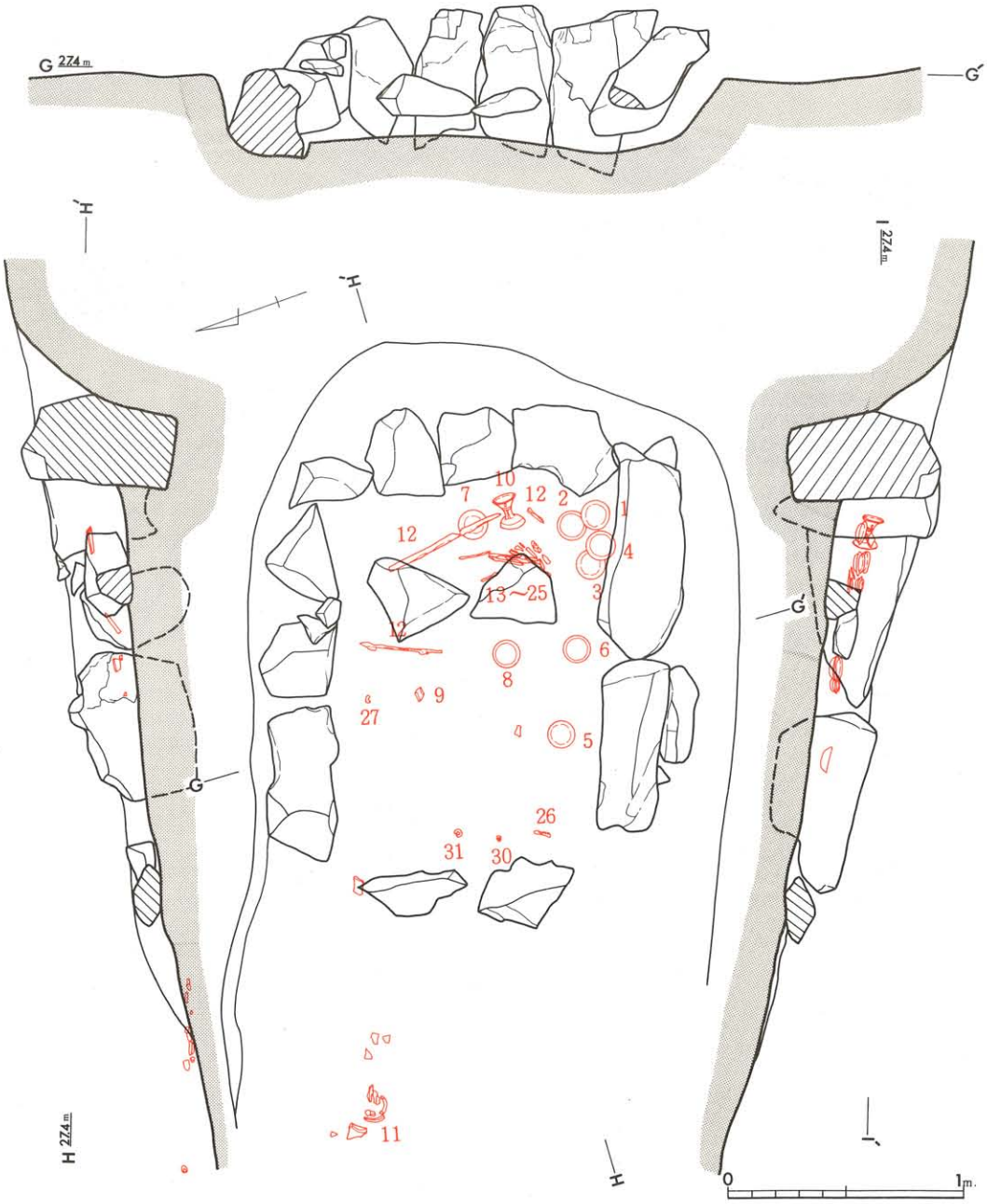
石室内から蓋坏、高坏の須恵器、直刀、刀子、鉄鏃、耳環等の遺物を検出した。これらの出土遺物は石室奥部にまとまって存在していた一群と石室の中央部に散在しているもの、さらに、入口付近で破片となって出土したものがあり、ほとんどが床面直上から出土している。蓋坏の蓋（1、3、5、7、9）は口



第60図　第4号墳周辺地形測量図



第61図　第４号墳実測図

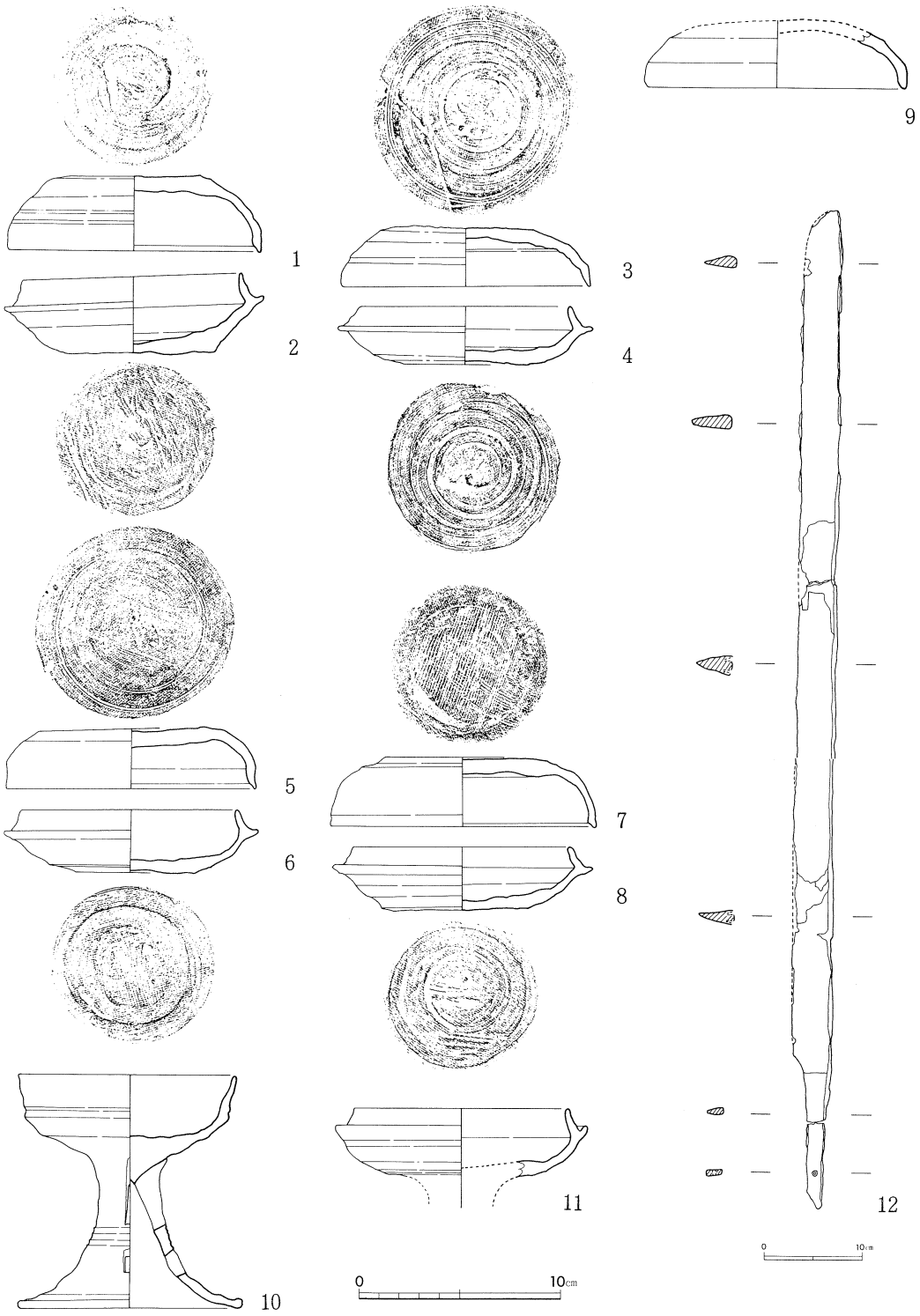


第62図　第４号墳遺物出土状況図

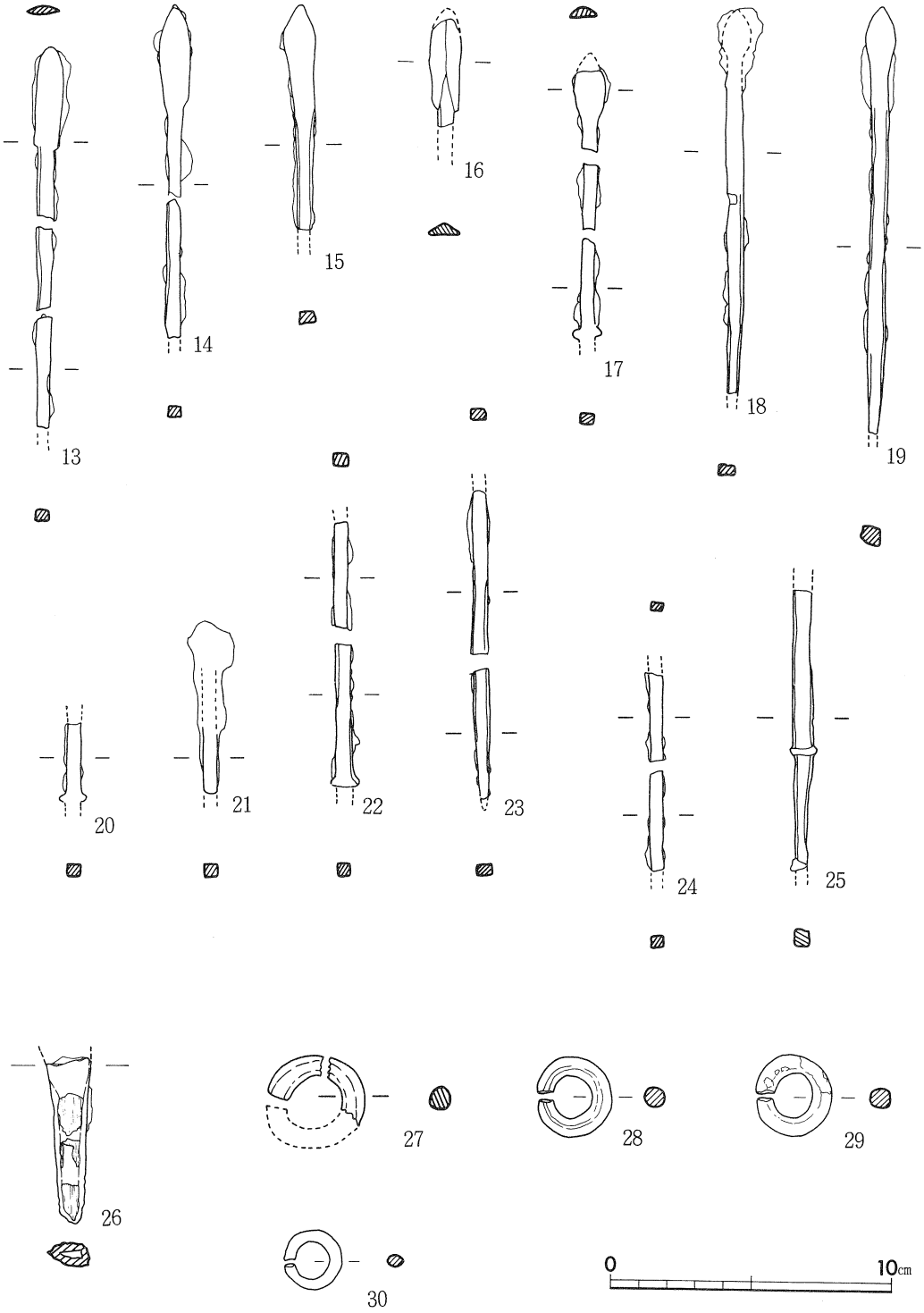
縁端部に凹面をもつタイプともたないタイプがある。前者は器高が割と高く、天井部の区別の意識が残っているのに対し、後者は器高が低く、天井部は内湾して下り、直接口縁部に至っている。この２つタイプの蓋は石室奥部からセットとして出土していることから、形態的な相違は若干あるものの時期的にはほぼ同一のものと思われる。一方、身は高さ 1.0 ㎝～ 1.2 ㎝あまりの内傾するたあがりをもち、口縁端部は丸い。底部はやや平らなものが多く、回転ヘラ削りが施されている。器高

はほとんどが3.0㎝あまりを測る。なお、蓋坏の天井部に板状工具によるナデを施したものが多い。高坏は石室奥部から出土した。脚部に長方形のすかしをもち、坏部は底体部と口縁部の境に沈線がめぐる。口縁部はやや外傾して上り、端部は丸い。11の有蓋高坏は脚部を欠くが、坏部は受部がやや上方に伸びている以外、上記の蓋坏の身と同様の形態をなしている。

12の直刀は石室の奥部で3か所に分かれて検出した。全長99.5㎝、刃部の長さ84.5㎝、幅3.8㎝茎長15.0㎝を測る大形の刀である。背は0.8㎝あまりの厚さをもつ平造りで、断面は二等辺三角形を呈する。切先はやや内湾し、茎は幅2.8㎝～1.5㎝を測り、先端近くに0.3㎝の目釘穴が存在する。また、茎の先端はななめに尖っている。この直刀は錆膨れしているところがあり、鞘などの木質の付着はみられない。鉄鏃は石室奥部から一括して出土したが、床面が粘土質であるため保存状態がきわめて悪かった。そのため図化できたのは破片を含め13点である。鏃身が残っている13～19はいずれも尖根式に属するものである。16は断面三角形を呈する鎬造り、他は錆化のため明らかでないものが多いが、片刃か両刃造りになるものと思われる。20～25は箆被部から茎部にかけての破片で、20、22、25は関をもち、これらの破片も尖根式に属するものと思われる。26の刀子は石室の前方で検出した茎部と刃部の一部が残るものである。茎部の長さ4.2㎝、関の幅1.2㎝を測る。背は平造りで、関は刃部部分につき、刃部は1.5㎝あまりしか残存していない。また、茎部には一部木質が付着しているところがあり、刃部は錆のため断面に空胴が存在する。耳環は計4個出土した。27～29は大形のもので、27は3.4㎝、28、29は2.6㎝の径を測る。27は錆化が進みばらばらの破片である。28、29は銀メッキが施され、保存状態は良好である。30は径2.0㎝、厚み0.5㎝を測る小形の金環であるが、保存状態が悪く、緑青がふき出している。



第63図　第4号墳出土遺物実測図(1)



第64図　第４号墳出土遺物実測図(2)

(5) 第 5 号 墳

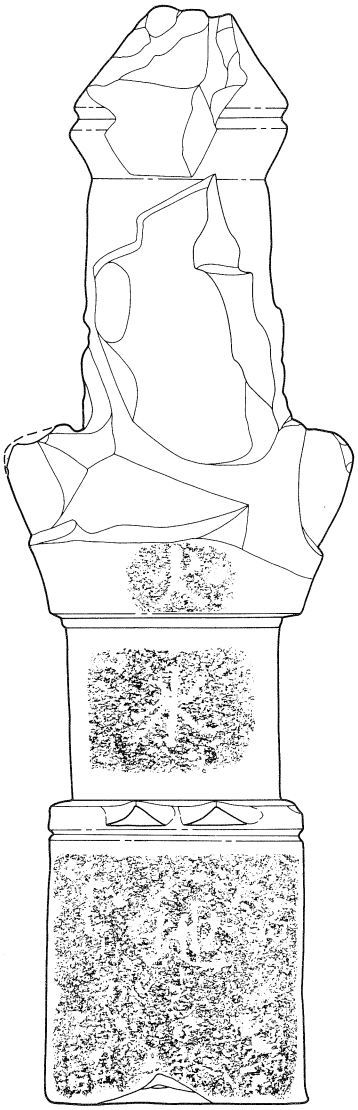
A地区付近より、周布平野に向って南西に延びる平坦な尾根の突端にあたる。5号墳の眼前には平野が広がり、日本海をのぞむこともできる。

5号墳は調査前より、長辺18m、短辺8.5m、高さ1.4mの墳丘が確認されていたが、墳丘の周辺は耕作により改変され、また墳頂部は後世墓地に利用されていたこともあって、大きな撹乱壙があり、当初より主体部等の残存状況は極めて悪いことを予想して調査に入った。また、丘陵部につづく尾根上も、トレンチを入れて確認調査を行ったが、何ら遺構、遺物は検出されなかった。

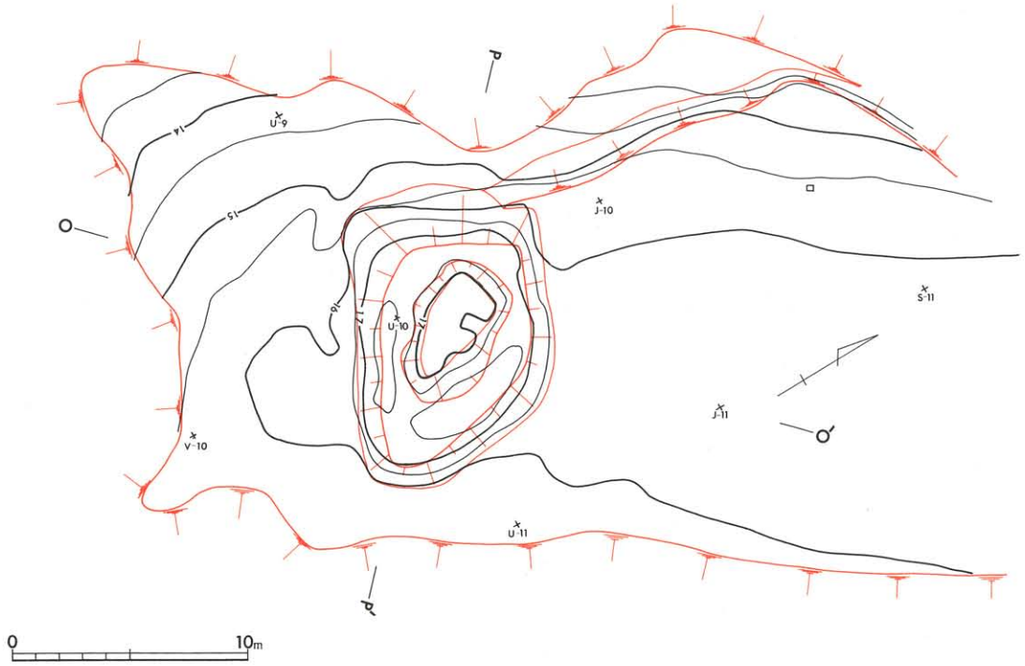
調査により、残存長径11.8m、短径8.3mの方形に近い墳丘であることがわかったが、これが原形を留めていないことは明らかで、周溝等も全く認められなかったため、墳形、規模は不明といわざるをえない。墳丘土層断面をみると、1層は後世の盛土で、2、3層が古墳の盛土と考えられる。4層は黒色土で旧表土と考えられ、地山は墳丘部分で盛り上っている。こうしたことから5号墳はまず地山を簡単に削り出した後、若干の盛土を行って墳丘を築成したと考えられる。

主体部は全く検出できなかったが、横穴式石室ではないことは明らかになった。この遺跡における他の古墳は全て横穴式石室を主体にしていることから、この5号墳は本遺跡では最も古いものである可能性が強いといえる。遺物は全く出土していない。

なお、5号墳北側約15mの地点に、破損した1基の宝篋印塔が置かれていた。これらの下方の精査を行ったが、土壙等の施設は何ら認められず、二次的に移動させられたものと判断された。この宝篋印塔は高さ72.5cmをはかる一石造のもので笠、塔身、基礎の各部に「火」、「水」、「地」が刻まれ、破損した相輪、笠部分には、「空」、「風」の各字が刻まれていた可能性が強い。また基礎部分の「地」の左右に文字が刻まれているが、風化のため解読できなかった。

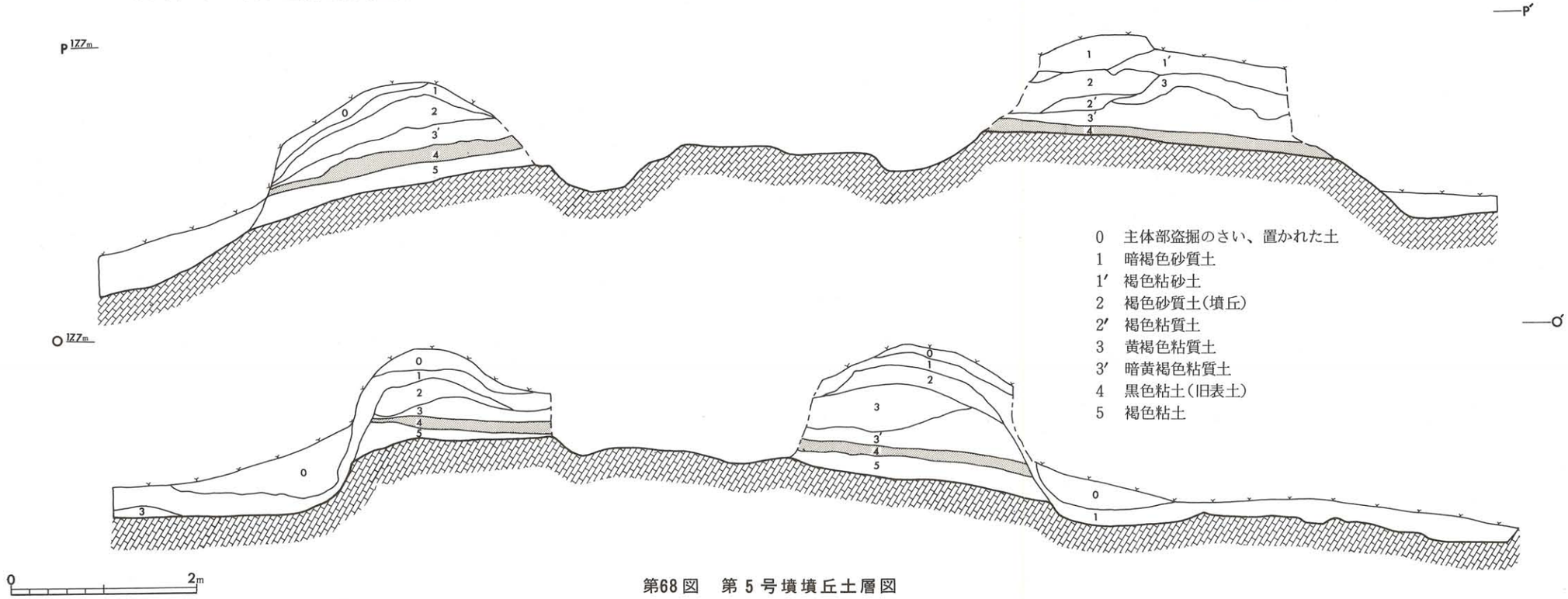


第65図　宝篋印塔実測図



第66図　第５号墳調査前地形測量図

第67図　第５号墳調査後地形測量図

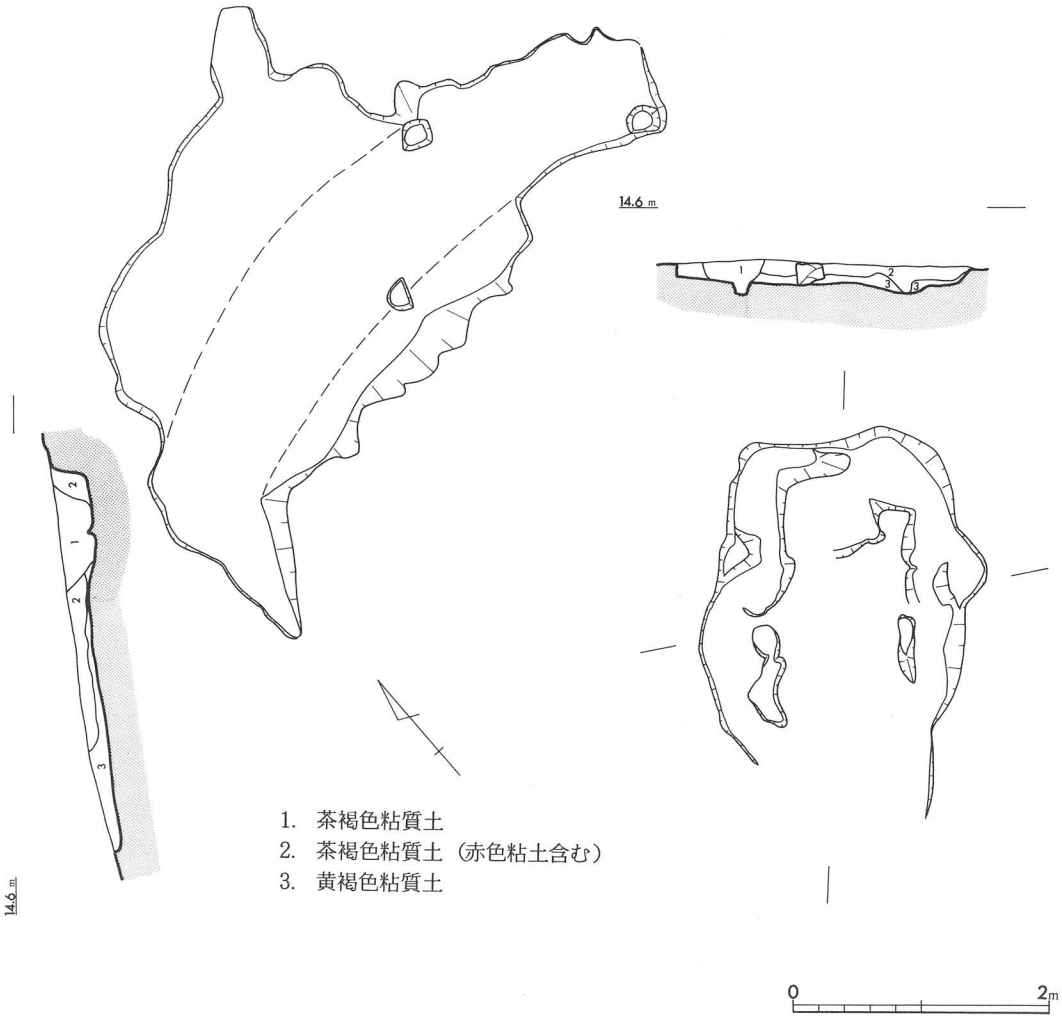


第68図　第５号墳墳丘土層図

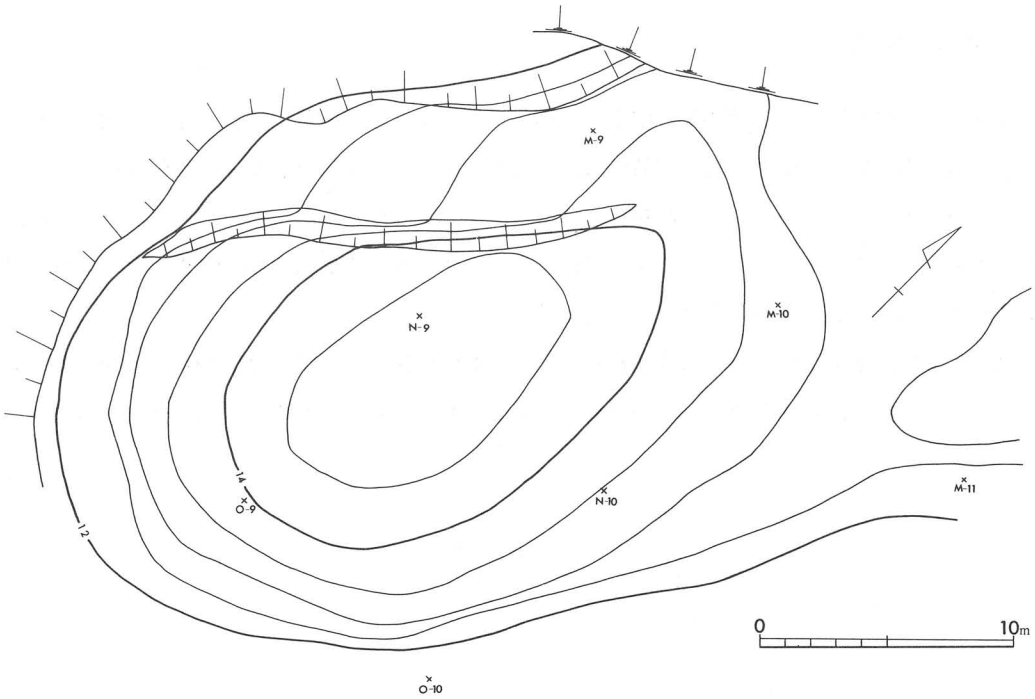
(6) 第 6 号 墳

1号墳、2号墳の存在する比高の高い尾根から南西に派生する比較的低い尾根の頂部で検出された。5号墳とは、南東側の谷をはさんで対峙する位置にあたる。この尾根は、頂部に比較的広い平坦面を有していたが、北西側斜面を中心に耕作等によりかなり地形の改変が行われていた。そのため調査前には墳丘は全く認められなかったが、試掘により須恵器が出土したため、精査したところ、平坦部南西側で古墳の痕跡が検出されたものである。

遺構としては、平坦部南西端に横穴式石室の掘り方痕が検出され、その北側約4 mの地点で周溝の一部と考えられる浅い落ち込みが検出された。周溝は長さ5.4 mにわたって検出され、深さは10



第69図　6号墳実測図



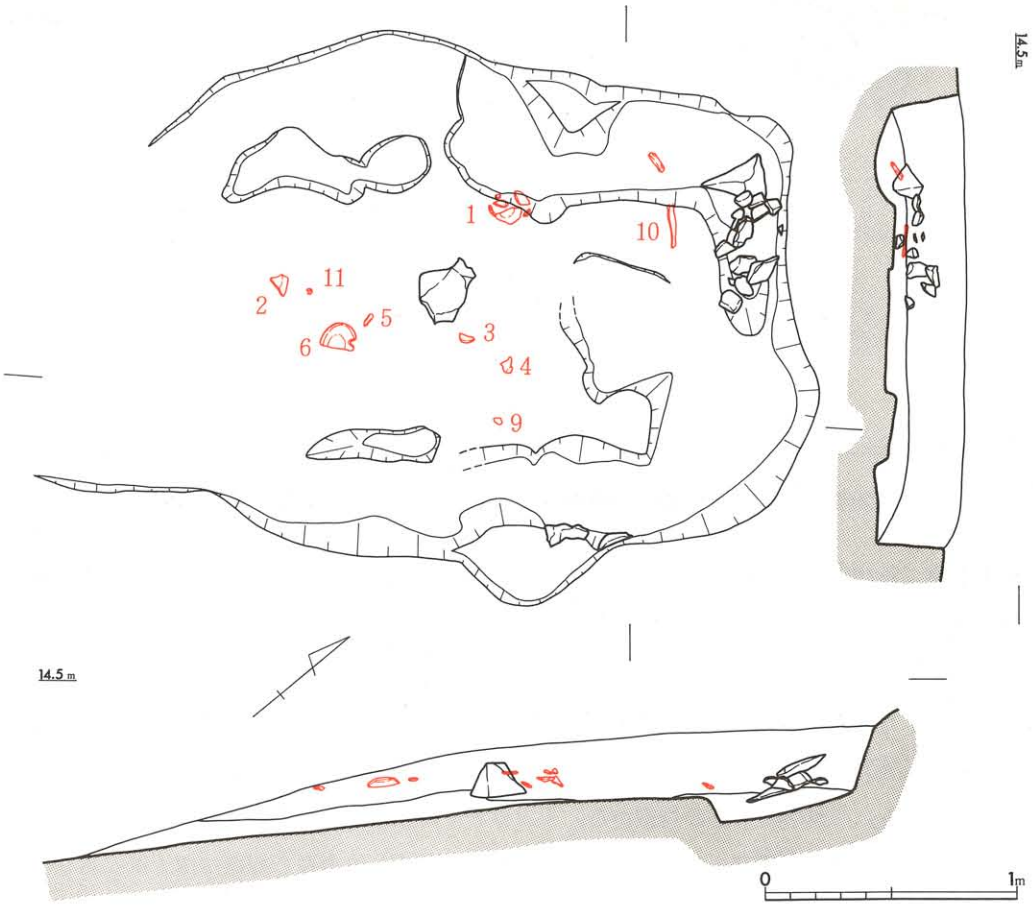
第70図　第 6 号墳周辺の調査前地形測量図

第71図　第 6 号墳周辺の調査後地形測量図

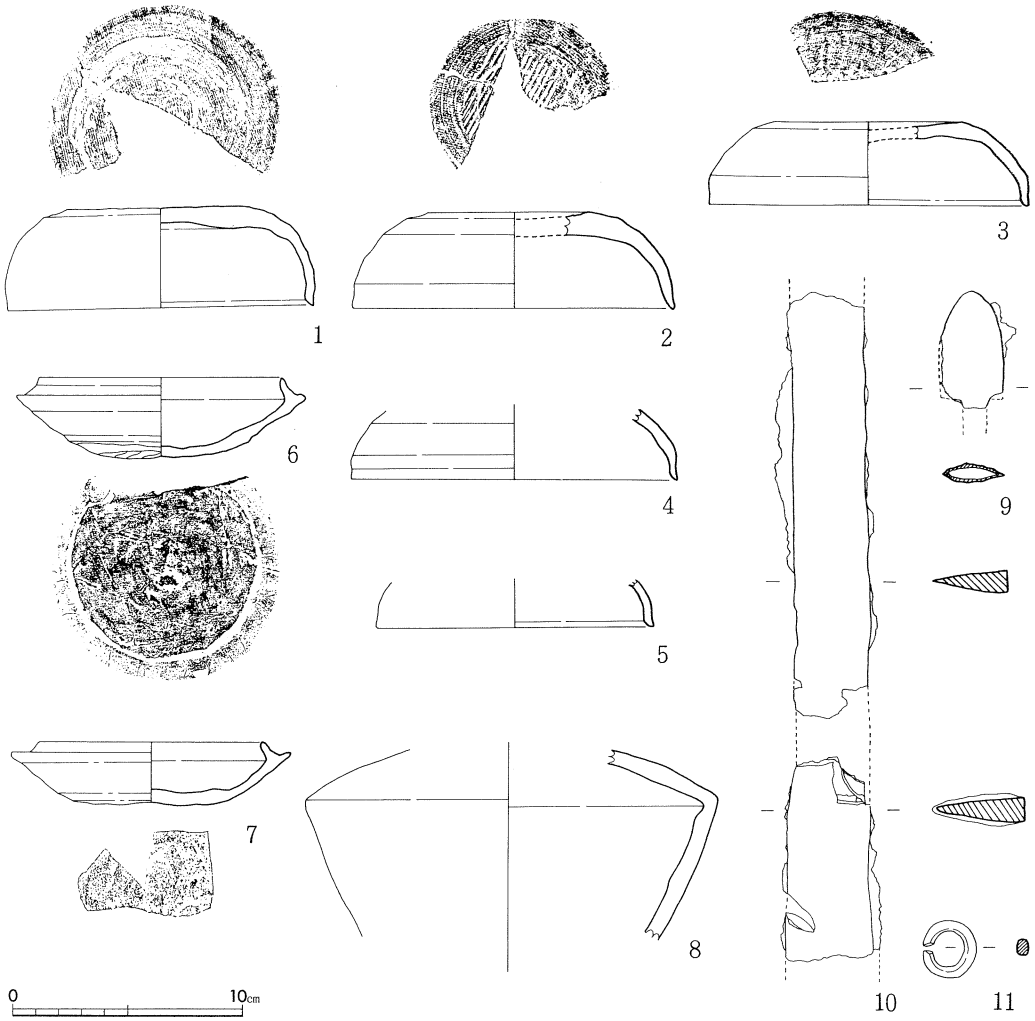
cmと浅く、地表から深くまで後世の削平が行なわれたことがうかがえる。墳丘は円墳であったと考えられ、規模は石室が墳丘の中心と仮定して、およそ8～9m程度と考えられる。周溝覆土内より長頸壷片が出土している。盛土等は全く検出されなかった。

石室掘り方は、残存部で長さ3.1m、最大幅2.1m、深さ0.3mをはかる。石材は全て抜き取られ、掘り方の底面には、深さ5～10cmの根石の掘り方と考えられる。溝状の遺構や小穴が検出された。奥壁部分の西寄りには、挙大程度の礫が集中しており、裏込石等の可能性がある。石室の幅は根石掘り方間の距離からみて、1m前後と考えられ、2号墳程度の非常に小形の石室である。

遺物の出土状況をみると、いずれも破損してバラバラになって、床面から遊離しており、原位置を保っていないと考えられる。須恵器の蓋坏類は中央から羨道寄りにかけて出土し、金環が1点、入口付近から出土している。鉄器類は、石室北隅に直刀片が折れて出土し、また東側壁寄りから鉄鏃片が出土している。



第72図　6号墳石室掘り方内の遺物出土状況実測図



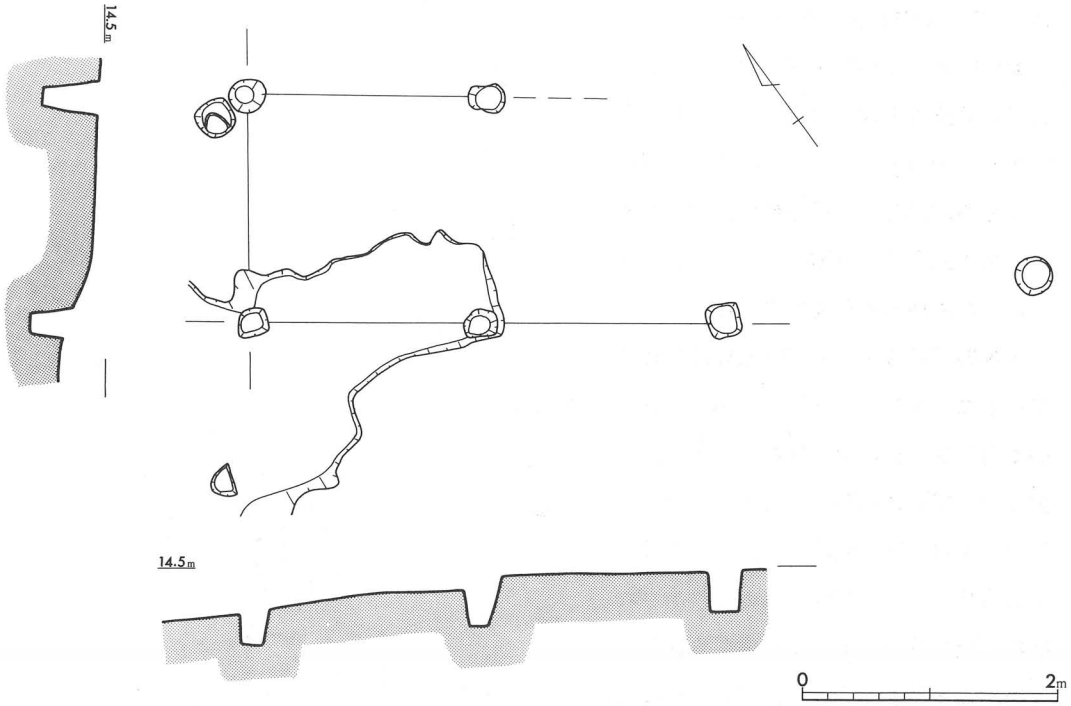
第73図　6号墳出土遺物実測図（1～8、10～11は石室内、9は周溝内）

出土遺物（第73図）　須恵器は蓋5点（1～5）、坏身2点（6、7）が出土している。1は口径13.4㎝、器高4.4㎝をはかる蓋で、体部から口縁にかけてほぼ垂直に下り、口縁端内面には明瞭な平坦面をもつ。天井部外面はほぼ平らでヘラケズリを施している。6号墳出土の須恵器の中では最も古式のものと考えられる。2～5は、口縁付近が短かく外反し、口縁端内面には、わずかに平坦面が残る。天井部外面は、ヘラケズリを施し（2、3）、2はヘラケズリ後に板状工具によるナデを行っている。これらは形態の特徴から、1より若干時期の下るものと考えられる。6は口径10.8㎝、最大径12.7㎝、器高3.6㎝をはかる坏身で、立ち上りは内傾し端部は薄く丸くおさめる。体部と底部の境には、一条の沈線を刻みその内側には不定方向のケズリを施す。7は口径10㎝、最大径12.3㎝、器高2.8㎝のやや扁平な坏身で、立ち上りは内傾し、端部は薄く丸くおさめる。底部

にはヘラケズリののち、板状工具によるナデを施す。8は周溝覆土より出土した長頸壺で、肩部で「く」の字状に屈曲している。石室内出土の須恵器よりやや時期の下るものと考えられる。

9は鉄鏃片で、鏃身部の長さ4.7㎝、幅2.8㎝の幅広のものである。頸部は破損しているが、幅およそ1㎝程度だったと考えられる。10は直刀残欠である。刀身の幅は3.4～3.8㎝で、背の厚さ1.0～1.2㎝をはかる。平造りで、ほぼ4号墳出土の直刀と同規模のものと考えられる。11は金環で、長径2.5㎝、短径2.3㎝をはかる。

柱穴群　6号墳石室の北側、一部周溝と重なって8穴の柱穴を検出した。これらは径20～30㎝、深さ30～45㎝をはかり、円形のものと方形のものがある。明確ではないが、柱の並び方からみて、柱間が約1.8㎞の1間×2間の小規模な建物が建っていた可能性が考えられる。これらの柱穴の時期は、伴出する遺物が出土していないため不明だが、少なくとも古墳を削平した後のものであることは明らかである。



第74図　第6号墳付近検出の掘立柱建物跡実測図

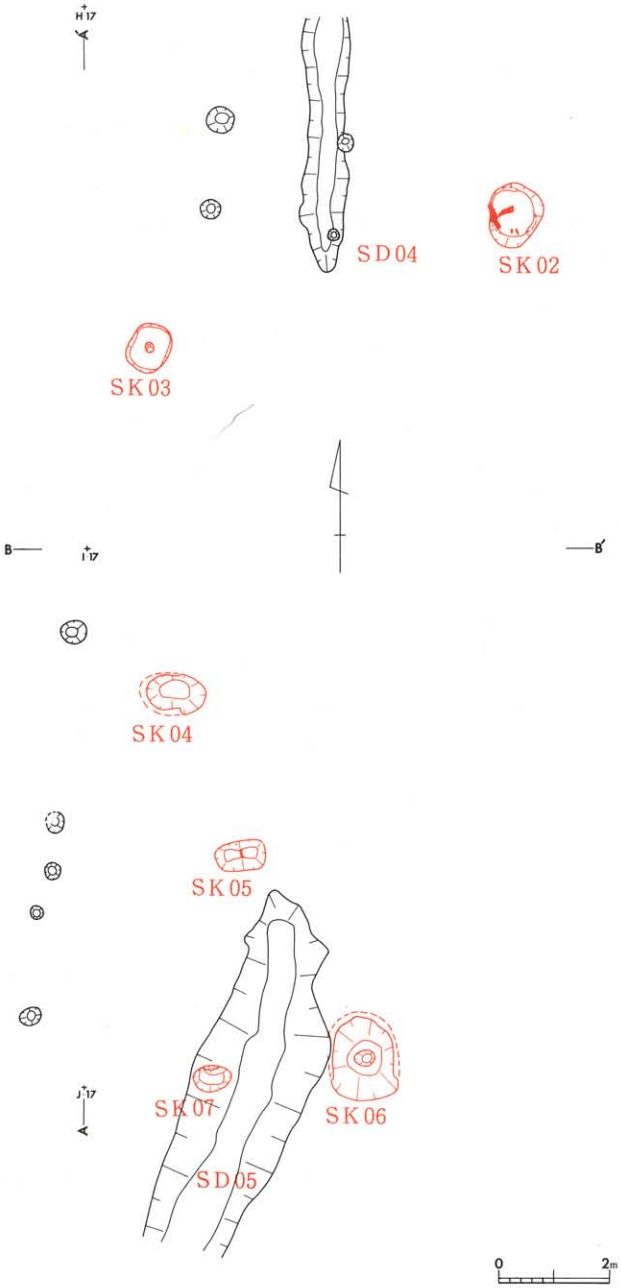
(7) B 地 区

1・2号墳、4号墳にはさまれた鞍部状のゆるやかな凹地がB地区である。現況は畑地になっており、A地区から約40m北西にあたる地点である。土の堆積が非常に厚く、最深部で地表より2.5mの深さまで発掘した。土層は1～4層が砂質土層で、耕作土客土である。5～9層が粘性の強い土層で5、9層の黒褐色土を中心に奈良時代頃の遺物を出土しており、9層下面より柱穴、溝等の遺構が検出された。10、11層は黄褐色を呈す粘質土で、10層より繊維混縄文土器、11層より押型文土器が出土しており、10層下面より土壙群が検出された。

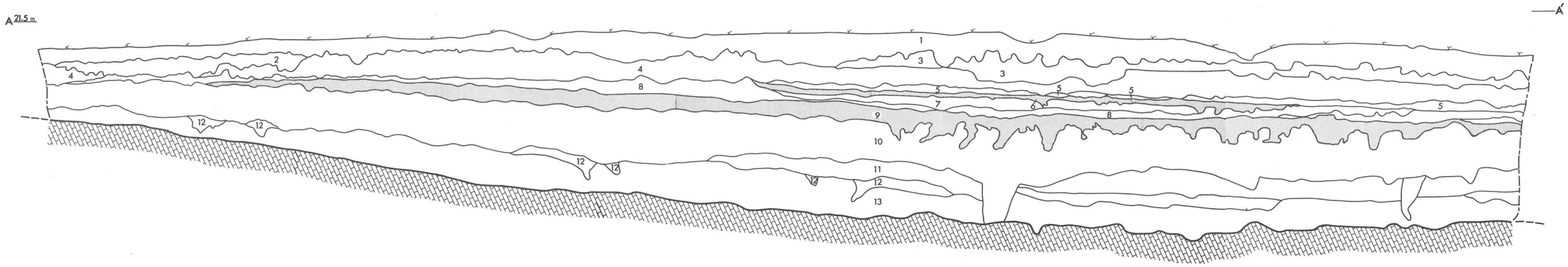
(a) 10層、11層検出の遺構と遺物

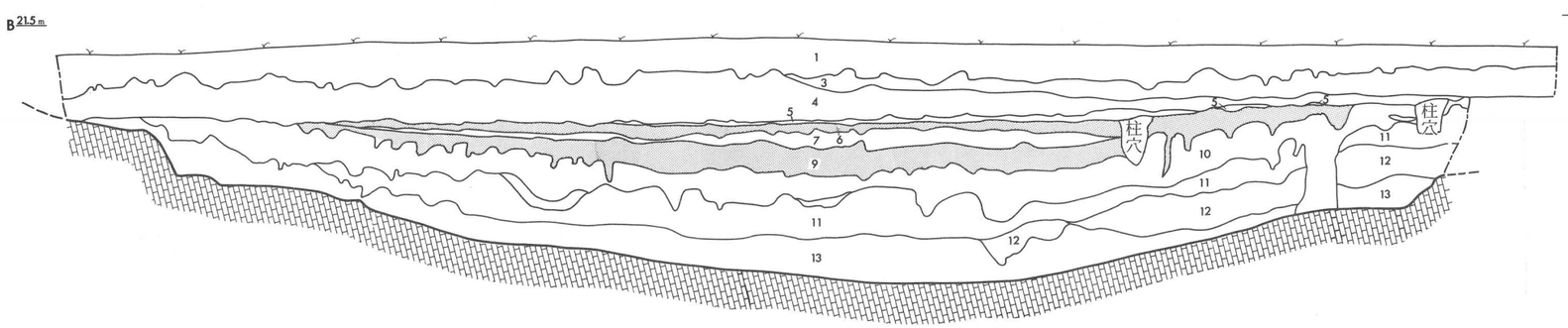
調査区東半で10層を取り除いた面より、弧状に6個の土壙が検出され、北から順にSK 02～07と呼んだ。調査区の東側にも土壙が存在した可能性は高いが、後世の粘土採取により地山まで撹乱を受けていたため検出不可能であった。

SK02（第77図）調査区北東端付近で検出した土壙で、上端部で1.18×1.0mの楕円形を呈す。深さは約0.8mで、壁面は中途で袋状に開き、底面は0.91×0.94mをはかる。底面には、一部にほとんど炭化した木、板状のものが検出され、底には板が敷かれていたと考えられる。土壙内の堆積土をみると、底面付近には、薄く淡黄灰色の粘性の強い土が堆積し、その上には、一様の淡黄褐色粘質土が堆積していた。また全体的に、炭化物が少量含まれていた。



第75図　B地区遺構配置図
（朱書10層下検出遺構）





1. 耕作土
2. 黒褐色砂質土
3. 明黄褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗褐色粘質土(炭化物含む)
6. 黒褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 黄褐色粘質土
9. 黒褐色粘質土
10. 黄褐色粘質土(白色粘土含む) ⎫ 縄文層
11. 〃 (白色粘土含まず) ⎭
12. 暗褐色粘質土
13. 赤褐色粘質土

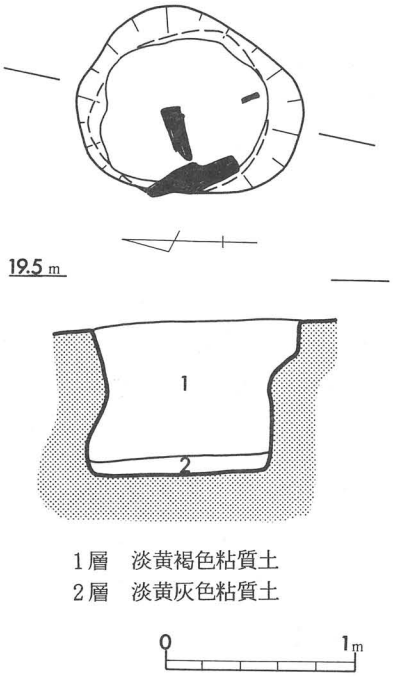
0 2m

第76図　B地区土層図

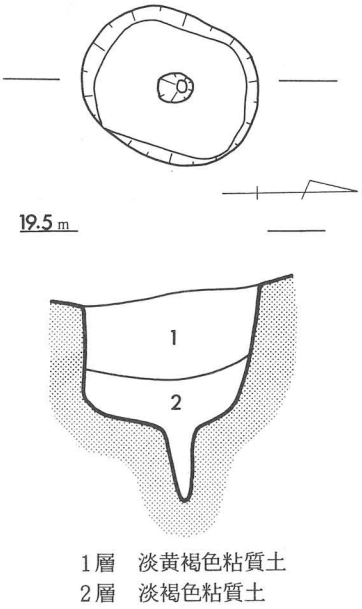
SK 03（第78図）　上端部幅94×79㎝、下端幅81×63㎝の楕円形土壙で、深さ75㎝をはかる。底面中央には径19×16㎝、深さ40㎝の小穴が検出された。土壙下半には淡褐色粘質土が、上半には淡黄褐色粘質土が堆積し、上半には少量の炭化物が含まれていた。また、土器細片が数片出土しているが、極めて軟質で原形を留めているものはなく、時期等は不明である。

SK 04（第79図）　検出面での長経109㎝、短径75㎝の長楕円形土壙だが、一部切り込み面を掘り過ぎたため、推定で上端部長径115㎝、短径78㎝前後になると考えられる。底面部長径55㎝、短径35㎝で、深さ112㎝の幅に比して非常に深い土壙である。堆積土は上下二層に分かれ、上層の黒褐色粘質土には炭化物が含まれる。

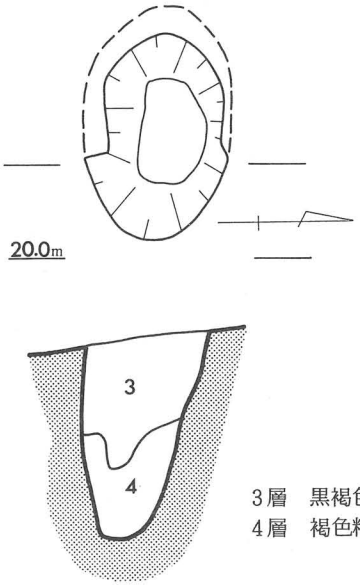
SK 05（第80図）　上端部の長径94㎝、短径57㎝の小判形を呈す土壙である。底面は長さ76㎝、幅19㎝の長方形を呈し、わずかに段差がある。深さは98㎝あり、その幅に比



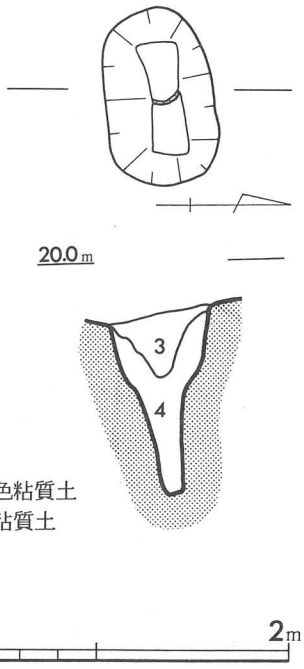
第77図　SK02実測図



第78図　B地区SK03実測図



第79図　B地区SK04実測図

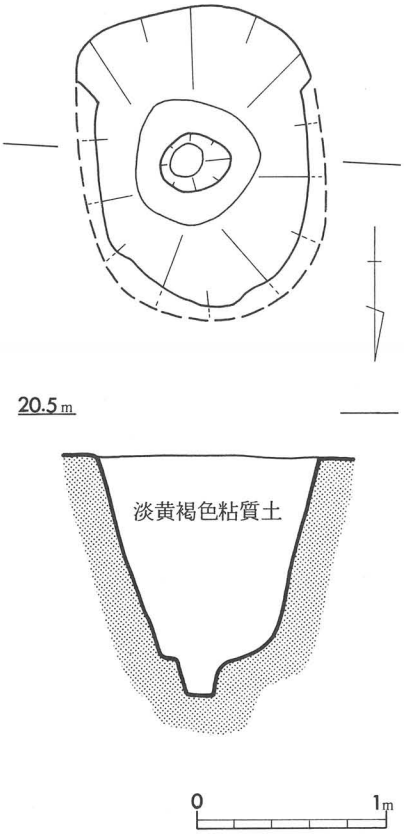


第80図　B地区SK05実測図

して非常に深い土壙で、しかも壁面の角度が中途で変わり、下半は非常に狭くなっている。土壙内には、褐色粘質土が堆積し、上方に擂鉢状に黒褐色粘質土が堆積していた。

SK06（第81図）　大形の長楕円形土壙で検出面で確認できた上端部の規模が長径158㎝、短径123㎝をはかるが、掘り込み面をやや掘り過ぎたため、実際にはもう少し大きくなり、推定では長径166㎝、短径130㎝程度であったと考えられる。深さも100㎝以上もある。いずれにせよ、B地区で検出された土壙のうち、最も大形のものである。しかし、底面径は66×64㎝で上端部の規模に比し小形で、深くなるほど、狭くなっている。また、底面には38×30㎝の小穴が検出され深さは20㎝をはかる。土壙内には、炭化物を含む淡黄褐色粘質土が堆積していた。

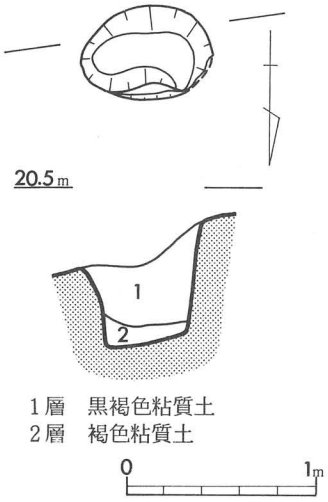
SK07　検出面での上端部長径70㎝、短径49㎝で、深さ65㎝をはかる。楕円形土壙だが、上方を後世の溝により削り取られているため、正確な規模は不明である。土壙内には、底面付近に褐色粘質土が堆積し上方には黒褐色粘質土が堆積していた。



第81図　SK06実測図

これらの土壙群の時期は、直接に伴う遺物はないが、この遺構面の覆土（10層）から出土した遺物より、縄文時代早期末葉のものと考えられる。

一方、土壙群はその形態から大きく2つに分類できる。一つは、平面形が円形に近く、土壙の底面近くでもかなりの広さをもつ土壙で、SK01、02、05がこれにあたる。また、これらはいずれも土壙内に淡黄褐色粘質土が堆積していた。一方、SK03、04、06は、平面形が細長く、特に底面付近が非常に狭いのが特徴で、いずれも土壙内上方には黒褐色土が堆積していた。これらの性格を考えてみると前者（SK01、02、05）は、SK01が袋状に聞き、底面に板が敷いてあることや、それらの規模、形から、貯蔵穴の可能性が大きいと考えられる。また、SK02、05の底面にみられる小穴も、貯蔵穴にしばしばみられるものであ

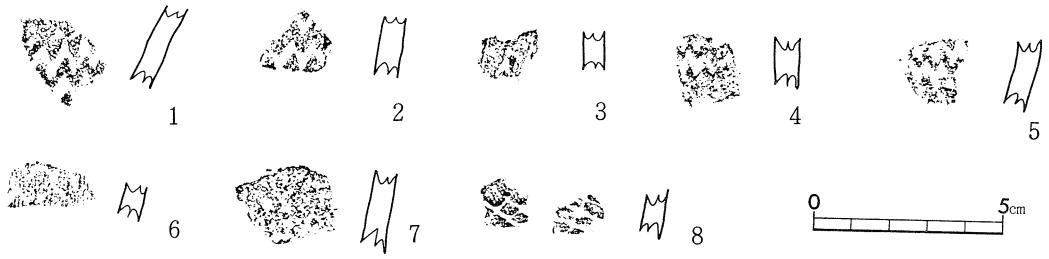


第82図　SK07実測図

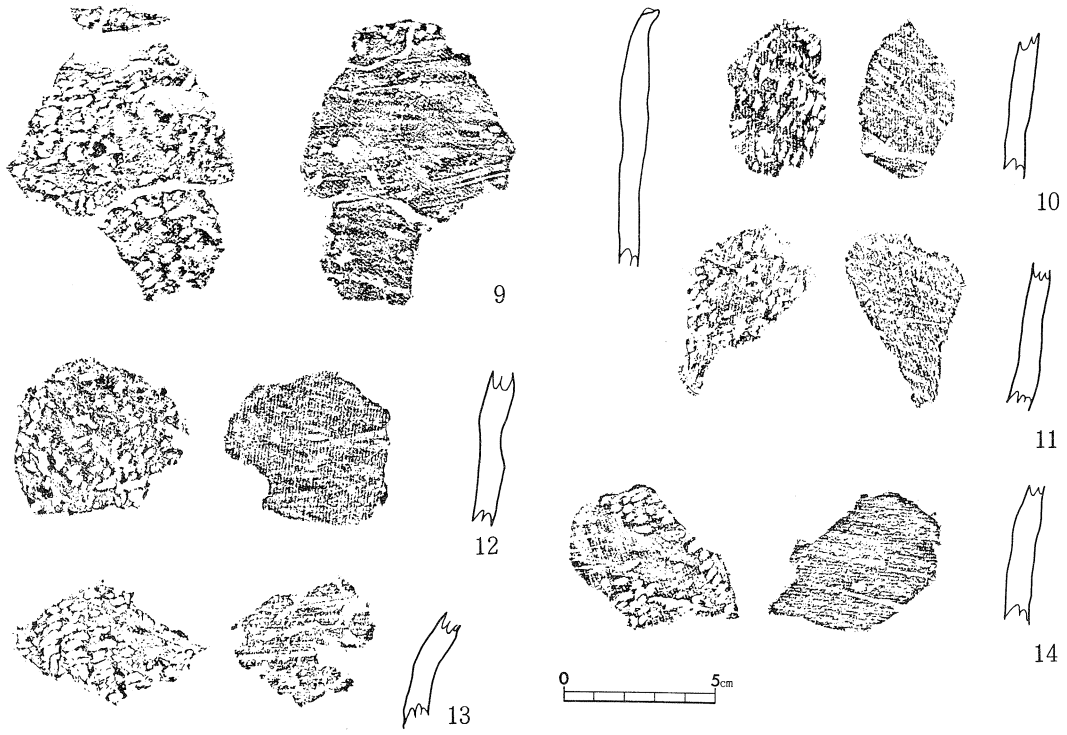
る。一方後者（SK03、04、06）は、その狭さから考えて貯蔵穴とは考えられない。その他の機能を類推する積極的根拠はないが、その幅に比して非常に深いことから、落とし穴等の可能性も考えられよう。

出土遺物（第83図～第88図）

縄文土器　10層、11層から縄文土器が出土しているが、軟質で細片が多く、図化できないものも多かった。第83図は11層出土の押型文土器である。1～7は、外面に山形押型文を施したもので、いずれも文様は小形である。8は内外両面に楕円押形文を施したもので、文様は小形で整っている。



第83図　B地区出土縄文土器実測図(1)　½



第84図　B地区出土縄文土器実測図(2)　⅖

外面上半には押型文はみられず、無文部と施文部に分れていたことがうかがえる。

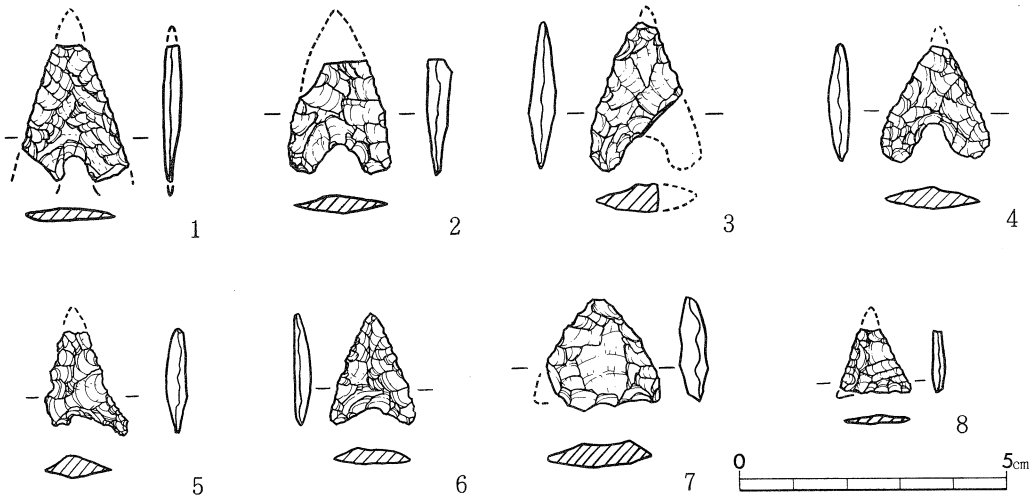
第84図は、10層出土の土器である。いずれも器壁が7～10㎜と厚く胎土に少量の植物繊維を含む。外面はいずれも太く粗い縄文を施し内面は横方向に二枚貝条痕を施す。9は口縁部破片で、口縁端には内面側より縄文原体を押圧し、刻目状にしている。また外面には縄文を施す前に強いナデを行っており、一部凹線状になっている部分もある。これらは、胎土、色調が類似しているものもあり、同一の個体も含まれていると考えられる。

石器　10層、11層を中心に、一部9層以上からも石器類が出土した。石斧、石錘を除くと大部分が安山岩製で、黒曜石がわずかに含まれている。

石鏃　（第85図）　8が9層より出土している以外は、全て10層より出土している。5が黒曜石製で、その他は安山岩製である。1～4が、A地区で分類したA類で、5、6がB類、7、8がC類（7は未製品の可能性あり）である。A地区同様A類が半数を占める。完存品は6のみで、その他は先端部か脚部を欠損している。

尖頭器（第86図9、10）　いずれも11層より出土している。9は、横長の剥片を素材に、周縁から簡単な加工を施して、二等辺三角形状に形を整えたもので、長さ6.0㎝、幅2.9㎝をはかる。先端部はわずかに欠損している。10は大半を破損しているが、尖頭器の基部と考えられる。大きさは9とほぼ同様のものと考えられるが、調整加工は9よりややていねいである。片面の一部に自然面が残っている。

スクレイパー（第86図12～14）　11、13は10層、12は9層より出土しており、いずれも安山岩製である。11は不定形剥片を切断して素材を半月形に整え、その一縁辺に調整剥離を加えて弧状の刃部を形成したものである。12は、横長剥片の一縁辺に調整剥離を加工、ほぼ直線の刃部を設けたも

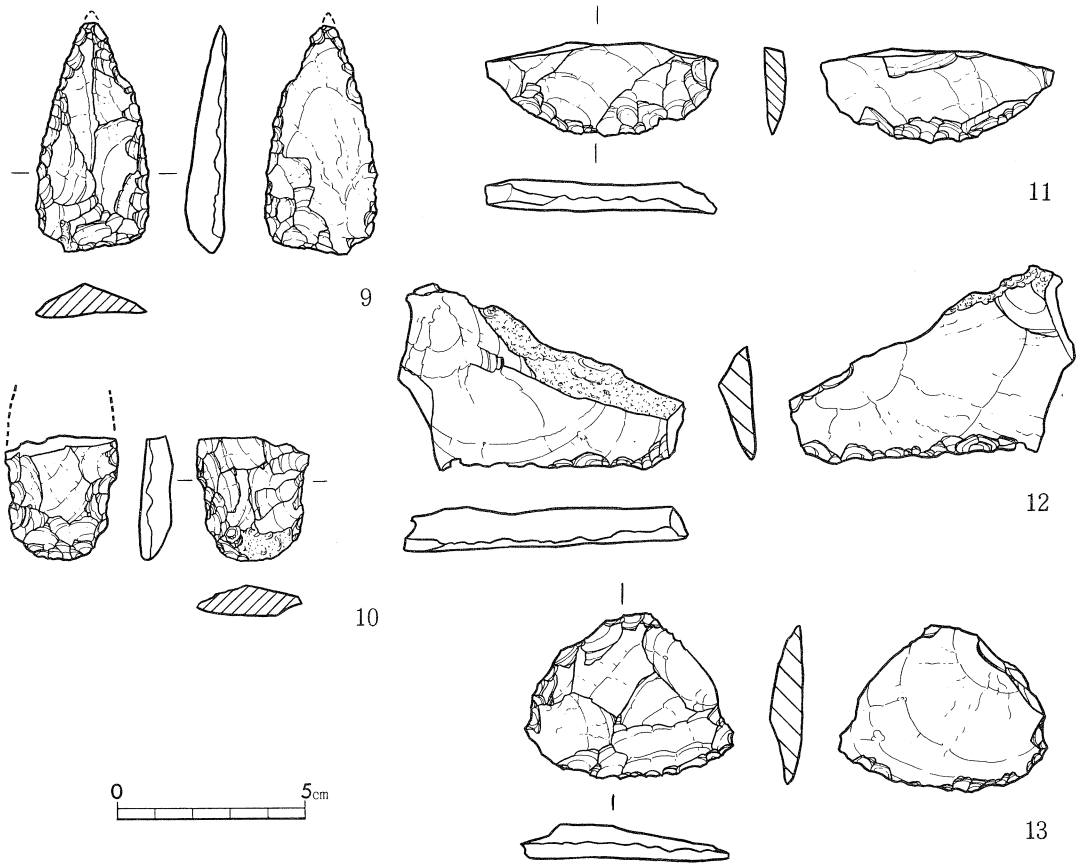


第85図　B地区出土石器実測図(1)（石鏃）　7/10

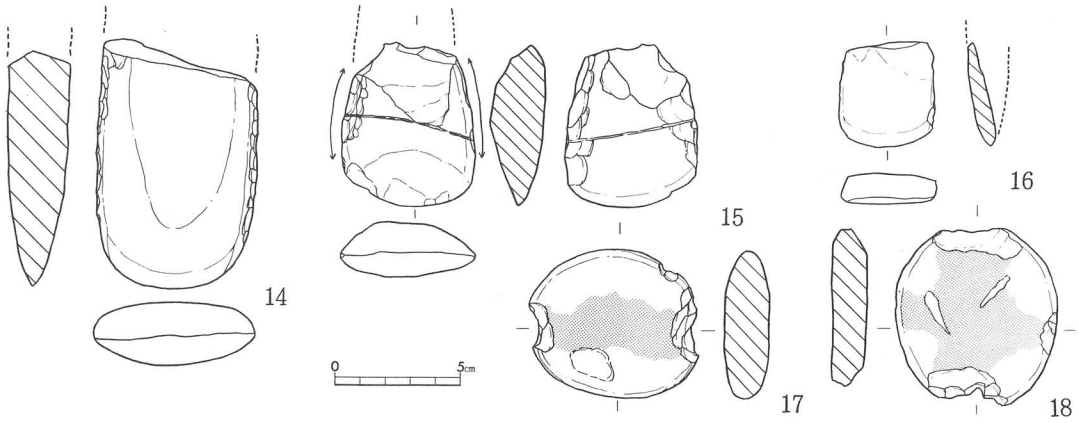
ので、大きな自然面を残す。刃部両端は欠損している。13は不定形剥片のほぼ全周に簡単な調整剥離を加えたものである。

磨製石斧（第87図14～16）　14は９層、15、16は10層より出土し、いずれも黒色の玄武岩製である。14は刃部がゆるく湾曲し、刃部幅は6.3㎝をはかる。側縁はほぼ平行しており、基部は欠損している。両側縁には“つぶれ”状に細かい剥離がみられる。15は刃部がゆるく湾曲し、刃部幅6.2㎝の14とほぼ同程度の刃部をもつ石斧だが、両側縁が刃部に向って開いているため、全体形は14より若干小形になると考えられる。両側縁からは数多くの剥離がはいり両面を廻るように幅１㎜前後の一条の溝がみられる。いずれも装着に関連した痕跡であろうか。16は刃部幅が3.6㎝の小形の石斧で、大半が欠損しているため、長さ、厚さ等は不明である。

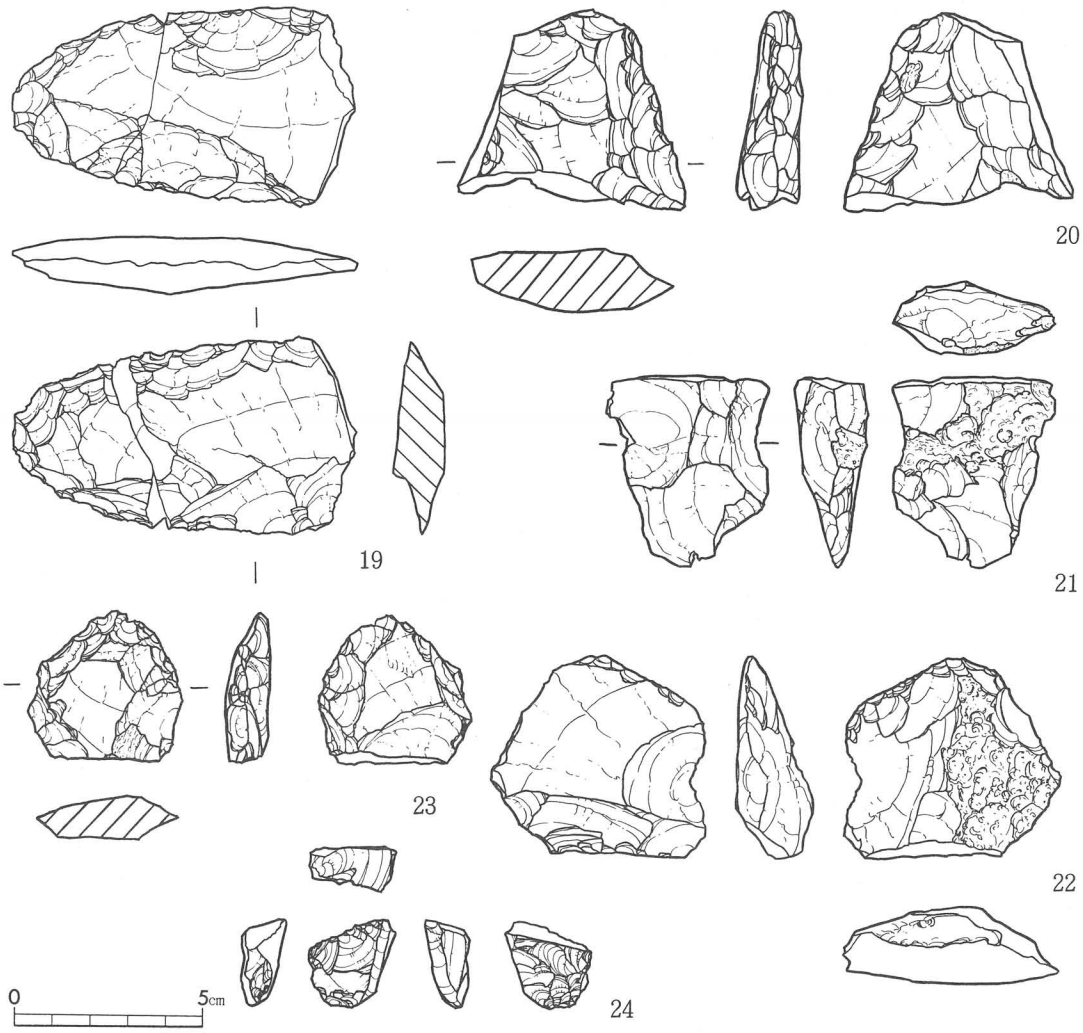
石錘（第87図17、18）　いずれも扁平な円礫を素材としている。17は楕円形礫の長径部両端を打ち欠いており、その打ち欠き部をつなぐように幅２㎝前後にわたって、磨耗した部分が認められた。両打ち欠き部に縄をかけた際の縄擦れ痕であろうか。18は、17よりやや大形で、長径部両端と、短



第86図　B地区出土石器実測図(2)（尖頭器、スクレイパー）½



第87図　B地区出土石器実測図(3)（石斧・石錘）1/3



第88図　B地区出土石器実測図(4)（石核）1/2

径部端にもわずかながら打ち欠いた痕跡がみられる。17と同様の磨耗痕が十字形にみられ、十字形にからませて縄をかけていた可能性もある。

石核（第88図）　19は11層、20・23は９層、21・22・24は10層より出土している。いずれも一定の打面はもたず、打点を移動しながら周縁より剥片を剥取したものが中心だが、23・24は平坦な打面も設けており、打痕を残すものもある。19は薄い盤状の剥片の周縁より剥片剥離を行ったもので、全形は、大形だが取られた剥片は１～３㎝程度の比較的小形のものであったと考えられる。22・24は取られた剥片が１㎝以下の小形のものが多く、小石鏃等の素材剥取用であろう。21・23は一面に大きく自然面を残している。

Ｂ地区出土縄文土器観察表

No.	出土地	調整の特徴	文様の特徴	胎土	備考
1	Ｉ－17 11層	内面　ナデ	外面　横方向山形押型文	微砂粒含む	外面　淡暗赤色 内面　淡褐色
2	Ｉ－17 11層	内面　ナデ	外面　横方向山形押型文	微砂粒含む	外面　淡暗赤色 内面　淡褐色
3	Ｉ－17 11層	内面　ナデ	外面　横方向山形押型文	微砂粒含む	外面　淡暗赤色 内面　淡褐色
4	Ｈ－17 11層	内面　ナデ	外面　横位山形押型文	小微砂粒多量含む	色調　黒褐色
5	Ｈ－17 11層	内面　横位ナデ	外面　横位山形押型文	微砂粒多量に含む	色調　黒褐色
6	Ｉ－17 11層	内面　ナデ	外面　横方向山形押型文	微砂粒含む	外面　淡暗赤色 内面　淡褐色
7	Ｈ－17 11層	内面　ナデ	外面　横位山形押型文	小石含むほか微砂粒多量に含む	色調　黒褐色
8	Ｈ－17 11層	外面　ナデ	内面　一部横位楕円押型文	小微砂粒多量含む	色調　暗褐色
9	Ｈ－17 10層	外面　ナデ 内面　横方向二枚貝条痕一部指圧痕あり	外面　縄文 口縁端に縄文原体を押圧	微砂粒多量含む 植物繊維少量含む	色調　暗橙色 条痕原体は二種類以上
10	Ｈ－17 10層	内面　横二枚貝条痕のちナデ	外面　縄文	微砂粒含む 植物繊維少量含む	色調　暗橙色
11	Ｈ－17 10層	内面　ナデ、横方向二枚貝条痕	内面　ナデ、横方向枚貝条痕	微砂粒含む	色調　外面明橙色、内面灰橙色

No.	出土地	調整の特徴	文様の特徴	胎　　土	備　　考
12	H－17 10層	外面　ナデ 内面　横方向二枚貝条痕	外面　縄文	微砂粒多量含む 繊維少量含む	色調　橙色
13	H－17 10層	外面　ナデ 内面　横方向二枚貝条痕	外面　粗い目の斜縄文	小砂粒多量含む 植物繊維少量含む	色調　赤褐色
14	H－17 10層	外面　ナデ 内面　横方向条痕のちナデ	外面　縄文	微砂粒多量含む 植物繊維少量含む	色調　暗灰褐色～橙色

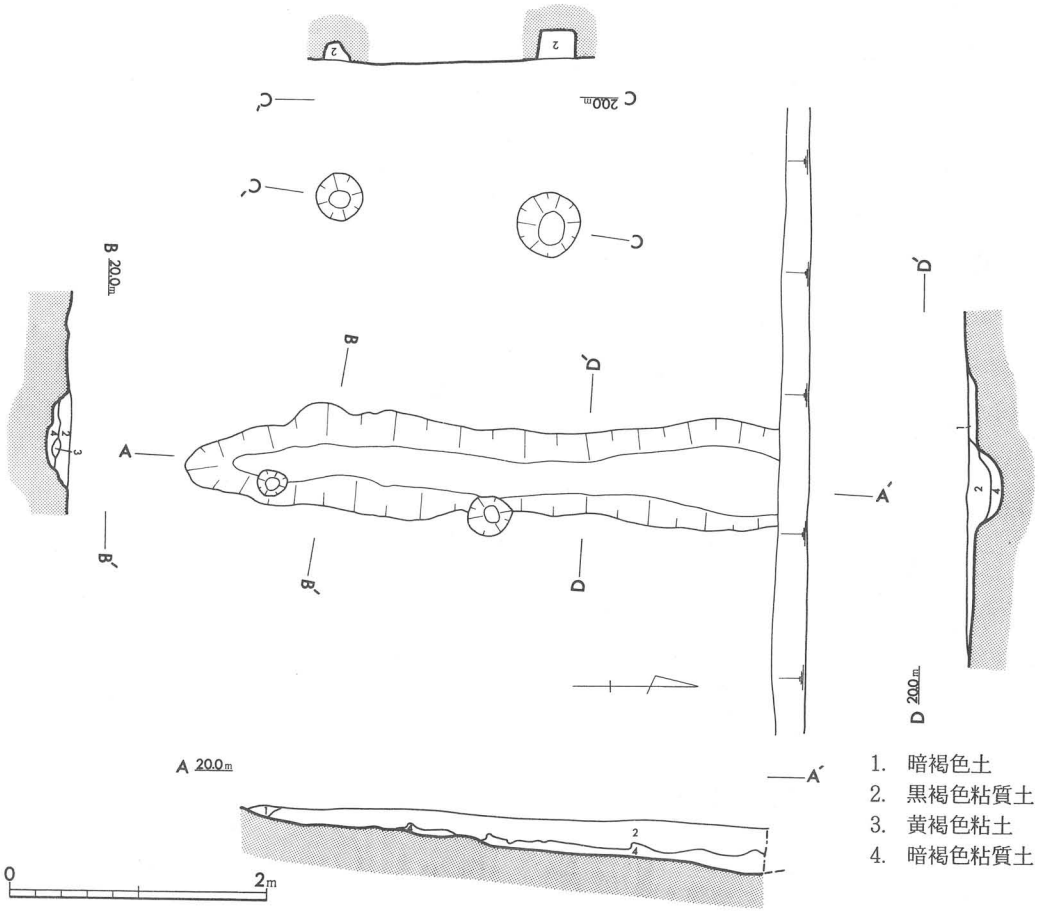
B地区出土石鏃観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　材	出土地点	記号	備　　考
－1	(2.5)	2.0	0.31	1.32	安山岩A	H－17　10層	Z 45	両脚欠損　先端部新破損
－2	(2.1)	1.9	0.41	1.29	安山岩A	H－17　10層	Z 46	先端部欠損
－3	(2.25)	(1.7)	0.5	1.6	安山岩C	H－17　10層	Z 47	脚部・先端部欠損
－4	(2.1)	2.0	0.4	1.13	安山岩A	H.I －17 10層	Z 51	先端部欠損
－5	(1.9)	(1.45)	0.4	0.65	安山岩A	H.I －17 10層	Z 50	脚部・先端部欠損
－6	2.05	1.5	0.3	0.68	安山岩A	H.I －17 10層	Z 52	完存
－7	2.1	2.1	0.5	1.75	安山岩E	I －17　10層	Z 49	一部欠損未製品か
－8	(2.1)	(1.3)	0.27	0.25	安山岩A	H－17　9層	Z 48	脚部欠損　先端部新破損

B地区出土石器（尖頭器、スクレイパー、石斧、石核）観察表

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　材	出土地点	記号	備　　考
－9	(5.9)	2.9	1.0	14.67	安山岩D	H－17　11層	Po 1	主要剥離面大きく残す
－10	(3.2)	2.95	0.85	9.55	安山岩A	H－17　11層	Po 2	上半新破損
－11	6.05	2.4	0.8	12.75	安山岩B	I －17　10層	R 2	
－12	7.2	5.1	1.1	30.29	安山岩B	I －17　9層	S 5	自然面残る
－13	5.5	4.3	0.9	19.25	安山岩C	I －17　10層	R 1	
－14	(9.8)	6.3	2.45	2.39	玄武岩	H－17　9層	A 1	側縁つぶれ
－15	(6.5)	(5.2)	(2.2)	96	玄武岩	H－17　10層	A 2	側縁つぶれ、細溝あり
－16	(4.1)	(3.8)	(0.7)	16.67	玄武岩	H－17　10層	A 3	大半欠損
－17	6.7	5.8	1.8	93.17		H－17　10層	W 1	一部縄擦れ

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点	記号	備　　考
− 18	7.0	6.3	1.3	95		H−17　10層	W 2	十字状に縄擦れ痕
− 19	9.0	5.2	1.5	96.6	安山岩D	H−17　11層	Po 3	
− 20	5.9	5.3	1.7	46.65	安山岩C	I −17　9層	C17	欠損
− 21	5.05	4.25	1.95	34	安山岩B	I −17　10層	C15	自然面残る
− 22	4.0	3.9	1.15	17.39	安山岩B	I −17　10層	C14	一部自然面残る　欠損
− 23	5.7	5.2	2.0	4.9	安山岩B	I −17　9層	C19	自然面　打痕残る
− 24	2.25	2.25	1.2	4.7	黒曜石A	I −17　10層	C18	



第89図　B地区 SD04実測図

(b) 7～9層検出の遺構と遺物

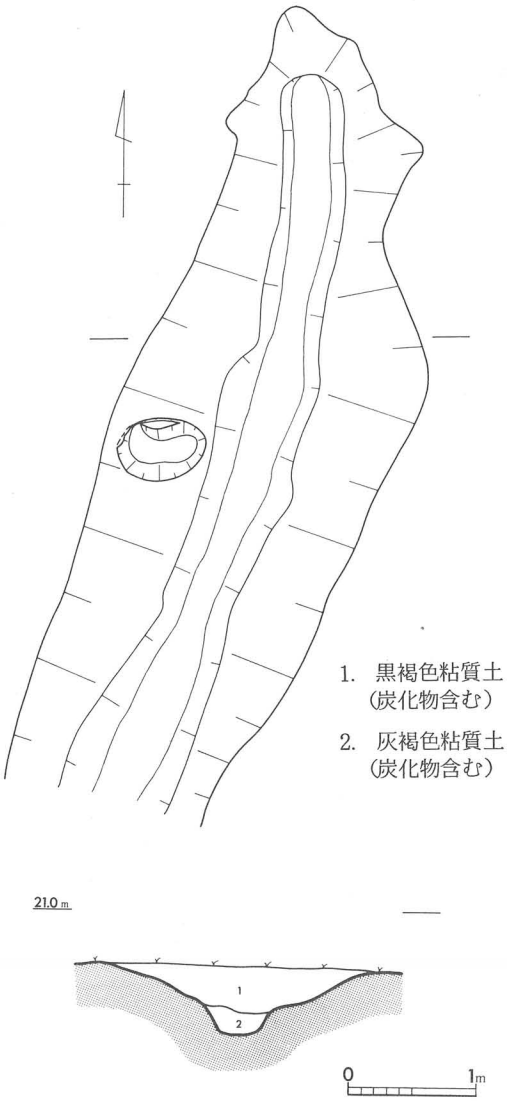
9層下面より、9つの柱穴と、溝状遺構2を検出した。柱穴は径20～50㎝の比較的小形のもので規則的に並ぶものはなく、建物等を推定することはできなかった。一方、調査区南北両端より、ほぼ南北方向に走る溝状遺構が検出され、北側の溝をSD01、南側の溝をSD02と呼んだ。本来、この2つの溝がつながっていた可能性もあるが、詳細は不明である。

SD04（第89図）　幅60～90㎝のほぼ南北方向に走る溝で、北側は調査区外に向ってのびていく。深さは、北側に向って深くなり、北端で37㎝をはかる。一部柱穴が重複しているが、その前後関係は不明である。

SD05（第90図）　ほぼ南北方向に走る溝で、幅1.35～2.2㎞あり、SD01よりかなり大形である。溝内は二段掘り状になっており、下層には淡褐色粘質土、上層には9層黒褐色土が推積していた。深さは40～60㎝で、南側に向って深くなっていく。なお南側は、後世の開墾等による地形改変のため削られて、不明である。

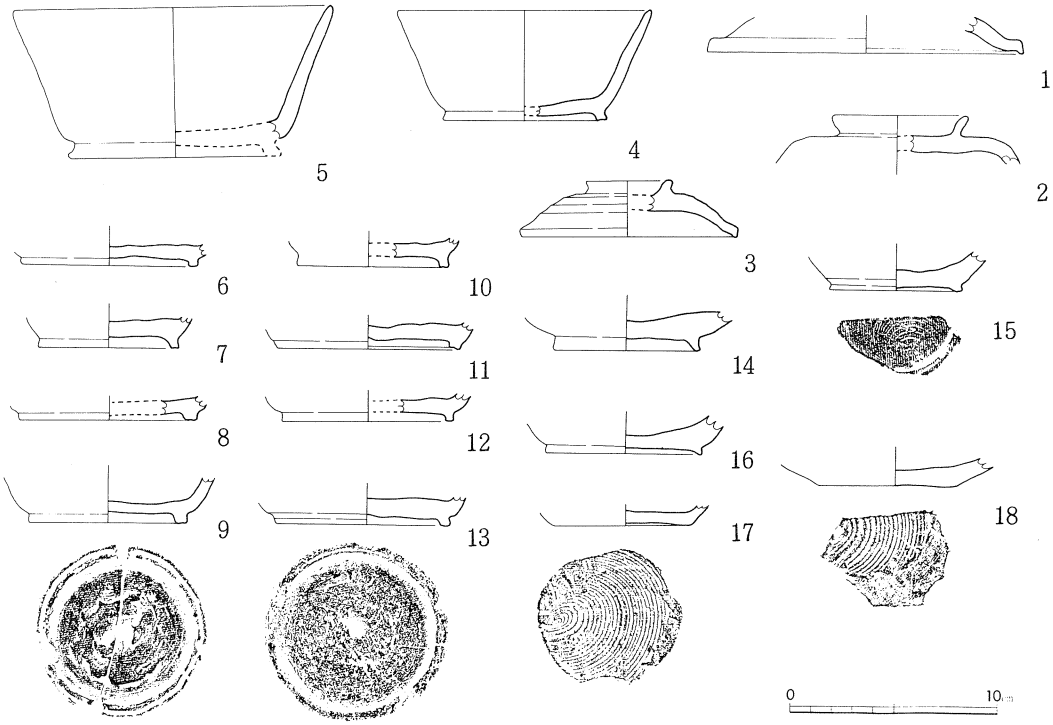
出土遺物（第91図）　1～3は須恵器蓋である。1は天井が低く、口縁部近くでほぼ水平に屈曲し、口縁端は下方につまみ出している。2、3はともに輪状つまみをもつ蓋で、2は径6.6㎝のしっかりしたつまみをもつが、3はつまみがやや退化し、全体的にも小形になっている。1、3は口縁端をわずかに下につまみ出している。4～18は須恵器**椀**である。4～13は、ほぼ方形に近い高台をもち、体部は外方に開いて、ほぼまっすぐに立ち上がるものである。15、16は高台が丸みをおびて短くなったもので、高台付近の器壁も厚くなっている。15は底部に回転糸切痕が残る。4～13より後出するものと考えられる。14は細い台をもち、全体の器形が浅いものと考えられる。17、18は高台をもたず、底面に回転糸切痕を残す。18は、皿に近い器形と考えられる。

これらの遺物は、層位的に明確な違いはみられないが、若干の時間差があると考えられる。基本的には、蓋が、大形のしっかりしたつまみをもつこと、



第90図　SD05実測図

つまみの退化した３、碗が方形の高台をもつ４～13と、退化した高台をもつ15、16の２つに分けられる。これらの時期については、明確な判断材料はないが、ともにおよそ奈良時代を前後する時期～平安時代と考えて大過ないと考えられる。



第91図　Ｂ地区出土須恵器実測図
（１、４～８、11～14、16…９層、２、３、７…８層、10、15、17、18…７層）

(8) C 地 区

A調査区東側に存在する丘陵斜面と谷の部分からなる調査区で、斜面から古式須恵器窯跡1基、谷から6世紀後半代の窯跡灰原二次堆積と考えられる須恵器、円筒埴輪、窯壁の破片を多量に検出した。

第1号窯跡（第93図、第94図）

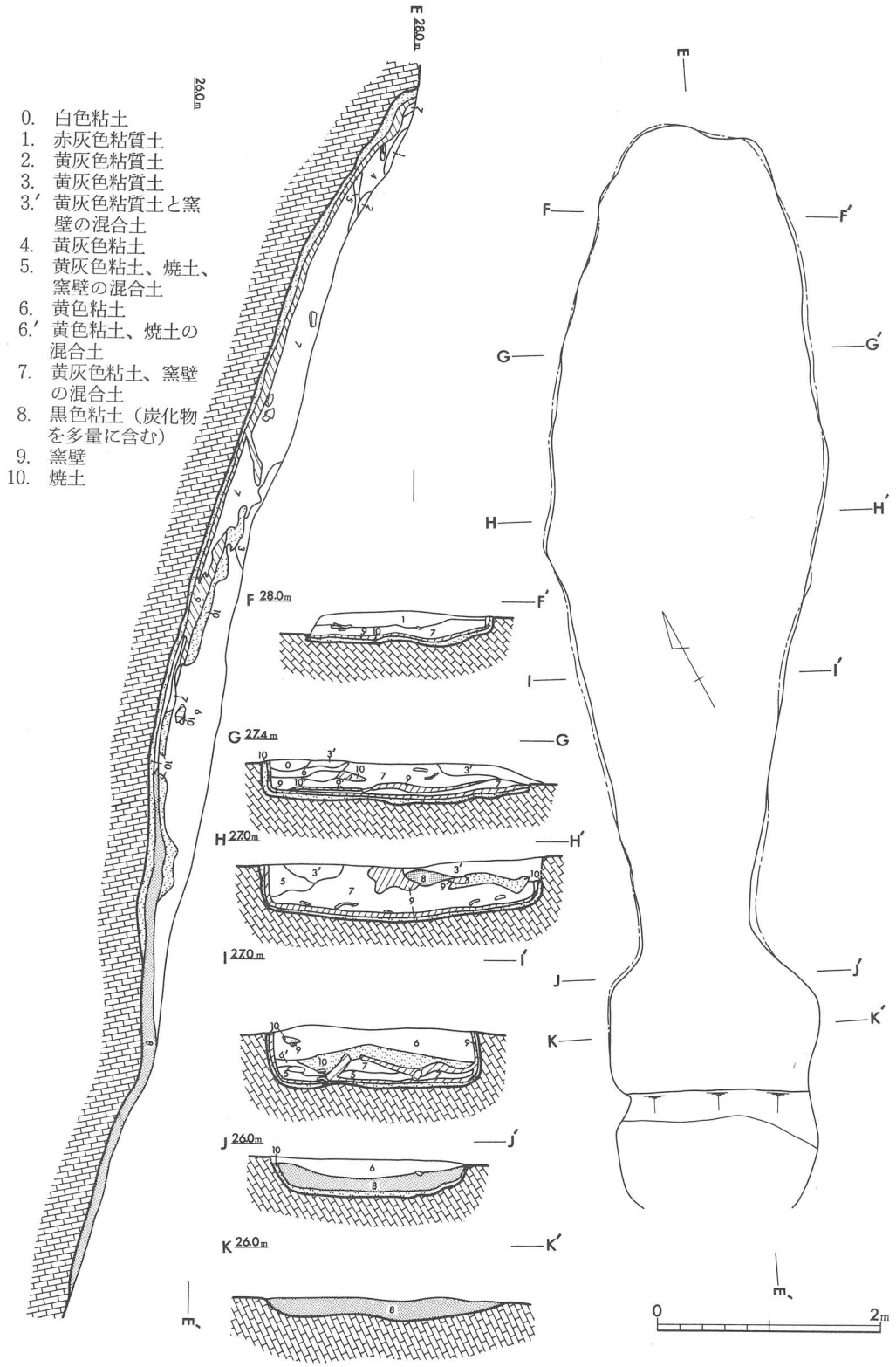
位置と状況　C調査区北側の丘陵斜面に築かれた半地下式の登り窯である。ここは東西に伸びる尾根から緩やかに下った斜面の中段にあたり、東側約10.0mの所には東西丘陵から南側に下る小さな尾根がある。窯は主軸を東西丘陵の尾根と直角に設定して築いているが、天井部のほとんどは開墾時に削平されていた。しかし、窯体の下部はほとんど遺存し、徳利形を呈した平面形をもっている。灰原を含めて全長10.0m、最大幅2.5m、主軸方向N－28°－Eで、床面平均傾斜角は21°を測る。

焚口、燃焼部　焚口部の幅1.0m、側壁残存高0.2m、焚口から傾斜変換点までの長さ1.8m、焼成部と燃焼部の境にあたる傾斜変換点の幅1.6mをそれぞれ測る。焚口から燃焼部にかけては、「ハ」の字形に開き、焚口の前方には両壁が内湾して広がる前庭部がある。また、焚口、前庭部の床面はほとんど水平で、前庭部は地山直上に炭化物を多量に含む黒灰色粘質土が10cm前後堆積していた。傾斜変換点付近に設けた第4東西ベルトの土層では、床面上に焼土や窯壁の混入した黄褐色粘土層があり、その上に天井部が落盤したと思われる窯壁、焼土がまとまって堆積していた。

焼成部　全長5.5m、最大幅2.5m、底面傾斜角21°を測る。床の基底部は傾斜変換点から徐々に広がり、ほぼ中央で最大径となる。床はやや外反しながら緩やかに上り、奥壁近くで傾斜が急になる。第2東西ベルトあたりは東壁の上部がすでに削り取られていたが、側壁の最も残っていたところは高さ0.4mあまりを測り、たちあがりはほぼ垂直である。また、第3東西ベルトでは床面直上に甕の破片が多数あり、これらの中には焼台として使用されたと思われるものがあった。さらに窯の縦断面をみてみると、第3東西ベルトから燃焼部あたりまで窯壁および焼土が厚く堆積しており、その上に焼成部の奥部からずり落ちたと思われる窯壁の層がのっていることから、焼成部の前方がまず破壊され、その後に奥部が壊れたものと考えられた。

奥壁、煙道、灰原　奥壁は基底部がかろうじて残り、「U」の字形に湾曲する平面形をもつ。煙道は確認することができなかった。灰原は前庭部から一段下って存在していたが、大半はすでに削り取られ、わずかに長さ1.0m、幅1.8mの範囲が残っていた。この灰原には須恵器片、炭化物を多く含む黒色粘土が約10.0mあまり堆積していた。

第92図　C地区地形測量図



第93図　第１号窯跡実測図・土層図

第94図　第１号窯跡遺物出土状況図

出土遺物（第95図、第96図）

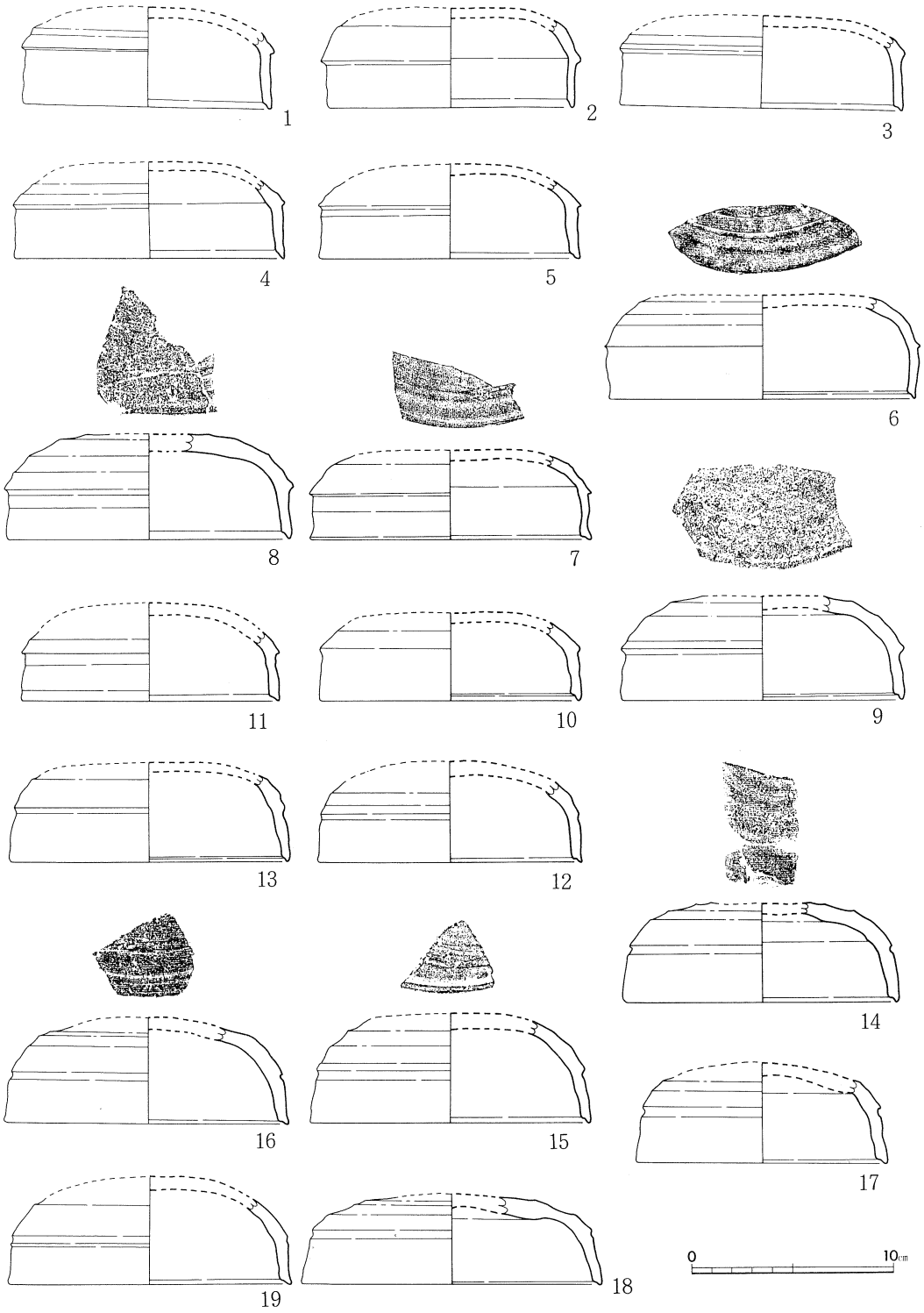
窯跡内および灰原から出土した須恵器には蓋坏、高坏、瓿、甕、壺、直口壺、短頸壺等の器種がある。このうち最も出土量の多いのが甕胴部の破片で、次いで多いのが蓋坏、高坏、瓿、壺などはきわめて少なかった。出土量の多い蓋坏、高坏については２つの形態に分けられる。

蓋坏（蓋）A類　A類の蓋は稜にしっかりした段を有するとともに、口縁部はほぼ垂直に下り、口縁端部内側に内傾する凹面をもつものである。口縁高は2.5㎝～2.8㎝あまりを測り、ほとんどが器壁が厚く、ぼってりした感じをもっている。口縁端部の内傾する凹面はノミの刃状に鋭角につけられているものが多いが、７のように大きくたおれて内傾するものもある。口縁部の形態を細かくみてみると、垂直に下る（２）、わずかに内頃する（１、３、４、５、８、10）、端部近くで短く外反する（７）、やや内湾気味に下る（６、９、11）等がある。稜は端部が丸いものが大半を占めるが、６のように断面三角形の凸帯状を呈するものや、５、７のように鋭いものもある。また、天井部はやや丸みをもつもの（９、20、21）とやや平らなもの（８）があり、回転ヘラ削りが施されている。20はロクロの回転が左方向である。なお、これらA類の蓋は１を除き焼成良好で、稜、口縁部などに古式の須恵器の特徴を備えている。

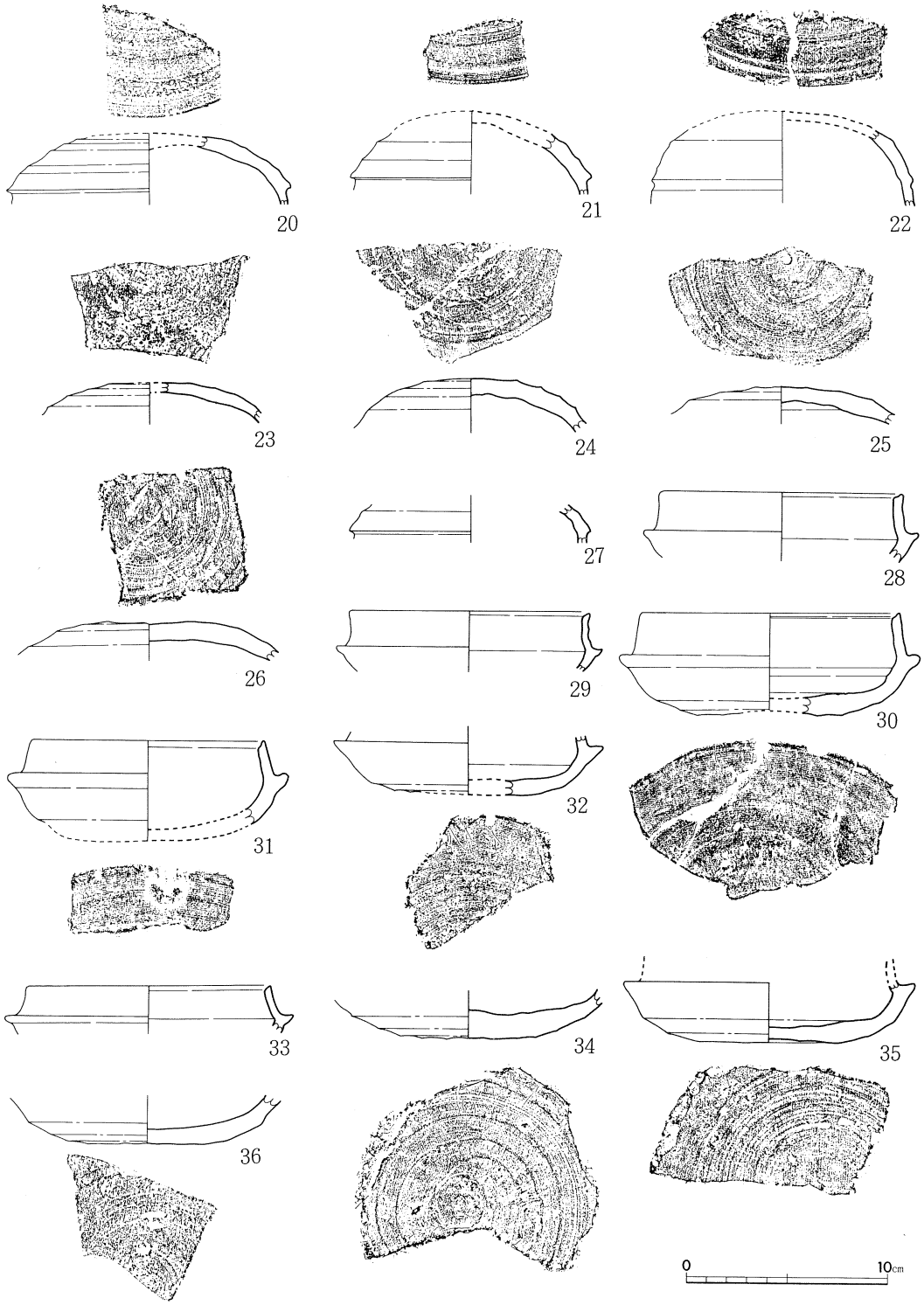
蓋坏（蓋）B類　口縁部はやや内傾して下り、その高さがやや低いもので、稜は段を有する12、13、15と沈線がめぐるものがある。口縁部は内湾気味に下る13～15と内傾する17、18、それに、内湾気味に下り、端部近くで短く外反する12、16、19があり、全体的に器壁の厚いものが多い。口縁端部はほとんどA類と同様に内傾する凹面をもつが、19は凹みがやや浅く平坦になっている。天井部は欠損しているものが多い。18はやや平らで、14～16はやや丸みをもつものと思われ、回転ヘラ削りが施されている。なお、14はロクロの回転が左方向である。焼成は13、14、17、18があまく軟質であり、その他は良好で、蓋B類はA類より形態的に少し退化している。

蓋坏（身）A類　たちあがりは2.0㎝前後内傾して伸び、口縁端部に段をもつタイプで、やや外反気味に伸びる28、29と直線的に内傾する30がある。底部付近まで残っている30の身は全体的に器壁が厚く、口径12.7㎝、器高5.0㎝あまりを測る。受部は厚く丸みをもち、底部はやや平ら、また、底体部に右方向の回転ヘラ削りが施され、内面の底部にはタタキの痕跡が残っている。焼成はややあまく軟質で、胎土に石英、長石を含む。口縁部の破片である28、29は受部がほぼ水平に伸び、端部が尖るシャープなつくりをなし、29は器壁が薄く、受部に重ね焼きをした痕跡が残っている。

蓋坏（身）B類　たちあがりがA類より内傾し、その高さがやや低いもので、A類よりやや退化した形態をもっている。31は全体的に器壁が厚く、焼成はあまい。たちあがりは内傾して上り、口縁部内側に段をもち、受部に重ね焼きをした痕跡が残る。また、受部から体部にかけて粘土がくずれ垂れ下っているところがある。33は薄造りで、受部は断面三角形を呈し、たちあがりはやや外反して口縁端部に至っている。口縁端部は内側を向き外傾する平面をもつ。



第95図　第１号窯跡出土遺物実測図(1)



第96図　第１号窯跡出土遺物実測図(2)

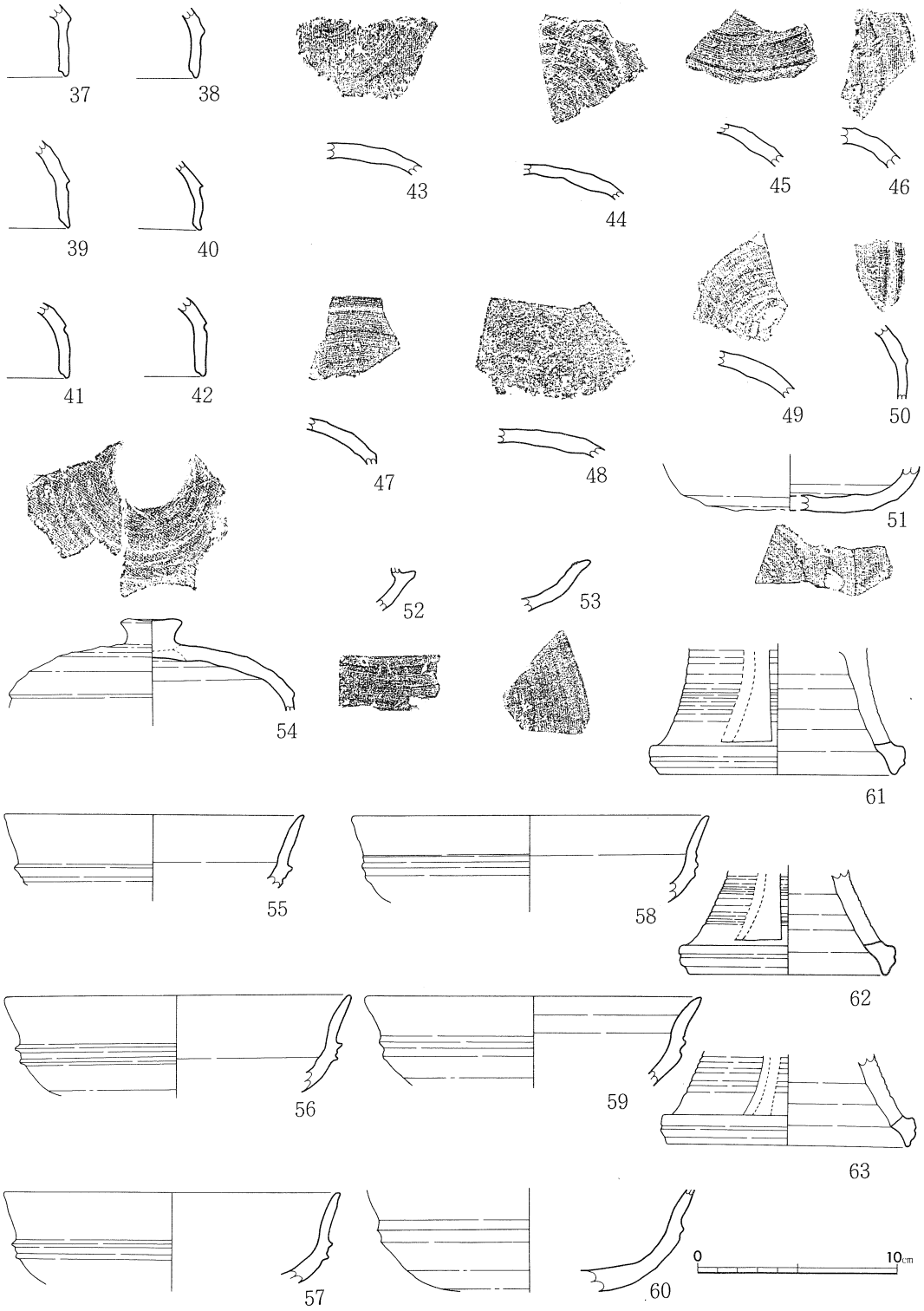
その他の蓋坏　身の底部、蓋の天井部の破片がある。これらはいずれも回転ヘラ削りが施されている。ロクロの回転方向は左のもの（24、34、35、47、48、51）と右のもの（26、49）があり、左回転が多いのは注目される。

高坏　高坏はほとんどが無蓋高坏の破片で、全体の器形が分かるものは１点もない。坏部および脚部の破片は蓋坏と同様２つに大きく分けられる。また、有蓋高坏の蓋と思われるものが１点ある。

有蓋高坏　54の蓋は口縁部を欠いているが、稜径14.3㎝を測る。やや丸みをもつ天井部の中央には高さ1.0㎝のつまみがつく。天井部の３分の２は削りが施され、稜にはしっかりした段を有する。焼成はややもろく、胎土に石英、長石を含む。また、ロクロの回転は左方向である。

高坏Ａ類　坏部は無蓋高坏の破片で、口縁部下方にシャープな凸帯２本がめぐるもの（55～57）である。口径は55、56が推定で10.0㎝前後、57は少し小さく15.0㎝あまりである。口縁部はやや外反気味に伸び、端部は薄くて丸い。また、口縁基部の器壁は0.5㎝あまりの厚さをもっているが、２本の凸帯がめぐる体部上端は0.7㎝あまりの厚さを測り、この部分で器壁の厚みが変換している。おそらくここで粘土を接合して口縁部を造ったものと思われる。56は２本の凸帯の間に沈線がめぐり、坏底部に回転ヘラ削りが施されている。これらの土器は淡灰色を呈し、焼成は良好、胎土に石英、長石を含む。脚部は台形ないし方形のスカシを有し、「く」の字形に屈曲する脚裾部に沈線を施すタイプ（61～63）である。これらの土器は脚柱部に台形、長方形のスカシを三方に有し、カキ目を施す。また、脚裾部は中程に沈線がめぐり、その下方は外反して端部に至っている。焼成は良好で、62、63は灰色、61は黄褐色をそれぞれ呈し、胎土に石英、長石を含む。

高坏Ｂ類　坏部は体部上端にめぐる凸帯がやや丸みをもち、口縁部と体部の器壁に厚みの変化がない無蓋高坏（58～60）である。比較的大きな破片である59は口径16.7㎝を測り、口縁部はやや外反して伸び、端部は丸い。体部上端にある凸帯は上方のものが丸みをもっているが、下方のものは上方の凸帯によって生じた凹線があるために凸帯状に見えている。底体部には回転ヘラ削のが施され、焼成は良好で、胎土に石英、長石を含む。なお、ロクロの回転は右方向である。60は口縁部上半分を欠くが59と同様の器形をなしているもので、口径がやや大きい。58の土器は上記の土器と比べやや薄造りで、口縁下部にめぐる２本の凸帯はＡ類のようにシャープではないが、わりとしっかりしている。また、凸帯の上方には１本の浅い沈線がめぐる。脚部は脚裾部がＡ類よりやや退化したものである。64は底部径10.4㎝を測り、外反気味に下る脚柱部にカキ目、スカシを有する。また、裾部は「く」の字形にゆるく屈折している。65は脚柱部の三方に台形のスカシを有し、全面にカキ目を施す。脚裾部は外反して下り端部に至っているもので、67も65と同様な器形をなす。70は脚部が外傾して下り、端部はノミの刃状に尖る。脚部には円形のスカシ、カキ目を有する。



第97図　第１号墳窯跡出土遺物実測図(3)

瓾　3点出土している。これらは頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部は短く外反して端部に至り、口唇部は平らなものが多い。78は推定口径10.5㎝を測る。頸部は外傾して上り、上下に波状文がめぐる。また、口縁部と頸部の境には段がつく。78は79と同様な形態をなす。80は外傾して上る頸部の破片で、波状文がめぐり、口縁部との境に2本の沈線を有する。

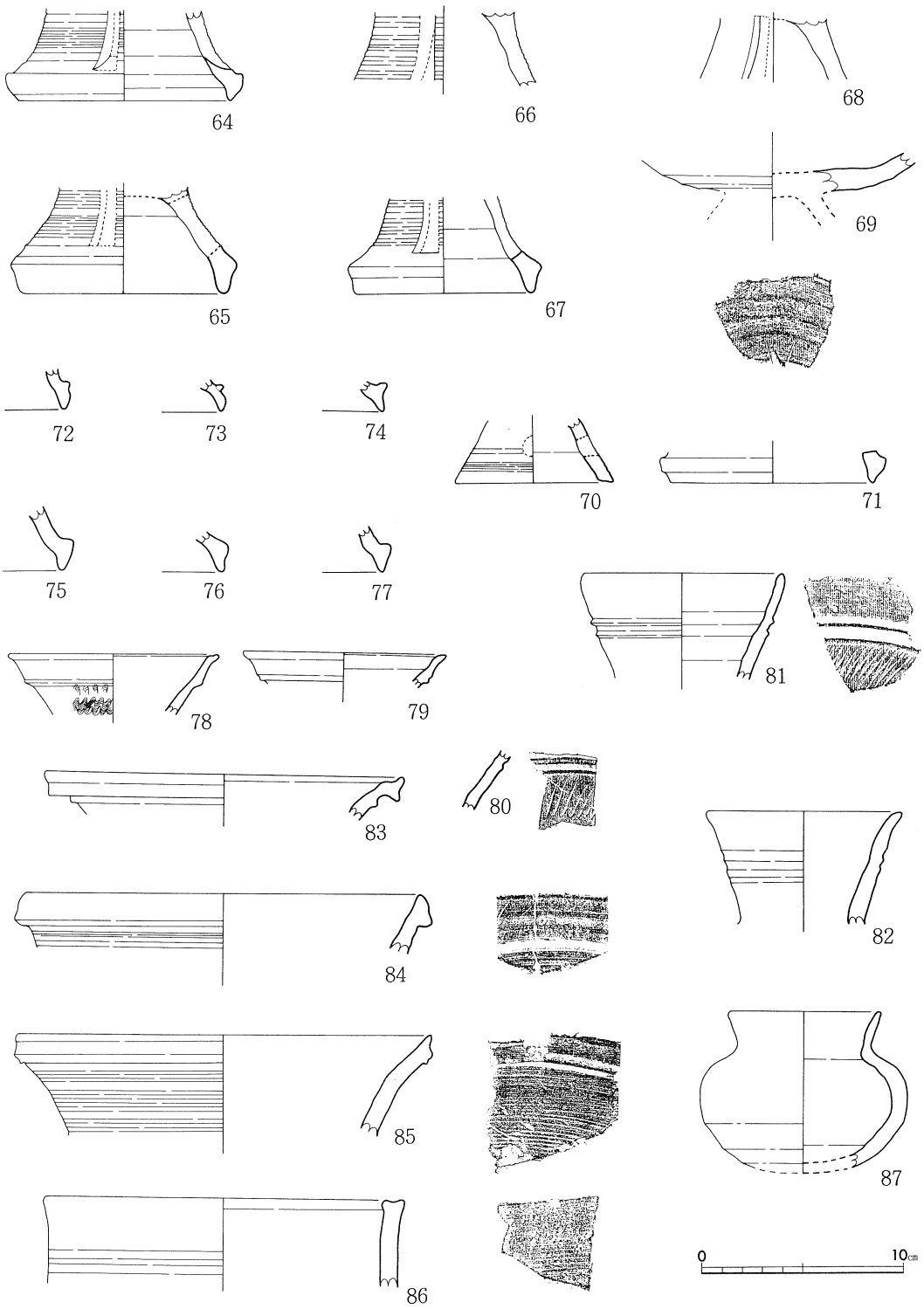
直口壷　口縁部から頸部にかけての破片2点がある。81は推定口経10.0㎝を測り、外傾する頸部には波状文を施す。口縁部と頸部の境は段をなし、その上に凸帯がめぐる。そのため、凸帯と頸部上端との間に凹線状の凹みを有する。また、この部分の内面にも段を有し、口縁部と頸部の器壁は厚みが異なる。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。82はやや外傾して上る頸部から2本の沈線をへて口縁部に至っている。口縁部はやや外反して上り、端部は丸い、推定口径9.5㎝、頸部基部から口縁端部までの高さ5.5㎝を測る。

短頸壷　87の1点のみである。推定口径7.5㎝、器高8.1㎝を測る。口縁部は外反気味に上り、端部は丸い。また、肩部から底部にかけては丸みをもって下り、体部下半分には回転ヘラ削りを施す。ロクロの回転は右方向、焼成は良好で、胎土に石英、長石を含む。

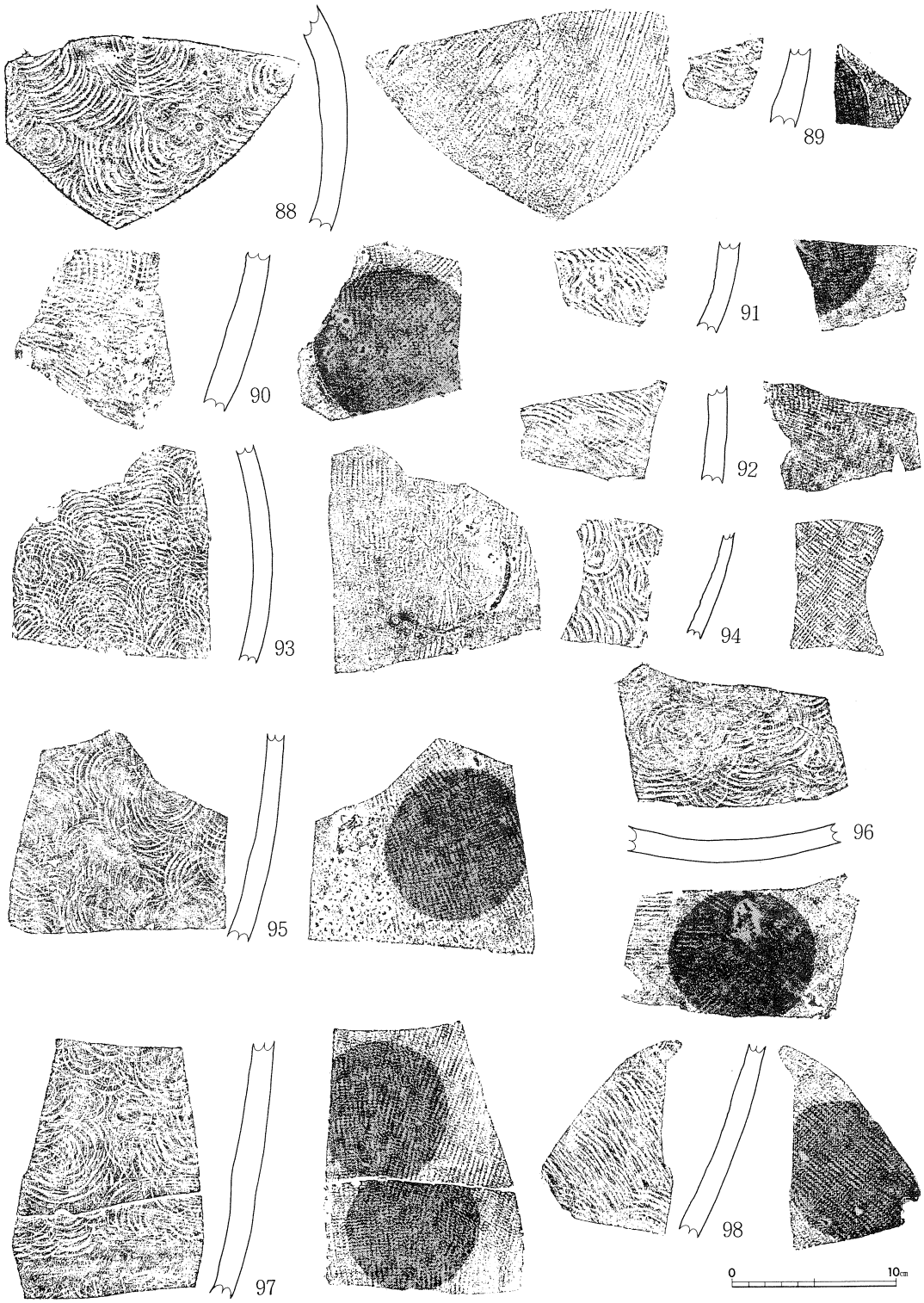
甕および壷　83〜86は甕ないし壺の破片である。83は口縁部が短く外側に開き、外反して端部に至っているもので、頸部との境に凸帯がめぐる。焼成はやや不良で、胎土に石英、長石を含む。84の口縁部は頸部からやや外側に開き、短く外反した後、内湾して端部に至っている。頸部にはカキ目を施し、焼成は良好である。85は口縁部が逆「く」の字形にやや外反し、端部は薄くて丸い。頸部はやや外反気味に上り、全面にカキ目を施す。また、86はほぼ垂直にたち上り、端部は幅広の凹面をもつもので、口縁部にカキ目を施す。

窯跡内から大量の甕ないし壺の胴部片が出土した。それらの中には外面を上に向けて、その上に土器を置いて焼いた破片が30点ある。この痕跡は色調が異なっていたり、上にのせた土器の端部が付着して残るもので、直径7.5㎝〜11.2㎝の円形を呈する。このうち11点あまりを図化した（88〜98）。前者に含まれるものとして91〜93、95〜98があり、後者に含まれるものとしては88、94、両方をもっているものとしては89、90がある。

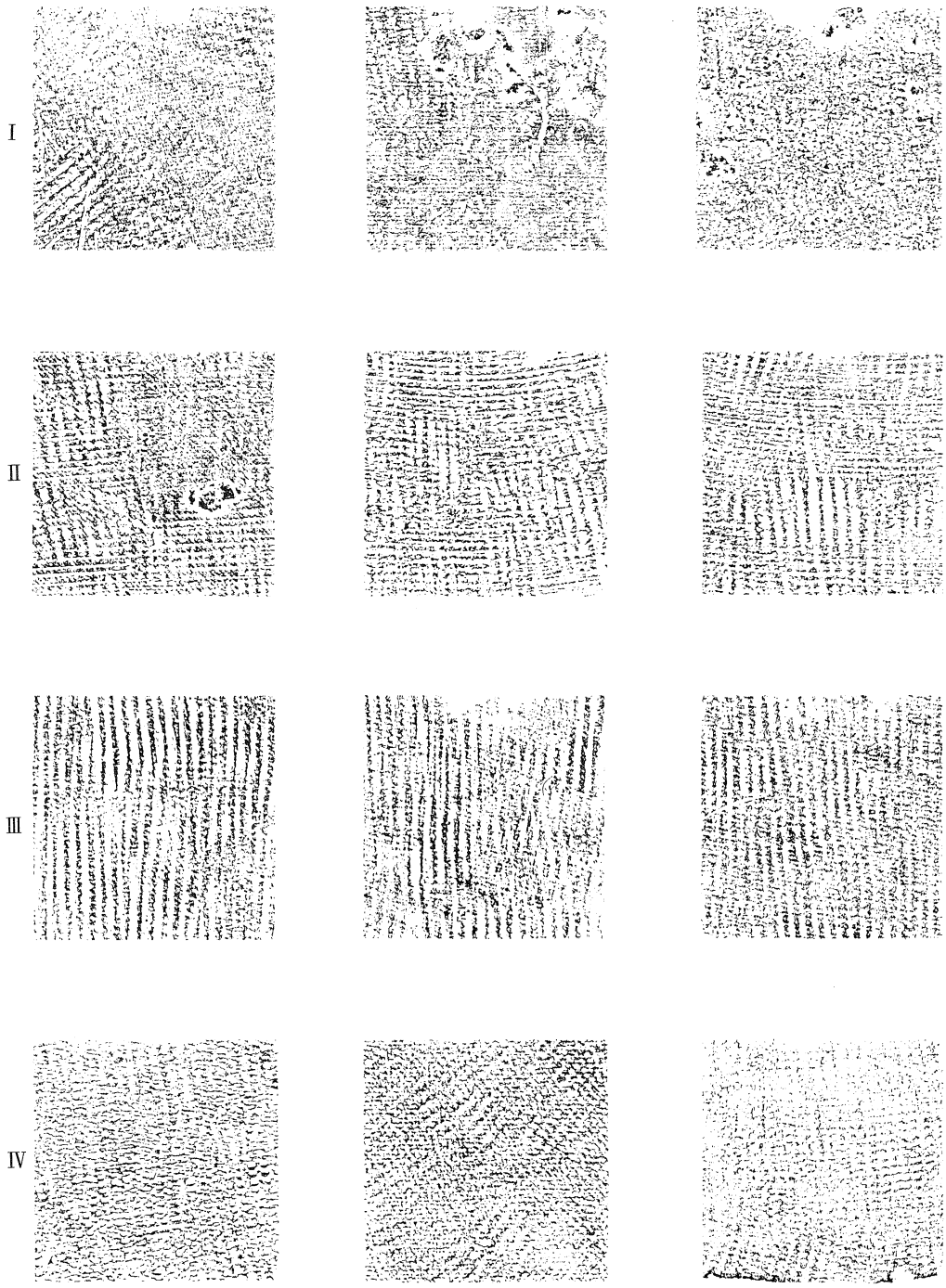
次に、器表面のタタキについてみてみると、外面が4つ、内面が5つに細分できる。外面Ⅰ類はタタキの後にナデを施しているもの、Ⅱ類はタタキの後にカキ目をめぐらしているもの、Ⅲ類はいわゆる格子目風並行タタキ、そしてⅣ類はⅢ類の形が少しくずれたものである。一方、内面はA類がタタキの後にナデを施しているもの、B類がタタキの後にカキ目をめぐらしているもの、C類が円弧状のタタキ、D類が浅く細かい同心円、円弧状のタタキ、E類が深くはっきりしたタタキの痕跡が残るものである。これらのタタキは同一土器の中で調整の異なっている2つのタイプのタタキをもつものもあると思われるが、窯跡および灰原から出土した壺、甕の破片360点について器表面の調整をみてみると、表2のとおりである。これによると、外面はⅢ類が56％あまりを占め、Ⅱ類が20％で続き、Ⅰ類8％、Ⅳ類7％となっている。また、内面はD類23％、C類23％、A類19％、



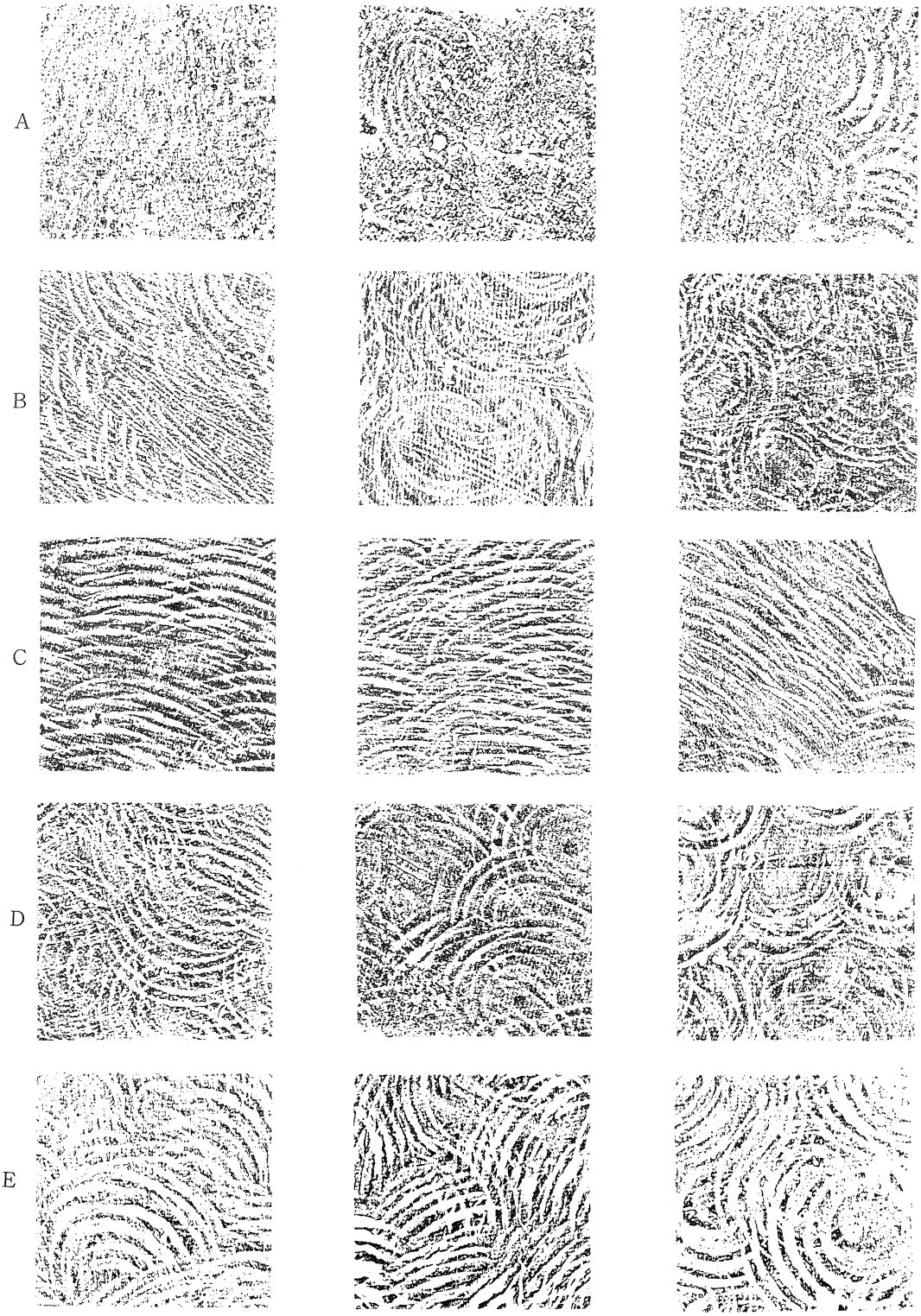
第98図　第１号窯跡出土遺物実測図(4)



第99図　第１号窯跡出土遺物実測図(5)



第 100 図　第 1 号窯跡出土の壷・甕類拓影図(1)



第101図　第1号窯跡出土の壺・甕類拓影図(2)

E類13%、B類３%の比率で、C、D類が多い。さらに、内外面ではⅢD類が20%を占め、最も多くなっている。しかし、ⅠB類、ⅡB類は１点も存在しなかった。

これらのことから、１号窯跡出土の壺、甕類の器面調整は外面が格子目風の並行タタキで、内面は浅く細いタタキか円弧状のタタキが入っているものが特徴的であるといえる。

No.	図面番号	焼台上土器痕跡径	備考
1	99図－88	9.0 cm	土器片付着
2	89	不明	土器片付着
3	90	9.0 cm	土器片付着
4	91	9.2 cm	
5	92	6.9 cm	
6	93	9.5 cm	
7	94	11.2 cm	土器片付着
8	95	9.7 cm	
9	96	9.2 cm	
10	97	9.0 cm、8.3 cm	2回使用
11	98	不明	
12		9.0 cm	
13		9.0 cm	
14		9.4 cm	
15		9.5 cm	
16		9.8 cm	
17		9.5 cm	
18		9.7 cm	
19		8.0 cm	
20		9.4 cm	
21		9.4 cm	
22		9.2 cm、12.0 cm	2回使用
23		9.4 cm	
24		7.5 cm	
25		8.3 cm	
26		9.0 cm	
27		9.7 cm	
28		10.0 cm	
29		9.5 cm	
30		9.0 cm	
31		9.8 cm	

表３　第１号窯跡焼台使用破片一覧

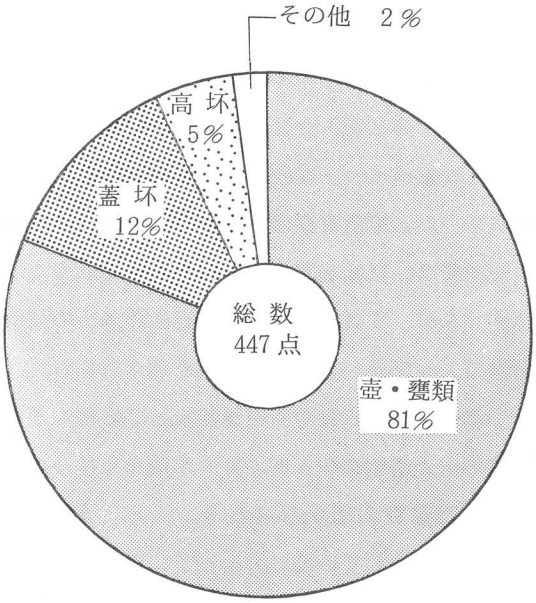


表１　第１号窯跡出土須恵器器種別比率

外面＼内面	A	B	C	D	E	不明	計
Ⅰ	6	0	10	10	4	1	31
Ⅱ	8	0	14	35	16	2	75
Ⅲ	38	7	50	74	25	8	202
Ⅳ	5	3	4	12	2	0	26
不明	12	2	4	8	0	0	26
計	69	12	82	139	47	11	360

表２　第１号窯跡出土壺・甕類体部片調整一覧

谷底部の調査

土層堆積状況　1号窯の南側下方の谷底部分は土層が非常に深く堆積しており、深い部分で2.0mの深さまで発掘を行った。

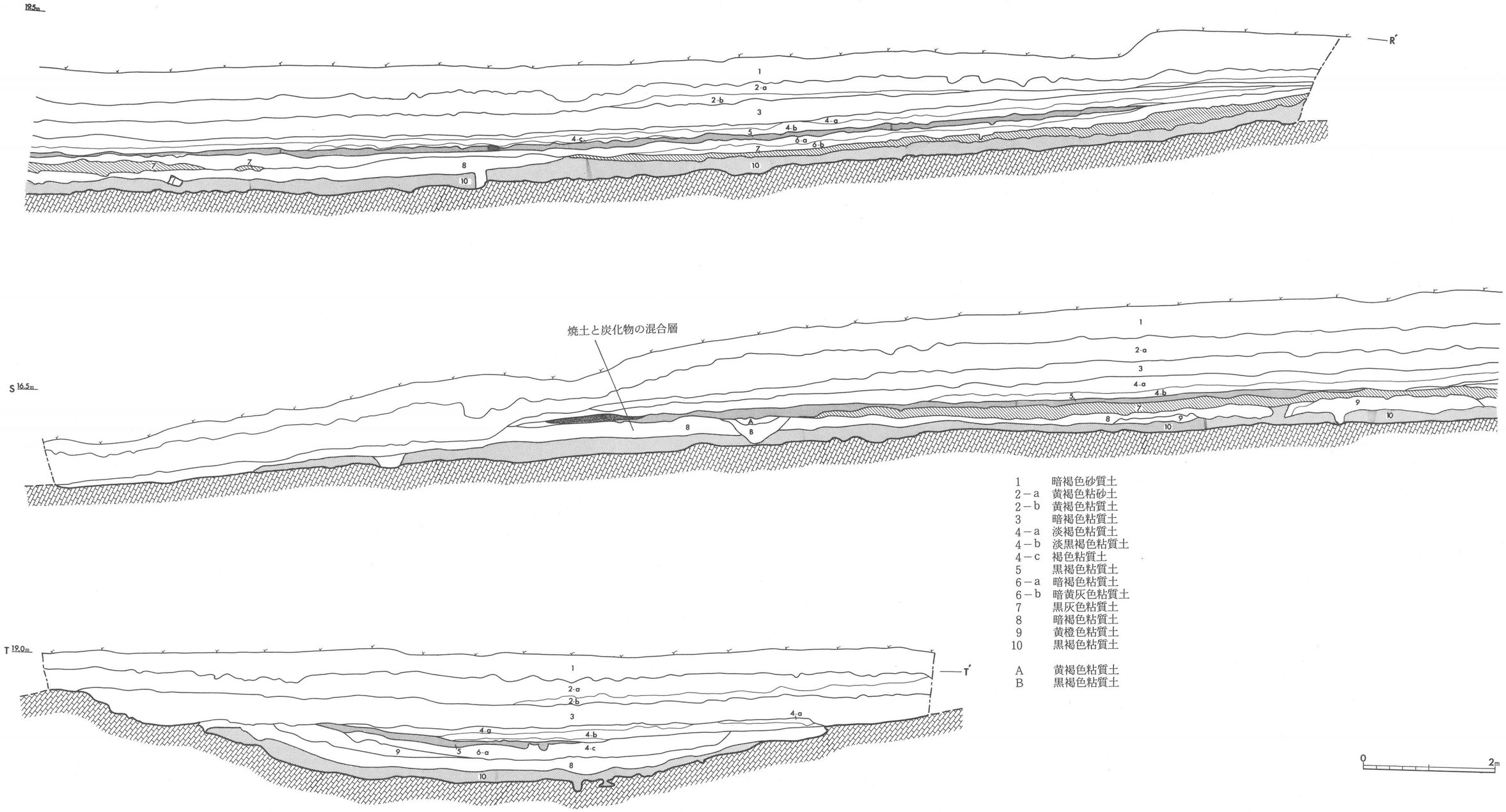
1層は砂層で、耕作土、および耕作のための客土である。2層は砂まじりの黄褐色粘質土で、近現代の遺物を含む。この1、2層は合わせて厚さ1.0mに近く、畑地開墾のため、近年動かされた土層と考えられる。

3層は暗褐色粘質土で、厚い部分で50.0cmにわたり堆積している。須恵器をはじめ、各種の遺物が出土したが、もっとも年代の新しいものは、備前系陶器擂鉢で、およそ室町時代前後のものと考えられる。この3層下面は、4層以下の地形に沿った凹レンズ状の堆積土を、ほぼ水平に切っており、3層堆積前に、一度削平して整地されたことがうかがわれる。その時期は、備前系陶器の時期すなわち、およそ室町期頃と考えられる。

4～10層は、ほぼ谷底の地形に合わせて凹んで堆積しており、各層にはさまれるように堆積する黒色土（5層、7層、10層）を中心に数多くの須恵器、土師器、埴輪、窯壁等が出土した。こうした遺物は、大部分が窯跡関係資料と考えられることから、これらの層は不良品等を廃棄したものが堆積したり、上方の窯や灰原が流出して堆積した層と考えられる。

各層の出土遺物をみると、4～7層からはほぼ1号窯と同時期のものから、奈良時代前後のものまで、かなり時期幅がみられる。一方、8層以下からは6世紀後半頃の遺物より新しいと考えられるものは出土していない。よって、これらの土層の堆積時期は、大きく二時期に分かれると考えられ、4～7層はほぼ奈良時代前後に、それ以前の窯跡等の流出遺物とともに堆積し、8～10層は6世紀後半頃に堆積したものであろう。なお、各層内の遺物の出土状況をみると、同一層内でも地点別に埴輪が集中したり、近い時期の遺物が集中して出土した箇所もあり、単なる自然流出による堆積とは考えにくい点もある。また、谷底からは数時期にわたる窯関係資料と考えられる遺物が出土しているにもかかわらず、上方斜面からは1基の窯跡（しかも上部が大幅に削平されている）しか検出されなかったことも考えあわせると、斜面部に存在した数基の窯跡が大きく二時期にわたって削平され、その廃土で谷底を埋めるために廃棄されたという可能性も考えられる。谷底部より大量の窯壁片が須恵器等とともに出土していることは、それを裏づけるかもしれない。

以下、各層出土遺物について、層別に記していく。



1　暗褐色砂質土
2－a　黄褐色粘砂土
2－b　黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4－a　淡褐色粘質土
4－b　淡黒褐色粘質土
4－c　褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
6－a　暗褐色粘質土
6－b　暗黄灰色粘質土
7　黒灰色粘質土
8　暗褐色粘質土
9　黄橙色粘質土
10　黒褐色粘質土

A　黄褐色粘質土
B　黒褐色粘質土

第 102 図　C地区谷底部土層図

C地区谷底出土遺物（第103図～第124図）

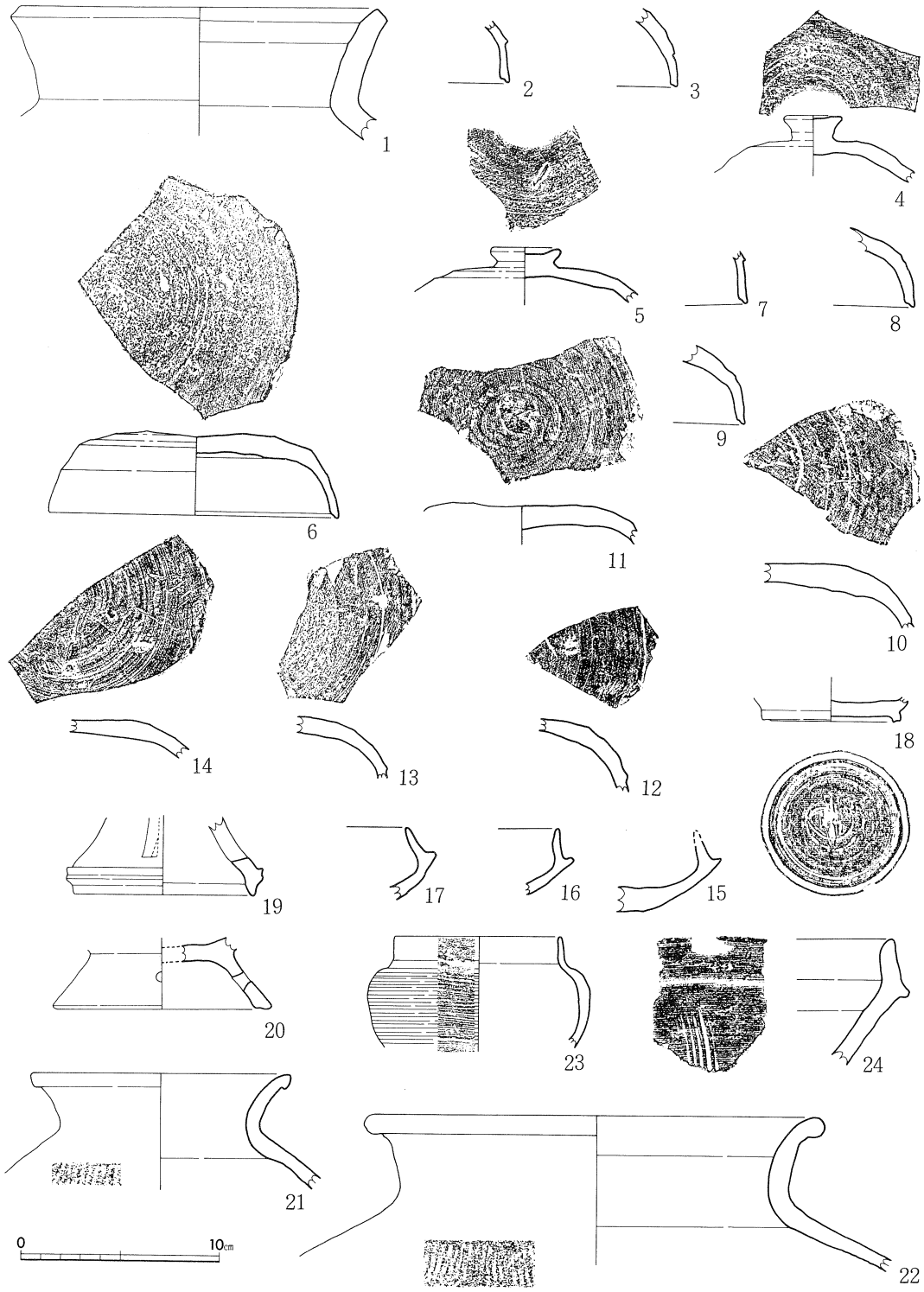
ここからはコンテナ300箱あまりの須恵器、埴輪、窯壁等を検出した。これらの遺物は1層から10層にわたって各層に含まれ、二次堆積したものと思われる。各層ごとに出土遺物をみることにする。

1層～2層　ほとんどが須恵器の細片で、図化できたのは1層の3点である。1は壺か甕の口縁部片で、口縁端部は二次加工した凝口縁風の形態をもつものである。2、3は蓋坏の蓋である。2は稜がしっかりした段をもち、口縁部はやや内傾して下る。古い要素をもつものである。一方、3は稜に沈線がめぐり、内湾して口縁端部に至っている。

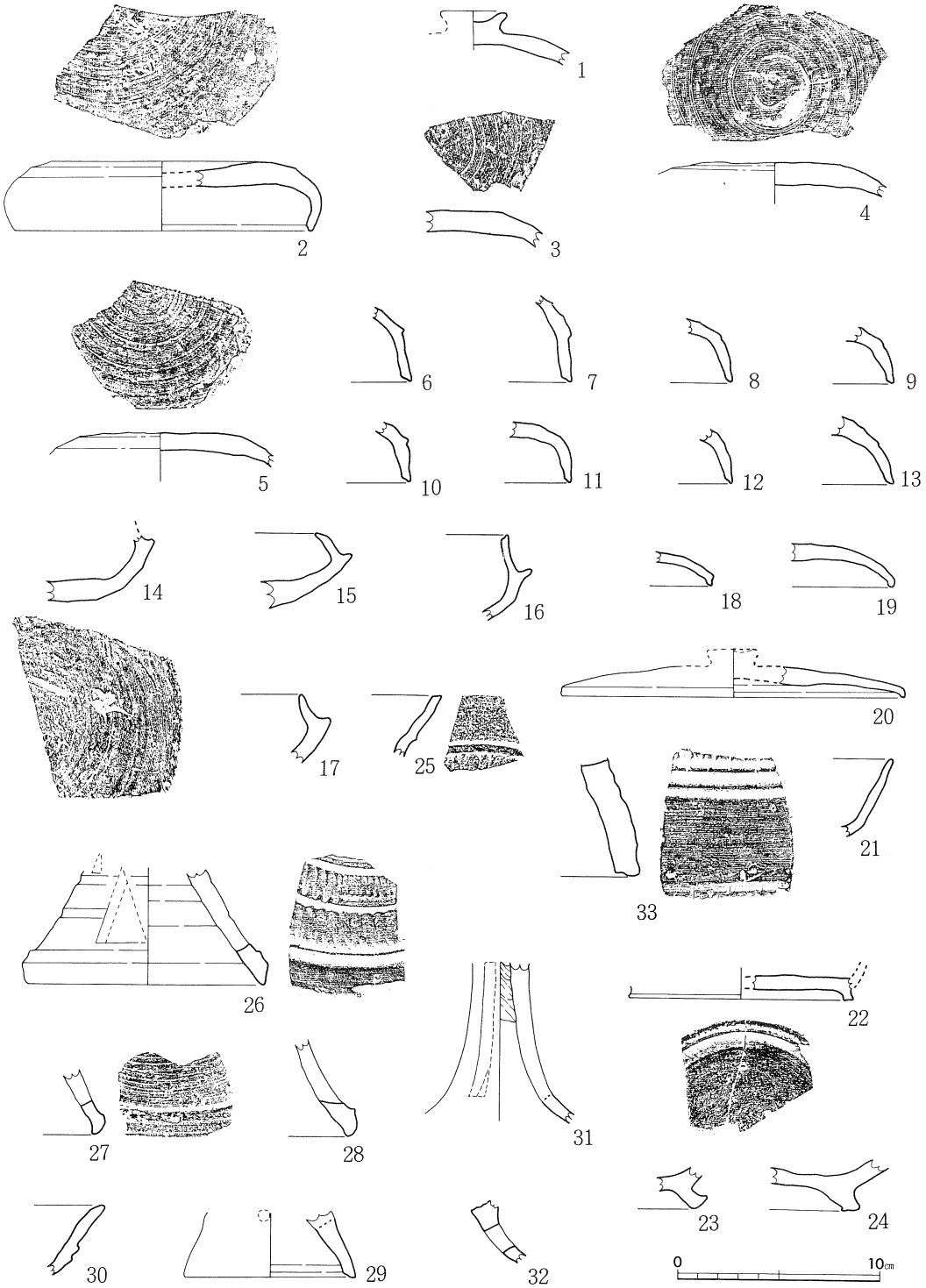
3層　蓋坏、高坏、高台付椀、短頸壺、壺ないし甕、備前焼擂鉢等が出土している。蓋坏（6～17）はほとんどが破片である。全体の器形の分かる6は口径14.5㎝、器高4.0㎝を測る。天井部はやや平らで、口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。また、天井部には右回転のロクロを使用した回転ヘラ削りを施す。7～9は蓋の口縁部片で、7は古式須恵器の特徴をもつ。10～14は蓋の天井部には回転ヘラ削りを施す。ロクロの回転方向は10が右、11が左である。15～17は蓋坏の身であり、たちあがりはやや内傾して上り、端部は丸い。高坏は脚部（19、20）と蓋（4、5）がある。4、5の蓋は天井部の中央につまみがつき、天井部には回転ヘラ削りを施す。また、脚部片である19は底部径8.9㎝を測り、脚柱部にはスカシを有し、脚裾部は「く」の字形に屈折する。20は脚部に円形のスカシをもち、端部はノミの刃状に尖る。18は底部径7.0㎝を測る高台付の椀である。23は口径8.3㎝を測る短頸壺で、口縁部はやや内湾して上り、端部は丸く、体部全面にはカキ目を施す。21、22は壺ないし甕の破片で、21は口径12.9㎝を測り、口縁部はゆるやかに内湾して上る。一方、22は口径22.5㎝あまりの大形のもので、口縁部は玉縁状の丸みをもっている。

24は備前焼の擂鉢である。口縁部は内傾して上り、端部は丸い。内面には太めの櫛目が入り、器壁はやや薄い。

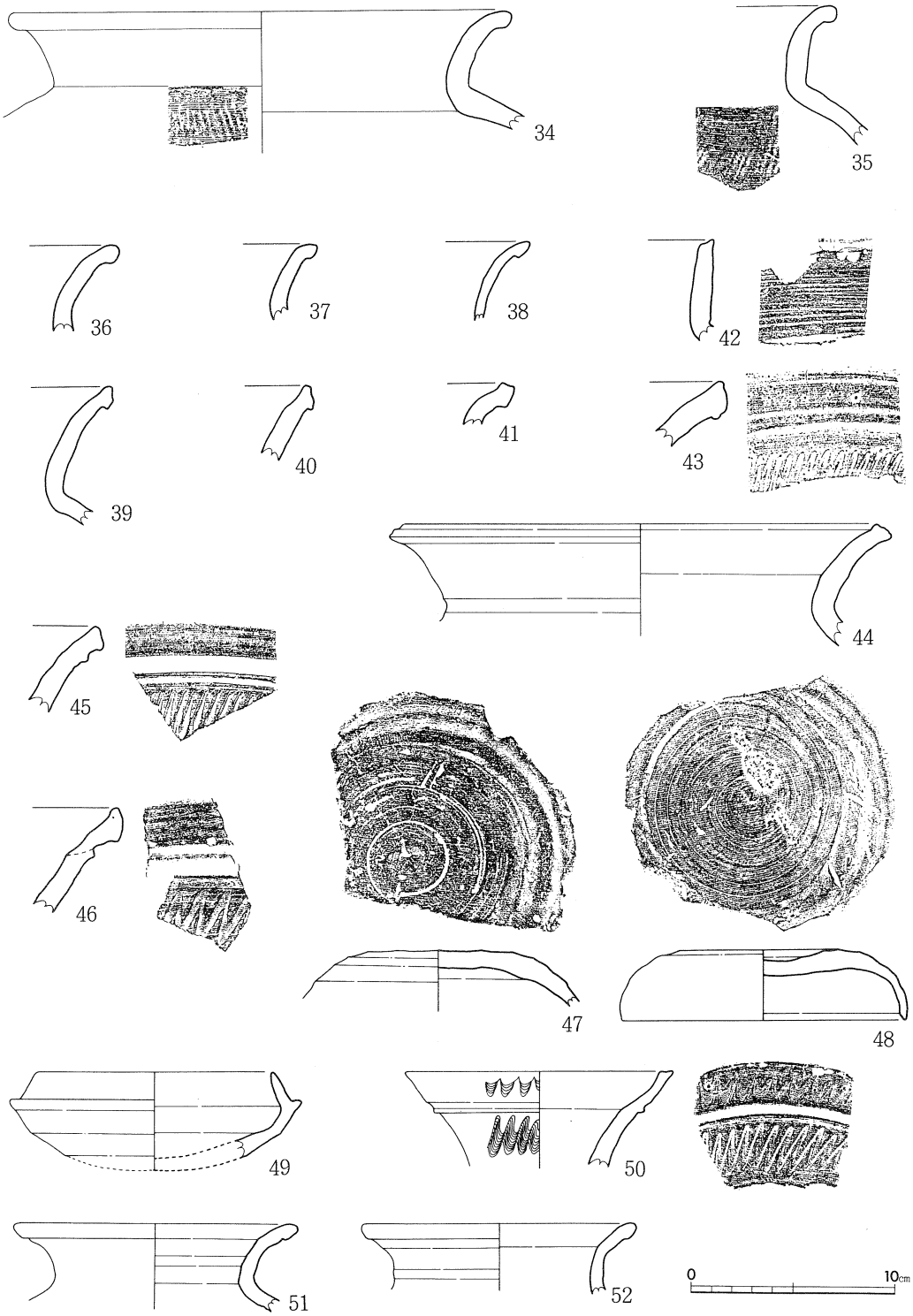
4層　蓋坏、高坏、蓋付椀、瓿、器台、壺、甕等が出土している。蓋坏（2～17）はほとんどが破片である。全体の器形が分かる2は推定口径14.7㎝、器高3.5㎝を測る。天井部はやや凹み、口縁部は大きく内湾して端部に至る。端部は内傾する凹面をもち、また、天井部には右回転による回転ヘラ削りを施す。3～5は蓋の天井部片で、4は右方向、5は左方向の回転ヘラ削りを施す。6～13は口縁部片で、6、7は古式の要素をもつ。身（15～17）はたちあがりが高く、やや外傾して伸び、端部内側に段をもつ16と、たちあがりがやや内傾して低いもの（15、17）がある。高坏（1、26～32）は蓋1点、坏部の破片1点、脚部片6点がある。1の蓋は天井部の中央につまみがつく。30は無蓋高坏の坏部片で、口縁部の下方に1本の凸帯がめぐり、口縁部はやや外傾して伸び、端部は丸い。脚部は低脚のものと高脚のものがある。低脚の26は底部径11.6㎝を測る。脚柱部は内傾して下り、裾部は「く」の字形に屈曲する。また、脚柱部には2本の沈線、三角形のスカシを有する。29は底部径8.4㎝を測る。脚部は内傾して下り、端部内側に内傾する平面をもつ。そして脚部には



第 103図　C地区 1～3層出土遺物実測図（1～3、1層　4～24、3層）



第104図　C地区4層出土遺物実測図



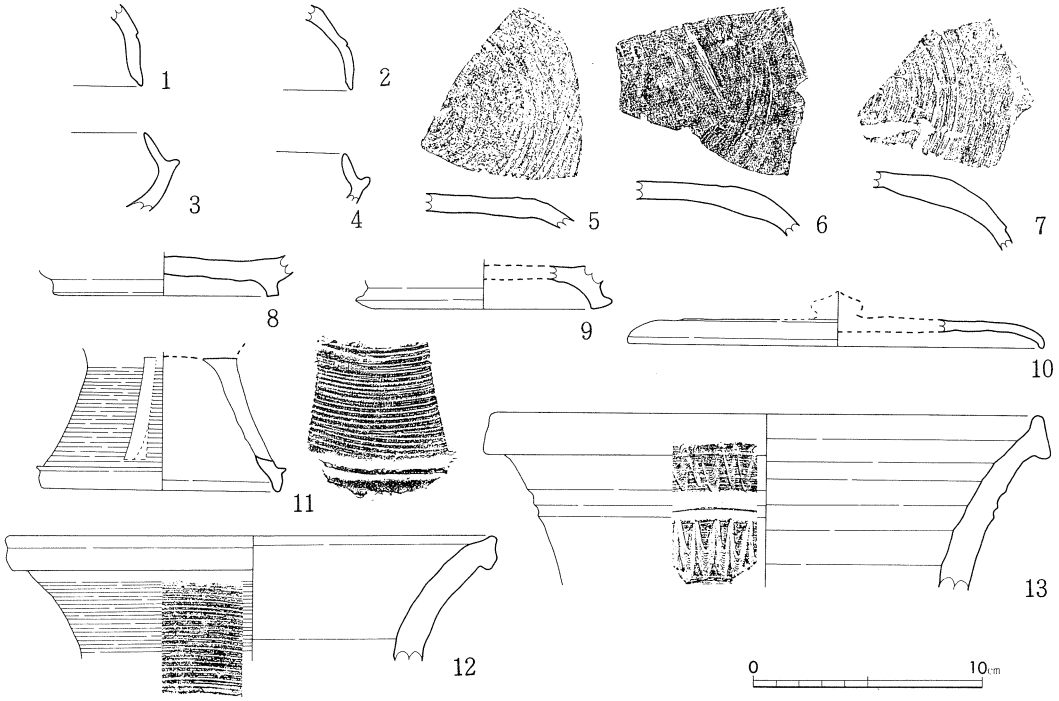
第105図　C地区4・5層出土遺物実測図（34～46、4層　47～52、5層）

円形のスカシを有する。27、28は底脚高坏の破片で、裾部は内湾して丸みをもつ。32は円形のスカシを有する脚部の破片である。高脚の31は脚裾部を欠くが、長方形の1段スカシを有し、脚部は下方で大きく開く。瑳は口縁部の破片1点（25）である。口縁部はやや外傾して伸び、端部は平らである。また、頭部と口縁部との境には凸帯がめぐり、端部に波状文を有する。蓋付埦（18〜24）は蓋3点、埦4点がある。蓋は口縁部が鳥の嘴状を呈し、器高の低いものである。20は推定口径16.9㎝、器高1.6㎝あまりを測る。21の埦はやや内湾して上る口縁部をもち、22〜24は高台を有する埦の破片である。22は推定底部径11.1㎝あまりで、やや内湾した高さ0.5㎝の高台がつく。23、24はやや高い高台がつく。33は3本の凹線をもつ脚部の破片で、器台であると思われる。34〜46は壺ないし甕の頸部から口縁部にかけての破片である。34〜38は頸部がやや外反して上り、口縁部は丸い。39は口縁部が「く」の字形に屈曲し、40は内湾して伸びた後、短く外反して端部に至る口縁部をもつ。また、43は口縁部の下方に沈線がめぐり、45、46は口縁部の下方に断面三角形の凸帯がめぐり、頸部に波状文を有する。42はほぼ垂直に伸びる口縁部をもち、41は口縁部がやや内湾して上り、端部は幅広の平面をもつものである。44は推定口径23.1㎝を測る。頸部は内湾して上り、口縁部は大きく内傾する。

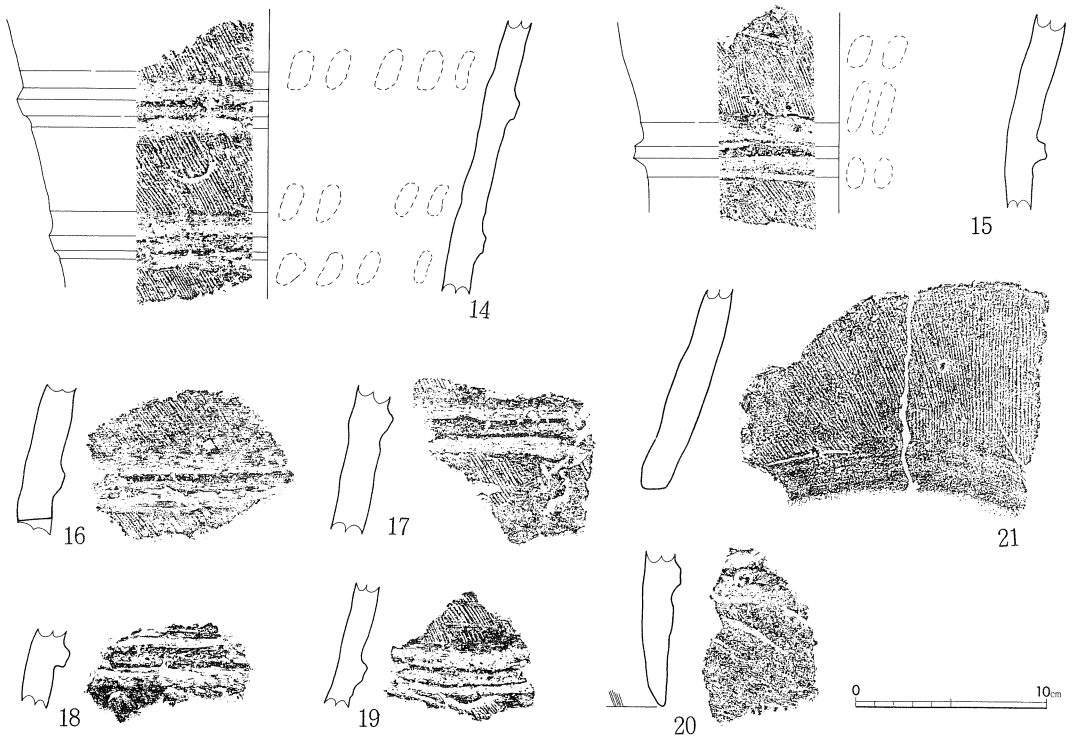
5層　蓋坏、瑳、壺がある。48の蓋坏の蓋は口径14.0㎝、器高3.5㎝を測る。天井部はやや凹み、口縁部は内湾して下る。端部内側には内傾する平面をもつ。また、天井部には右回転による回転ヘラ削りを施す。47は蓋天井部の破片である。49は推定口径10.0㎝を測る身で、たちあがりはやや内傾して伸び、端部は丸い。また、受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。50の瑳は外反する頸部に波状文を有し、口縁部との境に断面三角形の凸帯がめぐる。口縁部はやや内湾して上り、端部近くで短く外反し、端部は平らである。また、口縁部には波状文がめぐり、推定口径13.1㎝を測る。51、52は壺の頸部から口縁部にかけての破片で、51は推定口径13.5㎝を測る。頸部は大きく外反して伸び、口縁部は丸い。また、52は推定口径13.5㎝を測り、頸部は51よりやや立って伸びる。

6層　蓋坏、蓋付埦、高坏、甕、埴輪円筒等がある。蓋坏はいずれも細かい破片で、蓋（1、2）は稜に沈線が入り、口縁端部内側に内傾する凹面をもつ。3、4の身はたちあがりが内傾して伸び、端部は丸い。4は受部が上外方に伸びる。5〜7は蓋天井部の破片で、回転ヘラ削りを施す。7はロクロの回転方向が右である。蓋付埦の底部である8、9は高台をもつ。10の蓋は推定口径18.0㎝を測る。口縁部は内湾して下り、端部は丸く、天井部に回転ヘラ削りを施す。11の高坏は底部径10.3㎝を測る。脚柱部は内傾して下り、長方形のスカシ、カキ目を有する。脚裾部上方に凸帯がめぐり、「く」の字形にゆるやかに湾曲して端部に至る。12、13は壺ないし甕の頸部から口縁部にかけての破片で、12は口径21.2㎝を測り、外反する頸部にカキ目をもつ。口縁部は頸部から内傾して外方に伸びた後、「く」の字形に上方に伸び、端部に至る。13は口径23.8㎝を測る。頸部はやや外反して上り、2本の凸線とその上に波状文を有する。口縁部は上下が丸く伸び、内傾した面をもつ。

14〜20は円筒埴輪の破片である。15、18はわりとしっかりしたタガをもつが、14、16、17、19、



第106図　C地区6層出土遺物実測図(1)

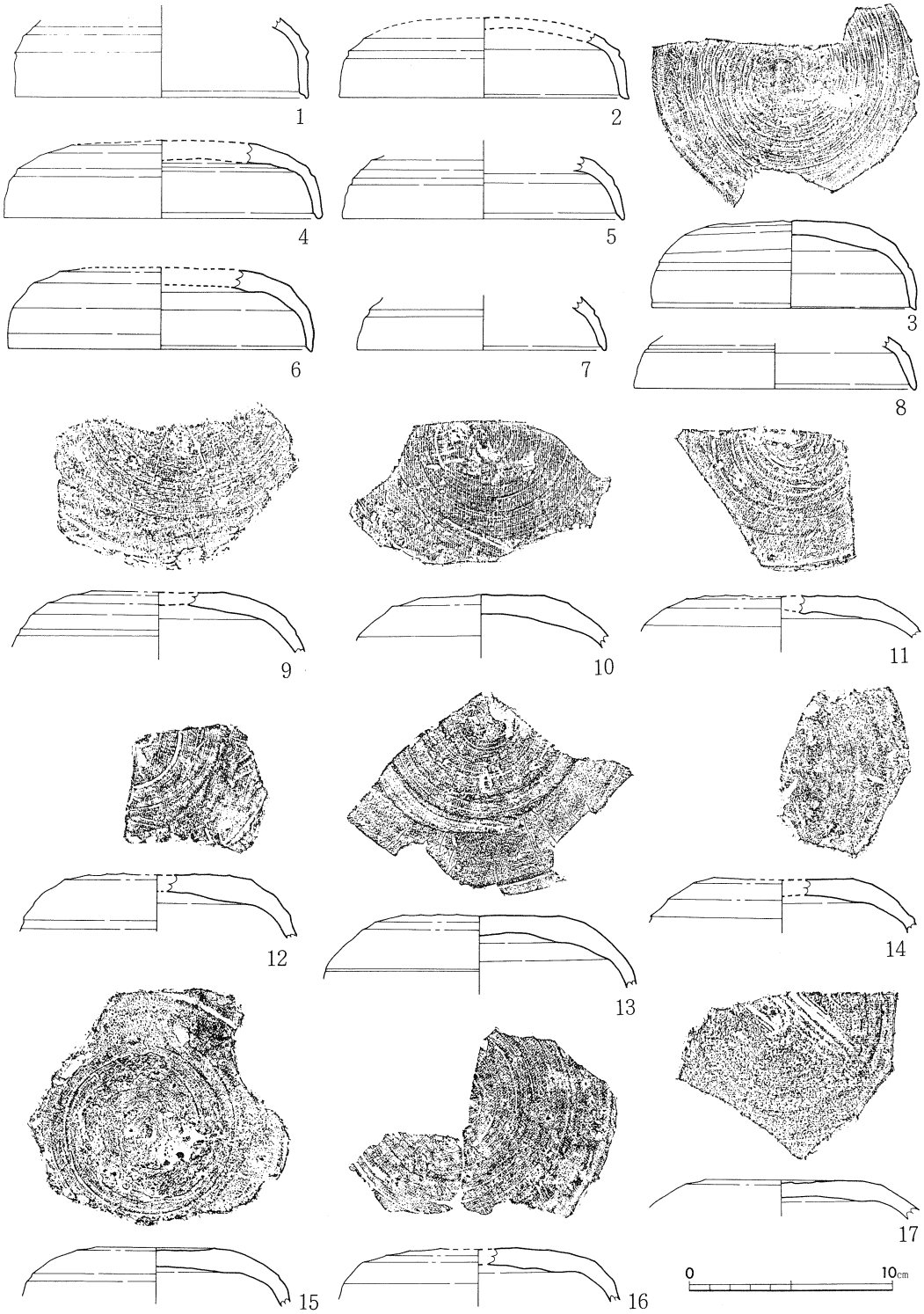


第107図　C地区6層出土遺物実測図(2)

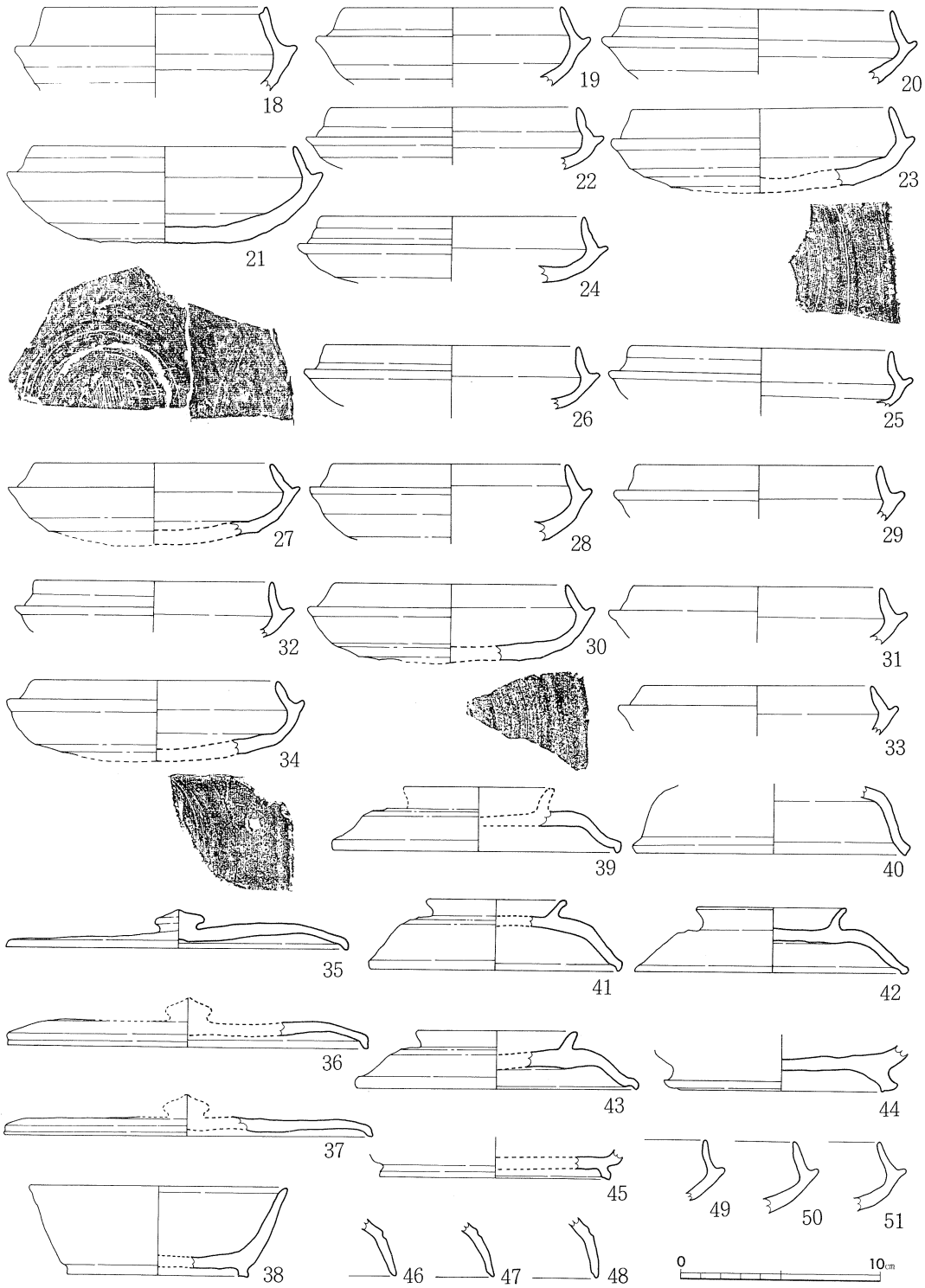
20のタガはやや退化し、その高さは低い。これらの埴輪はいずれも外面に右下りのハケ目を施し、内面はナデ、指圧痕の調整である。20は底部の破片である。端部はやや尖り気味で、外面にはヘラ状工具によるナデを施す。21は底部から外傾して上方に伸びるもので、外面に縦方向のハケ目を施す土師質の土器である。

7層　蓋坏、蓋付埦、瑯、高坏、提瓶、坏、短頸壺、甕、有蓋壺、長頸壺等が出土している。蓋坏の蓋は古式須恵器の要素をもつものとやや新しい形態を呈しているものとに分けられる。前者の蓋（1）は稜に段を有し、口縁部はほぼ垂直に下り、端部内側に段をもつものである。後者の蓋（2～8）は口縁部がやや内側にたおれているものである。稜は段のやや退化したもの（2）、沈線がめぐるもの（3、4、5、7、8）、稜のないもの（6）があり、器高は前者の1と比べやや低い。口径は4、6が15.0㎝～16.0㎝で大きく、3、5、7、8は12.3㎝～14.0㎝あまりである。これらの蓋はいずれも口縁端部内側に内傾する平面をもち、天井部に回転ヘラ削りを施す。9～17は蓋天井部の破片である。9、10の天井部はやや丸みをもち、その他は平ら気味で、いずれも右回転による回転ヘラ削りを施す。身はたちあがりの形態から4つに分けられる。すなわち、口縁端部に段をもち、2.0㎝あまりのたちあがりをもつもの（18）、口縁端部は丸いが、たちあがりが1.5㎝前後の高さを有するもの（19～24）、そして、たちあがりの高さが1.3㎝前後のもの（25～32）、1.0㎝前後のもの（33、34）に細分できる。18はやや内傾して伸びるたちあがりをもち、口縁端部内側にしっかりした段を有する古式の要素をもつものである。19～24の身は口縁端部が薄く尖り気味のものが多い。全体の器形の分かる21は口径13.2㎝、器高4.9㎝を測る大形のものである。底部はやや平らで、底体部の2分の1に右回転による回転ヘラ削りを施す。また、受部はやや上方に短く伸び、端部は丸い。25～32はたちあがりが内傾するものとやや外反気味に伸びるものがあり、器高はやや低い。また、33、34はたちあがりが大きく内傾し、その高さが低く、やや新しい要素をもつものである。口縁端部は33が薄く尖り気味で、34は丸い。

蓋付埦の蓋(35～37、39～43)は凝宝珠様のつまみがつくものと輪状のつまみがつくものがある。前者は口径が大きく、器高の低い扁平な蓋で、全体の器形が分かる35は口径17.1㎝、つまみを含めた高さ2.0㎝を測る。天井部はなだらかに内湾し、口縁部は短く屈曲し、端部に至る。端部は丸い。つまみは径2.5㎝、高さ1.0㎝あまりを測り、天井部には回転ヘラ削りを施す。36は口縁部が短く直立し、断面が鳥の嘴状を呈する。37は35と同様の器形をもつものである。輪状のつまみがつくものとしては39～43がある。41は口径12.5㎝、器高3.6㎝を測る。天井部はほぼ平らで、ゆるやかに内傾して下り、口縁部はやや外傾して端部に至る。端部は鳥の嘴状を呈し、口径6.7㎝を測る。輪状のつまみはやや外傾して伸び、端部は丸い。42は口径13.4㎝、器高3.4㎝、つまみの径7.3㎝を測り、口縁端部は丸い。43は口縁部が短く内湾し、端部内側に凹面をもつ。39は41と同様の器形をもち、40は器高がやや高く、口縁部は短く外傾し、端部は尖る。38、44、45は高台のつく埦である。38は口径12.7㎝、器高4.5㎝、底部径9.0㎝をそれぞれ測る。口縁部は内湾気味に上り、端部近くでわ



第 108 図　C地区 7 層出土遺物実測図(1)



第 109 図　C地区 7 層出土遺物実測図(2)

ずかに外反する。44はやや高めのしっかりした高台がつく。45は器壁の薄いやや小さめの高台がつく。

瓽は口縁部と体部の破片がそれぞれ1点出土している。52は頸部から口縁部にかけての破片で、頸部はやや外反して上り、波状文を有する。口縁部と頸部の境には断面三角形の凸帯がめぐり、口縁部はやや内湾気味に上り、端部は凹面をもつ。66は内湾して下る体部片である。上方に径1.5㎝の円孔を有し、沈線、刺突文等の文様はもたない。

高坏（53～62）はほとんどが脚部の破片で、低脚のもの（53、56、58）、長脚のもの（54、55、57、59、60）、それに、やや新しい器形をもつもの（61、62）の3つに分けられる。低脚の53は底部径12.5㎝を測り、やや外反して下る脚柱部に長方形のスカシ、カキ目を有する。脚裾部は短く内湾し、端部は丸い。56は脚柱部に台形のスカシをもち、裾上部に凸帯がめぐり、内湾して端部に至る。また、58は内傾して下る脚部に円形のスカシを有し、端部は尖り、底部は平らである。そして、54、55、57はラッパ状に開く脚部をもち、端部は丸く、脚部に長方形のスカシをもつ。60は脚柱部がほぼ直立して下り、下方で外反して開くもので、縦長の1段スカシをもつ。59は口縁部を欠くが、無蓋高坏の破片で、坏底部にクシ状工具による刺突文を施し、脚部は60のような形態をなすものと思われる。61、62は脚部の退化したもので、ラッパ状に開く脚部をもつが、その高さは低い。

提瓶は破片が2点出土している。64は背面が平らで、65はやや外反する口縁部をもつ。

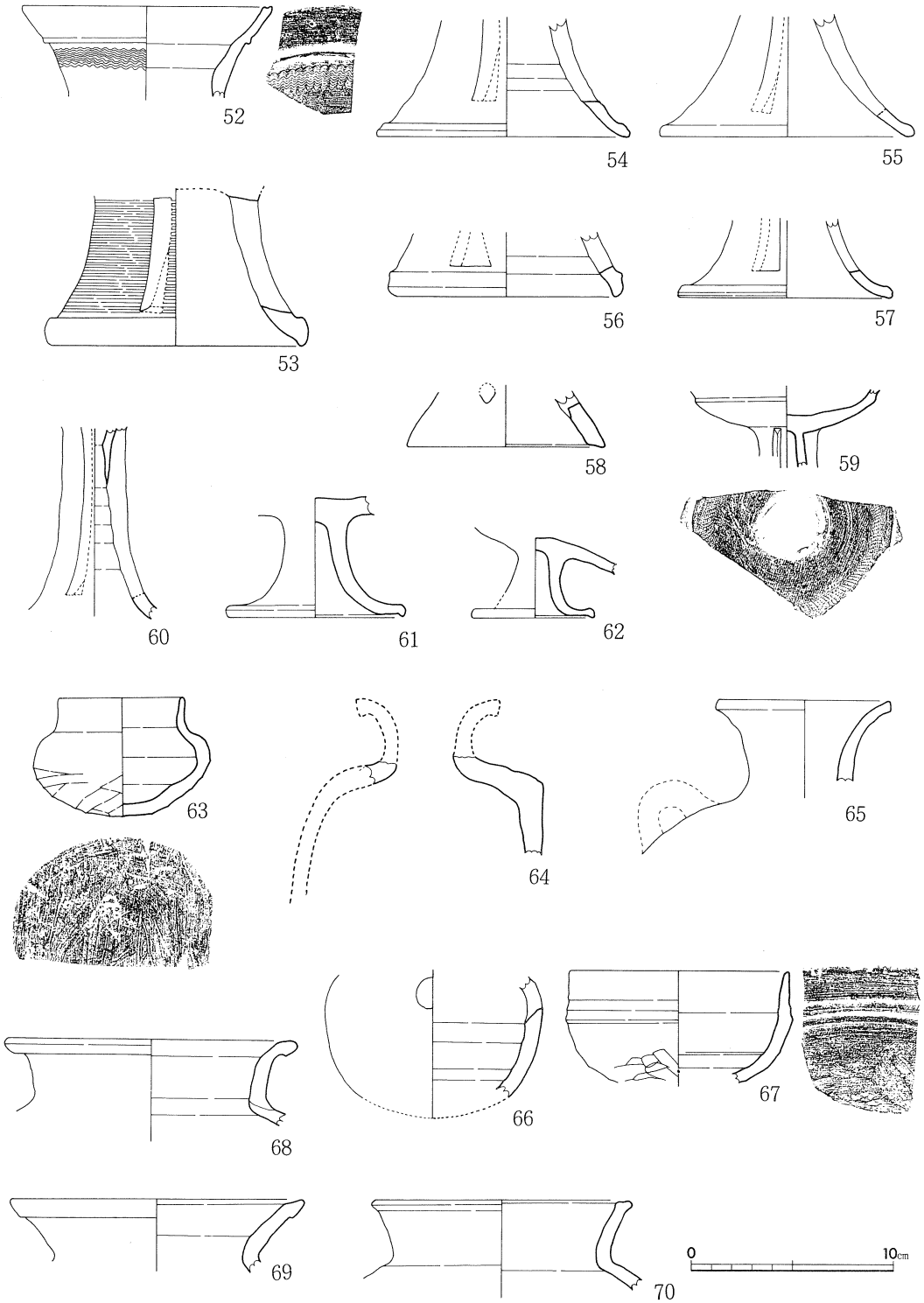
67の坏は底部に手持ちヘラ削りを施し、口縁部はほぼ直立して伸び、端部は丸い。

63の短頸壺は口径6.2㎝、器高5.9㎝を測る。口縁部はやや外反して上り、端部は丸い。肩部から胴部にかけて大きく内湾し、底部は丸い。底体部の2分の1には手持ちヘラ削りを施す。

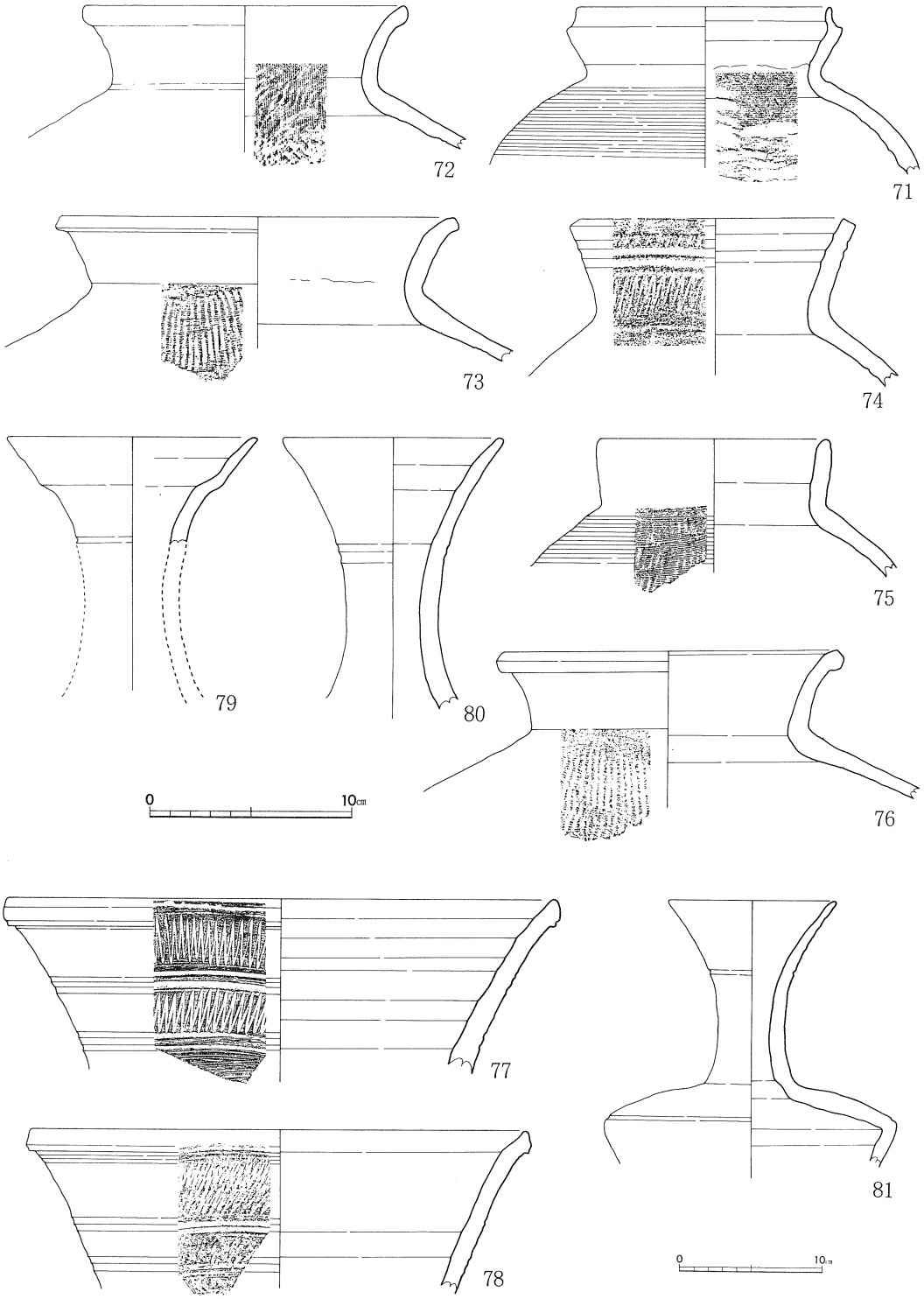
68～70は壺と思われる口縁部の破片である。68は口径14.4㎝を測る。頸部はやや外傾して上り、口縁部は丸い、頸部と肩部の境には粘土を接合した痕跡がある。69は大きく外傾する頸部に端部がやや尖った口縁部がつく。70は口縁端部がやや凹んだ平面をもつ。

71は有蓋脚付壺になるものと思われる破片である。頸部はやや外傾して伸び、口縁部は外反し、端部は丸い。頸部と口縁部の境に蓋坏の身のような短い受部をもち、口縁部の器壁は薄い。肩部はなだらか下り、この部分にカキ目を施す。また、内面にはタタキを有する。

72、73、76は壺ないし甕の口頸部で、頸部はいずれも外反して伸びる。口縁部は72が内湾、73は内傾、そして、76は「く」の字形に屈曲している。肩部の内外面にはタタキを有する。74、75は二次加工された壺ないし甕の破片である。74は頸部の中程から切り取られた口縁部をもち、頸部に2本の沈線、波状文を有する。また、75は切り取って二次的に加工した口縁部が面取りされて丸みをもつ。頸部はやや内湾して伸びる。肩部外面にはタタキの後にカキ目を施す。77、78は大形の甕の口頸部片である。77は推定口径38.6㎝を測り、頸部には沈線および波状文を有する。口縁下部には沈線がめぐり、口縁部はゆるやかに内湾して上る。78は77とほぼ同様の器形をなしているが、頸部の文様が少し雑であり、推定口径は35.0㎝を測る。



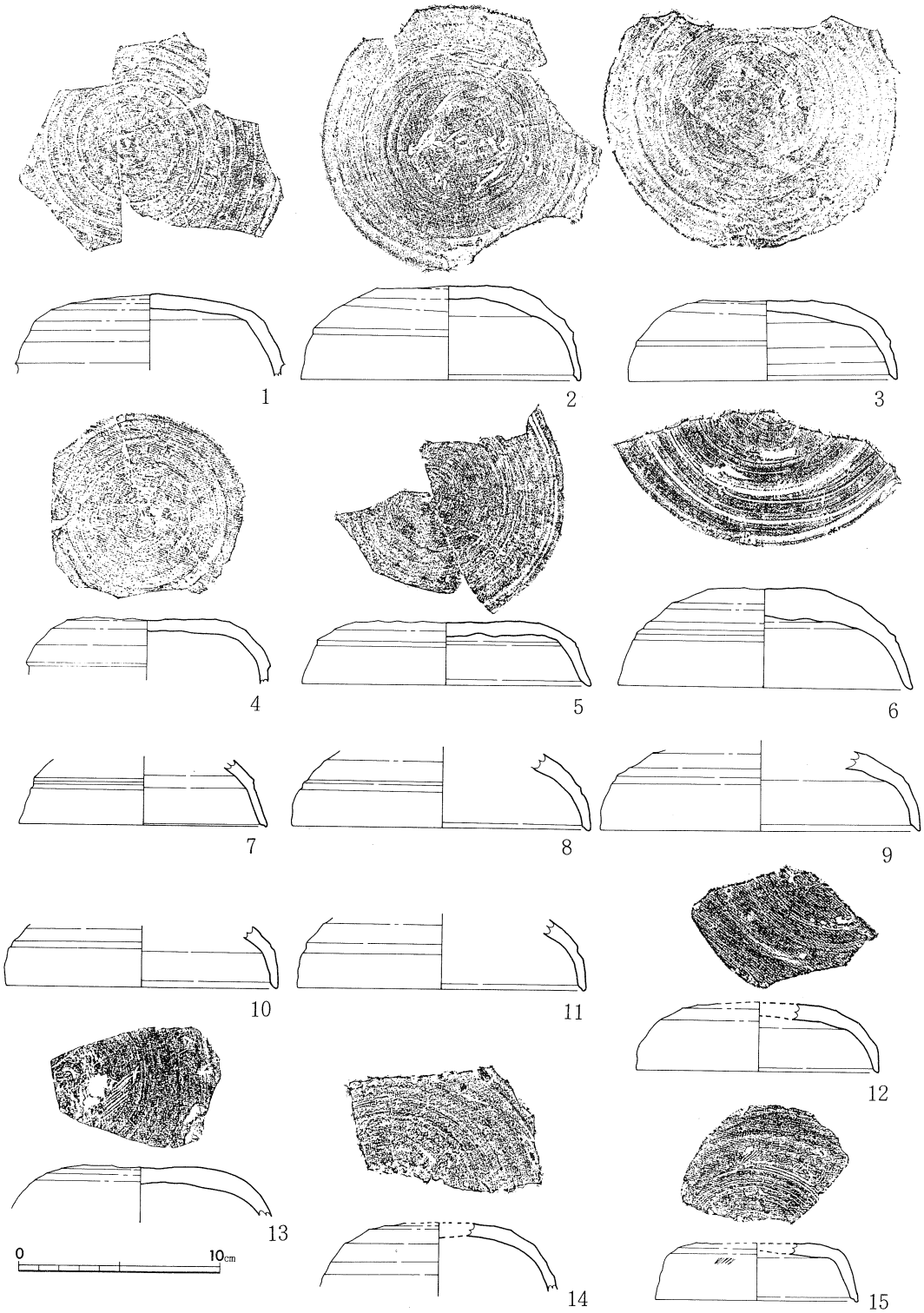
第 110 図　C地区 7 層出土遺物実測図(3)



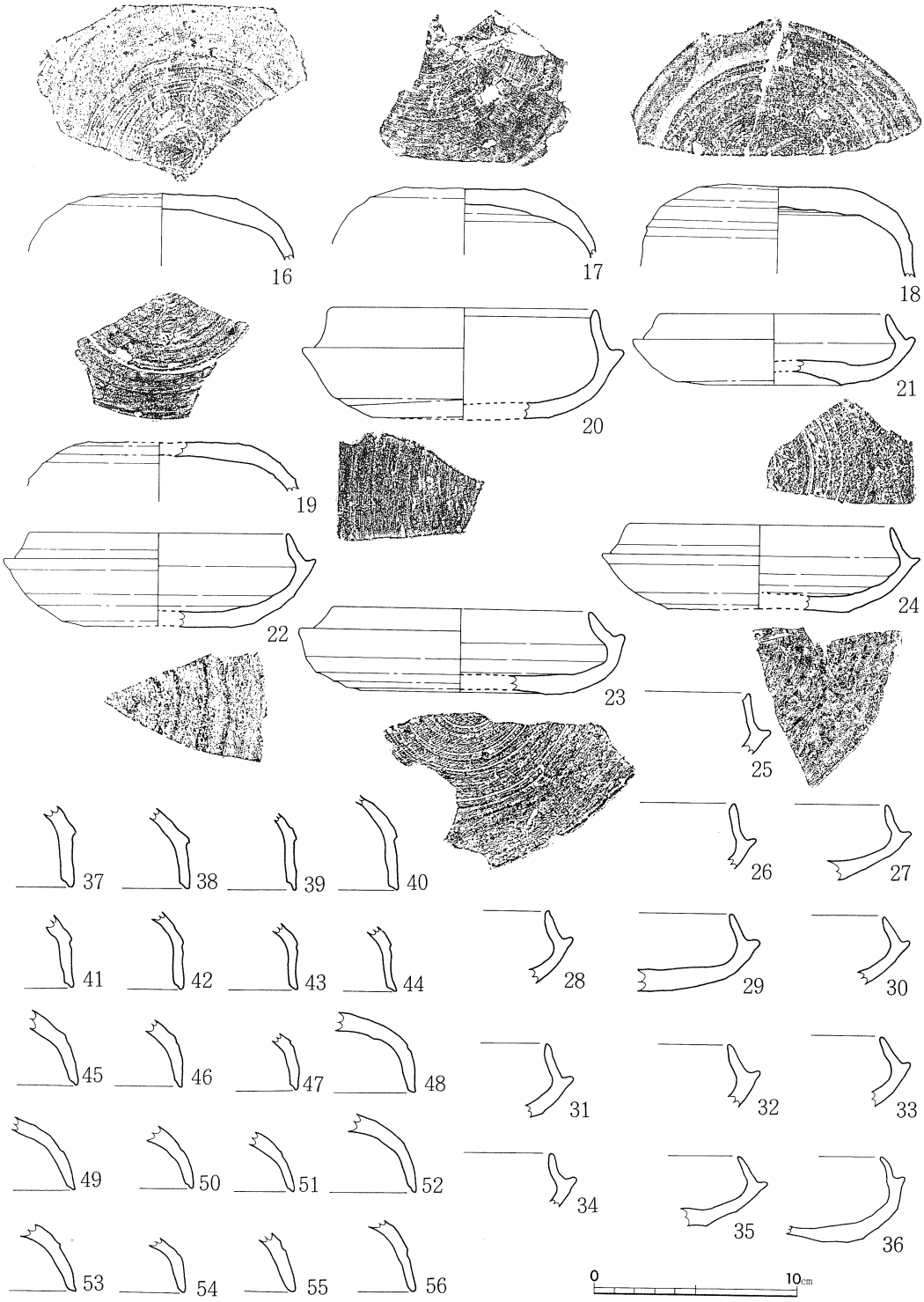
第 111 図　C地区 7 層出土遺物実測図(4)

長頸壺は３点（79～81）出土している。79は頸部と口縁部の境にゆるやかな段をもち、口縁部は内傾して伸びる。頸部の上方に１本の沈線がめぐる。80は頸部の中程に２本の沈線を有し、口頸部は大きく外反して端部に至り、口径10.8㎝を測る。81は口径10.7㎝、口頸部は外反して上り、端部は丸い。また、端部に１本の沈線を有する。肩部はやや丸みをもって大きく張り、胴部との境に沈線がめぐる。

８層　８層から出土した遺物には蓋坏、高坏、瑳、提瓶、短頸壺、器台、脚付壺、壺、甕等の須恵器のほか、円筒埴輪、土師器がある。蓋坏の蓋は古式の特徴をもつもの（Ａ類）、Ａ類が退化したもの（Ｂ類）、やや新しい形態を呈するもの（Ｃ類）の３つに分けられる。Ａ類の１、４は口縁部を欠くが、稜はしっかりした段を有し、やや平らな天井部には左回転による回転ヘラ削りを施す。口縁部はほぼ垂直に下るものと思われる。Ｂ類の２、３、５～11は稜に段ないし沈線を有し、口縁部はやや内傾して下るもので、口縁端部はＢを除き内側に内傾する凹面をもつ。また、稜に段をもつ蓋は２、３、７がある。２は口径14.0㎝、器高4.7㎝、口縁高2.6㎝を測り、天井部はやや平らで、右回転による回転ヘラ削りを施す。３はやや丸みのある天井部をもち、口径13.3㎝、器高4.0㎝、口縁高2.0㎝あまりを測り、２と比べやや器高が低い。また、７は稜に明確な段をもち、口縁部は内傾して下る。天井部を欠くが、この土器は短頸壺等の蓋になる可能性がある。稜に沈線がめぐる５、６、８～11は口縁高が2.5㎝あまりのものと2.0㎝前後のものがある。前者の６、９は他の土器よりやや大形のもので、６は口径14.5㎝、器高5.0㎝を測る。天井部はやや丸く、右方向の回転による回転ヘラ削りを施す。天井部の器壁は厚さ1.5㎝あまりを測り、口縁端部にむかって徐々に薄くなる。口縁端部ははっきりした凹面をもたず、丸い。９は推定口径16.0㎝を測り、口縁部はやや内湾して下り、端部内側に凹面をもつ。稜の沈線は浅い。後者は口縁部が内湾して下り、口縁端部内側に凹面をもつものが多い。しかし、５は口縁部がやや内傾して下り、天井部は平らで、口径14.5㎝、器高3.1㎝を測る。器高のやや低い蓋である。Ｃ類には12、15が含まれる。これらの蓋は口径がやや小さく、天井部と口縁部の区別がないものである。12は丸い天井部からそのまま内湾して口縁端部に至る。口縁端部内側にはやや丸みをもつ斜面がある。天井部は回転ヘラ削りを施し、焼成は良好である。推定口径12.0㎝、器高3.2㎝あまりを測る。15は天井部が平らで、大きく屈曲した後、内湾して口縁端部に至る。口縁部内側には凹面をもち、天井部は右方向の回転による回転ヘラ削りを施す。13～14、16～19は蓋の天井部の破片で、いずれも回転ヘラ削りを施す。身は口径の推定できる破片が５点あまりしか出土していない。20は古式の須恵器の要素をもつ身で、たちあがりはやや内傾して伸び、口縁端部内側に斜面を有する。たちあがりの高さは2.0㎝を測る。底体部には左方向の回転による回転ヘラ削りを施し、受部はほぼ水平に短く伸び、端部は丸い。推定口径13.2㎝、器高5.5㎝を測る。21～24はたちあがりの高さが1.2㎝～1.5㎝あまりで、内傾して伸び、口縁端部は薄くて丸い。底体部には回転ヘラ削りを施す。推定口径は21がやや小さく、11.2㎝あまり、22、23が12.8㎝、24は13.0㎝を測る。また、たちあがりは23がやや低く、内傾する角度



第112図　C地区8層出土遺物実測図(1)



第 113 図　C地区 8 層出土遺物実測図(2)

が大きい。なお、25～36は身の小破片、37～56は蓋の小破片で、蓋は稜に沈線が段を有するものが圧倒的に多い。

高坏は低脚と高脚のものがある。低脚高坏は内傾や外反する脚部に長方形等のスカシをもつもので、ほとんどが脚部にカキ目を施す。脚裾部は凸帯がめぐり、「く」の字形に屈曲する61、「く」の字形にゆるやかに内湾する57、58、59、60、やや外傾する62、それに、脚端部が「＼」状に尖る63がある。底部径をみてみると、13.0㎝～13.6㎝のやや大形の57、58、10.5㎝あまりの中形である59、60、それに、小形の61、62がある。63は脚部に円形のスカシをもつものと思われる。高脚の高坏は脚柱部の上方から外反気味に下るタイプ（64、65、67、69、70）とほぼ垂直に下り、下方で大きく開くタイプ（66、68）がある。これらの高坏は脚部上方を欠くものが多いが、スカシは1段になるものと思われ、脚端部は丸い。

瑳は大形瑳の体部片と思われるもの（71）がある。71は体部の最大幅13.8㎝を測り、上方にカキ目を施す。また、底部は丸く、器壁は全体的に厚い。内面の底は段をなす。

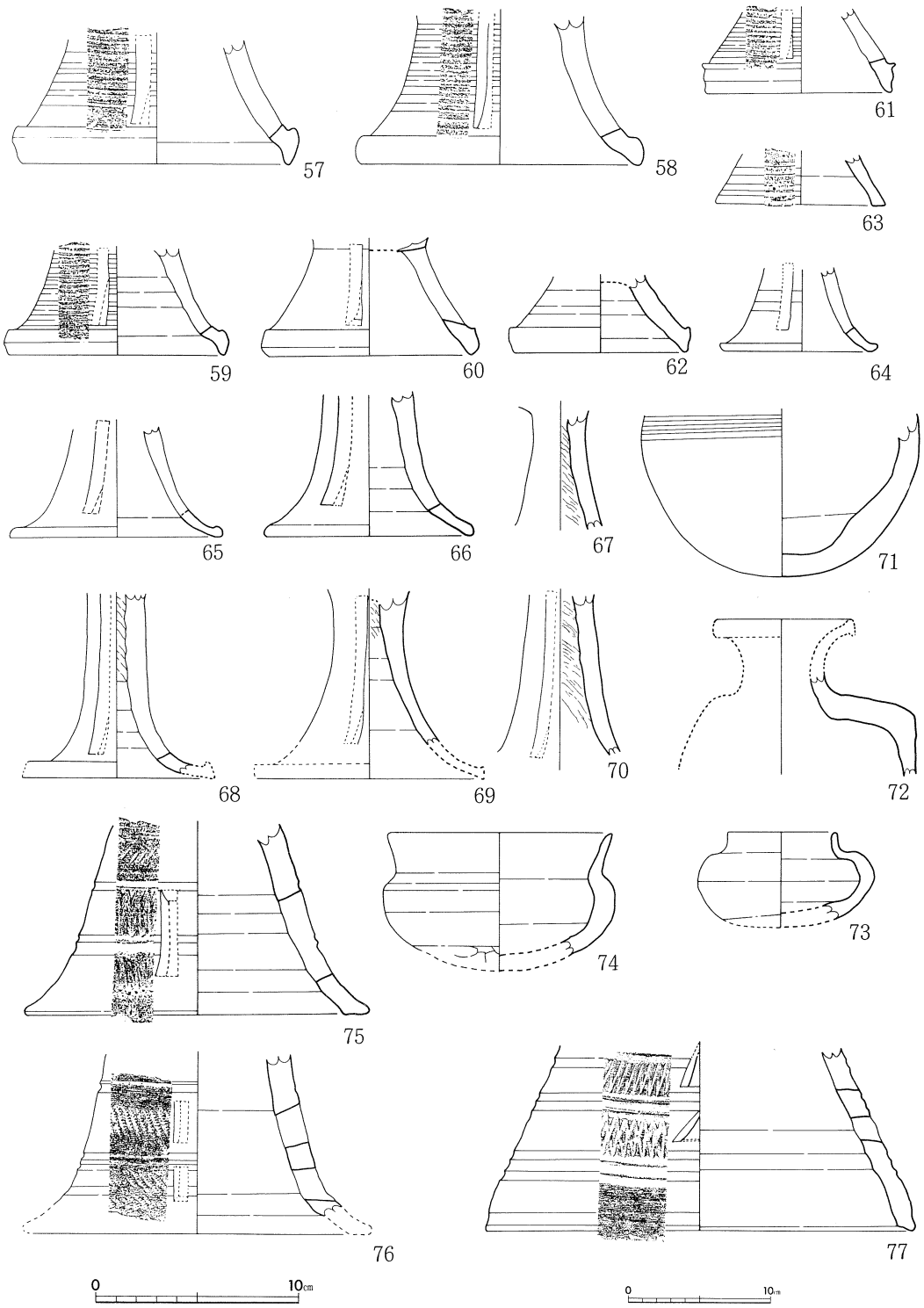
72は提瓶の背面部分の破片である。73、74は小形の短頸壺である。73は口径5.2㎝あまりを測る。口縁部は短く外反し、肩は少し張って大きく内湾しながら底部に至っている。底部には回転ヘラ削りを施す。74は口縁部がやや外傾して伸び、端部は丸い。肩部はゆるやかに内湾しながら底部に至る。底部には手持ちヘラ削りを施す。推定口径11.0㎝を測る。

75、76は脚付壺等の脚部になるものと思われる。75はやや外反しながら下る脚部に3本の沈線と刺突文、スカシを有し、底部径15.2㎝あまりを測る。76は75と同様の器形をなし、脚部にクシ状工具による刺突文がめぐる。

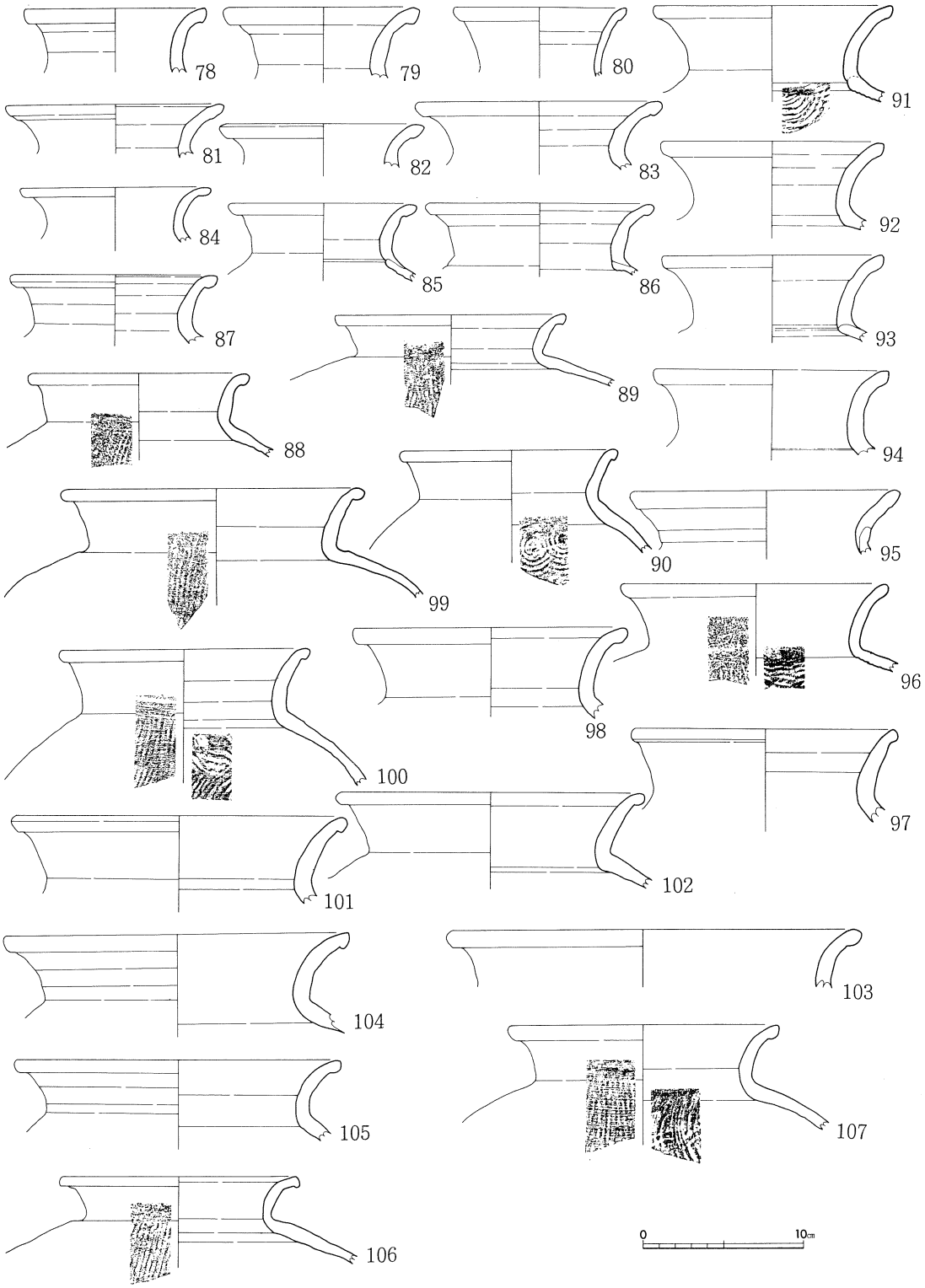
77は底部径が約30.0㎝あまりを測ることから、器台の脚部片と思われる。脚部はやや内湾して下り、わずかに内湾した後、端部近くで短く外反する。端部内側に内傾する凹面をもつ。脚部は5本あまりの幅広の沈線がめぐり、波状文および三角形のスカシを上下2段に施す。

壺甕類　ほとんどが頸部から口縁部にかけての破片である。大半が体部を欠き、壺と甕の区別が困難なものが多いため、ここでは壺、甕類として取り扱う。これらの土器は口径が10.0㎝～14.5㎝の小形品（A類）、14.5㎝～25.0㎝の中形品（B類）、33.0㎝～45.0㎝の大形品（C類）の3つに大きく分けられる。

A類（78～94、108）　頸部はやや外反して上り、口縁部は断面が丸いものが多い。78、79は頸部が直立して上り、口縁部近くで短く外傾し、口縁部はやや内湾して端部に至る。80は全体的に器壁が薄く、81～83は口縁端部がやや尖る。84～88は口縁部がやや外方に伸び、端部は丸い。89は外傾する短い頸部をもち、肩部は大きく外側に張り出す。90は肩部がなだらかに下る。91～94は頸部がやや外反して上り、口縁部は直立ないしやや外傾して口縁端部に至る。108は壺の口頸部片で、やや外傾する頸部に凸帯がめぐり、波状文を施す。口縁部は内湾気味に上り、口縁端部側に斜面をもつ。



第 114 図　C地区 8 層出土遺物実測図(3)



第 115 図　C地区 8 層出土遺物実測図(4)

B類　B類は口縁部の形態から9つに細分できる。すなわち、口縁部が大きく内湾し、断面の丸いもの（Ⅰ）、口縁部下方に凸帯がめぐるもの（Ⅱ）、口縁部中程が凸帯状を呈するもの（Ⅲ）、口縁部が「く」字形にゆるやかに湾曲するもの（Ⅳ）、口縁部が直立するやや内傾するもの（Ⅴ）、口縁端部が突き出るもの（Ⅵ）、二次加工された口縁部をもつもの（Ⅶ）、直口する口縁部をもつもの（Ⅷ）、口縁端部に平面をもつもの（Ⅸ）である。

Ⅰ（95～106）は外反する頸部から外側に短く開き、大きく内湾して口縁端部に至るものが多い。94、95はやや外反する頸部からそのまま口縁部に至る。99、106、107は肩部が大きく張り、100は肩部がなだらかに下る。これらの土器は体部の内外面にタタキを施す。また、107は頸部が短く低い。

Ⅱ（109～113）は口縁部下方に1本の凸帯がめぐり、口縁部が内湾してそのまま端部に至るものと内傾して上方に伸びる2つのタイプがある。前者（109、110）は外傾する頸部に2本の凸帯がめぐり、凸帯の上下にヘラ描きの文様を施す。後者（111～113）は頸部にカキ目をもつ。これらの土器は古式須恵器の特徴をそなえている。

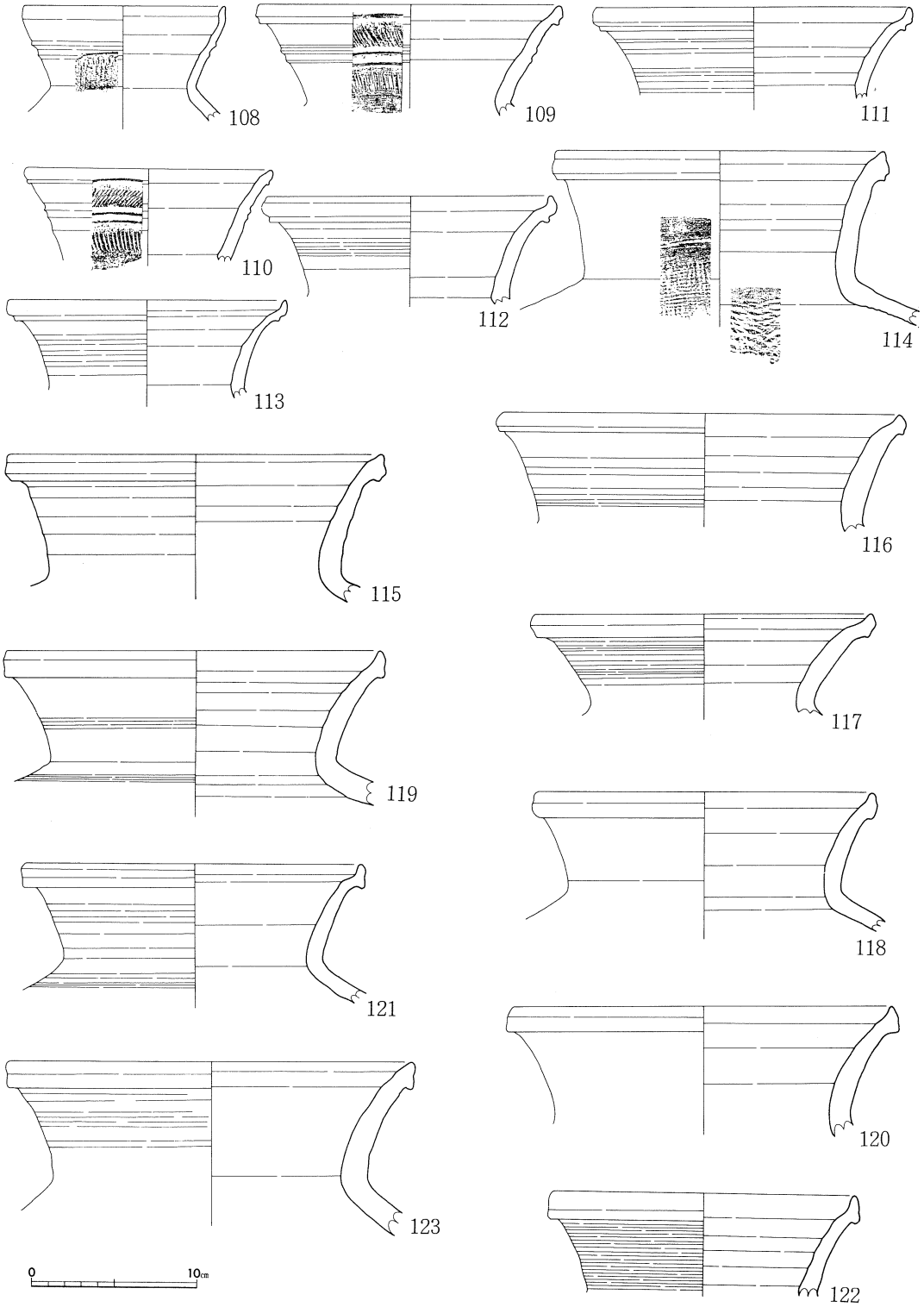
Ⅲ（114～120、130、131）は114～117のように口縁部の上下が外反して中ほどが凸帯状を呈するものとゆるやかに屈曲している118～120、130、131の2つに分けられる。また、130、131は口縁部が上方にやや伸び、端部内側に段をなす。116、117、119、130、131の頸部にはカキ目が施され、116の頸部は器壁が他のものと比べやや厚い。

口縁部が「く」の字形に屈曲するⅣ（121～124、128、129、132～134、169）は口縁部が上方に伸び、口縁端部内側に段をもつもの（121、122、128、129）と口縁部がほぼ直立するもの（123、124、169）、そして口縁部が内傾して口縁部下方が外側に飛び出すもの（132～134）に分けられる。132を除き、頸部にカキ目を施し、頸部はほとんどが外反して伸びているが、121、124、132は外傾して上り、口縁部近くで短く外反する。124は口縁部上下の端部が鋭い。また、123、124は全体的に器壁が厚い。

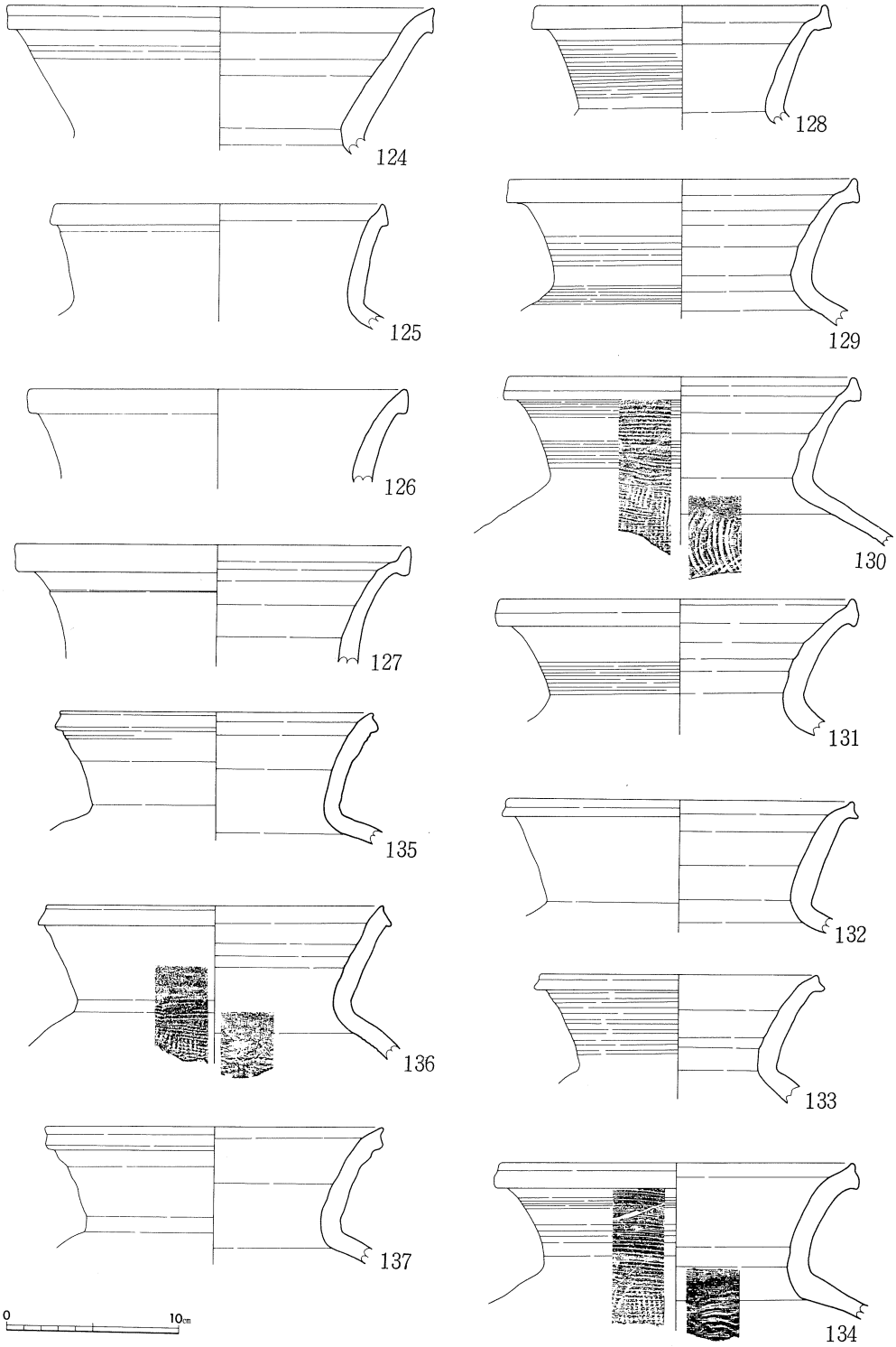
Ⅴ（125～127、168）は口縁部がやや内傾するもの（125、168）と口縁部がほぼ垂直に上るもの（126、127）に分けられる。125、127は口縁端部内側に段をなし、127は頸部がやや外反して開く。また、168は肩部がやや張り、内外面にタタキを施す。

Ⅶ（135～137）は口縁部が内傾して伸び、端部近くで短く外反し、端部は外側に短く突き出ている。頸部は135、137がやや外傾して上り、内湾して口縁部に至っている。また、136は頸部が内傾して伸びる。

二次加工された口縁部をもつⅦ（139～143）は頸部の中ほどから切り取って口縁部を新たに造ったもので、口縁部が内傾するもの（139、142、143）と面取りされて端部が丸いもの（140、141）の2つに分けられる。前者は頸部にカキ目を施し、器壁の厚いものが多い。後者は器壁が薄く、140は頸部がやや外傾し、肩部はなだらかに下り、カキ目を施す。そして、141は頸部にカキ



第116図　C地区8層出土遺物実測図(5)



第 117 図　C地区 8 層出土遺物実測図(6)

目を施す。

直口する口縁部をもつⅧ（144～146、167）は口縁端部が平らなもの（144、146）、斜面をもつもの（145）、そして凹面を呈するもの（167）がある。145は口縁部にカキ目を施し、167は口縁部がやや内傾し、両肩部には半環状の把手がつく。また、144は口縁部の高さが低く、短頸壺になるものと思われる。また、145、167は口径が16.8㎝あまりを測る大形品で、146はやや小さく、口径12.0㎝を測る。

Ⅸの口縁端部に平面をもつものは138の1点が含まれる。頸部はやや外反して上り、口縁部はほぼ垂直で、口縁端部は幅0.8㎝の平坦面をもつ。

その他、A、B類の破片（147～164）がある。

C類　C類は大形甕の口頸部片で、口縁部下方にしっかりした凸帯がめぐるもの（170、171）、やや退化した凸帯をもつもの（172、173、175、178）、凸帯のないもの（174、176）に分けられる。

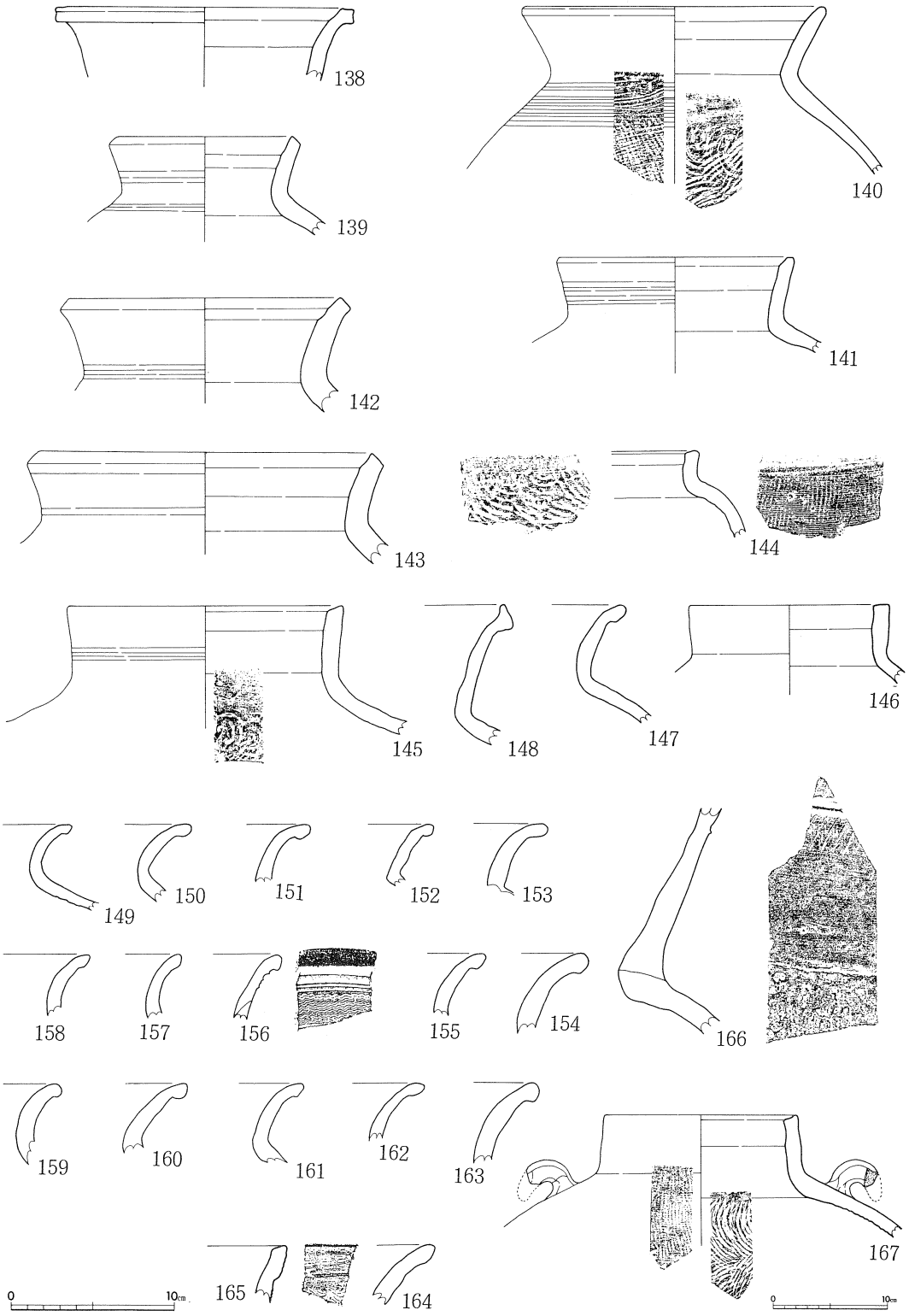
170は口縁部が逆「く」の字形にゆるやかに屈曲し、上方に伸びる。端部は丸く。端部内側に段をなす。頸部はやや外反して伸び、口縁部近くに断面三角形の鋭い凸帯がめぐる。また、頸部中ほどの上方に2本、下方に1本、それぞれ凸帯を有し、凸帯の上下に一条13本の波状文を施す。171は口縁部下方に2本の凸帯を有し、やや外反する頸部には沈線が上下にそれぞれめぐる。凸帯と沈線の間には一条7本の波状文を2列施し、沈線間には1列の波状文がめぐる。

口縁部下方の凸帯がやや退化する172、173は口縁部がやや内傾して伸び、頸部に幅広の沈線が3カ所めぐり、沈線間に波状文を施す。この波状文はカキ目の後に描かれている。また、175は口縁部がほぼ直立し、178は内湾して丸い。

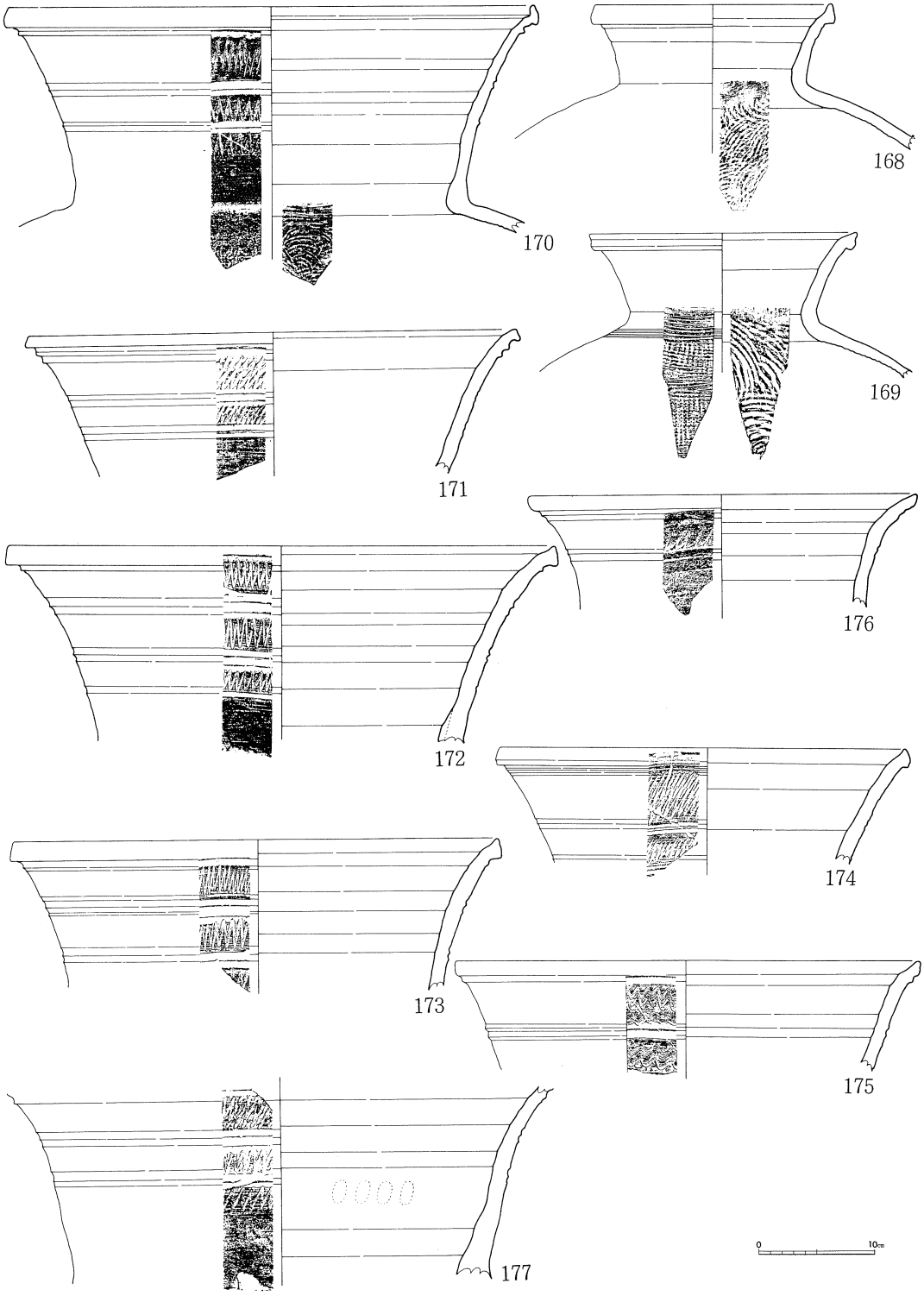
口縁部下方に凸帯が存在しない174、176は頸部に施されている波状文、沈線がやや雑で、174は口縁部が逆「く」の字形に屈曲し、176は口縁部ばほぼ直立する。また、176の頸部は上方で屈折し、外方にやや開いて伸びる。

蓋付埦（180～184）8層から奈良時代のものと考えられるやや時期の新しい蓋付埦が少量ではあるが出土している。180～182は凝宝珠様のつまみがつく蓋になるもので、口縁部は短くほぼ垂直に下り、端部は丸い。183は推定口径14.0㎝、器高3.2㎝を測る輪状のつまみのつく蓋である。また、184は埦の口縁部片で、口縁部はやや内湾して伸び、端部は丸い。

埴輪（185～202）埴輪は円筒埴輪で、185～188が口縁部片、その他はタガ部分の破片である。口縁部は大きく内傾し、端部に凹面をもつものが多い。タガは189～192、202がわりとしっかりしたもので、ほかはやや退化している。また、タガの端部は凹面をもつものが多い。189は円形のスカシを有する。これらの埴輪は外面が右下りのハケ目を施し、内面には指圧痕、ナデ調整が行われている。

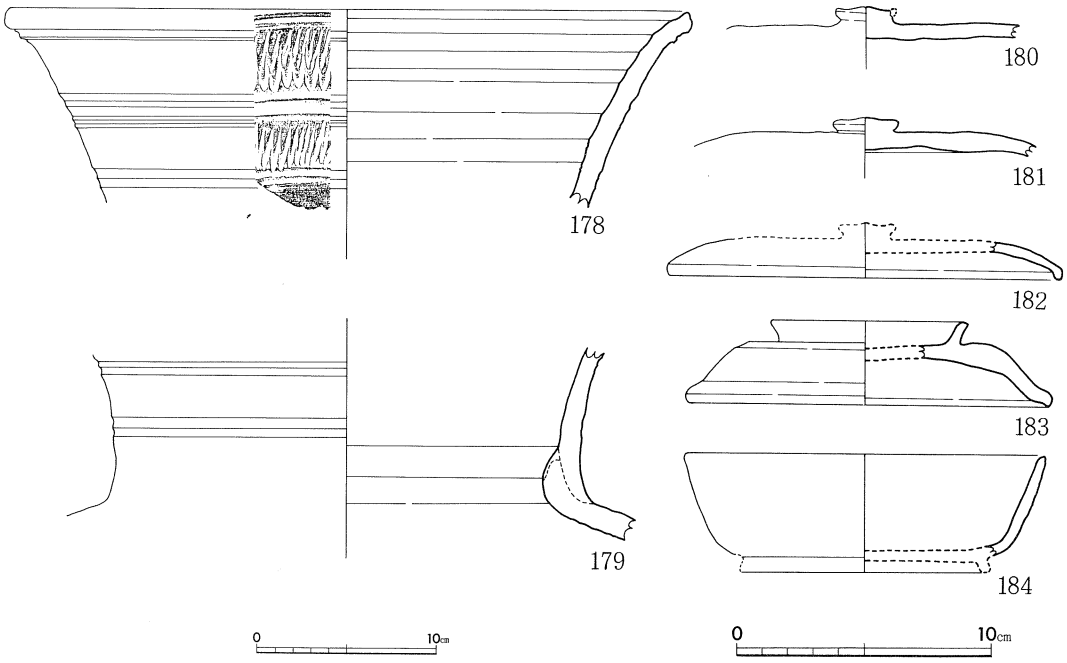


第 118 図　C地区 8 層出土遺物実測図(7)

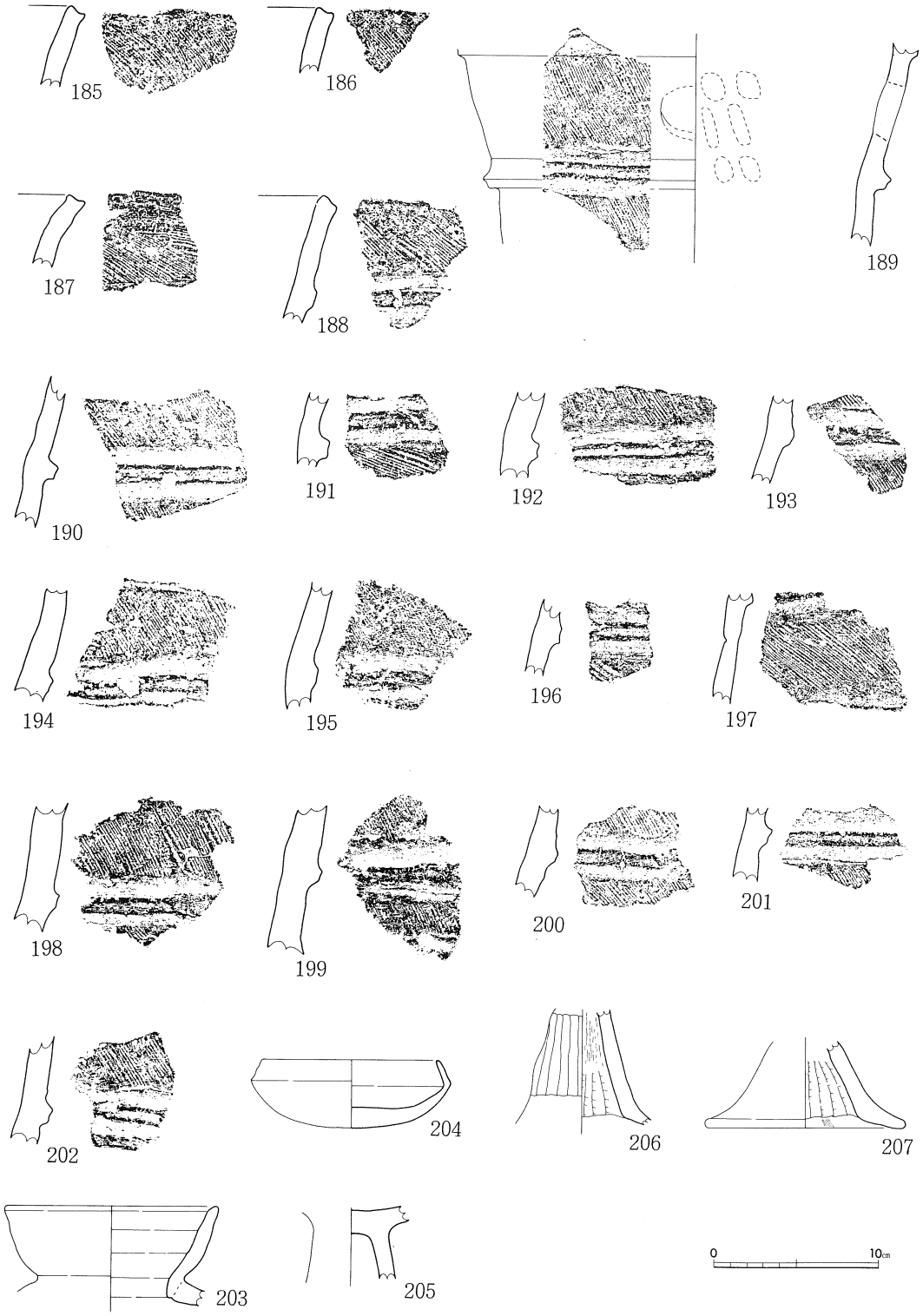


第 119 図　C地区 8 層出土遺物実測図(8)

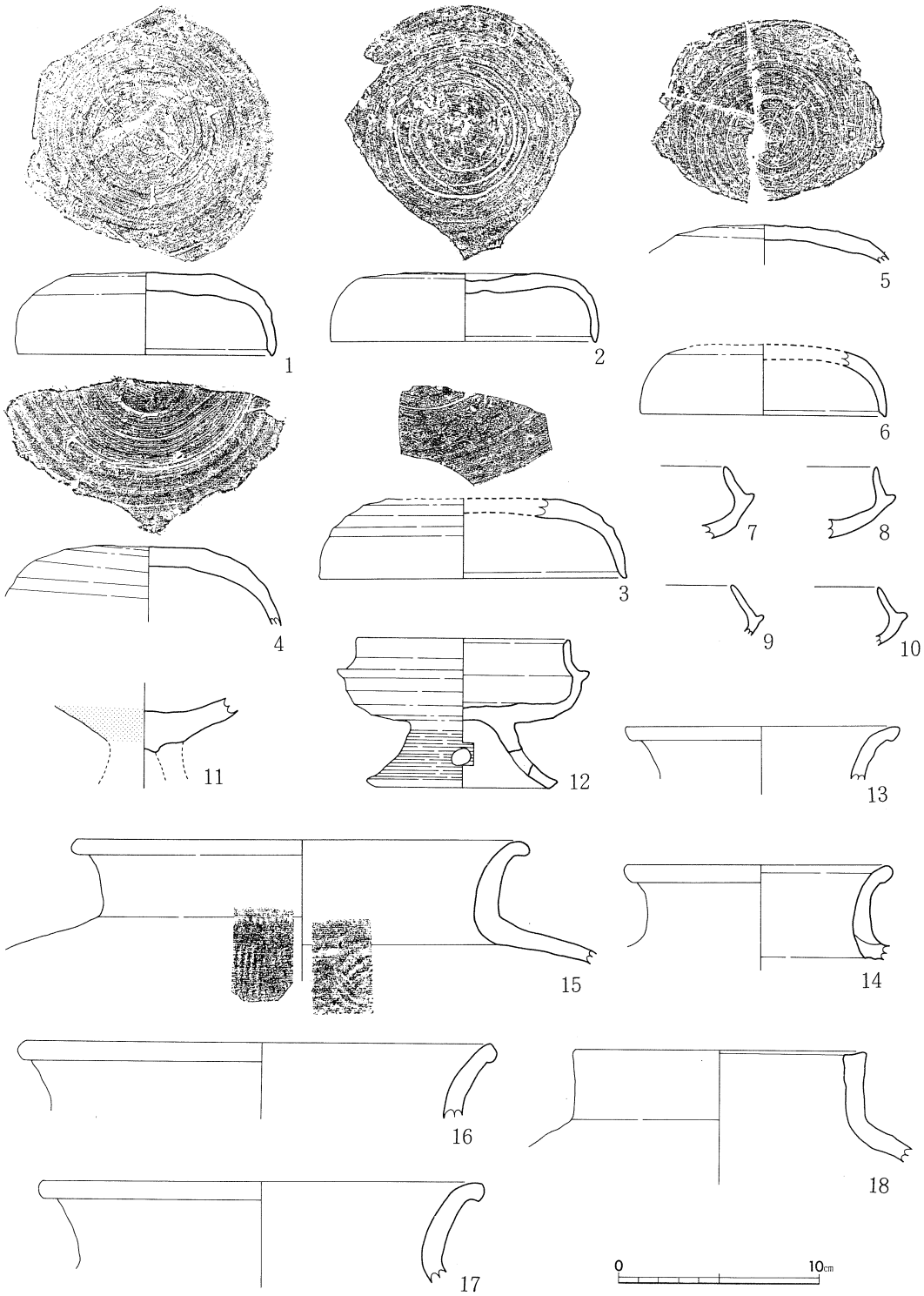
土師器（203 ～ 207）土師器は壺、坏、高坏がある。203 の壺は小形丸底壺の口頸部片で、口縁部はやや内湾して上り、端部は丸い。204 の坏は底部は丸く、体部と口縁部の境は逆「く」の字形に屈折する。口縁端部は丸い。205 ～ 207 は高坏脚部の破片である。206 は脚部の下方で外側に大きく開き、外面には縦方向にヘラミガキを施す。207 は 206 と同様の器形をなし、脚端部は丸い。



第 120 図　C地区 8 層出土遺物実測図(9)



第 121 図　C地区 8 層出土遺物実測図(10)



第 122 図　C地区 9 層出土遺物実測図

9層　蓋坏、高坏、壺、甕が出土している。蓋坏の蓋（1～6）は稜のないものが多い。1は口径12.6㎝、器高4.2㎝を測る。天井部はやや平らで、口縁部は内湾気味に下り、端部は内側に凹面をもつ。2は天井部がやや凹み、口縁部は内湾して下る。3は稜部に2本の幅広で浅い沈線がめぐる。4、5は蓋の天井部片で、右方向の回転による回転ヘラ削りを施す。6は1、2と同様の器形をなす。身（7～10）はいずれも小さな破片である。

11は土師器の高坏の破片である。12の高坏は有蓋高坏で、たちあがりはやや外反して伸び、端部は内側に凹面をもつ。受部はほぼ水平に短く伸び、端部は丸い。坏底部は回転ヘラ削りを施す。脚部はやや外反して下り、円形のスカシを有する。

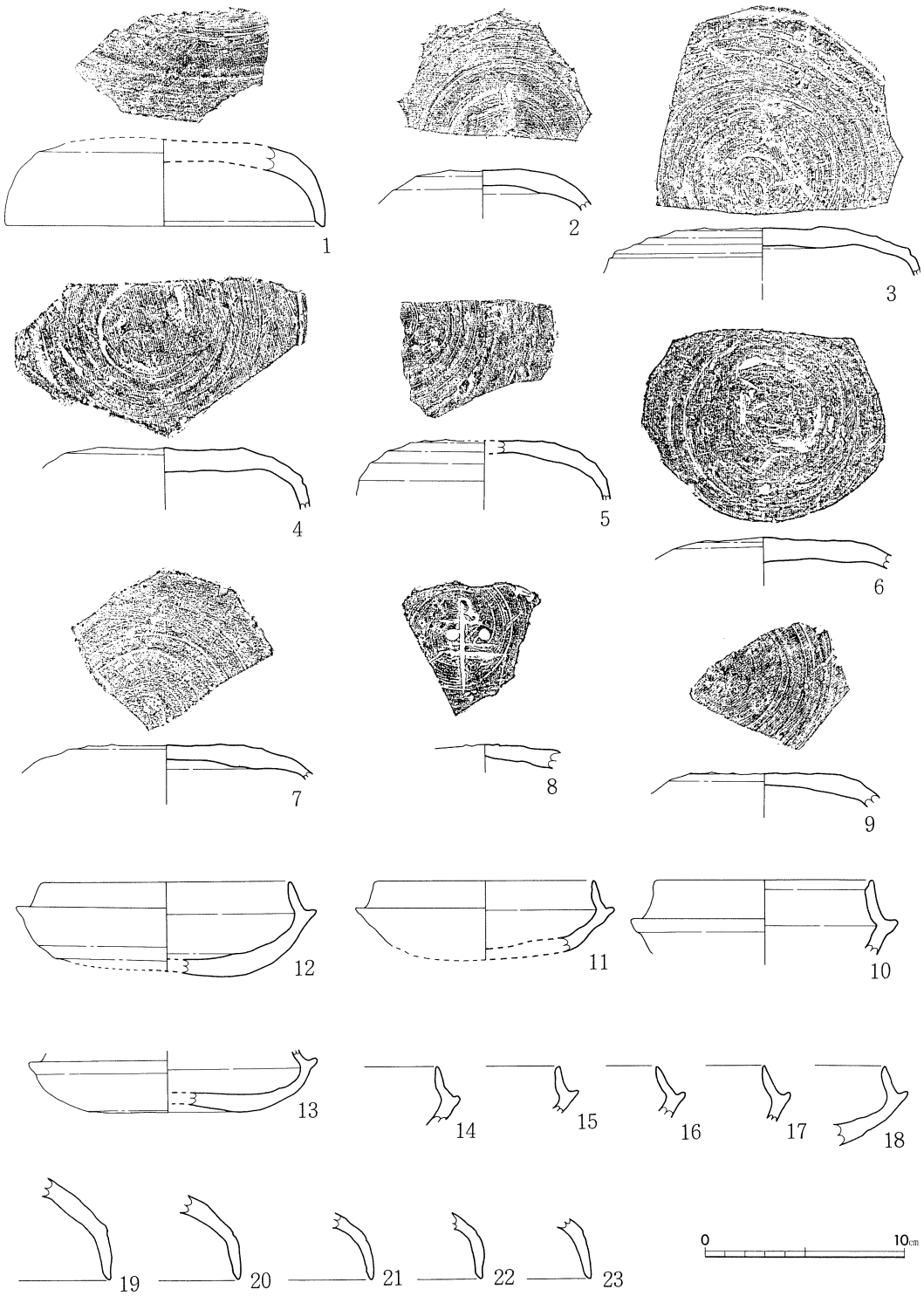
壺甕類は口径13.0㎝あまりの小形のもの（13、14）と口径が21.0㎝～25.0㎝の大形のもの（15、16）、さらに、直口壺（18）がある。13、14の口縁部は丸い。15は口縁部が外側にやや開き、端部は丸い。18の直口壺は口縁部がほぼ垂直に伸び、口縁端部はわずかに凹む平面をもつ。

10層　最下層の10層からは蓋坏、高坏、短頸壺の須恵器の他、埴輪、土師器が出土している。蓋坏の蓋（1～9）はほとんどが天井部の破片である。1は推定口径15.8㎝を測る。口縁部は内湾して下り、端部内側に斜面をもつ。4は稜に沈線がめぐる。2～9は天井部に右回転による回転ヘラ削りを施す。8の天井部には回転削りの後に、ヘラ記号が描かれている。身は口縁端部内側に凹面をもつものと薄くて丸いものがある。前者の10はやや外反して上るたちあがりをもち、受部はほぼ水平に短く伸び、端部は丸い。後者の12はたちあがりがやや内傾して伸び、底部はやや平らで、回転ヘラ削りを施す。13は口縁部を欠く。底部はやや上げ底で、受部は上外方に短く伸びる。17、18は身の口縁部片、19～23は蓋の口縁部片である。

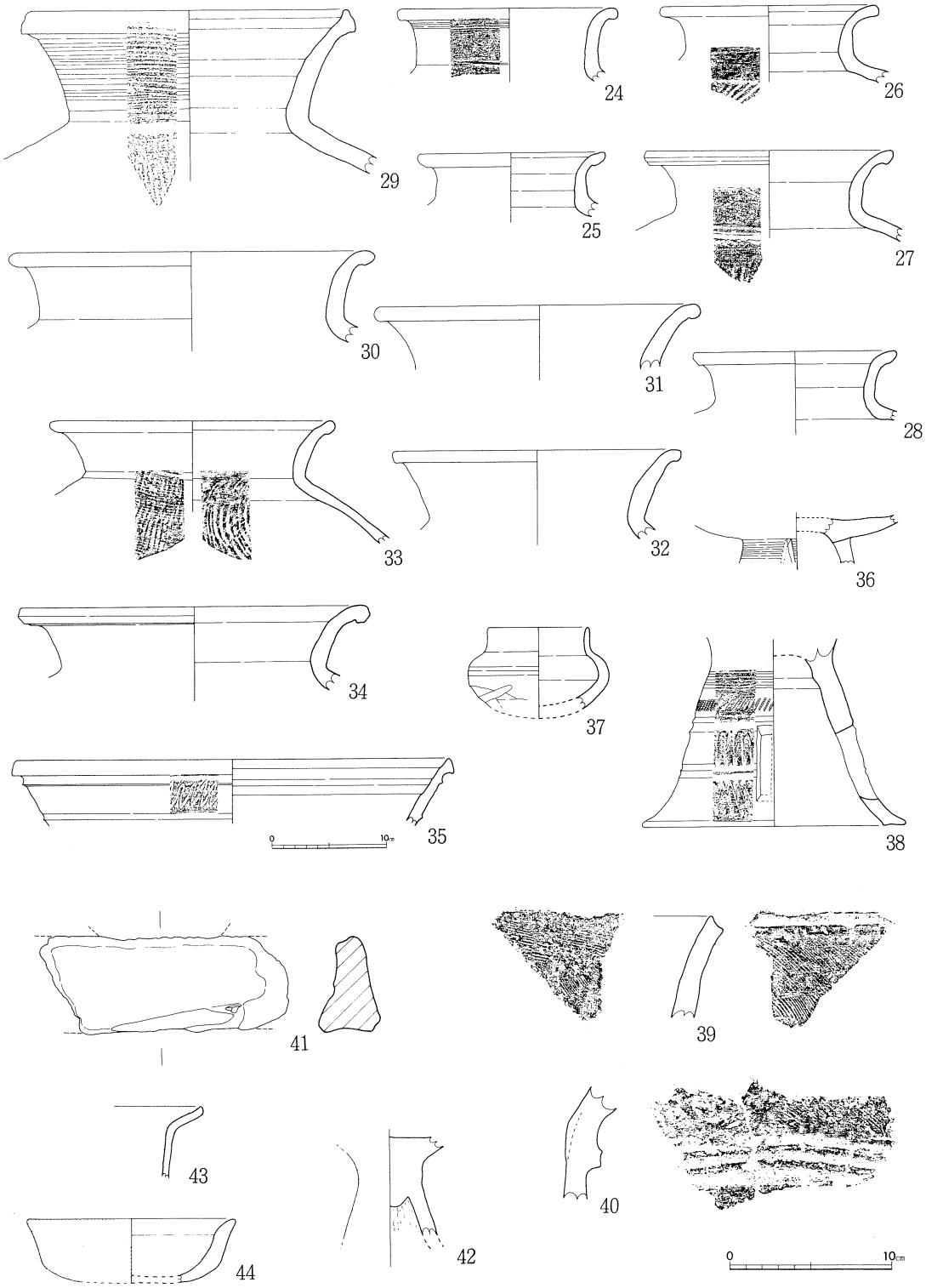
36の高坏は脚部にカキ目を施し、三角形のスカシを有する。37の短頸壺は口径6.2㎝を測る。口縁部はほぼ垂直に上り、端部は丸い。肩部はなだらかに下り、体部下方に手持ちヘラ削りを施す。38は脚付壺の脚部片と思われる。脚部はやや内湾して下り、脚部中ほどの上下に2本づつ沈線がめぐる。上方の沈線と坏部との間にクシ状工具により刺突文、沈線間および脚裾部に波状文を施し、長方形のスカシを有する。壺甕類は口縁部の丸い小形のもの（24～28）と中形のもの（29～34）、そして、大形のもの（35）がある。中形のものは口縁部が逆「く」の字形に屈曲するもの（29）と口縁部が丸いもの（30～34）に分けられる。

39～41は埴輪片である。39は円筒埴輪の口縁部片で、口縁端部は内傾した凹面をもつ。外面は右下りのハケ目を施し、内面は横方向、斜め方向のハケ目を施す。40、41はタガをもっているが、形象埴輪の破片と思われる。

42～44は土師器である。42は高坏の脚部片、43は甕の口縁部、そして、44は坏である。44は器壁が厚く、推定口径12.9㎝を測る。



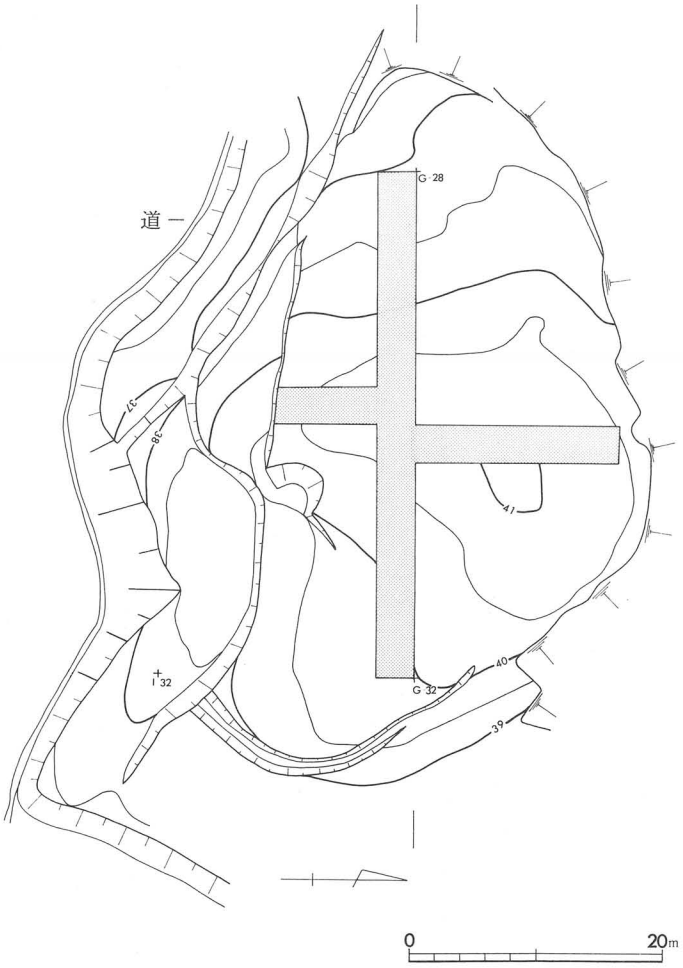
第 123 図　C地区10層出土遺物実測図(1)



第 124 図　C地区10層出土遺物実測図(2)

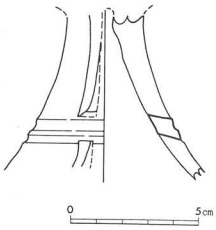
(9) D 地 区

調査区東端の調査区内最高所にあたる丘陵頂上部がD区である。頂上部には約60m×35mにわたるなだらかな平坦面があり、その周囲は段状に加工され、南側には一部石垣状の積石がみられたため、当初城跡の可能性を考えて試掘に入った。幅3mのトレンチを東西40m、南北27mの長さで設定し、試掘した結果、ほぼ調査区全域にわたって、深い部分では2m以上の深さまで粘土採取による撹乱が行なわれていたことが明らかになった。土地の人の話によると、戦後間もなく石州瓦生産のための粘土採取が、D地区周辺を中心に大がかりに行なわれたらしく、そのため、D地区に存した遺構等は、破壊されたと考えられた。

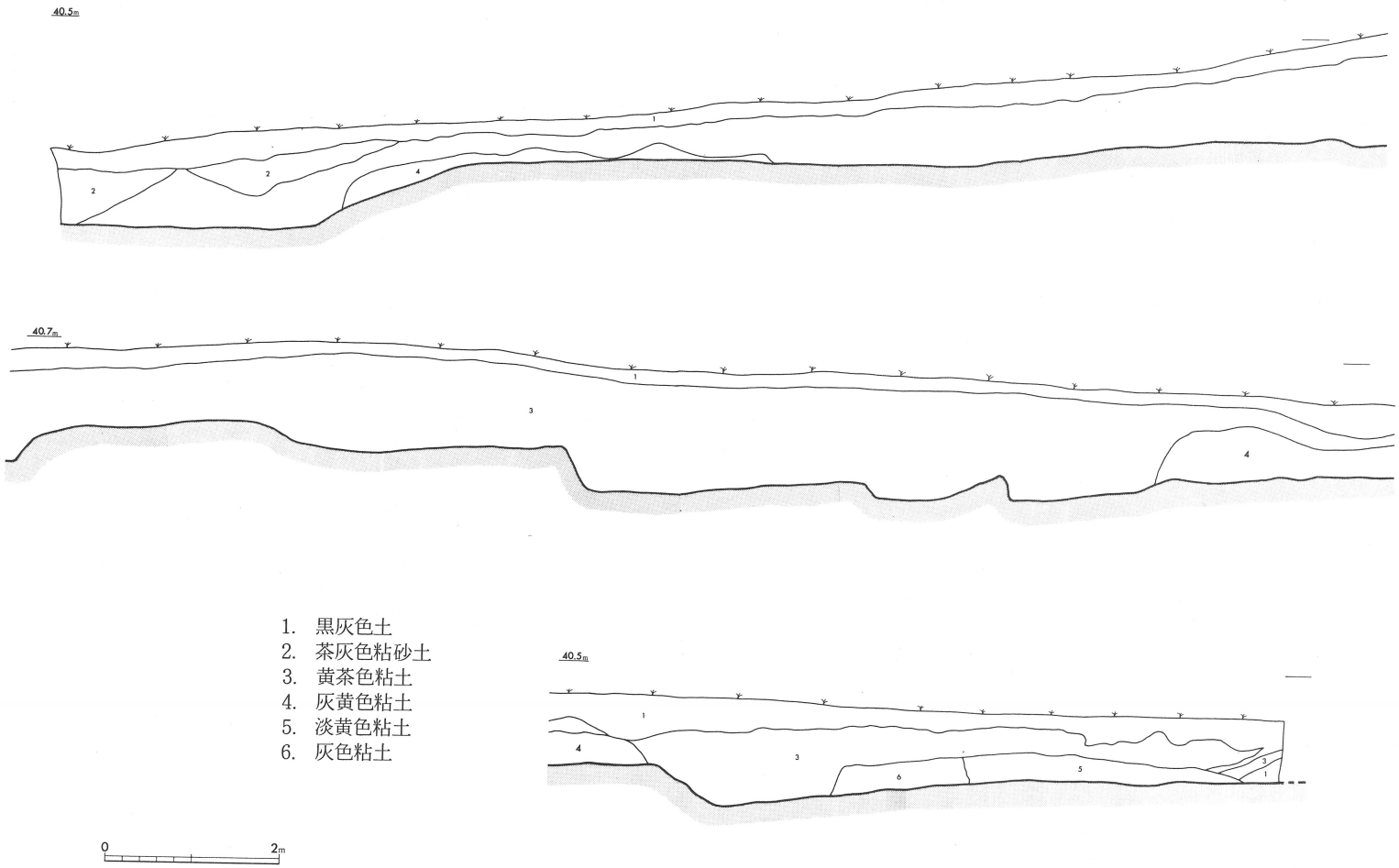


第125図　D地区地形測量図、トレンチ配置図

なお、南北方向トレンチの南端付近で、撹乱土層内より須恵器高坏片が出土している（第126図）。脚部片で、浅い凹線状の沈線をはさんで、その上下に長方形の透かしがはいる。大半を欠損しているため、明確ではないが、およそ6世紀後半～7世紀初頭のものと考えられる。こうした遺物の存在や、D地区が平野を見下す古墳築造の好適地であることを考えると、既に消滅しているものの古墳がD地区に存在していた可能性は大きいといえよう。



第126図　出土遺物実測図



第127図　D地区土層図

2. 出土土器観察表 第1号墳

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9－1 (P13)	短頸壷	口径 7.9 残存高 6.6	口縁部はほぼ垂直に立ち上り、端部は丸い。頸部は内傾して下る。	外面 回転ナデ 一部に指圧痕有 内面 回転ナデ 内面 回転ナデ	微砂粒を多量に含む	良好	淡灰色	
9－2 (P13)	高坏	口径径 不明 残存高 3.7	口縁部はやや外反して立ち上り、端部は丸い。	外面 坏底部に回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
9－3 (P13)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は内傾して下り、2条の沈線をめぐらす。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	微砂粒を含む	良好	青灰色	
9－14 (P13)	坏(土師器)	口径 不明 残存高 0.9 底部径 6.0	底部は平ら 口縁部、体部欠損	外面 糸切り 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	
9－15 (P13)	蓋坏(身)	口径 11.3 器高 3.9	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く、平ら。	外面 底部は回転ヘラ削りの後、板状工具によるナデを施す。 内面 中央部はナデで他は回転ナデ	微砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
9－16 (P13)	蓋坏(身)	口径 11.0 残存高 3.1	たちあがりは内傾後、短く外反し、端部は丸い。 器壁は全体的に薄い。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	微砂粒を含む	やや不良 軟質	白灰色	
9－17 (P13)	蓋坏(身)	口径 10.3 残存高 4.5	たちあがりは内傾し、端部は丸い。 受部は水平に伸び、端部は丸い。 底部は深く、やや丸い。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
9－18 (P13)	蓋坏(身)	口径 11.4 器高 4.0	たちあがりは内傾後、短く外反し、端部は丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底部はやや浅く、平ら。	外面 底部は回転削りの後、板状工具によるナデを施し、さらにナデで消去する。 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
9－19 (P13)	蓋坏(身)	口径 10.5 器高 3.8	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。 底部は浅く、やや平ら。	外面 底部に回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
9－20 (P13)	蓋坏(身)	口径 10.7 器高 4.2	たちがありは短く内傾し、端部は丸い。 底部は浅く、やや平ら。	外面 底部はヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ		やや不良	濃灰色	
9－21 (P13)	蓋坏(身)	口径 12.0 器高 3.8	たちあがりは内傾し、端部は丸い。 受部は上外方に伸びる。 底部は浅く、やや平ら。	外面 底部は回転削りの後、ナデを施す 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	濃灰色	
9－22 (P13)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 2.8	受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は平ら。	外面 底部は板状工具によるナデを施した後、回転削りをめぐらす 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	ロクロの回転右方向

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9－23 (P13)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 2.0	底部は平ら。	外面 底部は板状工具によるナデを施した後。回転削りをめぐらす 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	ロクロの回転右方向
10－24 (P14)	蓋坏(蓋)	口径 13.0 器高 4.5	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をなす。 天井部はやや高く丸い。	外面 天井部に回転削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
10－25 (P14)	蓋坏(蓋)	口径 13.0 残存高 3.5	口縁部は内湾気味に下り、端部はやや内傾し丸味を帯びた平面をなす。 天井部欠損。	外面 天井部は回転削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	若干砂粒を含む	良好	濃灰色	
10－26 (P14)	蓋坏(蓋)	口径 13.4 器高 4.3	口縁部はやや丸味をもって下り、端部付近で短く外反する。 端部は丸い。 天井部はやや高く、わずかに丸い。	外面 天井部は回転削りの後、板状工具によるナデを施す 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
10－27 (P14)	蓋坏(蓋)	口径 12.4 残存高 3.3	口縁部は短く外反した後、丸味をもって下り、端部は鋭い。	外面 天井部に回転削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
10－28 (P14)	蓋	口径 12.2 器高 3.9	口縁部は内傾して下り、端部は丸くて薄い。 天井部はわずかに丸味をもつ。 短頸壷の蓋と思われる。	外面 天井部に回転削り 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
10－29 (P14)	蓋	口径 12.4 器高 3.0	口縁部は内傾して下り、端部は丸い。 天井部は浅くて平ら。	外面 天井部に回転削り 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
10－30 (P14)	蓋坏(蓋)	口径 13.2 残存高 3.4	口縁部は内湾気味に下り、端部は丸い。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
10－31 (P14)	提瓶(?)	口径 7.0 残存高 3.5	頸部は外湾気味に伸び、口縁端部は薄くて丸い。 体部、底部共に欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
10－32 (P14)	平瓶(?)	口径 9.0 残存高 4.0	頸部は外傾して上方に伸び、口縁端部は丸い。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
10－33 (P14)	不明	口径 不明 高 不明	内湾する体部をもつ。	外面 カキ目の径、ナデを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
10－34 (P14)	提瓶(?)	口径 不明 残存高 6.5	提瓶体部前面の破片と思われる。	外面 カキ目 内面 横ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10－35 (P14)	平 瓶	口径 7.2 器高 13.5	口頸部はやや外傾して上方に伸び、端部は丸い。 肩体部は大きく内湾し、底部は平坦。	外面 体部から底部にかけて回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	ロクロの回転右方向
10－36 (P14)	提 瓶	口径 6.5 器高 17.1	口頸部は外傾して上方に伸び、端部付近で短く外反する。 端部は丸い。 頸部に2条の沈線をめぐらす。 肩体部は内湾して下る。 肩部にボタン状の貼り付けがある。	外面 カキ目 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
11－37 (P15)	高 坏	口径 10.5 器高 12.2 底部径 10.0	坏部のたちあがりは内傾して伸び、端部は丸い。 坏底部はやや丸味をもつ。 脚部はラッパ状に開き、2条の沈線をめぐらす。 脚端部はやや凹んだ平面をもつ。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
11－38 (P15)	高 坏	口径 11.0 残存高 4.2	坏部のたちあがりは内傾して上り、端部付近でわずかに外反する。 口縁端部は丸い。 受部はわずかに上外方に伸び端部は丸い。 坏底部はやや丸い。脚部欠損。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
11－39 (P15)	高 坏	口径 10.7 器高 9.7	坏の口縁部はやや外反して伸び、端部は薄くて丸い。 坏底部はやや浅く、平ら。 脚部は内傾して下った後、大きく外湾して端部に至る。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	青灰色	
11－40 (P15)	高 坏	口径 不明 残存高 9.5	坏部はやや内湾して伸び、坏底部は丸い。 脚部は外湾して下り、2条の沈線を2か所に施す。 三方に長方形のスカシが2段に穿たれている。坏端部、脚端部共に欠損。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
11－41 (P15)	高 坏	口径 12.0 残存高 5.7	坏の口縁部は体部との境に沈線を有した後、やや内湾して伸びる。 口縁端部は丸い。 脚部の三方にスカシがある。 脚部の大半欠損。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
11－42 (P15)	高 坏	口径 不明 残存高 9.0	坏底部は平ら。 脚部は外湾して下り、2条の沈線がめぐる。 三方にスカシを有する。 坏の口縁部および脚部下方欠損。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
11－43 (P15)	高 坏	口径 不明 残存高 8.7 底部径 7.0	坏底部は平らで内湾しながら上方に伸びる。 坏部は内湾気味に下り、2条の沈線がめぐる。 脚底部は短く外反する。 坏の口縁部欠損。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
11－44 (P15)	高 坏	口径 14.0 器高 10.0 底部径 8.7	坏の口縁部は内湾気味に伸び、口縁端部近くに1条の沈線がめぐる。 坏底部は浅く、平ら。 脚部は外湾気味に下る。2条の沈線を有する。 脚底部は短く外反する。	外面 坏底部にカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
11－45 (P15)	高 坏	口径 13.0 器高 10.9 底部径 9.0	坏の口縁部はやや内傾気味に立ち上り、3本の凹線がめぐる。 口縁端部は丸い。 坏底部はやや丸味をもつ。 脚部は外反して下り、脚底部は短く外反する。	外面 坏底部は回転削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
11－46 (P15)	高 坏	口径 14.7 器高 10.0 底部径 10.5	坏の口縁部は内湾気味に伸び、端部は丸い。 坏底部はわずかに丸みをもつ。 脚部は外湾して下る。 脚底部は短く外反している。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11－47 (P15)	高坏	口径 14.0 残存高 4.5	坏の口縁部は内湾気味に上り、短く外反して端部に至る。 坏底部はやや丸味をもつ。 脚部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや不良	黒灰色	
11－48 (P15)	高坏	口径 不明 器高 不明	坏部は内湾気味に伸びる。 口縁部、脚部共に欠損。	外面 坏底部は回転削り 内面 中央部にタタキ他は回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	黄灰色	ロクロの回転右方向
11－49 (P15)	高坏	口径 13.4 残存高 4.7	坏の口縁部はやや外湾して伸び、端部は丸い。 坏底部は若干の丸味をもつ。 脚部欠損。	外面 坏底部は回転削り他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
11－50 (P15)	高坏	口径 不明 器高 不明 底部径 10.0	脚部は外湾気味に下り、底部は短く外反する。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
11－51 (P15)	高坏	口径 不明 器高 不明 底部径 10.0	脚部はラッパ状に開き、短部は短く外反する。 脚部の上方及び坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや不良	茶灰色	

第2号墳

32－1 (P23)	蓋坏(蓋)	口径 12.7 残存高 3.6	口縁部は内湾気味に下り、端部付近でわずかに外反する。 口唇部内側に内傾する段をもつ。 天井部の一部欠損。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
32－2 (P23)	蓋坏(蓋)	口径 13.2 器高 3.6	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をなす。 天井部はやや低く、平ら。	外面 天井部は回転ヘラ削り他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不	淡灰色	ロクロの回転右方向
32－3 (P23)	蓋坏(蓋)	口径 12.7 残存高 2.9	口縁部は内湾しながら下り、端部付近で外反する。 端部は薄くて丸い。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
32－4 (P23)	蓋坏(身)	口径 11.0 器高 4.4	たちあがりは内傾して伸び、端部付近でわずかに外反する。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。	外面 底部は回転削り不整方向のヘラ削り他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
32－5 (P23)	蓋坏(身)	口径 12.0 器高 2.9	たちあがりはやや内湾気味に伸び、端部近くでわずかに外反する。 端部は丸い。 受部とたちあがりの境に沈線状の凹みがある。 底部は浅く、平ら。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転削りを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	ロクロの回転右方向
32－6 (P23)	蓋坏(身)	口径 10.2 器高 3.5	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。 受部は内湾気味に伸び、端部は丸い。 底体部は中程で大きく湾曲している。 底部はやや丸みをもつ。	外面 底部は回転ヘラ削り他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	外面に自然釉付着

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
32－7 (P23)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	底部は平ら。 口縁部、底体部の一部欠損。	外面 底部は回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良 軟質	淡灰色	
32－8 (P23)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸みをもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
32－9 (P23)	蓋付埦(蓋)	口径 15.4 残存高 3.2	天井部は低く、なだらかに内湾して下る。 天井部中央につまみがつく。 口縁端部に短い身受けかえりを有する。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	不良 軟質	白灰色	
32－10 (P23)	蓋付埦(蓋)	口径 8.0 残存高 1.8	天井部は低く、なだらかに内湾して下る。 端部に短い身受けかえりがつく。 天井部中央につまみがつく。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	外面に自然釉付着
32－11 (P23)	蓋付埦(身)	口径 9.1 器高 3.0	口縁部はほぼ垂直に上り、端部は薄くて丸い。 底部は平ら。	外面 底部は回転ヘラ削り 内面 不整方向のナデ回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	ロクロの回転
32－12 (P23)	蓋付埦(身)	口径 10.0 器高 3.0	口縁部は外傾して上り、端部付近で短く外反する。 端部は外湾した平面をもつ。 底部は平ら。	外面 底部は不整方向のナデ 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
32－13 (P23)	蓋付埦(身)	口径 12.0 器高 4.0	口縁部は外傾して伸び、端部付近でわずかに外反する。 端部は薄くて丸い。 底部は若干内湾する。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転削りを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
32－14 (P23)	蓋付埦(身)	口径 11.8 器高 4.0	口縁部は内湾気味に上り、端部付近でゆるやかに外反する。 底部は上げ底気味。	外面 横ナデ 底部は板状工具によるナデの後回転ナデを施す 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
32－15 (P23)	坏(土師器)	口径 12.9 器高 4.0	口縁部は外傾して上る。 やや内傾する高台をもつ。	外面 不明 内面 不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
32－16 (P23)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚端部は丸い。	外面 不明 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

第3号墳

58－1 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 13.6 器高 3.1	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部は低く平ら。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	ロクロの回転右方向

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
58－2 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 14.3 器高 4.0	口縁部は内湾して下り、端部付近でわずかに外反する。 端部は内傾する凹面をもつ。 天井部はやや高く、わずかに丸い。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	ロクロの回転右方向
58－3 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 14.1 器高 3.1	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部はやや低く、わずかに凹む。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
58－4 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 14.0 器高 3.6	口縁部はやや内傾して下る。 端部は内傾する凹んだ面をもつ。 天井部はやや低く、わずかに丸い。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
58－5 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 14.1 残存高 4.4	口縁部はやや内傾した後、端部付近で垂直に下る。 端部は内傾する平面をもつ。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部は一部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
58－6 (P56)	蓋坏(蓋)	口径 13.5 器高 4.4	口縁部は内傾して下り、端部は丸い。 天井部は高く、やや丸い。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	不良	白灰色	
58－7 (P56)	蓋坏(身)	口径 12.5 器高 3.0	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は低く、平ら。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
58－8 (P56)	蓋坏(身)	口径 13.2 器高 3.1	たちあがりは内湾した後、端部付近で外湾する。 端部は薄くて丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は低く、平ら。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
58－9 (P56)	坏	口径 13.2 器高 5.0	口縁部は内湾気味に伸び、端部近くで垂直に上る。 端部は丸い。 底部は深く、若干丸味をもつ。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	不良	白灰色	ロクロの回転右方向
58－10 (P56)	瓏	口径 不明 器高 不明	頸部はラッパ状に開き、波状文がめぐる。 口縁部、体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
58－11 (P56)	瓏	口径 不明 器高 不明	頸部はラッパ状に開き、波状文がめぐる。 口縁部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	不良	白灰色	
59－12 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 8.6 器高 3.5	口縁部はゆるやかに外湾し、端部に短い身受けかえりがつく。 天井部はなだらかに内湾して下り、中央に乳頭状のつまみがつく。	外面 天井部はカキ目 他は回転削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
59－13 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 8.8 器高 2.9	天井部は低く平らで、中央に乳頭状のつまみがつく。 口縁端部に短い身受けかえりをもつ。	外面 天井部はカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
59－14 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 8.7 器高 3.3	天井部はなだらかに内湾して下り、口縁端部付近で短く外反する。 天井部中央に擬宝珠状のつまみがつく。 口縁端部内側に短い身受けかえりをもつ。	外面 天井部はカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
59－15 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 7.9 器高 2.1	天井部は低く、やや丸い。 中央に擬宝珠状のつまみがつく。 口縁端部内側に短い身受けかえりをもつ。	外面 天井部は回転削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
59－16 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 8.6 器高 2.1	天井部は低く、わずかに丸い。 中央に擬宝珠状のつまみがつく。 口縁部内側に短い身受けかえりをもつ。	外面 天井部は回転削り、ナデ 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
59－17 (P57)	蓋坏(身)	口径 9.2 器高 3.1	口縁部はやや外傾して上り、端部は薄くて丸い。 底部はやや丸味をもつ。	外面 口縁部は回転ナデ 底部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
59－18 (P57)	蓋坏(身)	口径 9.0 器高 3.1	口縁部はやや外傾して上り、端部は丸い。 底部は平ら。	外面 口縁部は回転ナデ 底部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
59－19 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 11.5 器高 2.6	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。 天井部は低くて丸味をもち、中央に凹状のつまみがつく。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
59－20 (P57)	蓋坏(蓋)	口径 12.0 器高 2.3	口縁部はやや外傾気味に短く下り、端部は鳥の嘴状に断面三角形を呈する。	外面 自然釉付着のため不明 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	濃灰色	
59－21 (P57)	蓋坏(身)	口径 11.3 器高 3.8	口縁部は外反気味に立ち上り、端部は丸い。 底部はわずかに丸味をもつ。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
59－22 (P57)	蓋付椀(蓋)	口径 17.0 器高 2.6	口縁部は短く内傾し、端部は鳥の嘴状を呈する。 天井部は低く、ゆるやかに下って口縁部に至る。	外面 天井部は回転ヘラ削りの後、ナデを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
59－23 (P57)	蓋付椀(身)	口径 16.1 器高 4.4 高台径 11.0	口縁部は外傾して上り、端部は丸い。 底部は平らで、高台をもつ。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
59－27 (P57)	長頸壷	口径 不明 器高 不明	肩部は内傾して下り、「く」の字形に屈曲して体部に至る。	外面 肩部は自然釉付着のため不明 体部は回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	
59－28 (P57)	高坏	口径 不明 器高 不明	坏底部は平ら。 脚部は外反気味に下る。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	不良	白灰色	

第 4 号墳

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
63－1 (P62)	蓋坏(蓋)	口径 12.2 器高 3.7	口縁部は内湾して下り、端部付近でほぼ垂直に屈曲する。 端部内側に内傾する凹面をもつ。 天井部はほぼ平ら。	外面 天井部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	
63－2 (P62)	蓋坏(身)	口径 10.7 器高 3.7	たちあがりはやや内湾気味に伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。	外面 底部は回転ヘラ削りの後、板状工具によるナデを施す。 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
63－3 (P62)	蓋坏(蓋)	口径 12.1 器高 2.9	口縁部は内湾して下り、短く外反後、垂直に屈曲して端部に至る。 端部は薄く、丸い。 天井部は低くてほぼ平ら。	外面 天井部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	ロクロの回転右方向
63－4 (P62)	蓋坏(身)	口径 10.5 器高 2.9	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底部は浅く、やや凹む。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
63－5 (P62)	蓋坏(蓋)	口径 12.3 器高 3.0	口縁部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 口縁端部内側に内傾する凹面をもつ。 天井部は浅く、ほぼ平ら。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
63－6 (P62)	蓋坏(身)	口径 10.7 器高 3.1	たちあがりは短く内湾して伸び、端部は丸い。 受部はほぼ水平で、端部は丸い。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
63－7 (P62)	蓋坏(蓋)	口径 13.1 器高 3.5	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部はほぼ平ら。	外面 天井部は回転ヘラ削りの後、板状工具によるナデを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
63－8 (P62)	蓋坏(身)	口径 10.6 器高 3.1	たちあがりは内傾し、端部は丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底部は浅く、平ら。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転ナデを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転
63－9 (P62)	蓋坏(蓋)	口径 12.5 残存高 2.7	口縁部は内湾気味に下り、端部は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
63－10 (P62)	高坏	口径 10.7 器高 11.6 底部径 10.7	坏底部は丸味をもち、口縁部は外傾して立ち上る。 脚部は外反して下り、2条の沈線がめぐる。 沈線の上下三方に方形スカシがある。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
63－11 (P62)	高坏	口径 10.5 残存高 2.9	坏部のたちあがりは短く内傾し、端部は丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 坏底部は浅い。 脚部欠損。	外面 坏底部はカキ目 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

第 6 号墳

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
73－1 (P70)	蓋坏(蓋)	口径 13.2 器高 4.4	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部は高く、平ら。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	
73－2 (P70)	蓋坏(蓋)	口径 14.0 残存高 4.1	口縁部は内湾して下り、端部は薄くて丸い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
73－3 (P70)	蓋坏(蓋)	口径 13.8 残存高 3.6	口縁部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する平面をもつ。 天井部は平ら。	外面 天井部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
73－4 (P70)	蓋坏(蓋)	口径 14.1 残存高 3.0	口縁部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 端部は薄くて尖る。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
73－5 (P70)	蓋坏(蓋)	口径 12.0 残存高 2.0	口縁部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する平面をもつ。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
73－6 (P70)	蓋坏(身)	口径 10.5 器高 3.5	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 底部は浅く、やや丸い。 底体部の中程に沈線状の段がある。	外面 底部に不整方向のヘラ削り 他は回転 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
73－7 (P70)	蓋坏(身)	口径 9.8 器高 2.7	たちあがりは短く内傾して上り、端部は薄くて丸い。 底部は浅く、やや丸い。	外面 底部は板状工具によるナデ、回転削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
73－8 (P70)	長頸壺	口径 不明 器高 不明	肩部は内傾して下り、「く」の字形に屈曲して体部に至る。 口頸部、底部欠損。	外面 肩部は自然釉付着のため不明 体部はナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	

第 1 号窯跡

95－1 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 12.1 残存高 3.7	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
95－2 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 12.0 残存高 4.2	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜はやや丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－3 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 13.9 残存高 3.6	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜はやや丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
95－4 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 13.1 残存高 3.9	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－5 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 12.8 残存高 3.4	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
95－6 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 15.0 残存高 5.0	口縁部は内湾気味に下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－7 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 14.0 残存高 4.1	口縁部はほぼ垂直に下り、端部付近で短く外湾する。 端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
95－8 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 14.0 残存高 5.2	口縁部は内傾気味に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は断面三角形を呈し、やや鋭い。 天井部は高く、丸味をおびる。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－9 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 13.8 残存高 5.0	口縁部はやや内傾して下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、やや丸い。 天井部は高く、やや丸い。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
95－10 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 12.9 残存高 3.9	口縁部はやや内傾気味に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、やや丸い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は自然釉付着のため不明 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
95－11 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 12.7 残存高 3.4	口縁部は内傾気味に下る。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
95－12 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 13.0 残存高 4.0	口縁部はほぼ垂直に下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－13 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 13.6 残存高 4.3	口縁部はやや内湾気味に下る。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
95－14 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 13.4 残存高 5.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部は高く、やや丸味をもつ。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	ロクロの回転右方向
95－15 (P92)		蓋坏(蓋)	口径 14.0 残存高 5.1	口縁部はやや内傾して下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
95－16 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 13.8 残存高 4.9	口縁部は内湾気味に下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
95－17 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 12.3 残存高 4.2	口縁部は内傾気味に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
95－18 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 14.8 残存高 4.3	口縁部はやや内傾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部は浅く、やや平ら。 天井部の一部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
95－19 (P92)	蓋坏(蓋)	口径 13.8 残存高 4.2	口縁部は内傾気味に下り、端部付近でわずかに外反する。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
96－20 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高高 不明	稜は断面三角形を呈し、鋭い。 天井部はやや丸い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向
96－21 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	稜は断面三角形を呈し、鋭い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
96－22 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	稜は沈線状を呈する。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
96－23 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
96－24 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は丸い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向
96－25 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
96－26 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
96－27 (P93)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	稜は断面三角形を呈し、鋭い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
96－28 (P93)	蓋坏(身)	口径 12.0 残存高 3.4	たちあがりは内傾気味に上り、端部は内湾する段をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
96－29 (P93)	蓋坏(身)	口径 12.0 残存高 3.0	たちあがりは外湾気味に上り、端部は内湾する段をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は鋭い。 底体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
96－30 (P93)	蓋坏(身)	口径 12.9 残存高 5.1	たちあがりは内傾して上り、端部は内湾する段をもつ。 受部は短く、丸い。 底部は平ら。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	ロクロの回転右方向
96－31 (P93)	蓋坏(身)	口径 11.5 残存高 4.1	たちあがりは内傾して伸び、端部は内湾する段をもつ。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
96－32 (P93)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	受部はほぼ水平に伸び、端部は鋭い。 底部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
96－33 (P93)	蓋坏(身)	口径 12.0 残存高 2.4	たちあがりは外反気味に伸び、端部は外傾する面をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は鋭い。 底体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
96－34 (P93)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	底部はやや丸味をもつ。 口縁部欠損。	外面 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	ロクロの回転左方向
96－35 (P93)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部は凹面をもつ。 口縁部欠損。	外面 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向
96－36 (P93)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	底部は平ら。 底体部の一部、口縁部欠損。	外面 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－37 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.5	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内湾する段をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
97－38 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.5	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内湾する段をもつ。 稜は段面三角形を呈する。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
97－39 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.2	口縁部はやや内傾して下り、端部は内湾する段をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
97－40 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部は内湾気味に下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する面をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－41 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.6	口縁部は内湾気味に下り、端部は内湾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－42 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.1	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内湾する段をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
97－43 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転左方向
97－44 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
97－45 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
97－46 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－47 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	ロクロの回転左方向
97－48 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向
97－49 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 自然釉付着のため不明	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
97－50 (P95)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	稜は短く、鋭い。 天井部および口縁部の一部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
97－51 (P95)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	底部はやや平ら。 底体部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向

図番	面号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
97－52 (P95)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
97－53 (P95)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
97－54 (P95)		高坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもち、中央に凹状のつまみがつく。 稜は短く、丸い。 口縁部の一部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	ロクロの回転左方向
97－55 (P95)		高坏	口径 15.0 器高 不明	口縁部は外反して上り、端部は薄くて丸い。 口縁部と坏底部の境に断面三角形の凸線を有する。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－56 (P95)		高坏	口径 17.1 器高 不明	坏の口縁部は外反して上り、端部は薄くて丸い。 坏底部と口縁部の境には断面三角形の凸線が2本めぐる。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－57 (P95)		高坏	口径 16.8 器高 不明	坏の口縁部は外反して上り、端部は薄くて丸い。 坏底部と口縁部の境には断面三角形の凸線が2本めぐる。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－58 (P95)		高坏	口径 17.9 器高 不明	坏の口縁部は外反して上り、端部は薄くて丸い。 坏底部と口縁部の境にはやや丸味をもつ凸線が2本めぐる。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	濃灰色	
97－59 (P95)		高坏	口径 16.8 器高 不明	坏の口縁部は外反して上り、端部は丸い。 坏底部と口縁部の境にはやや丸味をもつ凸線が2本めぐる。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
97－60 (P95)		高坏	口径 不明 器高 不明	坏の口縁部は外反して上り、端部は丸い。 坏底部と口縁部の境にやや丸味をもつ凸線2.本を有する。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
97－61 (P95)		高坏	口径 不明 残存高 6.4 底部径 11.6	脚柱部は外反気味に下り、台形のスカシがある。脚 脚裾部は「く」の字形に屈曲し、中程に浅い沈線を有する。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄褐色	
97－62 (P95)		高坏	口径 不明 残存高 5.1 底部径 9.6	脚柱部は外反気味に下り、台形のスカシがある。 脚裾部は「く」の字形に屈曲し、中程に浅い沈線を有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
97－63 (P95)		高坏	口径 不明 残存高 4.6 底部径 12.0	脚柱部は外反気味に下り、台形のスカシがある。 脚裾部は「く」の字形に屈曲し、中程に浅い沈線を有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
98－64 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 4.5 底部径 10.4	脚柱部は外反気味に下り、スカシがある。 脚裾部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－65 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 5.2 底部径 10.0	脚柱部は外反気味に下り、スカシがある。 脚裾部は外反して下り、端部は丸い。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－66 (P97)	高 坏	口径 不明 器高 不明	脚柱部は外反気味に下り、スカシがある。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
98－67 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 4.7 底部径 9.0	脚柱部は外反して下り、スカシがある。 脚裾部は外反して下り、端部は丸い。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を	良好	灰色	
98－68 (P97)	高 坏	口径 不明 器高 不明	脚柱部は内傾して下り、スカシがある。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－69 (P97)	高 坏	口径 不明 器高 不明	坏部はゆるやかに内湾して上る。 脚部にスカシを有する。 坏部の一部、脚部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	濃灰色	
98－70 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 3.1 底部径 7.8	脚部は内傾して下り、端部に至る。 端部は内傾する平面をもつ。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
98－71 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 1.6 底部径 10.0	脚裾部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 端部は丸い。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
98－72 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 2.0	脚裾部は内湾して下り、上方に沈線がめぐる。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－73 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 1.5	脚裾部は内湾して下り、上方に丸味をもった凸線を有する。 端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
98－74 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 1.5	脚裾部は外反して下り、端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
98－75 (P97)	高 坏	口径 不明 残存高 3.0	脚裾部は内湾気味に下り、端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
98－76 (P97)	高坏	口径 不明 残存高 2.0	脚裾部は外湾気味に下り、端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－77 (P97)	高坏	口径 不明 残存高 2.2	脚裾部は外傾して下り、端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－78 (P97)	瑯	口径 10.4 残存高 3.1	頸部は外傾して上り、波状文を有する。 口縁部はやや外湾気味に上る。 端部は内湾する凹面をもつ。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
98－79 (P97)	瑯	口径 10.1 残存高 1.7	口縁部は外反して、端部は内湾する段をもつ。 頸部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
98－80 (P97)	瑯	口径 不明 器高 不明	頸部は外傾して上り、波状文がめぐる。 口縁部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
98－81 (P97)	長頸壷	口径 10.0 残存高 5.2	口縁部は内湾気味に上り、端部は丸い。 頸部との境に2本の凸線がめぐる。 頸部は外反気味に上り、波状文がめぐる。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
98－82 (P97)	長頸壷	口径 9.5 残存高 5.6	口縁部は外湾気味に上り、端部は丸い。 頸部は外傾して上り、口縁部との境に2本の凹線がめぐる。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
98－83 (P97)	壷	口径 17.7 残存高 2.2	口縁部は外湾して上り、端部は丸い。 頸部の上方に断面三角形の凸線がめぐる。 頸部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
98－84 (P97)	甕	口径 19.5 残存高 3.0	口縁部は外湾して上り、端部付近で短く内湾する。 端部は丸い。 頸部の一部、体部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 頸部はカキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－85 (P97)	甕	口径 20.5 残存高 5.0	口縁部は「く」の字形に屈曲して、端部に至る。 端部は丸い。 頸部は外湾して上る。 頸部の一部、体部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 頸部はカキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
98－86 (P97)	直口壷	口径 18.0 残存高 4.5	口縁部はやや外湾して上り、端部は凹面をもつ。 頸部、体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
98－87 (P97)	短頸壷	口径 7.5 残存高 8.0	口縁部は外傾して上り、端部は丸い。 体部は大きく内湾し、底部に至る。 底部の一部欠損。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
99－88 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－89 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－90 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－91 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－92 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－93 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
99－94 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－95 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	灰色	
99－96 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
99－97 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
99－98 （P98）	甕	口径 不明 器高 不明	甕体部の破片。	外面 タタキ 内面 タタキ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

C地区1～3層

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
103－1 (P106)		直口壷	口径 18.0 残存高 6.5	頸部は外反して上り、端部は内傾する平面をもつ。 甕形土器の二次加工品。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
103－2 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.1	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内湾する凹面をもつ。 稜は断面三角形を呈し、鋭い。 天井部の一部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
103－3 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
103－4 (P106)		高坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもち、中央に凹状のつまみがつく。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
103－5 (P106)		高坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平らで、中央に凹状のつまみがつく。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
103－6 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 14.2 器高 4.0	口縁部はやや内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部はやや平ら。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
103－7 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.6	口縁部は内傾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
103－8 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	ロクロの回転右方向
103－9 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.9	口縁部は内湾気味に下り、端部はわずかに内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
103－10 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 稜は沈線状を呈する。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不	黄灰色	ロクロの回転右方向
103－11 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや凹む。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	ロクロの回転左方向
103－12 (P106)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	稜は丸味をもち、沈線状を呈する。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
103－13 (P106)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸い。 稜は短く、鋭い。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
103－14 (P106)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
103－15 (P106)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりは内傾して上る。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 口縁部の一部、底部の一部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
103－16 (P106)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりは外反気味に伸び、端部は丸い。 受部は内湾気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の一部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
103－17 (P106)	蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部の一部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
103－18 (P106)	台付埦	口径 不明 残存高 1.2 底部径 7.1	底部は平らで、高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ、板状工具によるナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
103－19 (P106)	高坏	口径 不明 残存高 4.0 底部径 8.9	脚柱部は内傾して下り、スカシを有する。 脚裾部はやや湾曲する「く」の字形を呈し、端部は丸い。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
103－20 (P106)	高坏	口径 不明 残存高 3.6 底部径 10.5	脚部は内傾して下り、円形のスカシを有する。 端部は内傾する凹面をもつ。 坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
103－21 (P106)	甕	口径 13.0 残存高 5.2	口縁部は内湾して上り、端部は丸い。 頸部は外湾して上る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
103－22 (P106)	甕	口径 22.4 残存高 7.1	頸部は外反して上り、口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
103－23 (P106)	短頸壷	口径 8.4 残存高 5.5	口縁部は内湾気味に上り、端部は丸い。 肩体部はゆるやかに内湾して下る。 底部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
103－24 (P106)	備前焼 擂鉢	口径 不明 残存高 不明	口縁部は内傾して上り、端部は丸い。 底部欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	大粒の砂粒を含む	良好	茶褐色	

C地区4、5層

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
104－1 (P107)		高坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもち、中央に凹状のつまみがつく。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
104－2 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 14.5 残存高 3.5	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部はやや凹む。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
104－3 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
104－4 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
104－5 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転左方向
104－6 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.7	口縁部は内湾気味に下り、端部は内湾する凹面をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
104－7 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.2	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する段をもつ。 稜は短く、やや丸い。 天井部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
104－8 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.1	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
104－9 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.7	口縁部は内湾気味に下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
104－10 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾気味に下り、端部付近で短く外反する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
104－11 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
104－12 (P107)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.6	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
104－13 (P107)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部は内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ。口縁部は回転ナデ 内面 自然釉付着のため不明	砂粒を含む	良好	黒灰色	
104－14 (P107)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 2.4	受部はわずかに凹み、端部は丸い。 底部はやや平ら。 口縁部、底部の一部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
104－15 (P107)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.6	たちあがりは内湾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はわずかに上外方に伸び、端部は丸い。 底部の一部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
104－16 (P107)	蓋坏(身)	口径 不明 残存部 4.1	たちあがりは内湾気味に伸び、端部は内湾する凹面をもつ。 受部は上外方に伸び、端部は薄くて丸い。 底部の大半欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
104－17 (P107)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.2	たちあがりは外湾気味に伸び、端部は丸い。 受部はわずかに凹み、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	青灰色	
104－18 (P107)	台付椀(蓋)	口径 不明 残存高 1.6	天井部はなだらかに内湾して下り、端部付近で短く外反する。 端部は鳥の嘴状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
104－19 (P107)	台付椀(蓋)	口径 不明 残存高 2.1	天井部はなだらかに内湾して下り、端部付近で「く」の字形に屈曲する。 端部は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
104－20 (P107)	台付椀(蓋)	口径 17.0 残存高 1.5	天井部はなだらかに内湾して下り、端部付近で短く垂直に屈曲する。 端部は鳥の嘴状を呈する。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
104－21 (P107)	台付椀	口径 不明 残存高 3.7	口縁部は外傾して上り、端部は丸い。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
104－22 (P107)	台付椀	口径 不明 残存高 1.1 底部径 11.0	底部は平らで高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
104－23 (P107)	台付椀	口径 不明 残存高 2.1	高台は外傾する端部をもつ。 口縁部、底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
104－24 (P107)	台付椀	口径 不明 残存高 2.5	高台がつく。 口縁部、底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
104－25 (P107)	瓶	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は外傾して上り、端部は内湾する凹面をもつ。 頸部に波状文がめぐる。 頸部、体部共に欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
104－26 (P107)	脚付壷	口径 不明 残存高 5.7 底部径 11.6	脚柱部は内傾して上り、台形のスカシ波状文を有する。 脚裾部は「く」の字形に屈曲する。 脚部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
104－27 (P107)	高坏	口径 不明 残存高 3.2	脚柱部は内傾して下り、スカシを有する。 脚裾部は内湾して下り、端部は尖る。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
104－28 (P107)	高坏	口径 不明 残存高 4.7	脚柱部は内湾気味に下り、スカシを有する。 脚裾部は内湾して下り、端部は丸い。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
104－29 (P107)	高坏	口径 不明 残存高 3.2 底部径 8.5	脚部は内傾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 脚部に円形のスカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
104－30 (P107)	高坏	口径 不明 残存高 3.3	口縁部は外反して上り、端部は丸い。 口縁部と坏底部の境に2本の凸線がめぐる。 坏の一部、脚部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
104－31 (P107)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は外反して下り、スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	青灰色	
104－32 (P107)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は外反して下り、円形のスカシを有する。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
104－33 (P107)	器台？	口径 不明 残存高 5.7	脚部は内湾気味に下り、端部付近でわずかに外反する。 脚部中程に2本の凹面がめぐる。 端部は面傾する凹面をもつ。 脚部の大半、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
105－34 (P108)	甕	口径 23.7 残存高 5.9	口頸部は外反して上り、端部付近で内湾する。 底体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不	白灰色	
105－35 (P108)	甕	口径 不明 残存高 6.7	頸部は外傾して上り、口縁部付近で短く外反する。 口縁部は内湾する。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
105－36 (P108)	甕	口径 不明 残存高 4.3	頸部は外湾気味に上り、口縁部は短く内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
105－37 (P108)	甕	口径 不明 残存高 3.7	口頸部は外反して上り、玉縁状に内湾して端部に至る。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
105－38 (P108)	甕	口径 不明 残存高 3.8	頸部は外反して上り、口縁部は内湾して端部に至る。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
105－39 (P108)	甕	口径 不明 残存高 6.8	頸部は外反して上り、口縁部は「く」の字形に屈曲して端部に至る。 頸基部にクシ状工具による刺突文がめぐる。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
105－40 (P108)	甕	口径 不明 残存高 3.7	口縁部は「く」の字形に屈曲して端部に至る。 頸部は外傾する。 頸部の一部、肩体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
105－41 (P108)	甕	口径 不明 残存高 2.0	口縁部は外傾して上り、端部は内傾する平面をもつ。 頸部の一部、肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
105－42 (P108)	直口壷	口径 不明 残存高 5.0	口縁部はほぼ垂直に上り、端部付近で短く外反する。 端部は内湾する凹面をもつ。 肩体部欠損。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
105－43 (P108)	甕	口径 不明 残存高 3.1	口縁部は内湾して上り、下方に沈線がめぐる。 頸部は外傾する。 頸部の大半、肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
105－44 (P108)	甕	口径 22.8 残存高 6.0	口頸部は外反して上り、端部付近で内湾する。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
105－45 (P108)	甕	口径 不明 残存高 4.3	頸部は外反して上り、凸線、波状文を有する。 口縁部は内傾する。 頸部の一部、肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
105－46 (P108)	甕	口径 不明 残存高 5.1	頸部は外反して上り、1本の凸線、波状文を有する。 口縁部は内湾気味に上る。 頸部の大半、肩体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
105－47 (P108)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.4	天井部はやや丸味をもつ。 口縁部欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
105－48 (P108)	蓋坏(蓋)	口径 14.0 器高 3.5	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部は凹みをもつ。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
105－49 (P108)	蓋坏(身)	口径 10.0 残存高 4.3	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて鋭い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
105－50 (P108)	瑞	口径 13.1 残存高 4.7	口縁部は内湾気味に伸び、端部は凹面をもつ。 頸部は外反し、口縁部付近に1本の凸線がめぐる。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
105－51 (P108)	甕	口径 13.5 残存高 4.3	口縁部は内湾して上る。 頸部は外反する。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
105－52 (P108)	甕	口径 13.5 残存高 3.5	口縁部は内湾して上る。 頸部は外反する。 肩体部欠損。	外面 自然釉付着のため不明 内面 自然釉付着のため不明	砂粒を含む	良好	黒色	

C地区6層

106－1 (P110)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.6	口縁部は内傾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
106－2 (P110)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.7	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
106－3 (P110)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.2	たちあがりは内傾して伸び、端部は丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	青灰色	
106－4 (P110)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 2.2	たちあがりは内湾気味に上り、端部は尖る。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
106－5 (P110)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
106－6 (P110)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削りの後、板状工具によるナデを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
106－7 (P110)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 不明	天井部はやや平ら。 稜は沈線状を呈する。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
106－8 (P110)	台付椀	口径 不明 残存高 1.8 底部径 9.8	底部は平らで、やや内傾する高台がつく。 口縁部欠損。	外面 底部は回転ヘラ削り 他は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
106－9 (P110)	台付椀	口径 不明 残存高 1.9 底部径 9.7	高台は外反して下り、端部は外傾する平面をもつ。 底部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
106－10 (P110)	台付椀	口径 18.0 残存高 1.2	天井部はゆるやかに内湾して下り、端部は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
106－11 (P110)	高坏	口径 不明 残存高 5.8 底部径 10.3	脚柱部は外反気味に下り、スカシがある。 脚裾部は内湾気味に上り、脚柱部との境に断面三角形の凸線をもつ。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
106－12 (P110)	甕	口径 21.2 残存高 5.5	口縁部は内湾気味に上り、端部付近で短く外反する。 頸部は外反して上る。 肩体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
106－13 (P110)	甕	口径 23.8 残存高 7.5	口縁部は内傾して伸び、端部は丸い。 頸部は外反気味に伸び、２本の凸線、波状文を有する。 肩体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面	砂粒を	良好	淡灰色	
107－14 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部は外傾して上る。 タガの端部は平面を呈する。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 指圧痕、ナデ	砂粒を含む	良好	赤褐色	
107－15 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部は外湾気味に上る。 タガの端部は凹面をもつ。 須恵質の埴輪。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 指圧痕、ナデ	大粒の砂粒を含む	良好	茶褐色	
107－16 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部の破片。 タガの端部は平面をもつ。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 指圧痕、ナデ	大粒の砂粒を含む	良好	赤褐色	
107－17 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部の破片。 タガの端部は平面をもつ。 須恵質の埴輪。	外面 ハケ目、横ナデ ナデ 内面 指圧痕、ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
107－18 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部の破片。 タガの端部は凹面をもつ。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 指圧痕、ナデ	砂粒を含む	良好	赤褐色	
107－19 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	胴部の破片。 タガの端部は凹面をもつ。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 風化のため不明	砂粒を含む	良好	赤褐色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
107－20 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 器高 不明	底の端部は尖る。 タガの端部は平面をもつ。	外面 ハケ目、横ナデ ヘラ状工具による刺突 内面 指圧痕、ハケ目	大粒の砂粒を含む	良好	茶褐色	
107－21 (P110)	円筒埴輪	口径 不明 残存高 10.1 底部径 15.9	底の端部は平ら。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 風化のため不明	砂粒を含む	良好	赤褐色	

C地区7層

108－1 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 14.4 残存高 4.0	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内湾する凹面をもつ。 稜は断面三角形を呈し、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
108－2 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 14.4 残存高 2.8	口縁部は内湾気味に下り、端部付近でわずかに外反する。 端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	
108－3 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 13.0 器高 4.4	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部はやや丸味をもつ。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
108－4 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 15.5 残存高 3.9	口縁部は内湾気味に下り、端部内側に沈線を有する。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
108－5 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 14.0 残存高 3.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
108－6 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 16.0 残存高 3.9	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 天井部は回転ヘラ削り、回転ナデ 口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
108－7 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 12.3 残存高 2.6	口縁部は内傾して下り、端部は内側に凹面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
108－8 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 13.8 残存高 2.5	口縁部は内傾して下り、端部は内側にわずかに凹む面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
108－9 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもち、ヘラ記号がある。 稜は沈線状を呈する。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	ロクロの回転右方向

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
108－10 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸味をもつ。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、ナデ、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
108－11 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
108－12 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	ロクロの回転右方向
108－13 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 タタキ回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
108－14 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 稜は沈線状を呈する。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
108－15 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや凹んでいる。 稜に沈線がめぐる。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
108－16 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
108－17 (P112)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削りの後、ヘラ状工具により数条の沈線を施す。 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
109－18 (P113)	蓋坏(身)	口径 17.0 残存高 4.4	たちあがりは外反気味に上り、端部は内湾する凹面をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部欠損。	外面 口縁部は回転ナデ 底体部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転左方向
109－19 (P113)	蓋坏(身)	口径 11.0 残存高 4.0	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
109－20 (P113)	蓋坏(身)	口径 13.4 残存高 3.7	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
109－21 (P113)	蓋坏(身)	口径 13.2 器高 4.9	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深くて平ら。	外面 底部は板状工具によるナデの後回転ヘラ削りを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
109－22 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.5 残存高 3.2	たちあがりは「く」の字形に伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－23 (P113)		蓋坏(身)	口径 13.0 残存高 4.0	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
109－24 (P113)		蓋坏(身)	口径 13.3 残存高 3.3	たちあがりは内湾気味に上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－25 (P113)		蓋坏(身)	口径 13.1 残存高 2.8	たちあがりは内湾気味に上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－26 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.7 残存高 3.0	たちあがりは外湾気味に伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－27 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.0 残存高 3.6	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－28 (P113)		蓋坏(身)	口径 11.7 残存高 3.9	たちあがりは内傾して伸び、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
109－29 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.2 残存高 2.7	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－30 (P113)		蓋坏(身)	口径 11.7 残存高 3.9	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや平ら。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－31 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.4 残存高 2.9	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－32 (P113)		蓋坏(身)	口径 12.0 残存高 2.6	たちあがりは外反気味に上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
109－33 (P113)		蓋坏(身)	口径 11.5 残存高 2.3	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
109－34 (P113)	蓋坏(身)	口径 12.2 残存高 3.7	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
109－35 (P113)	台付埦(蓋)	口径 17.1 器高 2.0	天井部はゆるやかに内湾し、中央に凝宝殊状のつまみがつく。 口縁部は丸い。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
109－36 (P113)	台付埦	口径 18.0 残存高 1.4	天井部はゆるやかに内湾し、口縁部はほぼ垂直に下る。 端部は鳥の嘴状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	ロクロの回転右方向
109－37 (P113)	台付埦(蓋)	口径 18.4 残存高 1.0	天井部はほぼ平らで、口縁部は内傾して下る。 端部は丸い。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109－38 (P113)	台付埦	口径 12.7 器高 4.5 底部径 9.0	口縁部は内湾気味に上り、端部付近でわずかに外反する。 端部は丸い。 底部に高台がつく。	外面 口縁部は回転ナデ 底部は回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－39 (P113)	台付埦(蓋)	口径 14.2 残存高 2.0	天井部は内湾して下り、口縁部付近で外反する。 口縁部は内湾して下り、端部は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転左方向
109－40 (P113)	台付埦(蓋)	口径 13.4 残存高 3.5	天井部は内湾して下り、口縁部付近で短く外反する。 口縁部は短く外傾する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量の砂粒を含む。	良好	青灰色	
109－41 (P113)	台付埦(蓋)	口径 12.5 器高 3.5	天井部は内湾して下り、口縁部付近で短く外反する。 輪状のつまみがつく。 口縁部は短く内湾し、端部は鳥の嘴状を呈する。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転左方向
109－42 (P113)	台付埦(蓋)	口径 13.5 器高 3.3	天井部は内湾して下り、輪状のつまみがつく。 口縁部は短く内湾し、端部は丸い。 端部内側に凹面をもつ。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
109－43 (P113)	台付埦(蓋)	口径 14.0 器高 3.0	天井部は内湾して下り、口縁部付近でわずかに外反する。 口縁部は短く内湾し、端部は丸い。 端部内側に凹面をもつ。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－44 (P113)	台付埦	口径 不明 残存高 2.2 底部径 10.1	底部は平らで、内傾する高台がつく。 口縁部の大半欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109－45 (P113)	台付埦	口径 不明 残存高 1.5 底部径 11.5	底部は平らで、内傾する高台がつく。 口縁部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り、回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
109-46 (P113)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.7	口縁部は内傾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
109-47 (P113)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.7	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109-48 (P113)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
109-49 (P113)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.1	たちあがりは外反気味に上り、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
109-50 (P113)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.6	たちあがりは内湾気味に上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
109-51 (P113)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.5	たちあがりは外湾気味に上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
110-52 (P115)	瑯	口径 10.4 残存高 4.6	口縁部は内湾気味に上り、端部は凹面をもつ。 頸部は外反して上り、波状文を有する。 口縁部と頸部の境には断面三角形の凸帯がめぐる。 底体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
110-53 (P115)	高坏	口径 不明 残存高 7.5 底部径 12.5	脚柱部は外反して下り、スカシを有する。 脚裾部は短く内湾する。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
110-54 (P115)	高坏	口径 不明 残存高 5.8 底部径 12.5	脚柱部は外反して下り、スカシを有する。 脚裾部は短く内湾する。 坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
110-55 (P115)	高坏	口径 不明 残存高 6.0 底部径 12.4	脚柱部は外反して下り、スカシをもつ。 脚裾部は短く内湾する。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
110-56 (P115)	高坏	口径 不明 残存高 3.2 底部径 10.9	脚柱部は内傾して下り、スカシをもつ。 脚裾部は短く外反した後、内湾して端部にいたる。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
110-57 (P115)	高坏	口径 不明 残存高 4.0 底部径 10.5	脚柱部は外反して下り、台形のスカシを有する。 脚裾部は短く内湾する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
110-58 (P 115)	高坏	口径 不明 残存高 2.8 底部径 10.0	脚部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 円形のスカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
110-59 (P 115)	高坏	口径 不明 器高 不明	坏底部は丸みをもち、クシ状工具による刺突文を有する。 脚部の三方にスカシがある。 脚部および坏部の一部欠損。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
110-60 (P 115)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚部はほぼ垂直に下った後、やや外反し、スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
110-61 (P 115)	高坏	口径 不明 残存高 4.5 底部径 6.1	脚柱部は外湾して下る。 脚裾部は短く外傾する。 坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや良好	淡灰色	
110-62 (P 115)	高坏	口径 不明 残存高 6.0 底部径 8.7	脚柱部は外反して下り、脚裾部は内傾する。 坏部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含め	良好	淡灰色	ロクロの回転左方向
110-63 (P 115)	短頸壷	口径 6.2 器高 5.9	口縁部はやや外反して伸び、端部は丸い。 底部は丸い。	外面 手持ちヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒に含む	良好	淡灰色	
110-64 (P 115)	提瓶	口径 不明 器高 不明	体部の背面は平坦で、側面に把手がつく。 口縁部、体部の大半欠損。	外面 カキ目、ナデ 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
110-65 (P 115)	提瓶	口径 8.5 残存高 7.7	頸部は外反して上り、口縁部は内傾する。 体部の前面は湾曲して丸く、側面に把手がつく。 体部の大半欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
110-66 (P 115)	瑳	口径 不明 器高 不明	体部は内湾して下り、上方に円形のスカシを有する。 口縁部、体部の一部欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
110-67 (P 115)	埦	口径 10.9 残存高 5.6	口縁部は下方に2本の凹線がめぐり、ほぼ垂直に上る。 端部は丸い。 底体部は内湾して下る。 底部欠損。	外面 手持ちヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
110-68 (P 115)	壷	口径 14.4 残存高 4.3	頸部は外反して伸びる。 口縁部は外傾して上り、短く内湾する。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
110-69 (P 115)	壷	口径 14.5 残存高 3.6	頸部は外傾して下り、口縁部との境でわずかに段をなす。 口縁部は外傾して伸び、端部付近で短く内傾する。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
110-70 (P115)	壷	口径 12.8 残存高 4.5	口頸部は外傾して上り、端部付近で短く内湾する。 端部は凹面をもつ。 肩体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
111-71 (P116)	脚付壷	口径 12.5 残存高 8.2	たちあがりは外反して上り、端部は丸い。 受部はほぼ水平で短い。 頸部は外傾し、肩部は内湾する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
111-72 (P116)	甕	口径 15.9 残存高 7.2	頸部は外湾気味に上り、口縁部は短く内湾する。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
111-73 (P116)	甕	口径 19.7 残存高 7.2	頸部は外傾して上り、口縁部は内傾する平面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
111-74 (P116)	甕	口径 13.2 残存高 8.3	頸部は外傾して上り、2本の凹線と波状文を有する。 口縁部は内傾する平面をもつ。 頸部は内湾気味に下る。 体部欠損。	外面 風化のため不明 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
111-75 (P116)	直口壷	口径 10.2 残存高 6.8	口縁部は内湾気味に上り、端部は丸い。 肩部は内湾気味に下る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
111-76 (P116)	甕	口径 16.7 残存高 7.5	頸部は外湾気味に上る。 口縁部は「く」の字形に屈曲する。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
111-77 (P116)	甕	口径 38.6 残存高 12.3	頸部は外傾して上り、2条の凹線、波状文を有する。 口縁部は下方に凹線がめぐり、内湾して上る。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
111-78 (P116)	甕	口径 35.0 残存高 11.9	頸部は外傾して上り、2条の凹線、波状文を有する。 口縁部は下方に凹線がめぐり、内湾して上る。 肩体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
111-79 (P116)	長頸壷	口径 12.2 残存高 5.3	口頸部はわずかに外反して上り、端部は丸い。 口縁部と頸部の境にゆるやかな段がつく。 頸部の大半、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	黒灰色	
111-80 (P116)	長頸壷	口径 10.8 残存高 13.5	口頸部は外反して上り、中程に2本の沈線がめぐる。 端部は丸い。 肩体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	黒灰色	
111-81 (P116)	長頸壷	口径 10.7 残存高 18.8	口頸部は外反して上り、1本の沈線がめぐる。 端部は丸い。 底部は内湾気味に下り、「く」の字形に屈曲して体部に至る。 体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	淡灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
112- 1 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸みをもち、稜は短く鋭い。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	ロクロの回転左方向
112- 2 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 14.0 器高 4.7	天井部はやや平ら。 稜は短く、丸い。 口縁部は内傾して下り、端部内側に凹面をもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
112- 3 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 13.3 器高 4.0	天井部は低くて平ら。 稜は丸くて鋭い。 口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
112- 4 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 稜は短く、鈍い。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	ロクロの回転左方向
112- 5 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 14.5 器高 3.1	天井部は低くて平ら。 稜は沈線状を呈する。 口縁部は外湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
112- 6 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 14.5 器高 5.0	天井部は高くて丸い。 稜は沈線状を呈する。 口縁部は内傾して下り、端部内側に外反する平面をもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
112- 7 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 12.3 残存高 3.2	口縁部は内湾気味に下り、端部内側に凹面をもつ。 稜は短く、鈍い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
112- 8 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 14.9 残存高 3.7	口縁部は内湾して下り、端部は内側に凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
112- 9 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 16.0 残存高 4.0	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
112-10 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 13.4 残存高 4.1	口縁部は内湾気味に下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
112-11 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 14.5 残存高 3.5	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
112-12 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 12.0 残存高 3.2	天井部はやや丸い。 口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内側に外反する面をもつ。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
112-13 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 板状工具によるナデの後、回転ヘラ削りを施す 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
112-14 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は丸い。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
112-15 (P118)	蓋坏(蓋)	口径 10.1 残存高 2.9	天井部は平ら。 口縁部は内傾して下り、端部は内側に凹面をもつ。 天井部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ カキ目状のナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
113-16 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
113-17 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
113-18 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸みをもつ。 稜は沈線状を呈する。 口縁部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
113-19 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 稜は沈線状を呈する。 天井部の一部、口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	ロクロの回転右方向
113-20 (P119)	蓋坏(身)	口径 13.2 残存高 5.5	たちあがりは外反気味に伸び、端部は内側に凹面をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部は深い。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転左方向
113-21 (P119)	蓋坏(身)	口径 11.2 残存高 3.5	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
113-22 (P119)	蓋坏(身)	口径 12.8 残存高 4.6	たちあがりは外反気味に上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深くて平ら。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
113-23 (P119)	蓋坏(身)	口径 12.8 残存高 4.0	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
113-24 (P119)	蓋坏(身)	口径 13.0 残存高 4.2	たちあがりはやや内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底部は平ら。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
113-25 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.0	たちあがりはやや内傾して伸び、端部内側に外傾する平面をもつ。 受部はほぼ水平に伸びる。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
113-26 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.1	たちあがりは内傾して伸び、端部内側に外傾する平面をもつ。 受部はほぼ水平に伸びる。 底体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
113-27 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.9	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-28 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.5	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
113-29 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.9	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部はやや丸みをもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ 指圧痕	砂粒を含む	良好	白灰色	
113-30 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.4	たちあがりは内傾して上り、端部は尖る。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	ロクロの回転右方向
113-31 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.6	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
113-32 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.0	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
113-33 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.5	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-34 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 2.5	たちあがりは外反して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-35 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.5	たちがありはやや内湾気味に伸び、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-36 (P119)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 4.2	たちあがりは内湾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
113-37		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.0	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は断面三角形を呈する。 天井部の大筈欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
113-38		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.9	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-39		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.8	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短く、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
113-40		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.2	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短く、やや丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-41		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.6	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈し、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-42		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.7	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は短く、丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-43		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.2	口縁部は外反気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈状線を呈し、鋭い。 天井部の大井欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-44		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.1	口縁部は外反気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈し、鋭い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-45		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.6	口縁部はやや内傾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
113-46		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.2	口縁部はやや内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大筈欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
113-47		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-48		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.0	口縁部はやや内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
113-49 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.5	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-50 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾して下り、端部は内側に浅い沈線をもつ。 稜に浅い沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
113-51 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内湾気味に下り、端部は内側に浅い沈線をもつ。 稜は沈線状を呈し、鈍い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-52 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.8	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜はわずかに段をなし、鈍い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
113-53 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部はやや内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
113-54 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.6	口縁部はやや内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜に浅い沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
113-55 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 2.9	口縁部はやや内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
113-56 (P119)	蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部は内傾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-57 (P121)	高坏	口径 不明 残存高 6.1 底部径 13.0	脚柱部は外湾気味に下り、スカシを有する。 脚裾部はやや外傾し、「く」の字形にゆるやかに屈曲する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-58 (P121)	高坏	口径 不明 残存高 7.2 底部径 13.6	脚柱部は外湾気味に下り、スカシを有する。 脚裾部は短く内湾する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-59 (P121)	高坏	口径 不明 残存高 5.2 底部径 10.5	脚柱部は外湾気味に下り、スカシを有する。 脚裾部は「く」の字形に屈曲する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-60 (P121)	高坏	口径 不明 残存高 5.9 底部径 10.5	脚柱部は外湾気味に下り、スカシを有する。 脚裾部は「く」の字形に内湾する。 坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
114-61 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 4.0 底部径 9.1	脚柱部は内傾して下り、スカシを有する。 脚裾部は内湾して下った後、端部付近で短く外反し、上方に凸線を有する。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-62 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 3.7 底部径 8.5	脚柱部は内傾して下り、スカシを有する。 脚裾部は内湾して下り、端部付近で短く外反する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-63 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 2.4 底部径 8.4	脚部は内傾して下り、端部は平面をもつ。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
114-64 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 4.0 底部径 7.3	脚部は外反気味に下り、スカシを有する。 端部は外傾する平面をもつ。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
114-65 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 5.5 底部径 10.5	脚柱部は外反して下り、スカシを有する。 脚裾部は短く内湾して端部に至る。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-66 (P121)		高坏	口径 不明 残存高 7.0 底部径 10.0	脚部は外反気味に下り、短く内湾して端部に至る。 スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-67 (P121)		高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は外反気味に下り、スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-68 (P121)		高坏	口径 不明 器高 不明	脚部はほぼ垂直に下り、下方で大きく内湾する。 スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-69 (P121)		高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は外反して下り、スカシを有する。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-70 (P121)		高坏	口径 不明 器高 不明	脚部はやや内傾して下る。 脚部の一部、坏部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ シボリ	砂粒を含む	良好	灰色	
114-71 (P121)		壷	口径 不明 残存高 8.4	底部は丸い。 肩部、口縁部欠損。	外面 カキ目、ナデ、ケズリ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
114-72 (P121)		提瓶	口径 不明 器高 不明	背面はほぼ平ら。 口縁部、体部の大半欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ 指圧痕	砂粒を含む	良好	白灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
114-73 (P121)	短頸壷	口径 5.2 残存高 4.3	口縁部はやや外反して上り、端部は丸い。 肩体部は大きく内湾して下る。 底部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削りナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
114-74 (P121)	短頸壷	口径 11.0 残存高 6.0	口縁部はやや外傾して上り、端部は薄くて丸い。 肩体部はゆるく内湾して下る。 底部の一部欠損。	外面 手持ちヘラ削り回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
114-75 (P121)	脚付壷	口径 不明 残存高 9.4 底部径 15.2	脚部は外反気味に下り、沈線、波状文、刺突文を有する。 端部はやや凹んだ平面をもつ。 体部、口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
114-76 (P121)	脚付壷	口径 不明 器高 不明	脚部は内傾して下り、2条の沈線、クシ状工具による刺突文を有する。 脚部の一部、体部、口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
114-77 (P121)	器台	口径 不明 残存高 13.0 底部径 30.0	脚部は内傾して下り、下方でやや内湾する。 三角形のスカシ、2、3条の凹線、波状文を有する。 端部は内傾する凹面をもつ。 受部、脚部の一部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
115-78 (P122)	壷	口径 11.1 残存高 4.0	頸部は外反して上り、口縁部はゆるやかに内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115-79 (P122)	壷	口径 11.6 残存高 4.5	頸部は外反して上り、口縁部は「く」の字形にゆるやかに内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
115-80 (P122)	壷	口径 10.5 残存高 4.1	頸部は外反して伸び、口縁部は「く」の字形にゆるやかに屈曲する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
115-81 (P122)	壷	口径 13.4 残存高 3.0	頸部は外反して伸びる。 口縁部は外傾して上り、端部付近でわずかに内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-82 (P122)	壷	口径 11.6 残存高 2.6	頸部は外反して伸び、口縁部はゆるやかに内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115-83 (P122)	壷	口径 14.5 残存高 4.1	頸部は外反して伸びる。 口縁部は外傾して上り、端部付近で内傾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	○の破片付着
115-84 (P122)	壷	口径 11.5 残存高 3.2	頸部は外反して伸びる。 口縁部はほぼ水平に伸びた後、内湾して端部に至る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
115-85 (P122)	壷	口径 11.2 残存高 4.1	口縁部は外傾して伸び、端部付近で短く内湾する。 頸部は外反して上る。 体部欠損。	外面 自然釉付着のため不明 内面 回転ナデ タタキ	砂粒を含む	良好	黒色	
115-86 (P122)	壷	口径 13.5 残存高 4.0	口縁部は内湾して丸い。 頸部は内湾した後、外反して口縁部に至る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ タタキ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115-87 (P122)	壷	口径 12.5 残存高 3.9	口縁部は内湾する。 頸部は外反して伸びる。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-88 (P122)	壷	口径 13.4 残存高 4.6	口縁部は内湾して丸い。 頸部は内湾した後、外反して口縁部に至る。 体部欠損。	外面 自然釉付着のため不明 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	
115-89 (P122)	壷	口径 14.0 残存高 4.0	頸部は外傾して上り、口縁部は内湾して丸い。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
115-90 (P122)	壷	口径 13.2 残存高 6.1	頸部は外傾して上り、口縁部は内湾して丸い。 肩部はやや下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	
115-91 (P122)	壷	口径 14.5 残存高 5.3	頸部は大きく外反し、口縁部はやや内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-92 (P122)	壷	口径 13.5 残存高 4.8	頸部は大きく外反し、口縁部はやや内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115-93 (P122)	壷	口径 13.4 残存高 4.6	頸部は大きく外反し、口縁部はやや内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-94 (P122)	壷	口径 14.1 残存高 4.8	頸部は外反して上り、口縁部はほぼ垂直に短く伸びる。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-95 (P122)	壷	口径 15.1 残存高 3.6	頸部はやや外反して伸び、口縁部はわずかに内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115-96 (P122)	壷	口径 16.1 残存高 4.8	頸部は外反して伸び、口縁部は内湾して丸い。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
115- 97 (P122)	壷	口径 16.0 残存高 5.0	頸部は外反して上り、口縁部は短く内湾して端部に至る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
115- 98 (P122)	壷	口径 17.0 残存高 4.8	頸部は外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115- 99 (P122)	壷	口径 18.1 残存高 6.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は内湾して丸い。 肩部はやや内湾気味に下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
115-100 (P122)	壷	口径 15.3 残存高 8.1	頸部はやや外反して上り、口縁部は短く内湾して丸い。 肩部はやや内湾して下る。 体部の大半欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
115-101 (P122)	壷	口径 20.3 残存高 5.0	頸部は外反気味に上り、ヘラ状工具で描いた「の」状の文様がある。 口縁部は外傾して上り、端部付近で短く内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
115-102 (P122)	壷	口径 18.5 残存高 5.2	頸部は外傾して伸び、口縁部は丸い。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
115-103 (P122)	壷	口径 25.0 残存高 3.5	頸部は外反して上り、口縁部は逆「く」の字形に内湾する。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
115-104 (P122)	壷	口径 21.4 残存高 5.1	頸部は外反して伸び、口縁部は逆「く」の字形に内湾する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
115-105 (P122)	壷	口径 20.0 残存高 4.6	頸部は外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
115-106 (P122)	壷	口径 16.5 残存高 6.1	頸部は外反気味に伸び、口縁部は丸い。 肩部はやや内湾して下る。 体部の大半欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
115-107 (P122)	壷	口径 14.6 残存高 5.0	頸部は短く外反し、口縁部は内傾する平面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部の大半欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
116-108 (P124)	壷	口径 12.0 残存高 6.4	口頸部は外傾して伸び、端部付近で直立する。 頸部に2本の凸線がめぐり、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
116-109 (P124)		壷	口径 18.4 残存高 6.2	口縁部は内湾して伸び、下方に凹線がめぐる。 頸部は外傾して伸び、2本の凸線およびヘラ描きの文様を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
116-110 (P124)		壷	口径 14.9 残存高 5.4	口縁部は内湾して上り、下方に凹線がめぐる。 頸部は外傾して伸び、2本の凸線およびヘラ描きの文様を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
116-111 (P124)		壷	口径 19.0 残存高 5.2	口縁部は内湾して伸び、下方に凹線がめぐる。 頸部は外反して上る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
116-112 (P124)		甕	口径 17.4 残存高 6.1	口縁部は内湾して伸び、頸部との境に凸線がめぐる。 頸部は外反して上る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-113 (P124)		甕	口径 16.9 残存高 5.5	口縁部は内湾して伸び、頸部との境に凸線がめぐる。 頸部は外反して上る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-114 (P124)		甕	口径 20.0 残存高 9.6	口縁部は外反して上り、下方に凹面を有する。 頸部は外反気味に伸びる。 肩部は内傾して下る。 体部の大半欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-115 (P124)		甕	口径 22.8 残存高 8.0	口縁部は「く」の字形に屈曲する。 頸部はやや外傾して上る。 体部の大半欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-116 (P124)		甕	口径 24.0 残存高 6.9	頸部はやや外反し、口縁部は逆「く」の字形に湾曲する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-117 (P124)		甕	口径 20.5 残存高 6.0	頸部は外反し、口縁部は逆「く」の字形に屈曲する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
116-118 (P124)		甕	口径 20.5 残存高 8.0	頸部は外傾して上り、口縁部は内湾し、端部付近で短く外反する。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-119 (P124)		甕	口径 22.7 残存高 7.9	口縁部は逆「く」の字形に屈曲する。 頸部は外反気味に上る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-120 (P124)		甕	口径 23.0 残存高 7.2	頸部は外反して上り、口縁部は逆「く」の字形に屈曲する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
116-121 (P124)	甕	口径 20.5 残存高 7.6	頸部は外傾して上り、口縁部は凹面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-122 (P124)	甕	口径 18.4 残存高 6.0	頸部は外傾して伸び、口縁部はやや内傾する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
116-123 (P124)	甕	口径 24.5 残存高 9.2	頸部は外反して伸び、口縁部はほぼ垂直にやや凹みをもって上る。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-124 (P125)	甕	口径 24.8 残存高 8.5	頸部は外傾して伸び、口縁部はほぼ垂直に上る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-125 (P125)	甕	口径 19.1 残存高 7.3	頸部はやや外傾し、口縁部は内傾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
117-126 (P125)	甕	口径 20.0 残存高 5.5	頸部はやや外反して上り、口縁部はほぼ垂直に伸びる。 頸部の一部、体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
117-127 (P125)	甕	口径 22.8 残存高 6.8	頸部はやや外反して上り、口縁部は垂直に伸びる。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-128 (P125)	甕	口径 16.8 残存高 6.9	頸部はやや外反し、口縁部は内傾して端部に至る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
117-129 (P125)	甕	口径 20.2 残存高 8.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は内傾する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-130 (P125)	甕	口径 21.0 残存高 10.0	頸部は外反して上り、口縁部はやや内傾する。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-131 (P125)	甕	口径 20.5 残存高 8.0	口縁部は「く」の字形に内湾する。 頸部はやや外反して上る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-132 (P125)	甕	口径 20.4 残存高 7.7	頸部は外傾して上り、口縁部は内側に大きく凹む面をもつ。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
117-133 (P125)	甕	口径 16.1 残存高 6.4	頸部はやや外反して上り、口縁部は内傾する凹面をもつ。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
117-134 (P125)	甕	口径 20.5 残存高 9.0	口縁部は内湾して上り、端部付近で短く外反する。 頸部は外反して上る。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 回転ナデ 内面 タタキ、ケズリ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-135 (P125)	甕	口径 18.2 残存高 7.6	頸部はやや外反して上り、口縁部は内湾した後、短く外反して端部に至る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-136 (P125)	甕	口径 20.0 残存高 8.9	頸部はやや外傾して伸び、口縁部は内傾した後、端部付近でわずかに外反する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
117-137 (P125)	甕	口径 19.6 残存高 8.0	頸部はやや外反して伸び、口縁部は内湾した後、端部付近で外反する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
118-138 (P127)	甕	口径 17.6 残存高 4.5	頸部はやや外反して伸び、口縁部はほぼ垂直に上る。 端部はほぼ水平な平面をもつ。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
118-139 (P127)	直口壷	口径 10.8 残存高 6.2	頸部は外傾して伸び、口縁端部は2次加工した内傾する面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
118-140 (P127)	直口壷	口径 18.3 残存高 10.0	頸部は外傾して上り、口縁端部は2次加工した面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
118-141 (P127)	直口壷	口径 14.2 残存高 5.8	頸部は外傾して上り、口縁端部は2次加工した平面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
118-142 (P127)	直口壷	口径 16.8 残存高 7.0	頸部は外反して上り、口縁端部は2次加工した内傾する平面をもつ。 体部欠損。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
118-143 (P127)	直口壷	口径 20.6 残存高 6.8	頸部はやや外反して上り、口縁端部は2次加工した内傾する平面をもつ。 体部欠損。	外面 カキ目 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
118-144 (P127)	直口壷	口径 不明 残存高 5.0	頸部は短く外反し、口縁端部は丸い。 肩部は内湾気味に下る。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
118-145 (P127)	直口壺	口径 16.8 残存高 7.9	頸部はやや外傾して上り、口縁端部は内側に平面をもつ。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
118-146 (P127)	直口壺	口径 12.0 残存高 4.8	頸部はほぼ垂直に上り、口縁端部は平ら。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
118-147 (P127)	壺	口径 不明 残存高 7.3	頸部は外傾して上り、口縁部は丸い。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	不良	淡灰色	
118-148 (P127)	甕	口径 不明 残存高 8.6	頸部は外傾して上り、口縁部は内傾する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黄灰色	
118-149 (P127)	壺	口径 不明 残存高 5.8	頸部は外反して上り、口縁部は丸い。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 不明 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	不良	黒灰色	
118-150 (P127)	壺	口径 不明 残存高 4.8	頸部は外傾して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
118-151 (P127)	壺	口径 不明 残存高 3.5	頸部は外反気味に上り、口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
118-152 (P127)	壺	口径 不明 残存高 3.9	頸部は外傾して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
118-153 (P127)	壺	口径 不明 残存高 4.4	頸部は外反気味に上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	
118-154 (P127)	壺	口径 不明 残存高 5.0	頸部は外反気味に上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
118-155 (P127)	壺	口径 不明 残存高 3.7	頸部は外湾気味に上り、口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 風化のため不明 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	緑灰色	
118-156 (P127)	壺	口径 不明 残存高 4.4	頸部は外湾気味に上り、凹線、波状文を有する。 口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
118-157 (P127)	壷	口径 不明 残存高 3.6	頸部は外反気味に上り、口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	
118-158 (P127)	甕	口径 不明 残存高 3.4	口縁部は「く」の字形に湾曲する。 頸部はやや外反して上る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
118-159 (P127)	甕	口径 不明 残存高 3.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
118-160 (P127)	甕	口径 不明 残存高 4.0	頸部はやや外傾して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
118-161 (P127)	甕	口径 不明 残存高 4.8	口縁部は外傾した後、端部付近で内湾する。 頸部はやや外反して伸びる。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶灰色	
118-162 (P127)	甕	口径 不明 残存高 3.3	頸部はやや外反して伸び、口縁部は内湾する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
118-163 (P127)	甕	口径 不明 残存高 4.7	頸部はやや外反して伸び、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
118-164 (P127)	甕	口径 不明 残存高 3.5	口縁部は「く」の字形に内湾する。 頸部は外傾して伸び、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
118-165 (P127)	甕	口径 不明 残存高 3.1	口縁部はやや内湾気味に伸び、端部は内側に平面をもつ。 口縁部と頸部に文様を有する。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
118-166 (P127)	甕	口径 不明 器高 不明	頸部は内傾して上り、凸線、波状文を有する。 口縁部および体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
118-167 (P127)	直口壷	口径 16.8 残存高 11.0	口縁部はやや内傾して伸び、端部は内側に凹面をもつ。 肩部はやや内湾気味に下り、把手がつく。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
119-168 (P128)	甕	口径 20.0 残存高 12.7	頸部はやや外反して伸び、口縁部は内傾する。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
119-169 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部は「く」の字形に内湾した後、端部付近で短く外反する。 頸部は外反して上る。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
119-170 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部は「く」の字形に内湾し、端部は丸い。 頸部はやや外反して伸び、凸線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
119-171 (P128)	甕	口径 残存高	頸部は外傾して伸び、口縁部は内傾して端部に至る。 頸部に凸線、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
119-172 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部はやや内傾して上る。 頸部はやや外反して伸び、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
119-173 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部は「く」の字形に内湾する。 頸部はやや外反して伸び、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
119-174 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部は内傾し、下方に凹線がめぐる。 頸部はやや外傾して伸び、凹線、ヘラ描きの文様を有する。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	
119-175 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部はほぼ垂直に上り、下方に凸線がめぐる。 頸部はやや外傾して伸び、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
119-176 (P128)	甕	口径 残存高	口縁部はやや外傾して伸びる。 頸部はやや外反気味に伸び、凹線、波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
119-177 (P128)	甕	口径 器高	頸部は外反気味に伸び、凹線、波状文を有する。 口縁部および体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
120-178 (P129)	甕	口径 残存高	口縁部は内湾する。 頸部はやや外反して伸び、凸線、凹線、ヘラ描きの波状文を有する。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
120-179 (P129)	甕	口径 器高	頸部は外反して伸び、凹線、波状文を有する。 口縁部および体部欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
120-180 (P129)	台付椀(蓋)	口径 器高	天井部はほぼ平らで、中央に擬宝珠様のつまみがつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
120-181 (P129)		台付椀（蓋）	口径 不明 器高 不明	天井部はほぼ平らで、中央に擬宝珠様のつまみがつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
120-182 (P129)		台付椀（蓋）	口径 15.2 残存高 1.4	天井部は内湾気味に下り、口縁部は短く直立する。 端部は丸い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
120-183 (P129)		台付椀（蓋）	口径 14.0 器高 3.2	天井部は内湾気味に下り、口縁部付近でわずかに外反する。 中央に輪状のつまみがつく。 口縁部は内湾し、端部は丸い。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
120-184 (P129)		台付椀	口径 14.0 器高 不明	口縁部は内湾気味に上り、端部は丸い。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
121-185 (P130)		埴輪	口径 不明 残存高 4.7	口縁部はやや外傾して上り、端部は内傾する凹面をもつ。 筒部欠損。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	暗茶褐色	須恵質
121-186 (P130)		埴輪	口径 不明 残存高 4.0	口縁部はやや外反気味に上り、端部は内傾する凹面をもつ。 筒部欠損。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ	砂粒を含む	良好	暗茶褐色	須恵質
121-187 (P130)		埴輪	口径 不明 残存高 4.2	口縁部はやや外反気味に上り、端部は内傾する凹面をもつ。 筒部欠損。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	暗茶褐色	須恵質
121-188 (P130)		埴輪	口径 不明 残存高 7.5	口縁部はやや外傾して上り、端部は内傾する凹面をもつ。 タガは低く、端部に平面を有する。 筒部の大半欠損。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-189 (P130)		埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部はやや外反して上り、タガはやや高く、端部に凹面をもつ。 口縁部欠損。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	暗茶褐色	須恵質
121-190 (P130)		埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや高く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-191 (P130)		埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや高く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-192 (P130)		埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや高く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
121-193 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-194 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-195 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
121-196 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 横ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-197 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 回転ナデ 指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-198 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	黄褐色	
121-199 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
121-200 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低い。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-201 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 ナデ、指圧痕	砂粒を含む	良好	茶褐色	
121-202 (P130)	埴輪	口径 不明 器高 不明	筒部の破片。 タガはやや低く、端部に浅い凹面をもつ。	外面 横ナデ、ハケ目 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
121-203 (P130)	土師器 壺	口径 12.6 残存高 5.2	口縁部はやや内湾気味に上り、端部は丸い。 体部欠損。	外面 横ナデ 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
121-204 (P130)	土師器 坏	口径 10.6 器高 4.1	口縁部はやや内傾して上り、端部は丸い。 底部はやや丸みをもつ。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	黒色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
121-205 (P130)		土師器 高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は内傾して上る。 脚部の大半、坏部欠損。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	褐色	
121-206 (P130)		土師器 高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は内傾して下り、下方で大きく開く。 坏部、脚端部欠損。	外面 ミガキ、ナデ 内面 シボリ、ケズリ	砂粒を含む	良好	黄褐色	
121-207 (P130)		土師器 高坏	口径 不明 残存高 5.2 底部径 11.5	脚部は内傾して下り、下方で外反して開く。 端部は丸い。 坏部欠損。	外面 風化のため不明 内面 ケズリ、ハケ目	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	

C地区9層

122- 1 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 12.6 器高 4.2	口縁部はやや内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部は低くて平ら。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
122- 2 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 13.2 器高 3.5	口縁部はやや内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部は低く、やや凹む。	外面 回転ヘラ削り ナデ、回転ナデ 内面 タタキ ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	ロクロの回転右方向
122- 3 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 15.2 残存高 4.0	口縁部はやや内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒色	
122- 4 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸みをもつ。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	ロクロの回転右方向
122- 5 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸みをもつ。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	ロクロの回転右方向
122- 6 (P131)		蓋坏(蓋)	口径 12.2 残存高 3.2	口縁部はやや内湾気味に下り、端部は内傾する平面をもつ。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
122- 7 (P131)		蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.6	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はわずかに上外方に伸びる。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
122- 8 (P131)		蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.6	たちあがりは内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
122- 9 (P131)	蓋 坏(身)	口径 不明 残存高 2.5	たちあがりは内傾して上り、端部は丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
122-10 (P131)	蓋 坏(身)	口径 不明 残存高 3.0	たちあがりはやや内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はほぼ水平に伸びる。 底体部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
122-11 (P131)	土師器 高坏	口径 不明 器高 不明	坏部はやや外傾して伸びる。 口縁部、脚部欠損。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
122-12 (P131)	高坏	口径 10.7 器高 7.5 底部径 8.7	たちあがりはやや外反して伸び、端部は内側に外傾する平面をもつ。 脚部はやや外反気味に下り、円形のスカシを有する。	外面 カキ目 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
122-13 (P131)	壷	口径 13.5 残存高 2.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は内湾する。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
122-14 (P131)	壷	口径 13.0 残存高 4.0	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
122-15 (P131)	壷	口径 22.2 残存高 5.3	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 肩部は大きく内傾する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
122-16 (P131)	壷	口径 25.3 残存高 3.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
122-17 (P131)	壷	口径 21.5 残存高 4.5	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
122-18 (P131)	直口壷	口径 14.5 残存高 4.7	口縁部は垂直に上り、端部は内側に凹面をもつ。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	緑灰色	

C地区10層

123- 1 (P131)	蓋 坏(蓋)	口径 15.8 残存高 4.0	口縁部は内傾して下り、端部は内傾する凹面をもつ。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
123- 2 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸い。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
123- 3 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 稜に沈線がめぐる。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
123- 4 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平らで、稜に沈線がめぐる。 口縁部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
123- 5 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
123- 6 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
123- 7 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
123- 8 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部はやや丸く、ヘラ記号が描かれている。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
123- 9 (P133)	蓋坏(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平ら。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
123-10 (P133)	蓋坏(身)	口径 10.9 残存高 3.7	たちあがりはやや外反して上り、端部は内側に凹面をもつ。 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	白灰色	
123-11 (P133)	蓋坏(身)	口径 11.0 残存高 3.5	たちあがりはやや内傾して上り、端部は薄くて丸い。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
123-12 (P133)	蓋坏(身)	口径 13.2 残存高 4.8	たちあがりはやや内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや凹む。 底部はやや平ら。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
123-13 (P133)	蓋坏(身)	口径 不明 残存高 3.0	受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや凹む。 口縁部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	

図番号	面	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
123-14 (P133)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりはやや外反して上り、端部は薄くて丸い。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
123-15 (P133)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりはやや外反して上り、端部は丸い。 受部はやや凹む。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
123-16 (P133)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりは内傾して伸び、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
123-17 (P133)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりはやや内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	黒色	
123-18 (P133)		蓋坏(身)	口径 不明 器高 不明	たちあがりはやや内傾して上り、端部は薄くて丸い。 受部はやや上外方に伸びる。 底部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
123-19 (P133)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 5.0	口縁部はやや内湾して下り、端部は内傾する平面をもつ。 稜は丸くて鈍い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	暗茶褐色	
123-20 (P133)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 4.2	口縁部はやや内傾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	茶褐色	
123-21 (P133)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部は内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は沈線状を呈する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
123-22 (P133)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.4	口縁部はやや内湾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜は丸くて鈍い。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
123-23 (P133)		蓋坏(蓋)	口径 不明 残存高 3.0	口縁部は内傾して下り、端部は外反する平面をもつ。 稜に沈線がめぐる。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
124-24 (P134)		壷	口径 13.0 残存高 4.0	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
124-25 (P134)		壷	口径 11.7 残存高 3.2	頸部は外反して上り、口縁部は内湾して丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	黒色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
124-26 (P134)	壷	口径 13.5 残存高 4.1	頸部は外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
124-27 (P134)	壷	口径 15.4 残存高 4.9	頸部は外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	青灰色	
124-28 (P134)	壷	口径 12.6 残存高 3.6	口縁部は「く」の字形に内湾する。 頸部は外反して上る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
124-29 (P134)	甕	口径 19.3 残存高 9.1	口縁部は「く」の字形に内湾する。 頸部は外反して上る。 肩部は内傾して下る。 体部欠損。	外面 カキ目、タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
124-30 (P134)	甕	口径 21.5 残存高 4.6	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	黒灰色	
124-31 (P134)	甕	口径 19.6 残存高 3.7	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	濃灰色	
124-32 (P134)	甕	口径 17.3 残存高 4.9	頸部はやや外傾して上り、口縁部は丸い。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
124-33 (P134)	甕	口径 16.6 残存高 7.1	頸部はやや外反して上り、口縁部は丸い。 肩部はやや内湾して下る。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	青灰色	
124-34 (P134)	甕	口径 21.0 残存高 4.2	口縁部は「く」の字形に湾曲する。 頸部はやや外反して上る。 体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
124-35 (P134)	甕	口径 38.2 残存高 6.0	口縁部は内傾して上る。 頸部は外傾して上り、凸線、波状文を有する。 頸部の一部、体部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	白灰色	
124-36 (P134)	高坏	口径 不明 器高 不明	脚部は内傾して下り、スカシを有する。 脚部および坏部の大半欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
124-37 (P134)	短頸壷	口径 6.2 残存高 5.0	口縁部はほぼ垂直に上り、端部は丸い。 肩部は短く内湾し、底部に至る。 底部の一部欠損。	外面 手持ちヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	

図番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
124-38 (P134)	脚付壺	口径 不明 残存高 11.5 底部径 14.0	脚部は内傾して下り、凹線、波状文、刺突文、スカシを有する。 端部はやや凹む平面をもつ。 体部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
124-39 (P134)	埴輪	口径 不明 残存高 6.2	口縁部はやや外反して上り、端部はやや内傾する凹面をもつ。 筒部欠損。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 ハケ目	砂粒を含む	良好	赤褐色	
124-40 (P134)	埴輪	口径 不明 器高 不明	タガはやや高く、端部に凹面をもつ。 筒部から外方に突起するところがあり、形象埴輪の破片か。	外面 ハケ目、横ナデ 内面 風化のため不明	砂粒を含む	良好	赤褐色	
124-41 (P134)	形象埴輪	口径 不明 器高 不明	方形のスカシがあり、家形埴輪か。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
124-42 (P134)	土師器 高坏	口径 不明 器高 不明	脚部はやや外反気味に下る。 脚部の一部、坏部の大半欠損。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	
124-43 (P134)	土師器 甕	口径 不明 器高 4.3	口頸部はやや外反して端部に至る。 体部の大半欠損。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
124-44 (P134)	土師器 皿	口径 12.9 残存高 4.0	口縁部はやや外傾して上り、端部は丸い。 体部の大半欠損。	外面 風化のため不明 内面 風化のため不明	砂粒を含む	やや不良	黄褐色	

A 地区

54－1 (P49)	高坏	口径 不明 器高 不明	坏底部はやや平ら。 口縁部および脚部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
54－2 (P49)	高坏	口径 不明 残存高 4.9 底部径 9.8	脚柱部は外反気味に下り、沈線を有する。 脚裾部は内傾して下る。 坏部欠損。	外面 カキ目 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	茶褐色	
54－4 (P49)	甕	口径 37.5 残存高 12.5	口頸部はやや外傾して上り、短く内湾して端部に至る。 口頸部にヘラ描きの文様、波状文を有する。 体部欠損。	外面 タタキ 回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
54－5 (P49)	甕	口径 不明 器高 不明	頸部はやや外反して上り、沈線、波状文を有する。 口縁部および体部欠損。	外面 ナデ、回転ナデ 内面 タタキ 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
54－6 (P49)	台付椀	口径 不明 器高 不明	天井部はやや平らで、中央に擬宝珠様のつまみがつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	ロクロの回転右方向
54－7 (P49)	台付椀	口径 12.2 器高 5.1 底部径 8.2	口縁部はやや内湾気味に上り、端部は丸い。 底部は平らで、やや内傾する高台がつく。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	灰色	

B 地区

91－1 (P85)	台付椀(蓋)	口径 15.0 残存高 1.6	天井部はやや内湾して下り、口縁部付近で短く外反する。 天井部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－2 (P85)	台付椀(蓋)	口径 不明 器高 不明	天井部は平らで、輪状のつまみがつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－3 (P85)	台付椀(蓋)	口径 10.4 器高 2.8	天井部は内湾気味に下り、輪状のつまみがつく。 口縁部はやや外傾して下る。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－4 (P85)	台付椀	口径 12.2 器高 5.4 底部径 8.0	口縁部はやや外傾して上り、端部は丸い。 底部は平らで、内傾する高台がつく。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－5 (P85)	台付椀	口径 15.2 器高 不明	口縁部はやや外傾して上り、端部は丸い。 底部欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	濃灰色	
91－6 (P85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.1 底部径 8.4	底部は平らで、やや内傾する高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－7 (P85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.1 底部径 7.2	底部は平らで、やや内傾する高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－8 (P85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.4 底部径 6.7	底部は平らで、内傾する高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－9 (P85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.0 底部径 8.7	底部は平らで、高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	良好	淡灰色	

図面番号	種類	法量	形態の特徴	調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
91－10 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.2 底部径 8.4	高台はやや外反し、端部内側に凹面をもつ。 口縁部、底部の大半欠損。	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－11 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.4 底部径 8.2	底部は平らで、高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－12 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 2.1 底部径 7.5	口縁部は内湾気味に上る。 底部は平らで、高台がつく。 口縁部の一部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－13 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.5 底部径 8.4	底部はやや平らで、高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ヘラ削り 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
91－14 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.4 底部径 7.0	底部は平らで、内傾する高台がつく。 口縁部欠損。	外面 回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	多量に砂粒を含む	良好	淡灰色	
91－15 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.6 底部径 6.4	底部は平らで、内傾する低い高台がつく。 口縁部欠損。	外面 糸切り ナデ、回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
91－16 (P 85)	台付椀	口径 不明 残存高 1.4 底部径 7.5	底部は平らで、内湾する低い高台がつく。 口縁部欠損。	外面 糸切り ナデ、回転ナデ 内面 ナデ、回転ナデ	砂粒を含む	やや不良	灰色	
91－17 (P 85)	椀	口径 不明 残存高 0.7 底部径 6.6	底部はやや凹む。 口縁部欠損。	外面 糸切り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	
91－18 (P 85)	椀	口径 不明 残存高 1.4 底部径 6.4	底部はやや凹む。 口縁部欠損。	外面 糸切り 回転ナデ 内面 回転ナデ	砂粒を含む	良好	灰色	

Ⅳ　島根県日脚窯跡と須恵器について

北九州市立考古博物館　小　田　富士雄

1984年3月17日から19日まで浜田市日脚町で発見された須恵器窯跡の調査現地を見学し、出土須恵器についても若干の検討を加えることができた。このような機会を設けていただいた県教委ならびに関係者の方々にまず感謝申し上げる。

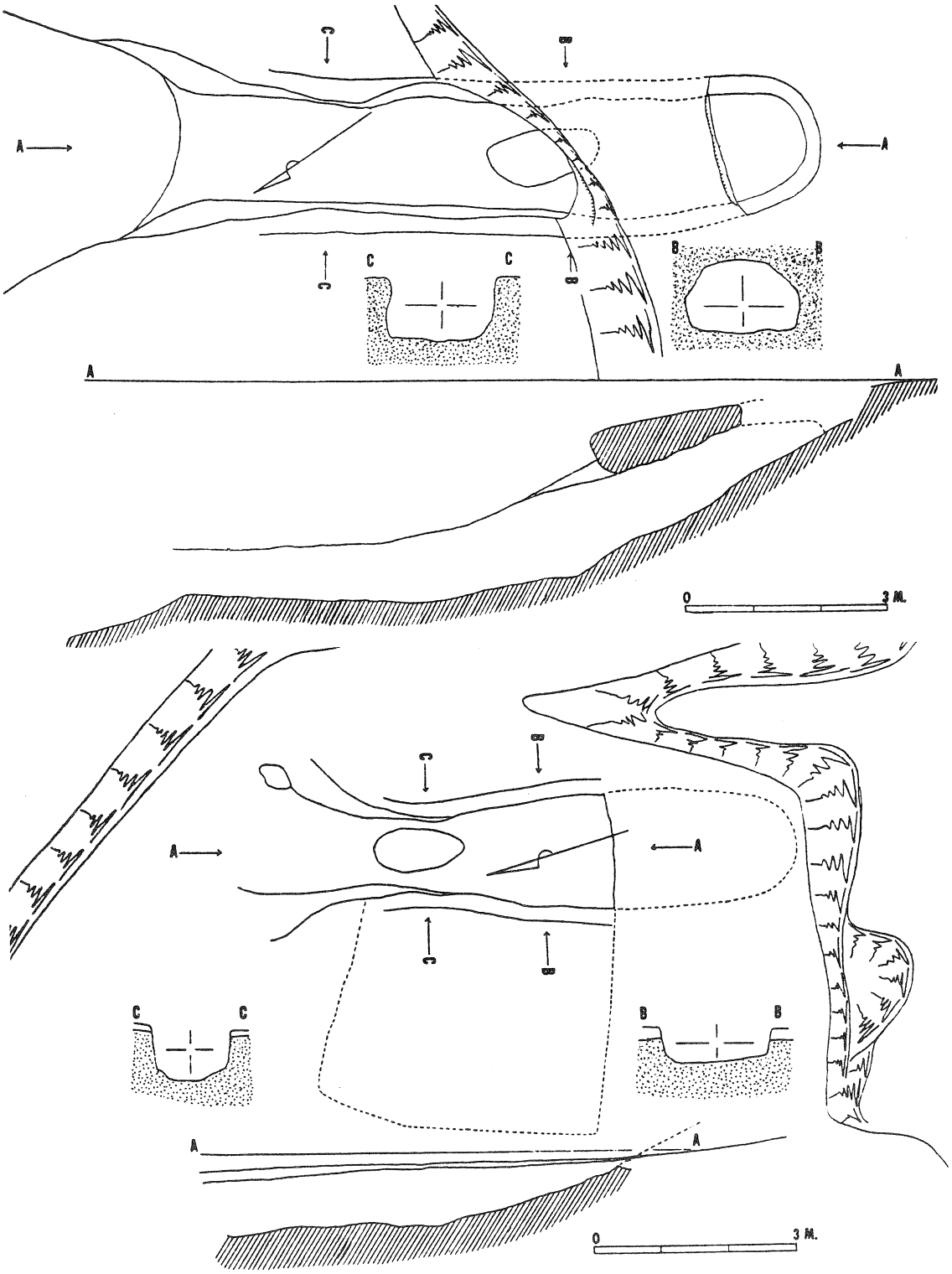
石見地方の須恵器窯跡は1957年に大川清氏らによって調査された益田市西平原の芝窯跡、中塚窯跡があり[(1)]、また1981～82年に勝部昭氏らによって調査された益田市遠田町の本片子窯跡[(2)]が知られている。芝窯跡・中塚窯跡は6世紀後半代、本片子窯跡は瓦陶兼用窯で8世紀代に比定される。調査内容の判明している以上3窯跡を参照しながら、日脚窯跡について見学した所感を記して参考に供しよう。

1．窯体の構造について

芝窯跡　窯体はトンネル式無段登窯である。段畑にあるので大部分の天井は削りとられている。平面全長10.5m、幅は焚口部末端で約3m、そこから約1.5m奥の床面で約1.7m、上部両壁間で約2.4mを測る。それより奥は平均1.5mである。窯壁は最初の壁にさらに1～2cmの厚さの粘土を塗って補強しているが、ほとんど発掘時に剥落してしまった。天井部の残存した部分で高さ約1.3m、窯尻寄りで0.8mである。床面は焚口より3mまではほぼ水平（正確には約2度の勾配）で燃焼部を形成する。これより奥は平均28度の勾配で上昇して煙道にいたる焼成部を形成する。両者の境付近に1.5×0.8mの不正長円形凹み（深さ約10センチ）がある。

中塚窯跡　焚口から窯体の中央付近までが残っているだけで、天井もすでに削平されている。現在平面長4.3m、幅は焚口部末端で約1.3m、上部両壁間で約2mを測る。焚口部末端から約2m奥までは幅が逐次せばまり、さらにそこから奥にむかって幅が広がり、現存末端での床面幅は約1.75mである。床面は焚口から奥に0.75mまでは約5度の勾配で上昇して燃焼部を形成する。これより奥は平均約18度の勾配で上昇して焼成部を形成する。両者の境付近に1.3×0.6mの不正長円形凹み（深さ約10cm）がある。調査者は地形、窯体構造、遺物の年代などから本窯跡もトンネル式無段登窯の可能性が強いと推定している。

本片子窯跡　窯体はトンネル式無段登窯であろう。窯体の平面全長6.34m（斜距離で6.84m）、焚口と窯尻の床面レベル差は2.78mである。焚口末端の床面幅は1.3m、さらに1.7m奥の地点では1.45mを測り、それから奥にむかっては次第に開いてゆき、焚口から4m地点では1.78mの最大幅となる。以後は次第にせばまり、窯尻には径50cmほどの円形灰黒色土の部分があって煙出しであ

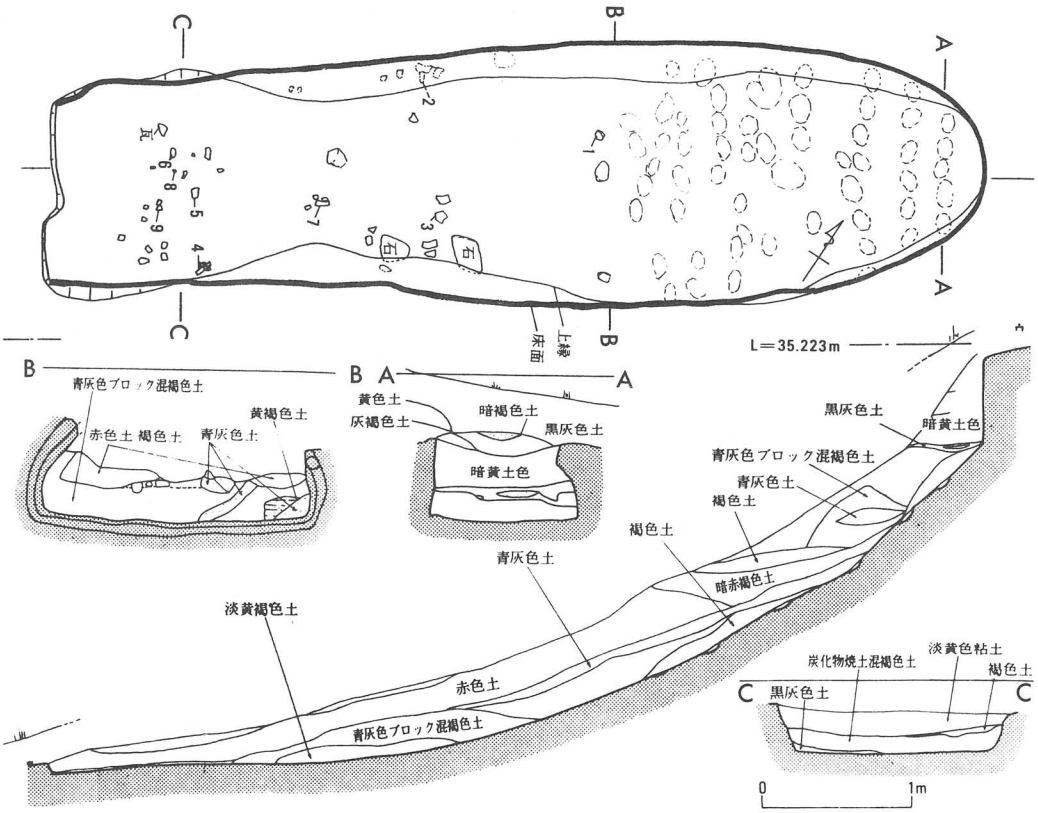


第128図　芝窯跡（上）と中塚窯跡（下）の窯体構造図（大川清ほか報文より）

ることを示している。焚口から1.7 m地点までは床面4度の傾斜を示す燃焼部であり、それより奥は13～26度の焼成部となる。とくに、窯尻ちかくでは45度の急傾斜である。傾斜角の急な焼成部の奥寄りでは床面に製品を据えやすくするために凹みがつくられている。この凹みは窯尻に近いほど整然と明瞭に並んでおり、最奥列は5個、その手前は6個、9個と数えることができる。凹みの大きさは14～20 cm、深さ3.5～5 cmである。窯体の横断面はかまぼこ形を呈し、天井はすでに崩壊している。

不良製品や炭灰を廃棄した灰原は、焚口から斜面下方に約7.5 m、横に12.5 mの広がりをもっており、厚さ10cmほどの堆積層が2～3層認められた。

北部九州の窯跡　北部九州ではこれまでいくつかの須恵器窯跡が調査されているが、1遺跡で10基にも達する調査例をとりあげてみると、福岡県北九州市小倉南区の天観寺山窯跡群[4]（四地区10基）と福岡県八女市の八女古窯跡群[5]（五地区10基）がある。前者は6世紀後半～末頃（Ⅳ様式須恵器）を主体とする窯跡群で豊前北部地域を代表する遺跡である。後者は6世紀中頃から8世紀（Ⅲ～Ⅶ様式須恵器）におよび、6世紀後半から末頃（Ⅳ様式須恵器）が空白となるが、筑後北部地域を代表する遺跡である。[5]

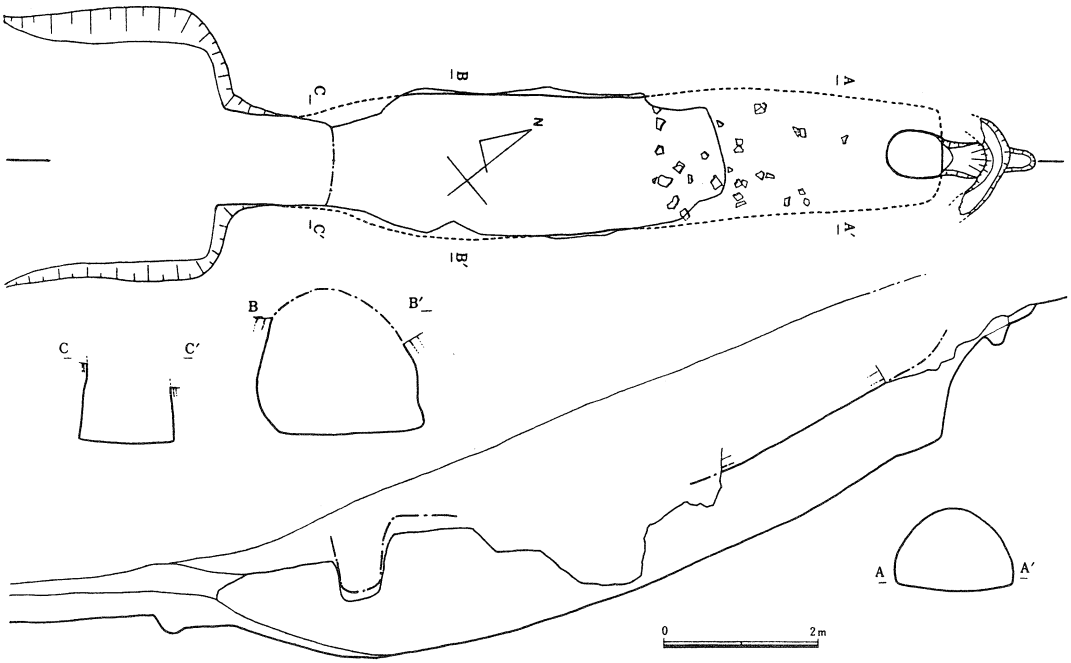


第129図　本片子窯跡の窯体構造図（勝部昭ほか報文より）

天観寺山窯跡群の窯体構造をまとめると次表のようになる。

区一号窯	全　長 (cm)	最大幅 (cm)	高　さ (cm)	傾　斜	方　位	須恵器
Ⅰ－1	930	190	160	25°	N52°E	ⅣB～A
Ⅰ－2	1320	230	推定 130	23°	N54°E	Ⅴ
Ⅱ－1	1120	185	130	30°	N82°E	Ⅳ A
Ⅱ－2	1040	190	70 (+)	28°	N82°E	Ⅳ A
Ⅲ－1	1040	190	推定 100	25°	N35°E	ⅣA～B
Ⅲ－2	700 (+)	150	160	15°	N36°E	Ⅳ B
Ⅲ－3	550 (+)	180	120	15°	N40°E	Ⅳ B
Ⅲ－4	410 (+)	160	推定 100	?	N21°E	Ⅳ B
Ⅲ－5	320 (+)	170	推定 110	?	N46°E	Ⅳ B
Ⅳ－1	400 (+)	190	推定 150	21°	N13°E	Ⅳ B

窯体の全長は6世紀代のもの（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区）で10～11m、最大幅1.6～2m、高さ1～1.5m、焼成部の傾斜角15～30度に要約される。7世紀前半代のもの（Ⅰ区）は2基で、全長・最大幅では大・小著しい差を示している。



第130図　須恵器窯跡（北九州市天観寺山第Ⅰ区第1号窯跡）

つぎに、八女古窯跡群の窯体構造をまとめると、次表のようになる。

	長さ(cm)	巾(cm)	高さ(cm)	方位	傾斜	生産品
塚ノ谷1号	880	170	130	W 16° N	38°	須恵器(V～VIA) 円面硯
2号	860	148	120	N 55° E	38°	須恵器(VIB～C) 円面硯
3号	?	102	88(+)	N 18° E	32°	須恵器(IIIB)
4号	1470	180	100	N 40° W	22°	須恵器(IIIB)
牛焼谷	540	130	116	E 15° N	40°	須恵器(IVC) 瓦
中尾谷1号	910(+)	226	130～70	N 76° E	22°～36°	須恵器(IIIA)
2号	1270(+)	225	160～80	N 82° W	28°	須恵器(IIIA)
3号	990(+)	190	160	N 88° W	25°～32°	須恵器(IIIA)
菅ノ谷1号	520	100	94	N 30° E	22°	須恵器(VII) 瓦
2号	620	145	140	S 70° W	42°	須恵器(VII)

ここでは6世紀代(III様式須恵器)と、7～8世紀代(VI～VII様式須恵器)の窯体に大別できる。前者(古墳時代)は全長10～15m、最大幅1.8～2.3m、高さ1～1.6m、傾斜角20～30度に要約できる。後者(歴史時代)は全長5～9m、最大幅1～1.7m、高さ1～1.4m、傾斜角22度1基38～42度4基となる。両者を対比してみると、古墳時代窯に対して歴史時代窯は高さではほとんど差違がないものの、全長・最大幅が小さくなり、傾斜角が著しく大きくなる(急傾斜になる)という結果がえられる。

また、古墳時代にかぎって天観寺山窯跡と比較してみると、八女古窯跡群に対して天観寺山窯跡群は全長・最大幅においてはやや小さく、高さ・傾斜角においてはほぼ等しいという結果がえられる。さらに天観寺山窯跡群の7世紀代の窯跡(I区1・2号窯)の場合は古墳時代とほとんど異なった特徴は見出せない。強いて言うならば歴史時代窯への移行段階とでも評すべきもので、未だ古墳時代窯の特徴を強く継承していて、八女古窯跡群の歴史時代窯跡とは著しい相違を示している。

北部九州における上述の成果と石見地方の既往調査3窯跡を対比してみよう。6世紀代の芝・中塚両窯跡については窯体のほぼ完形がうかがわれる芝窯跡の場合しか比較しえないが、八女古窯跡群よりも天観寺山窯跡群の平均値の方に近似した結果がえられる。また8世紀代の本片子窯跡については窯体の全長・最大幅は八女古窯跡群に近く、傾斜角は天観寺山窯跡群に近いという結果がえられる。

以上の結果を参照した上で、今回発見された日脚窯跡についてみれば、窯体の全長は7m、最大幅2.5m、傾斜角15～26度で古墳時代の窯跡としては全長がやや短かいのに対して最大幅が大きく、傾斜角では芝、天観寺山、八女古窯跡群などと大差ない。全長の短かい点は、日脚窯の位置が丘陵斜面の中位より上に構えられていて頂上部までの距離が地勢上著しい制約をうけ、また立地斜面が緩傾斜地形であることなどと関係するのであろうか。また窯体の平面形でみると、焚口付近で窯体幅が著しくせばまり、いかにも〝徳利窯〟の形容にふさわしい。その点では芝・本片子両窯が

窯体幅にあまり広狭がない構造であるのときわめて対照的である。中塚窯とむしろ近いというべきであろう。後述するように日脚窯の須恵器は、これまで比較した諸窯跡にくらべて最も古く位置づけられ、また山陰地方でも同時期の窯跡の構造が調査されていない現状であるから、将来比較資料の増加を待って当地方の窯構造の変遷・特色を知らねばならない。本稿では上述比較諸窯の構造を一覧整理して参考に供しておく。

遺跡名＼窯体		全　長 (m)	最大幅 (m)	高　さ (m)	傾斜角 (度)
天観寺山窯跡群	古墳	10 ～ 11	1.6 ～ 2	1 ～ 1.5	15 ～ 30
	歴史	9.3 13.2	1.9 2.3	1.6 1.3	25 23
八女古窯跡群	古墳	10 ～ 15	1.8 ～ 2.3	1 ～ 1.6	20 ～ 32
	歴史	5 ～ 9	1 ～ 1.7	1 ～ 1.4	22 (1基) 38 ～ 42 (4基)
芝窯跡		10.5	1.5	1.3 (+)	28
中塚窯跡		4.3 (+)	2	—	18
本片子窯跡		6.34	1.78	—	(13 ～) 26
日脚窯跡		7	2.5	—	(15 ～) 26

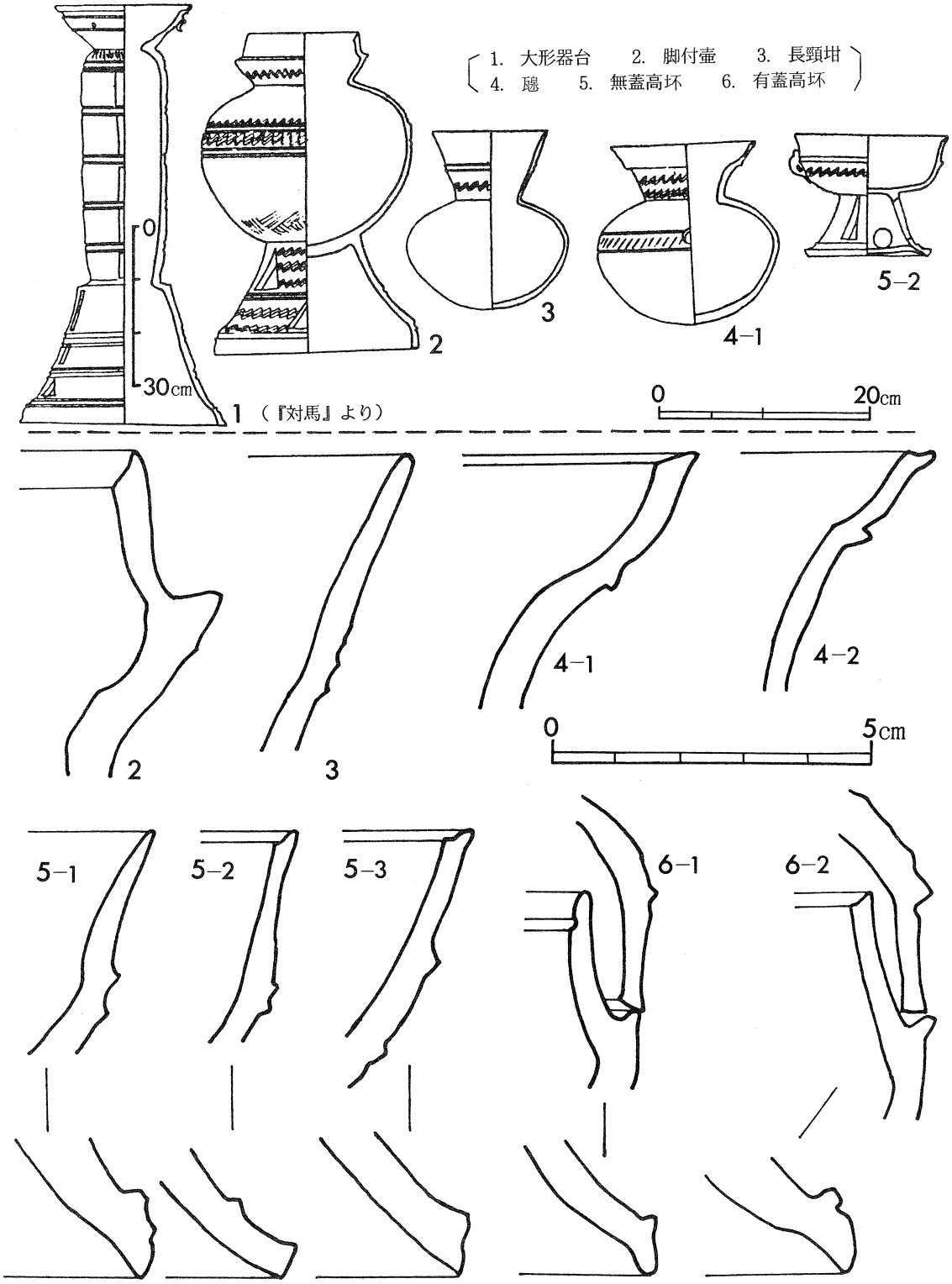
2．須恵器について

日脚窯跡で生産された須恵器は石見地方の須恵器窯としては現在知られている最古段階のものであり、出雲地方では安来市門生町の高畑窯跡[4]の収集資料が最も近い特徴を有しているようである。したがって須恵器のなかでも古式段階に属するものであることはまちがいない。筆者は調査中の短時間現地でごく限られた資料について点検した程度であり、その後調査者が整理中にもたらした情報を加えての判断であるから、不十分な段階での考察であることを前提としていることを了されたい。

現地で抽出しえた資料は蓋坏・無蓋高坏・瑞・壷または甕破片などである。これらに注目したのは、須恵器の編年研究上最も時期判断の特徴がとらえやすいというこれまでの経験と、資料の普編性によるところである。

これまで山陰の須恵器編年は1960年に発表された山本清氏の研究に負うている[7]。当時はまだ窯跡資料で編年するにはあまりに資料に乏しい段階であったから、古墳の副葬須恵器に資料を求められた。山本氏は古墳終末期の須恵器を出雲国分寺跡の発掘資料を基準として、類品を終末期古墳に求め四期に大別された。このうち第Ⅰ期には松江市の金崎古墳[8]、薬師山古墳[9]の資料をあて、第Ⅱ期には浜田市のめんぐろ古墳[10]の資料をあてている。

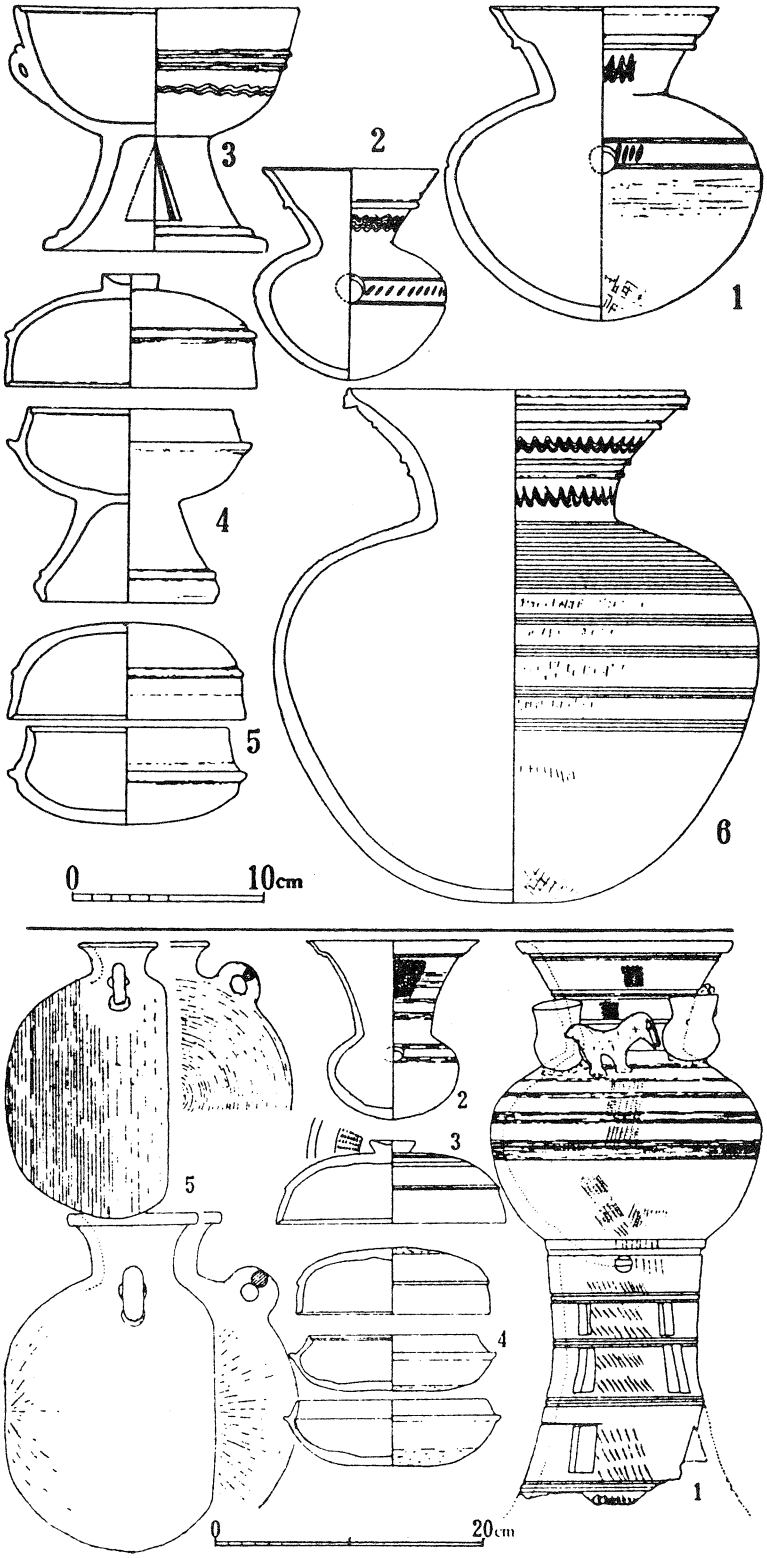
金崎古墳では蓋坏（第131図５）・大型壷（第131図６）を欠き、薬師山古墳では大型器台（第132図１）・脚付壷（第132図２）・長頸壷（第132図３）などを欠いている。しかし共通する器種としては無蓋高坏・有蓋高坏・瑞などがあるので、器形上の特徴を比較することができる。高坏は無蓋式・有



第131図　金崎古墳の須恵器

蓋式ともに短脚形式であり、瑞は短頸形式である。さらに有蓋高坏および蓋坏にみる蓋と身の接口部にみる特徴においても両古墳の共通するところが多い。山本清氏も指摘されたように両古墳の須恵器はほぼ重複する時期に位置づけられよう。しかし現段階までの西日本における須恵器研究の成果を参照してみるときは、果して単一時期の様式として処理してしまうにはやや疑問が生ずる。たとえば金崎古墳の有蓋高坏の一例(第131図6－1)、薬師山古墳の瑞の一例(第132図2)などは若干新しい様相を示しているように思われる。

両古墳に後続するめんぐろ古墳の須恵器は蓋坏(第132図4)・高坏の蓋(第132図3)・瑞(第132図2)で比較してみても明らかに新しい様相を示している。薬師山古墳の須恵器ともつながる特徴をのこしながらも、坏身の蓋受け立上りが内傾し、口唇端が面を持たずに尖



第132図　薬師山古墳(上段)・めんぐろ古墳(下段)の須恵器(注9・10)

るものが現われる。また瓏は長頸化して器体部がやや小さくなる。高坏の蓋はやや浅く側面の稜部が退化して、頂部に櫛歯圧痕をめぐらして、おそらく長脚二段透孔式高坏の蓋であろうと思われる。装飾付脚付壷もやや退化形態である。新たに提瓶が加わってくる。これらの諸特徴から北部九州で筆者らが行っている編年観[5]に照らしてみると、金崎古墳・薬師山古墳の須恵器はⅠ期を主体としながらⅡ期にまで及び、めんぐろ古墳の須恵器はⅡ期に相当する様式を一部含みながらⅢ期を主体とする時期のようである。

今回調査された日脚窯の須恵器には蓋坏・無蓋高坏・長頸壷・瓏・有蓋高坏などからみれば、金崎・薬師山両古墳と共通する特徴をみることができる。しかし二次堆積とされる灰原資料のなかにはⅢ期相当の蓋坏がみられるので、おそらく付近に後続する窯跡を考えるべきであろうか。日脚窯で本来生産された須恵器はⅠ期からⅡ期にかけての時期であったと思われるので5世紀末から6世紀初頭あたりの時期を考えておくのが妥当な所見ではあるまいか。

出雲地方の窯跡としては未調査ながら安来市の高畑窯跡の収集資料[6]に金崎古墳の時期に相当するものが含まれているので、今後両者の比較検討が必要であろう。いずれにせよ、日脚窯跡の出現は石見地方最古の須恵器窯跡の発見となった。したがって今後は同時期の須恵器の分布をさぐり、本窯跡から供給遺跡を確認する作業が課題となろう。

なお、今回日脚字台の畑地から工事中に出土したという坏の蓋3個[11]をみせられたが、日脚窯の生産品とも若干異なるようであり、あるいは日脚窯の須恵器よりやや古式に属するのではないかと思われる。窯跡の資料の整理を通じて検討していただきたいものである。

（1985. 1. 9　稿了）

注(1)　大川清・田中義昭・西垣丹三「島根県益田市西原窯址(『古代』第29.30合併号) 1958

(2)　勝部昭・房宗寿雄(『本片子遺跡・木原古墳』) 1982

(3)　小田富士雄ほか『北九州市小倉南区天観寺山窯跡群』 1977

(4)　小田富士雄ほか『福岡県八女市古窯跡群調査報告』Ⅰ～Ⅳ　1969 ～ 1972

(5)　九州の須恵器の様式設定および編年はつぎの文献を参照されたい。
小田富士雄「須恵器の編年」(『九州考古学研究・古墳時代篇』第7章) 1979
小田富士雄「九州の須恵器と半島系陶質土器」(『九州古代文化の形成・上巻』第5章)1985

(6)　近藤正「窯業―山陰」(『日本の考古学Ⅵ・歴史時代・上』) 1967
山本清監修『さんいん古代史の周辺・下』第四章3・須恵器の生産・ 1980

(7)　山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』) 1971

(8)　注(7)文献およびつぎの文献による。報告書は未刊
水野清一・樋口隆康・岡崎敬『対馬』(東方考古学叢刊2種第六冊) 124～128頁・ 1953

(9)　山本清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」(同上)

(10) 山本清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」(同上)

(11) 川原和人「石見における古代須恵器」(松江考古第2号) 1979

V　日脚１号窯出土須恵器の胎土分析

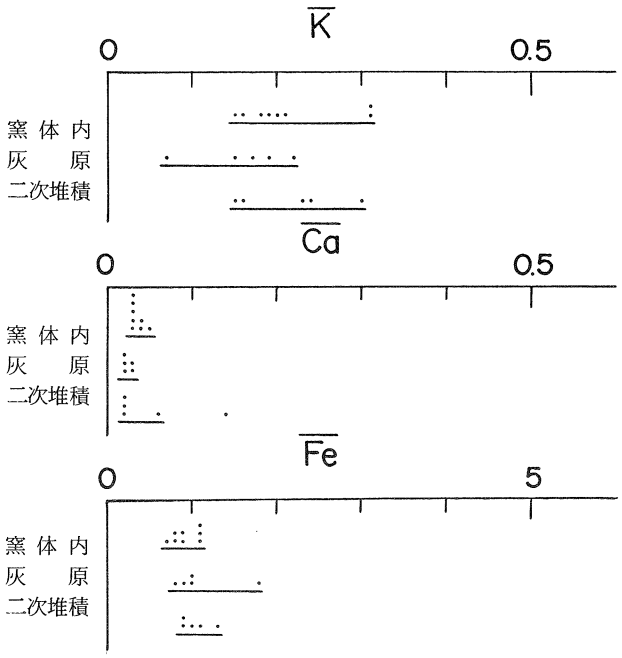
奈良教育大学　三　辻　利　一

１．はじめに

全国各地の窯跡出土須恵器に地域差があることが判明した結果[1]、古墳・遺跡出土須恵器の産地は胎土分析によって推定できることになった。ただ、全国各地に散在する窯跡数が多いために、胎土分析のデータだけで、ただちに産地を推定することは困難である。しかし、その後の研究で、考古学的に推定される時代因子や土器型式を参考にすれば、胎土分析の結果は容易に解釈できることが分かりつつある。とくに、５～６世紀代には須恵器窯業生産が全国にまだ普及していないため、窯跡数は限定されており、胎土分析による産地推定は容易となる。島根県下で今度発掘された日脚１号窯は５世紀末～６世紀初頭と推定されており、胎土分析が適用し易い時期のものだけに、その化学特性を整理しておくことは重要である。日脚１号窯出土須恵器の胎土分析の結果について報告する。

２．実験方法

資料は島根県教育庁文化課から提供されたものである。資料はその表面を研磨してのち、100～200メッシュ程度と粉砕された。粉末試料は直径２cmの塩化ビニール製リングに入れ、10トンの圧力を加えてコイン状のペレットに成形し、蛍光Ｘ線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置により、Tiを２次ターゲットとして真空下でＫ、Caを、また、Moを２次ターゲットとして空気中でFe、Rb、Srを定量した。定量分析には、標準試料として岩石標準試料ＪＧ－Ｉを使用した。分析データはＪＧ－１による標準化値で表示された。もし、試料中の絶対濃度が必要なときは、標準化値に地質調査所から公表されているＪＧ－Ｉの分析値を乗ずればよい。



第133図　日脚１号窯出土須恵器のＫ・Ca・Fe量